
私の秘密の話をしよう

あきちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の秘密の話をしよう

【Nコード】

N9633M

【作者名】

あきちゃん

【あらすじ】

中学時代のイジメが原因で引き籠りの由子にはカッコいいお兄ちゃんが届きました。

由子はお兄ちゃんの勧めで芸能界に入る事に…

お兄ちゃんとの怪しい関係、仕事で出会う美男子たち。

何故だかモテる由子は誰を選ぶのでしょうか。

由子と美形男子達が巻き起こす？お姫様ストーリーです。

第一章

私の名前は佐藤 由子^{よしこ}、年は19歳。乙女座のO型。

私の好きな物、パソコン、漫画、ドラマ…自分の部屋。

私の嫌いな物、侵害、男、人間…現実。

私は自分の部屋で自分の好きな物に囲まれているのが幸せ。

私はいわゆる…「引き籠り」

私だって好きで引き籠りになった訳じゃない。

私だって外に出て、同じ年頃の人たちの様に生きてみたい。

でも怖い。外が怖い。人間が怖い。

私が引き籠りになった訳は単純。中学校時代の「いじめ」。

私は太っている上に凄いニキビ顔。そんな顔を隠す為の長い黒髪。中学生のイジメの対称としては十分だった。

私は中学校に通っている三年間、いじめに耐えた。耐えに耐えた。でも高校受験を迎え、気持ちは前向きだった。

きつと高校に通えばイジメなんて無くなる。そう思ってた。でも実際は違った。

高校に通い初めて一カ月、友達は一人も出来なかった。

そればかりか…

高校生のイジメは陰険だった。

中学時代は肉体的なイジメ。高校生は精神的なイジメ。

誰がやっているか解らない。でも私の周りは異常な事ばかりが起くる。

上履きは毎日ゴミ箱、教科書は字が読めない程落書きをされ、体育着は変な汁が付いている。

一番キツかったのがインターネットの裏サイト。

私のスリーサイズ、体重、訳が解らない病気や菌に感染している…
私の精神は完全に壊された。

私は高校を半年で退学して、以降引き籠りになった。

精神的に弱っていた私は拒食症になり、やつれてしまった…

両親は私のイジメを知ってから、私に対して腫れものに触るていう感じで。

そんな毎日が続く中、私のお兄ちゃんが留学から帰国した。

私のお兄ちゃんは七歳年上。二人兄弟だ。

世間的にはイケメンという種類の兄。

私とは大違いな種族だった。

でも、イジメられてションボリしている私が学校から帰ると、

「俺のプリンセス」

「俺の天女」

って、口に出すのも恥ずかしい冗談で私を笑わせる。

引き籠る様になってからも、お兄ちゃんは変わらず接してくれた。

夕食時には、一日の事を冗談を混ぜて面白可笑しく話す。

我が家のムードメーカーな兄。

私はお兄ちゃんが大好だった。

そんなお兄ちゃんは二年前突然…

「俺はメイクに目覚めた！！」

つと書き置きを残し、一人ハリウッドに旅立っていった。

前日見た映画に感化され、翌日アメリカに旅立つ行動力のある人間なのだ。

まあ、自分勝手とも言っけど。

そんなお兄ちゃんが突然の帰国した。

お兄ちゃんは二年の間、本場の通常のメイクだけでなく、特殊な

メイクも学んで帰国したらしい。

突然帰国した理由は、日本で撮る映画の専属になってくれとの依頼があったからだった。

お兄ちゃんの名指しで依頼がくる程腕を上げたらしいけど…

私にはそれを立派だつと褒める知識も興味もなかった。

でも、大好きなお兄ちゃんの帰国は最高に嬉しかった。

夕食時、私たち家族は久しぶりの家族団欒をした。

お兄ちゃんが突然いなくなつてからは家の中から笑いが消えて…

私は両親と一緒に夕食を取る事も無くなつていたけど。

今日は久しぶりに皆で食べようつてお兄ちゃんが言いだした。

私はお兄ちゃんの帰国が嬉しくて了承した。

お兄ちゃんはアメリカでの出来事を色々話してくれた。

行き当たりばつたりの旅、良い師匠に巡り合った話。出会った面白い人たち。

私は夕食の時間だけでは足りなくて、食べ終わってからもお兄ちゃんの傍を離れなかった。

お兄ちゃんは、

「荷物の整理をしたいから部屋に行くぞ。」

つと言ったので、私は言うとおりに部屋まで付いて行った。

お兄ちゃんの持っていた荷物は服や日用品ではなかった。

「お兄ちゃん、荷物つてこれ？」

私が指差した先にあるのはチョット大きめの箱。

「そうだよー、俺の一番大事な荷物！」

お兄ちゃんは滞在先から日用品は宅急便で送り、この箱だけは自分で持ってきたらしい。

「俺の秘密道具だよー。」

そう言つて、私に箱の中身を見せてくれた。

箱の中に入っていた物は…訳の分からない薬品や絵の具やら糸や

ら…

私が不思議そうに手に取って見ていると…

「よし！お兄ちゃんの二年間を見せてあげよう！」

つと言うと、私の長い黒髪を束ね始めた。

「おっお兄ちゃん？」

私はビックリして兄の手を振り払った。

お兄ちゃんも私の態度にビックリした表情だったが、すぐ何時もの優しい顔に戻り、

「大丈夫、お兄ちゃんに任せなさい。」

お兄ちゃんの優しい、魔法な声に私は目を閉じて顔を預けた。

お兄ちゃんは暫く私の顔を優しく撫でていた。

私は少しドキドキしながらお兄ちゃんを受け入れていた。

「よし、最高だ…」

お兄ちゃんの優しく甘い声。

私はゆっくり目を開ける。

「由子、俺を見て…」

私はなんだか重たい瞼を開き、ボーっとお兄ちゃんの顔を見つめた。

「うん、俺のお姫様だ。由子、ここを見て…」

お兄ちゃんは何かを手に持っていた。

蛍光灯にキラッと反射したそれは…鏡。

「嫌っ！！鏡は怖い！！」

私は咄嗟にお兄ちゃんの手を叩いた。

お兄ちゃんは私の顔を覗き込んで…

「鏡が怖いのか？」

つと聞いてきた。

私は正直に答えた。

「私、自分の顔が醜いのは知ってる。体だって骸骨みたいだし…

同級生が私の容姿の事でイジメた事はお兄ちゃんだって知ってるでしょ？

なのに…鏡を向けるなんて酷い！」

私は兄に八つ当たりをしてしまった。情けない…

「大丈夫、由子は可愛いよ…」

お兄ちゃんは思ってもない事を口にした。

「ほら、鏡を見て御覧？お前は絶対に可愛いよ。」

甘く優しい声で私にもい一度鏡を向ける…嫌、嫌だ！自分の顔なんて見たくない！！

「嫌あー！！！」

私は思わずお兄ちゃんを突き飛ばし家を飛び出した…

久しぶりに家を出た。こんな形で…

あの優しいお兄ちゃんが私が嫌がる事をしたなんて初めてだった。私は行く宛てもなく夜道を彷徨った。

お金も持って出なかったし、仕方なく近所の公園のベンチに座った。

私がボーっとベンチに座っていると、通りかかる人たちは私を見てヒソヒソ何か言っている。

男の人なんて、ゆつくり前を通ってチラチラ見ている。

私の顔はそんなに酷いの？私は見世物じゃない！！

私は死にたくなった…いつそ電車にでも飛び込んでみようか…

「由子！！！」

ビックリして振り返った。

お兄ちゃんは息を切らせいる、どうやら私を探していたらしい。

「ごめん由子、お前がそんなに鏡が嫌いだなんて…」

私は少し考えて…

「お兄ちゃん、私こそごめん。お兄ちゃん優しいから…八つ当たり??？」

お兄ちゃんは苦笑いしながら私を抱き寄せた。

「馬鹿、ビクリさせんなよ…心配するだろう?」

「うん、ごめんお兄ちゃん…」

「俺のお姫様は馬鹿さんだなあ…こんな夜中に女の子一人で歩くなんて…」

「大丈夫だよ…私を襲う人なんて居ないから。」

「馬鹿由子!!!」

ゴチン!!!私は久しぶりのゲンコツっという奴を味わった…

兄の腕に絡みつき私は家に帰った。玄関には両親が揃って待っていた。

「馬鹿由子!」

またしてもゲンコツを食らってしまった。

久しぶり過ぎて嬉しかった。私は思わず泣いてしまった。

そんな私を見て

「うわっ強く叩きすぎたか?」

っと慌てる両親、そんな私を抱きしめて、

「シーッ」

っと指を立てるお兄ちゃん。

私と家族の距離は兄によって一瞬で縮まった。

私が落ち着くのを待って、

「由子、そんなに鏡が嫌いなのか?」

っとお兄ちゃんが聞いてきた。

「ううん、鏡に映った自分を見るのが嫌なの。」

「そっか…」

「ごめんね、私もう落ち着いたし、お兄ちゃんも帰国したばかりで疲れたでしょ?

私、部屋に戻るね?」

「うん、お休み由子。」

お兄ちゃんは私の頭を撫でてくれた

私が部屋から出ようとした時、チカッと何かが光った様な気がした。

「えっ 何？」

つとお兄ちゃんに聞いたけど、

「ん？ どうかしたか？」

つと聞き返してきた。多分私の気のせいだろう。

いや、気のせいではなかった。

お兄ちゃんは私の顔を携帯のカメラで一瞬の隙に撮っていた。

この一枚の写真が後の私の人生を大きく変えようとは…

第二章

お兄ちゃんは帰国して間もなく忙しい毎日を送っている。

私は相変わらず引き籠る毎日。

私とお兄ちゃんが会えるのは3、4日に一回位。正直寂しい…

だからお兄ちゃんが家に帰ってきた時は何時も纏わりついた。

お兄ちゃんは疲れていても、私を煙たがったりしなかった。

お兄ちゃんは私と一緒に居る時、よく私の顔を撫でてくれた。

私はただ可愛がってくれていると思っただけ…

ある日の夜、お兄ちゃんは大事な箱を持ってきて…

「由子、ちよつと仕事の練習させてくれない？」

つと言ってきた。

「うん、別に良いよ？」

つと、目を閉じ顔を預けた。

私の醜い顔でお兄ちゃんの役に立つなら嬉しかった。

私でもお兄ちゃんの為に何か出来るんだ！！

私はずっと目を閉じたまま、お兄ちゃんの立てる音を聞いていた。

お兄ちゃんは何かゴソゴソ取り出しては私の顔に何か塗っている。

何やら良い香りだなあ。

薄眼を開けてお兄ちゃんを見てみた。何時になく真剣な表情…

「あつ由子！まだ開けちゃ駄目！！」

「えへっごめん。」

お兄ちゃんと居る時間は私にとって癒しの時間だった。

暫くすると、お兄ちゃんはフインキをだす為って言って、ボーイ
ツシユな服を持ってきた。

「由子、一回これに着替えてくれない？」

「???うん、わかった。」

私は素直に差し出された洋服を持って自分の部屋へ向かった。よくよく見ると、ボーイツシュっというより男物の服だった。

きつと次の担当の役者さんは男の人なんだ…と気にも留めずに着がえた。

「お兄ちゃん、これでいい？」

「おー、由子。間違えた！」

「当たり前だよ、これ男物の服じゃない。」

「実はね…次の仕事で担当になるのKJなんだよー。」

「へー、そうなんだ。」

私はKJと聞いても、ふーんっとしか思わないが、KJというのは今、一番人気のアイドル集団だ。

私は現実の男に興味は無いから顔は忘れたけど、すごく美形の集団らしく、

歌、バラエティー、ドラマ…まあ、マルチな活躍をしている人達っというのは知っている。

最近海外進出も果たした世界的にも有名になりつつある…らしいけど。

「おーい由子、お前…女の子なら泣いて喜ぶ所だぞ？」

お兄ちゃんの反応は当然で、関心がない私の方が女として違っている。

自分の兄がKJの担当なんて普通の女の子なら、

(写真が欲しいー、サイン貰ってきてー、仕事場連れて行けー)っとなるだろうけど…

「でも、私、興味無いし…」

「ふーん、そっか。勿体ない。」

だって、お兄ちゃん以外の男なんて怖いに決まってるし。テレビでいくらアイドルやってても、本当は怖い生き物な筈だ。

私はそういう男を沢山見てきた。

私だって最初からイジメられていた訳じゃない。
顔や体系はつじつま合わせ。

本当の原因はアイドル的存在のクラスメイトに恋をしてしまったから。

彼はクラスで一番女子から人気があった。

甘いマスクに優しい口調。皆から好かれていた。私も当然の様に恋をした。

恋をすれば気持ちを伝えなくなる。私は玉碎覚悟で手紙を書いた。
(放課後、教室で話したい事があります。)

私は短い文章の中に、有りつ丈の勇気を詰め込んで彼の机の中に入れた。

放課後、彼は来なかった。代わりにクラスの女子が来た。

後は絵に書いたような場面。

「ブスの癖に告白なんてしてんじゃねーよ！」

「ブスは黙って見てろよ!!」

「嫌、ブスはイケメン見ちゃだめでしょ？綺麗な物みると死んじやうよ？」

私だって負けずに、

「なんで皆で来るの？今、人を待ってるからどっか行つて！」

精一杯言い返してみたけど…

「今日、私たち以外来ないよー。だって本人から聞いたんだし！」

「彼、お前みたいなブスが手紙よこしたって気持ち悪がつてたし。」

「

「いい迷惑なんだよ！このブス!!」

一人の女の子が私の腰の辺りを蹴飛ばしてきた。

私は倒れこむ拍子に、額の辺りを机の角にぶつけてしまった。額から血が出る…

「うわー、汚ったねー。」

「こいつ、血なんか出して、教室汚すなよ！」

私は、痛いし悔しいし…ただ泣くしか出来なくて…

女の子たちにも腹が立つたけど、手紙を出した事を喋った男の子にも腹が立った。

あの優しい顔の裏に、あんな事を平気でする顔が隠れていたなんて…ショックだった。

私は次の日から学校へ行く事が出来なかった。

私は昔の嫌な事を思い出して少し涙が出てきた…

「あー由子！お兄ちゃんが折角メイクしたのに！！もう一回やり直し。」

「ああ、ごめん。お願いします。」

お兄ちゃんは練習メイクを再び始めた。

お兄ちゃんは30分程私の顔をいじくり回し、髪の毛もセットした。

「よし！完ペッキだ！我ながら良い仕上がりだ！」

「えっ本当？お役に立てて光栄です。」

「こちらこそとても助かりました。」

お互いに頭を下げた笑い合った。

「お兄ちゃん、もうメイク落としてもいい??」

私は慣れない化粧で顔が重くて重くて…早く顔を洗いたかった。

「うん、良いけど…最後にもう一回確認したいから真っすぐ立って。」

私は言われた通り立ちあがった。

「はい、そのまま目を閉じて…」

私はゆっくり目を閉じた。

何だか急に目の前が明るくなったと思ったが特に気にしなかった。

「はい、有難う。顔洗ってきていいよ。」

「はい。じゃあ行ってくる。」

私は急いで顔を洗いに走った。

その頃お兄ちゃんは、携帯を力チャ力チャ弄っていた。

「悪いな由子…。」

私は顔を洗い終わるとお兄ちゃんの部屋へ戻った。

「おにいちゃん、おまたせー。」

「おー、素ッピン由子ちゃん。そのままでも可愛いね。」

「お兄ちゃんって優しいのか意地悪なのか解んないよ…。」

「ははは、ごめん。それより俺の携帯の待ち受け画面、見て見て

！！」

お兄ちゃんは私に携帯を手渡した。私はその画面を覗き込む。

携帯の画面には美少年が映っていた。中性的な美少年だ。

白い肌、ピンクの唇。少し癖のある長めの黒髪。鼻筋も通ってい

て…

その美少年は、どこかお兄ちゃんに似ている感じだった。

「うわー、可愛い男の子、お兄ちゃんがメイクした人？モデルさん？」

「そう、俺がメイクした中で一番の自信作！」

「ふーん、羨ましいな、私もこんな綺麗な顔に生まれたかった…」

「羨ましいか？」

「うん、私だってお兄ちゃんとか、この子みたいに顔の良い人間

に生まれたかったよ。」

「……生まれてる？」

「…はっ??」

「いや…だから生まれてみる？」

「いつ言ってる意味が…」

「この写真の子、お前だよ由子。」

…へ？仰っている意味が…

私が意味不明な顔をしていると、お兄ちゃんが私の顔を掴み、こ
う言った。

「この写真の男の子は由子だよ。俺がメイクした由子。よく見て
みて。服とか風景とか…」

確かに男の子が来ている服は今私が着ている洋服。背景もお兄ち
やんの部屋。

…いや…これはお兄ちゃんの悪戯に違いない。

「お兄ちゃん、こんな手の込んだ悪戯して面白い？」

私が言い放つと、お兄ちゃんは急に真剣な顔をして言った。

「本当に由子の写真だよ。疑うなら男の子の耳の部分を見て御覧
？」

「耳？うん…。あつ！」

写真の男の子の耳にハートのホクロがある。私の耳にあるホクロ
と一緒に…

「うわ、これ本当に私なの？嘘みたい…」

私は不思議な感覚に襲われ、暫く現実に戻れなかった。

現実逃避している私に、お兄ちゃんはいきなり土下座を始めた…

「ごめん由子！実はお前にしか頼めないお願いがある…」

「へっ何？」

「俺が帰国した日、お前にメイクしただろう？」

「うん、そういえば…」

「俺、あのお前のお前の仕上がりが自分でもビックリするぐらい綺
麗で…」

「うっうん。」

「俺、お前に見せたかったけど、お前は飛び出しちゃうからさ。」

「あの時は心配掛けました。」

「んで、お前を連れ戻した後、こっそり写真を撮っちゃって…」

しかも待ち受けにして持ち歩いてたんだ。

それを担当の事務所の社長に見られちゃって…。それで、社長
に写真の事聞かれて…

俺、咄嗟に自分の弟だって嘘ついちゃった。」

「ふーん、ちょっと恥ずかしいけど。メイクした写真ならいいや。思い出になっただし！」

「いや…話しはそれじゃ終わらなくて…実は…」

お兄ちゃんは何か口ごもって話にくそうだ…そして意を決した様に話し出した。

「お前をKJの新メンバーにしたいから必ず連れてこいって！」
そう言うとお兄ちゃんは深々と頭を下げた。

第三章

「おっお兄ちゃん、今…なんと？」

「いやね、社長が言うには、KJの新メンバーオーディションがあるらしいんだけど、

書類選考の時点でパツするのが居ないらしくってさ。

そんな時に俺の携帯の写真みて、一目で気に入ったって。」

いや…気に入られても…私も一応女な訳で。ちよつと複雑。

「でもお兄ちゃん、私女だよ？」

「分かってるよ。なんかKJの中に中性的な美少年を加入させたかったって。」

由子はイメージにピッタリ合うつてさ。」

「でも、私…外つて怖いし。まして芸能人の人の中に混じるなんて論外だよ。」

人間怖いのに…顔の良い人間はもっと怖い。」

私の顔から血の気が引いていく。きつと間違はなく怖い思いをする…

「…由子、由子は毎日家に居て楽しい？」

昼間もカーテン閉めて一日中パソコン弄って漫画読んで…」

「いいじゃん、好きなんだもん。漫画もパソコンも…」

それに人間怖いし…。」

お兄ちゃんは真剣な顔で恐ろしい事を言った…

「お前は一生閉じこもったまんま生きていくのか？」

親だつて何時までも居る訳じゃない。年も取つていくし。

もし明日家族が急に事故で死んで収入が無くなったら？

閉じこもったまんまでお前は生活できるのか？金は？食料は？

病気になつたら？」

確かにお兄ちゃんの言う事も分かる。

人間に明日の確証なんてない。明日は誰にも分からない。

考えたくないけど、もし明日家族全員が死んでしまったら？私はどうやって生きていくのか…

閉じこもってからの生活費は全部両親が払ってくれている。寝る所も住む所も両親の物だ。

きつと私は…仕事もしないで貯金全部使い果して…毎日泣いて…間違いなく飢えて死ぬ。

そんな事考えた事も無かったけど…実際に起こらない確証もない。「わつ私…皆に迷惑掛けてたんだね…」

私は自分が情けなくて…でも外に出て行くのが怖くて…自分でも思い通りにならない感情が涙になって…溢れて止まらない。い。

お兄ちゃんは私の方をそっと抱きしめてくれた。

「由子、お前だつて分かつてたんだろう？皆に迷惑かけてた事。でも俺たちは迷惑だとは思っていなかったよ。ただ由子が心配なんだよ？」

俺たち人間は明日の保障が無いから今を精一杯生きてるんだよ。もう由子にも人生を無駄に過ごして欲しくは無いんだ…」

「お兄ちゃん…」

「まあ、男装して芸能人は行き過ぎだと俺も思ってたけど…！社長には明日にでも断りを入れておくけど…由子。」

「なあに？」

「お前が出来る範囲から始めよう。俺と一緒に。俺も一生懸命由子を支えていくから…」

「お兄ちゃん…」

お兄ちゃんは私の背中に回していた腕を解いて…私の頭天边をポンポンって。

そして優しく頭に唇を押しつけてきた…親が子供にする様に…私は心底安心して…なんだか元気が出てきた。

「よし、由子。少しでいいから。少しずつ俺と頑張ろうな!!」
お兄ちゃんは素敵な笑顔で私を見つめてくれた。
お兄ちゃんって世界一カッコいい!!本当にそう思う。

翌朝、朝食を食べにリビングへ向かった…久しぶりに皆で食べた
くて…

「おっお早う。」

私はドキドキしながら家族に挨拶した。

「おっおはよう由子。」

「っ今日は…早いな…」

両親とも言葉が上手く喋れてないし…でも、顔はニコニコしていた。嬉しそうだった。

私はチョットの勇気で両親を笑顔に出来た事が嬉しかった。

お兄ちゃんの顔を見てみた。チラッと顔を見せて、目が合ったら
ウインクしてくれた。

頑張るっていいな…

私は朝食を食べ終わると自分の部屋の窓を久しぶりに開けてみた。
風が顔の横を気持ちよく過ぎていく。揺れるカーテン。ほんのり
太陽の香り…気持ちいい。

私はこんなに気持ちのいい事を何でしなかった、深く後悔した。

…色々後悔した。

イジメにあった時、もうちょっと頑張ってみても良かったかな?
仕返ししてやれば良かったかな?

せめて両親に相談して早く解決していたら?

一人で寮にでも入って生活を一新させる事も出来た。

色々後悔して、思い出して悔しくもなってきた。段々腹が立って
きた。ム力ついてきた…

何で？私は何一つ悪い事をしていないのに！！

私は被害者なんだ！なんで私が日に当たらない生活をしなくちゃいけないんだ！！

本当に腹が立って、イライラしてきて…もう爆発しちゃいたくて…叫んだ。

「ム力つくー！！ちくしょー！！お前ら！何時か見返してやる！！覚えてろよー！！」

息が切れるほど叫んだ。ちょっと喉から血の味もする。

びつくりしたお兄ちゃんと両親が部屋に飛び込んできた。

「なっどうした？強盗か？」

「由ちゃん！！無事？？」

「どうしたー！」

慌てた三人の顔は久しく見ていなかった真顔で…

私は叫んでスッキリしたのもあるけど、爆笑してしまった。

可笑しくて可笑しくて…笑いと涙が同時に出た。

不思議な位気分もスッキリしている。すごく爽快な気分だった。

私は決めた。

「お兄ちゃん…」

「へっどうした？」

「私ね…昨日のお兄ちゃんの提案…やってみるよ。」

「へっ提案って…どの部分？」

「KJの事。私…頑張って見るよ。」

「えっあつまジ？」

「まーじいー！！」

お兄ちゃんは凄く驚いた表情をしたけど、私の表情を見て…

「そんな由子の顔…久しぶりに見た。…分かった。社長に話して

おく。」

「うん、お願いします。」

私はいつそのこと、大きな力ケに出てみようと思った。

私の事をブスだのキモイだの言った人間たち。

ひと泡吹かせるのは私が有名になるのが一番手っとり早い。

それに芸能人ならお給料も沢山貰えるだろうし…皆に恩返しも出来るかも！

ならば昨日の話はチャンスでは？と思った次第で。

夜、お兄ちゃんの帰宅を待つて駆け寄った。

「お兄ちゃん…どうだった？」

「うん、いやね…」

何か言いにくそうなお兄ちゃん。

「お兄ちゃん、何かあったの？もしかして駄目だった？」

「いや、駄目って事は無いんだけど…あのさ、なんだか社長は快諾してくれたんだけど…」

メンバーがね…一人だけ特別扱いなんて出来ないって。

書類選考はいいからオーディションには参加させろってさ。」

「オーディションかあ…ってマジ？」

「うん大マジです。」

お兄ちゃんは気まずそうに目を伏せた。

「私なんて…コネがなくちゃ無理じゃん…そっか…」

「いや、まだ落ちるとは決まっていねえっね。一緒に頑張ろう！」

「うん…まあ無理だけどね…」

私は持ち前の？ネガティブを存分に発揮して落ち込んだ。

世の中、そんなに甘くないよなあ！。

引き籠りから一夜でシンデレラ…なんて起こる筈ないよなあ…はあ。

「よっ由子ー。」

お兄ちゃんは落ち込んでいる私を見て焦っている…。お兄ちゃんが悪い訳じゃないのに。

「お兄ちゃん…」

「へっどうした？」

「私…駄目もとでチャレンジしてみようかな？」

「よっ由子ちゃん…良く言った…！」

「うん、駄目でも私にはいい経験になる筈だし！頑張ってる！」
お兄ちゃんはグーっと抱きしめて、何時もの様に頭をポンポン
つて。

「お兄ちゃん…」

「由子は偉い！頑張り屋さんだ！きっと由子なら合格できるよ。
それに…」

お兄ちゃんは何かを言いかけて…自分の鞆から何かを取りだして
きた。

「…お兄ちゃん、それ何？」

「これはなあ…由子ちゃんにプレゼント…！KJのPVと写真集
とドラマ全集…！」

物凄い量を取りだしてきた。出るは出るは…

「戦いに勝つ為には、マズ敵を知る事！これはその一部です。」

お兄ちゃんは急に先生口調になり、私の目の前に本やらCDを並
べ始めた。

「ちよっこれで一部なの？」

「はい、これは一部です。先生も全部は持てませんので厳選致し
ました。」

これからは私の言うとおり頑張って進んでいきましょう。」

「ふふっハイ！分かりました先生！」

「よし、偉い偉い！じゃあ…ご褒美です。」

…お兄ちゃんは私の頬にブチューっ唇を押しつけてきた。
これには流石に私も動揺してしまう…

「ひあ！おっお兄ちゃん？」

「あははっ由子は可愛いなあ！」

「もう、お兄ちゃんにとって由子は何時までも子供なんだね！いいもん！フン！」

私は照れ臭い顔が隠せなくて…わざと怒った振りをした…

「あー、由子には演技指導も必要かなあ…？」

お兄ちゃんは突然考え込んでしまう…何処まで本気なんだかあ？私お兄ちゃんに貰ったKJの資料を両手いっぱい抱えて自分の部屋に帰った。

第四章

私はお兄ちゃんに貰った資料を一つ一つ確認してみた。

まず写真集…メンバーの個別の写真集3冊と全員の写真集。

まず、リーダーKOUJIの写真集を開いてみた。

……うわぁ、凄くいい男…。

一見冷たそうな眼差し、その中に潤んだ瞳…キラキラしてる。

目鼻立ちはハッキリしている、彫りも深い。少し日本人離れしている。

何故か人を寄せ付けない…少し怖い感じの人。

次にJ E Y の写真集を開いてみた。

……うわぁ…綺麗な男の人…。

思わずため息が出る綺麗な顔。でもちゃんと男のセクシーさも兼ね備えている。

写真集も何処か神秘的な感じのショットが多い。

次にK A J I の写真集を開く。

……うへー、たくましい体…。

写真集の半分は半裸。筋肉を前面に押し出す仕上がりだった。

でもただの筋肉馬鹿って感じじゃなくて、表情は優しい…

頼れるお兄さんの感じだった。

取り合えず全員の写真を見て感じた事は、ちゃんと役割分担がされているな…って。

同じ個性のメンバーは居ないし、それぞれの個性が前面に押し出されている。

たしかに中性的な男の人は居ない…だから私に話が来たのか…

続いてC D を聞いてみた。

合計10枚ものアルバムを貰ったけど、全部を聞いている時間は無いし…

取り合えず一番最初のアルバムと、最新のアルバムを聞いてみた。

最初のアルバムは…なんだか一曲一曲が丁寧な造りで、なんだか切ない。

どの曲を聞いても涙が出そうなの…

男嫌いの私の心にスーッと染みしてくるような悲しい歌声…

一体誰が歌っているんだろう…

CDジャケットを広げてみる。

ボーカルはKOUJI、ベースはJEY、ドラムはKAJI…まあ、予想通りだった。

でも、あんな怖そうな人がこんな綺麗な声をしているなんて…

続いて最新のCDを聞いてみた。

やはりどの曲も丁寧な旋律が流れていく…

でも何だか心に染みしてくるような曲は無かった。少し残念。

最後に本を読んでみた。まあ本と言っても雑誌のインタビューとかテレビで話した事とかの編集版。

KOUJIは23歳、JEYは26歳、KAJIは25歳。

元は同じ雑誌で活躍するモデル。

あまりに人気があり過ぎて、社長が調子に乗って他の活動をさせたら…爆発的大ヒット！

元から歌唱力があつたのと、演技もこなせる実力が相まって各メディアから仕事が殺到。

今や幼い女の子からお年寄りまで知るスーパーマルチタレントにのし上がったらしい。

この人達…凄いなあ…大変な苦勞があつたんだろうなあ…

いや、男なんて皆一緒に決まってる！

表向きは良くても、裏ではきつと私みたいな人間をあざ笑うんだ…

まあ、オーディションすら通ってない私がこんな事考えても仕方ないけど…

私がオーディションに通った暁にはキッチリ利用させていただきます
！！

オーディション当日、私は朝から兄に付きつきりでメイクして貰った。

朝起きた時の冴えないやつれ顔は何時しか美少年へと変わっていき…

今日でメイクは三回目だけど、やっぱり顔が重い気がする…

他の女の人は毎日メイクをして大変だったんだなあ…私ももう少し努力すればよかったかな？

「よし、俺の可愛い王子様…完成！！」

私に向けて鏡を差し出すお兄ちゃん…私はまだ鏡を見るのが怖かった。

躊躇している私にお兄ちゃんは優しく頭を撫でてくれる…

私は意を決して鏡を手にとった…

鏡の中には、見た事も無いような美少年がビックリした表情で映っていた。

「お兄ちゃん…」

「どうした？由子。」

「お兄ちゃんって詐欺師だよな。」

「はい？俺が詐欺師？」

「うん、これは詐欺の領域でしょう…」

「あはは、確かに。お前は王子様じゃなくて王女様だからね。おれは詐欺師じゃなくて、魔法使いのお兄さんの！」

「あは、何それ？」

「もういいから！そろそろ出発するぞ！」

「はい！了解です。魔法使いのお兄さん！」

本当、お兄ちゃんは私に魔法をかけてくれたんだね…

オーディションはKJの事務所の一室で行われた…。

私は会場に着くまでに汗ダク…。

だって電車で揺られるなんて何年振りか…

物凄く怖くて…でも今日はお兄ちゃんが居てくれたから。

私が怖くて動けなくなっても、お兄ちゃんは私の表情を見て手を握ってくれたり肩を支えてくれたり。

お兄ちゃんのお陰で私は会場まで辿り着く事が出来た。

KJの事務所は大きなビルだった。KJの事務所は芸能事務所だけでなく雑誌なども出版している。

同じ会社だが複合ビルみたいな感じだった。

芸能事務所はビルの最上階だった。

お兄ちゃんは事務所の人と話があるからって、私は控室に一人で行く事になった。

大丈夫！誰とも目を合わせないで下を向いて、お兄ちゃんが来るのを待ってしよう。

私は一人で控室に向かった。

廊下にはKJの大きなポスターが貼ってある。デカイ顔だなあ…毛孔まで見えそうな大きなポスター…男の人なのにお肌スベスベだ…女としてムカつく。

私が眼をつけながらポスターを睨んでいる後ろで、何やら音がした…。

次の瞬間に…ボカッと頭に衝撃が走る…

「痛いーイ！ー！」

何かが私の頭にぶつかってきた…私が後ろを振り向くと…

「お前、なに眼たれてんの？」

って頭の上から誰かが喋りかけてきた。

私は頭が痛いのかどうか忘れて…硬直してしまった…

立っていたのは少し幼さも残る美少年…

大きな瞳にうつすら日焼けした肌…

「お前、これからオーディション受けるなら、メンバーの写真に眼たれるなんて止めた方がいいぞ。」

……おーい！き・い・て・ま・す・かあー？」

私は久しぶりに生の若い男と目が合って…体が強張って動けなくなつた。

どうしよう、どうしよう…お兄ちゃん…怖い！！助けてお兄ちゃん！！

私の体から血の気が失せ…私は倒れそうになつた…。

フラつく足元…とにかく此処から逃げ出そう…

私は転びそうな足を引きずって逃げるように事務所から出てトイレに駆け込んだ…

「怖い…怖い…怖い…」

私の頭の中は恐怖で一杯になってトイレから出れなくなつてしまつた。

トイレに閉じこもって10分経って、私の携帯が鳴つた。

「はい…」

私は携帯に出た。お兄ちゃんからだつた。

「由子！今何処に居る？」

「…トイレ。」

「はあ？もうすぐオーディション始まるぞ！」

「分かつた。今行く…」

私は嫌嫌トイレを出た。

控室の前にお兄ちゃんが立っていた。

「馬鹿由！心配させるな！」

「ごめんなさい…」

「…っ良かった…」

お兄ちゃんは心配して私を探しまわっていたらしい。ごめんねお兄ちゃん。

お兄ちゃんに簡単なメイク直しを施され会場に向かった。

会場には15人位の綺麗な美少年が椅子に座っていた。

正面には会社の人達らしいオジサンたち…メンバーは参加していない様だった。

良かった…あの綺麗な瞳に見られてると…固まる自信があった。

私は一番端の椅子に腰かけた。

一人一人自己PRを始めた。

歌を歌う者、ダンスを踊る者、芝居を始める者…いろんな個性が飛び出した。

審査を終えた人は会場から次々に出ていく。

…審査も終盤、さっき私の頭を叩いたアイツの順番になった。

「14番、雪。年は18歳です。宜しくお願いします。」

彼は深々と会釈をしてから演技を始めた。

サッカーのリフティングだった。

延々とリフティングが続く中、彼はKJの一番のヒット曲を歌い始めた…

彼の綺麗で元気な歌声は運動しながらとは思えない安定した音量だった。

審査員は全員息をのむ…私もそんな歌声に心を奪われる…

「有難うございました。」

彼の演技が終了した。なんだかあつという間に感じた。

彼が会場から出ていく瞬間、私は彼と目があつた…

「が・ん・ば・れ」

彼は口パクでそう言ってくれたけど…私は顔を背けてしまった。

「最後の人ー、えー由君かな？では初めて下さい。」

「あつハイー！」

私は昨日まで一生懸命練習した曲を熱唱した。

元々低めの声だったし、少年イメーজなら多少女っぽい印象も悪くないからって。

お兄ちゃんのアドバイス通りに歌った。精一杯歌った。

会場に若い男の人が居なかった所為か、自分でも上手に歌えた。

「はい、お疲れ様です。後ほど結果を発表しますので控室でお待ち下さい。」

「はい、有難う御座いました。」

私は控室に戻った…

お兄ちゃんは控室で待っていてくれた。

私はお兄ちゃんの胸に飛び込みたかった…が、周りの目もあるので我慢した。

30分程待っていると一人の中年の男性が控室に入ってきた。

「お待たせいたしました。結果を発表いたします。」

呼ばれた方は別室にて説明がありますので部屋を移動してください。まず番号1番の方…」

次々に番号が呼ばれる…一番から順に13番まで。もしかして全員合格なの？

「13番の方…以上です。お疲れ様です。」

…えっ、落ちたの二人だけ？まじっすか…

悲しいというより恥ずかしい！早く帰りたい！！

私が荷物を纏めている間に、呼ばれた人達はワイワイしながら部屋を出て行った。

いきなり静まり返る部屋…聞こえるのは私の声と…男の鳴き声？
「うう…くそ…」

ボソボソ聞こえてくる呟き…声の方に視線を向ける。彼だ。雪だ

った。

雪は荷物を乱暴に鞆に押し込んでいる。自分の悔しさをも詰め込んでいる様だった。

私は雪の綺麗な涙に見惚れてしまった…なんて純粋な涙なんだろう。

私が雪に見惚れている時、お兄ちゃんは私の横で複雑な表情をしていた…

その時、咳ばらいが聞こえた…

「ゴホンッ。お忙しい所失礼します。」

私と雪が振り返って見ると、さつき控室に結果報告をしにきた中年男性が話しかけていた。

「お二人とも、おめでとうございます。」

「はっはい？」

「お二人はKJの新メンバーに選ばれました。」

……………。

「えっ？ぼつ僕たちは落選したんじゃない？」

雪が男性に尋ねた。

「お二人は最終選考を行うことなく、全員の意見が一致して選ばれました。」

「えっうつ嘘…マジ？」

「はい、本当です。おめでとうございます。」

「でも、僕たちは番号も呼ばれなかったし、他の方たちも自分たちが残ったって…」

「はい、このまま帰すのは惜しい人材も居ましたので、いつそ他にもユニットを作ってしまうかと。」

……………。

私達が現実を理解するには少し時間が必要で…また現実に戻るのにもキツカケが必要だった。

そのキツカケはお兄ちゃんくれた。

「おめでとう！由！！」

お兄ちゃんは私の頭を優しく叩く…ポンポンって。
何時もの感覚に私は現実に戻って実感した。

私は芸能人になった…うわぁ…引き籠りからアイドルなんて！
体中の血液が沸騰しそうになった。口の中の水分が一気に蒸発する…。

足も痙攣してきた…腰なんて今にも抜けそうだ…

私はお兄ちゃんにもたれ掛り何とか立っていた。

一方雪はまだ夢の中に居るようだった…。

そんな雪を見て私は可笑しくて…

そんな時、控室のドアが開いた。

まるで後光が射しているような光の中、彼らは現れた。

第五章

部屋の中に入ってきたのはKJのメンバーだった…

第一声はKAJIだった。

「こんにちは。KJだよー。宜しくねー。」

テンションMAXのKAJIに空かさずJEYが突っ込む。

「……おいKAJI、男相手だぞ？」

「別にいいじゃん。第一印象は大切だよ？」

そんな二人をリーダーKOUJIが呆れた眼差しで見つめる。

「……ふう。」

私たちは呆気にとられて茫然と眺める…

「おおー！！本物だ！！」

つと興奮の雪を尻目に私は硬直。

（うわっ生の美男子…嫌！怖い！）

私は体中の筋肉が硬直してしまつて動く事も挨拶する事も出来な

かつた…

そんな私をフォローしてくれたのはお兄ちゃん。

「こんにちは。皆さん。」

「あつメイクのSATOさん！！どうしてここに居るの？」

兄の仕事名を叫んで食いついたのはKAJIさん。

「はい、実はここに居る由は私の弟でして…」

「えっ本当に？」

「はい、宜しくお願いします。」

「へー、そうなんだあ。由君、これからも宜しくね！」

硬直している私の手を取りブンブン上下に振りまわす。私は失神

寸前…。

「ぼっ僕は雪と言います。宜しくお願いします。」

空かさず雪も自己紹介をする。

「ああ、宜しく。」

「……宜しく。」

「宜しくねー！」

メンバーが挨拶を返す。

そんな中中年のおじさんが、

「色々打ち合わせる事がありますので、一回場所を移しましょう。」

└

っと切り出し、私たちは控室を後にした。

場所を会議室に移し私たちはミーティングに入った。

私は始終挙動不審だったけど、空かさずお兄ちゃんのフォローがあつた。

色々と話をする中、メンバーの特性が見えてくる。

良く喋るし、兄キ的印象と違いお調子者のKAJI。

何かとクール。ずっと女性の話に持っていこうとするJEY。

始終寡黙なKOUJI。

そのままと言えばそうなんだけど。

司会進行は中年の男の人。

「私はマネージャーの高田と言います。宜しく。」

君たち二人は今日からKJのメンバーになります。

まず初めに、二人にはココにサインしていただきます。」

差し出されたのは数枚の契約書。

内容は…勤務体制の事。収入の事…色々な注意事項が書かれている。

最後の一枚に…

（メンバー内の秘密は絶対に厳守）

メンバーの秘密って何だろう？

「あつあの…。」

私は意を決して質問してみた。

「こっこの秘密厳守っていうのは…」

メンバーが一斉に私を見た。ひい！恐ろしい！！

「あっそれは追々分かりますので、取り合えずサインしちゃって下さい。」

「はっはい！！」

お兄ちゃん私の契約書をチェックしようと手を伸ばしてきたけど、

何だか今すぐ書かなくちゃいけない不陰気に飲まれ、私は急いで契約書にサインした。

「はい、これで二人は正式にKJのメンバーになりました。

皆でKJを盛り上げて行きましょう！」

「はっはい！」

田中さんの勢いに押され、私も景気よく返事をする。

「ひやつひゃい！」

雪は噛みながら返事をした。

「今日は顔合わせ程度でお終いになりますが、明日からは忙しくなりますので覚悟して下さい。」

田中さんの優しくも裏のある口調は私の緊張を更に高める…

私が冷や汗を流していると…私の手を優しく握ってくれたのはお兄ちゃんだった。

「落ち着いて…大丈夫。」

口パクで私に合図を送る。私はお兄ちゃんの顔を見て冷静を取り戻す。

私とお兄ちゃんは真つすぐ家に帰った。

私は家に着くなりベッドに倒れこんだ。

久しぶりの外出に加え、絶世の美少年に囲まれた一日。地獄の様な日だった。

私はすぐ眠りに落ちた…

眠っている時も今日一日の夢を見た。

久しぶりの生男。美男子のアップやスキンシップ。

シンデレラストー리를歩むであろう自分の気持ちの高ぶり…

私は魔^{うな}されていた…

全身を流れる汗…握りしめた手…

隣の部屋のお兄ちゃんが私の異変に気づいて駆け付けた…

「…由！由子！大丈夫か！？」

お兄ちゃんは寝ている私の体を揺する…でも私は夢から覚めない。

夢の中では鋭くセクシーな瞳が私を見つめている…

私の体は益々強張り…でも私は夢から覚める事が出来ない…

……。

「由子…由子…」

お兄ちゃんが優しく私を抱き起こす。

「うっうん…怖い…」

私は夢の中の瞳から逃げようと夢の中で走り続ける。私の呼吸も乱れる。

「はっはっはっ……はっ……っ」

私の呼吸が一瞬止まる。

「よっ由子！？」

苦しそうな私を見て、お兄ちゃんの顔色が曇る…

「助けて…お…兄…ちゃん…」

私は苦しくて怖くて…

……。

……次の瞬間、私の中に温かい空気が入ってきた。

なんだか気持ちよくて、温かくて。

私はやっと目を覚ます事が出来た。

私が目を開けると…お兄ちゃんの顔がすぐ近くにあった。

なんだか唇が熱くて感じる…

お兄ちゃんは私が目を覚ましたのに気付かないらしく、横を向いて呼吸を整えている。そして…

お兄ちゃんの顔がもう一度近づいて来る。

お兄ちゃんの綺麗な唇が私の唇にそつと触れた。

お兄ちゃんは私に空気を送り込んでくる。

私はボーっとした頭で考えた。

…ん？なんでお兄ちゃんは…

お兄ちゃん、私に何してるんだろう…

私は送り込まれた空気に噎せかえる。

「ごほつごほつおっお兄ちゃん？」

私はようやく言葉を喋る…

「よっ由子…はあ…、良かったあ…。」

お兄ちゃんは私をキツく抱きしめた。

お兄ちゃんは暫く私を離そうとしなかった…

顔は青白く体も小刻みに震えて…可哀そうに。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

私はお兄ちゃんがどうにかなつちやっただかと思って…

「うっうん、もう大丈夫。」

お兄ちゃんは震えた声で答える。

ぎゅーっ…お兄ちゃんの腕の力が強くなる…

「お兄ちゃん…どうしたの？」

お兄ちゃん…何かあったのかな？

「何でもないよ…。」

お兄ちゃんは甘い声で私の耳元に囁いた…

お兄ちゃんは私を抱きしめたまま…

頬に…首筋に…唇を落としていく…

私はお兄ちゃんを抱きしめ返し…暫く二人で抱き合った。

私は体の奥に疼くような感覚を覚えた…

第六章

昨日の夜の事、あんまり覚えていないけど…
一体私たち兄弟に何があったのかな…

朝が来た。

私は重い体をベットから起こす。

隣にはお兄ちゃんが座りながら眠っていた。

私はお兄ちゃんを起こさない様に顔を洗いに行く…

部屋に戻ると、お兄ちゃんは自分の部屋に戻っていた。

どうやら私が始めるのを待っていたみたい。

私は身支度を済ませ朝食を食べに下の階へ降りる。

私達は朝食を済ませ、お兄ちゃんにメイクをしてもらって、一緒に家を出た。

今日も電車で事務所に向かった。

やっぱり電車は苦手だ…満員の電車は男の人が近くに居るから…

私が事務所に着くと、ド派手な衣装の雪が待っていた。

「おう、おはよう！」

「おっおっおはよう…」

私は声を振り絞って挨拶をする。

（由子…お兄ちゃんは仕事があるから今日は側に居れない…大丈夫か？）

お兄ちゃんが私に耳打ちする。

（うっうん、私…大丈夫！）

（そうか…何かあったら直ぐに電話して来いよ…）

心配そうなお兄ちゃんの顔…

私は精一杯の強がりをする。本当はお兄ちゃんが居ないと不安なの…

雪とは部屋の中で一番遠い席に座り、次のアクションを待っていた。

暫くすると、マネージャーの高田さんが入ってきた。

「お早うございます。」

私と雪は会釈をする。

「今日からは歌、演技などの実技レッスンを受けていただきます。実力が付き次第、徐々にメディアに出していく予定です。」

しかし、一般認知度が低いままデビューさせる訳にはいけないので、近々ポスター撮りをして、

デビューの前にファンに顔を知ってもらいます。」

「はあ…」

「今日はメンバーが到着するのを待つて、それぞれのキャラ設定や売り方を打ち合わせして、

決まり次第レッスンを受けてもらいます。」

「はあ…」

「では、もうすぐメンバーも来ると思うので各自用意された衣装に着替えてお待ちください。」

「はい。」

高田さんは部屋を後にする。

私たちは高田さんが居なくなった部屋で緊張の糸を解く…
「ぶっはぁー！！！」

「はあ…」

私も雪も大きなため息…

部屋の隅には名前の書かれた衣装が置いてあった。

私は衣装を取りに行つた。雪はすでに手に持っている。

「うーん、これで全部かな？」

どうやらスーツの様だ。

私が衣装を持って更衣室に行こうとすると…横では雪が素っ裸で着替えている。

「……………！」

私は言葉にならない悲鳴を上げ、逃げるようにして更衣室に飛び込む。

「…へんな奴だなあ…」

雪は呆れ顔で着替えを進める…

私と雪が着替え終わると同時位に高田さんが入ってきた。

「メンバーが到着しましたので、会議室にお越しく下さい。」

「はい。」

「はっはい。」

二人で会議室に向かう。

会議室の扉を開けると…室内の空気が廊下に流れる…

凄くいい香りの風だ…

「お早うございます！」

雪が隣で挨拶をしている。

「おっお早うございます。」

私も雪ほどの元気ではないけど、精一杯頑張つて声を出す。

「おー！！お早う！！」

テンションの高いKAJIさん。今日も元気だ。

「おはよう。」

素っ気ないJEYさん。

「……………」

返事すらしてくれないKOUJIさん。

「お二人はココに座ってください。」

上座に案内される…。気まずいんですけど…

「今日は二人のキャラ設定と今後の方針などを話し合いたいと思います。」

高田さんが司会進行。

「……いいんじゃないの？この前高田さんが言ってた通りで…。」
初めてKOUJIさんが口を開く。

「ああ、イメージ通りだ…。」

JEYさんが後に続く…

「うんうん！！二人とも思っていた通り！ピッタリだ！」

KAJIさんだけはノリノリで返す。

「ではキャラの方向はこの前離した通りで行きます。」

私と雪は顔を見合わせる。

「雪さん、由さん、お二人のキャラ設定を説明します。」

私と雪は息をのんで話を聞く。

「まず雪さん。あなたは健康第一の元氣者。落ち込む事を知らないスポーツ万能少年。」

ある時は可愛い弟、またある時は元氣な王子様。

でも一瞬見せる悲しそうな瞳にお姉さんはズッキュン！！イメージは捨てられた子犬。」

「ズツズッキュン？？子犬？」

思わず肩を落とす雪。そういえば雪が着ている衣装はなんだか子供っぽい色合いだ。

そして、私の着ている衣装もなんだかピンクやら白やらの色が多い…嫌な予感が…

「そして由さん。あなたはか弱い美少年。

透き通る肌、いかにも病弱な眼差しでグループのマスコットの存在。

今にも倒れそうなのに、一瞬見せる猛獣のような瞳にママさんメロメロ。イメージは手負いの兎」

「メツメロメロ？？うつ兎？」

信じられない言葉に失神しそうな私。

「つと、こんな感じで行きます。」

「……………」

二人とも言葉が出てこなかった。

「えー、グループ全体の方針と致しましては……………」

高田さんが一生懸命何かを説明しているけど、私の耳には全然入ってこなかった。

隣の雪も同じように、心此処にあらずって感じで空中をボーッと眺めている。

「よ……………しさ……………由さん。」

「はい！」

私は自分の名前が呼ばれていた事に漸く気付く。

「では今後はこのように活動してもらいますので宜しくお願い致します。」

「はっはい……………」

まずい……………全然聞いてなかった。

高田さんは用事があるからつと先に会議室を出て、部屋にはメンバーだけが残った。

「さて……………どうしようか……………」

J E Yさんが口を開く……………

「まず改めて自己紹介をしてもらおう！」

K A J Iさんが乗っかる。

「はっはい！僕は雪と言います。年は18歳です。」

趣味はサッカー。特技もサッカーです。後は踊りにも自信があります。宜しくお願いします。」

雪がハキハキと応えていく。

うわっ私も何か喋らなくちゃいけないの？人前で話すなんて……………どうしよう。

「えっつと、私は由です……………」

後に言葉が続かなくて……………どうしよう。沈黙の時間が流れる。

メンバーは顔を見合わせ、不思議そうな顔をしている。
私は全身で冷や汗をかいて、必死に言葉を振り絞ろうとする。

沈黙の空気を破ったのはKOUJIIさんだった。

「お前の兄貴はSATOさんなんだろう？」

「えっはい。」

「ふーん……」

……それだけ？

KOUJIIさんの発した言葉はそれだけだったが、沈黙を破るには十分だった。

「ぶっ……あはは！！」

J E Yさんが大笑いしだした。あの美しい顔の原型が分からない位大口を開けて……

「ちよつちよつとJ E Y……」

K A J Iさんは苦笑いしながらJ E Yをたしなめる。

「……。」

K O U J Iさんの顔色が赤くなりプルプル震えだす。

そしてK O U J Iさんはいきなり立ち上がり、控室を出て行ってしまった。

私と雪が呆気にとられていると、K A J Iさんが説明してくれた。

「いやー、これからこんな二人のやり取りは年中目撃すると思うけど、心配しないでね！」

別に中が悪いとか、J E Yが喧嘩売ったとかじゃなくて、これは何時ものかけ合いなんだ！」

「はあ……でも、顔まで真っ赤にして怒ってたんじゃ……」

雪が心配して聞いてみる。

「大丈夫！K O U J Iも怒って飛び出した訳じゃなくて、あれね……照れてるんだ。」

はあ？あんなに怖そうな人が照れてる？そんな馬鹿な！！

私たちは暫く談笑をして今日は解散になり―（私は殆ど喋れなかったけど）、

私と雪は歌のレッスンに向かう事になった。

とりあえず荷物を纏めようと衣装を脱ごうと部屋まで戻った。

「おい！先に行ってるぞ！」

「あつああ…」

雪の着替えはメチャクチャ早い！

更衣室なんて使わないで、バツつと脱いでザツつと着る。衣装だけはキチンと畳んでいたけど。

一方私は更衣室に隠れコソコソ着替えるから、どうしても時間がかかる。

お兄ちゃんの言いつけ通り、胸にはさらしを巻いていたが少し緩んでしまった…

仕方なく巻きなおしてたら余計に時間が掛ってしまった。

私は身支度と、お兄ちゃんに教わった応急メイク直しをしてから部屋を出た。

私は時間も無かったので早足で廊下を歩いていると…

うつすら開いていたドアの隙間から、なんだか悲痛なうめき声が聞こえてきた。

（何だか苦しそうな声…もしかして急病人でも居るんじゃない！）

私は恐る恐る隙間から中を覗いてみた。

第七章

うめき声の正体はKOUJIだった。

「うう、くう…」

壁の方を向いて、体を丸めて蹲っていた。

（もしかして急に具合でも悪くなったのかしら…

声、掛けた方がいいのかな？でもKOUJIさんって怖そうだし…）

躊躇したものの、明日の朝刊に載るような事は避けた方が良さそうなので、

意を決して話しかけることにした。

「こつKOUJIさん…どこか具合でも悪いんですか？」

私はKOUJIさんの肩に触れた。

瞬間、KOUJIさんの体が跳ねあがった。

「KOUJIさん？」

やだ！本当に具合が悪そう！私は触れた手に力が入る…

つといきなり、KOUJIさんは私の手を掴んできた。

「！！！！！！」

私は声も出せないほどビククリしてしまった。

次の瞬間、KOUJIさんは私の手を振り落とす。

「ほつといてくれ…」

「でも…どこか具合が悪いんじゃない？」

「別に何でもない！」

急にKOUJIさんが立ちあがって…顔が真っ赤に染まっていた。でも、苦しそうというよりは…恥ずかしやら気まずいやらの表情をしていた。

えつまさか、さっきのがまだ尾を引いてるのかしら…

イメージとのギャップが激しすぎて…私は大爆笑してしまった。だって…あんなに眼光の鋭い人が…笑える。

私の大爆笑を見て、ますますKOUJIさんの顔が赤く染まった。耳まで真っ赤に。

「いい加減にしてくれ！」

KOUJIさんは怒って部屋を出て行ってしまった。

なんだか怒ってた割には全然怖くなかった。

なんだか面白い人だなあ。

って、私…今笑ってた？

外に出るのが怖くて仕方なかったのに…目の前に顔のいい男が居たのに。

私…順応性高いなあ…

でも、KOUJIさんって同じ匂いを感じたというか…

人を寄せ付けない感じは自分と似ている気がした。

「すつすいません！遅れました。」

私は歌のレッスンの為に雪と二人でタクシーに乗り込んだ。

私は後から乗り、なるべくドアに体を密着させて座った。

タクシーの中で雪は一人でひたすら喋り続けていた。

私は必死に相槌を入れていた。

最初は密室空間に男と居るなんてゾーっとしたけど、到着するころには結構慣れていた。

雪は一生懸命話しかけてくれて、なんだか子犬がジャレついてくる様な…

雪とはいい友達になれそうだって思った。

歌のレッスンと言っても、一日発声練習ばかりさせられていた。

お腹の筋肉が破裂しそうだった…明日は筋肉痛だ。

お腹を撫でながら帰り支度をしていた。

「お前ってなんでKJに入ろうと思ったんだ？」

雪はいきなり質問してきた。

「えっうーんと…」

私は言葉に詰まってしまった。

まさか本当の事は言えないし…

「ゆっ雪は？」

私は咄嗟に質問返しをする。

「えっおれ？そりゃーKOUJIIの歌唱力だよー！！あの歌声は半端じゃない！

それに表現力！KJの歌って全部KOUJIIさんが作ってんじやん？マジ天才ー！！」

「へえー、雪はKOUJIIさんに憧れてオーディション受けたんだ…」

「当然ー！！」

雪の真っすぐな気持ちは凄いなあ…

「んで、お前は？」

「え？わた…じゃなくて僕？うーんと…僕もKJに憧れて…」
適当に嘘をついてしまった。

「へー、誰のファンなの？」

しまった！そこまで考えてなかった。

「…えっと、僕もKOUJIIさん。」

うん、KOUJIIさんはボーカルだし…。一番妥当かと。

「そっか！いいよなーKJ。ってか、今は俺たちもメンバーだったな！アハハ！！」

なんだか話しやすい人だなあ雪って。

「でも、お前って変わってる奴だよなあ。実は昨日は嫌な奴だと思ってた。」

「へっ本当？」

「うん、本当。だって初めてお前見たとき、KJのポスター睨みつけてたし…」

何だか話しかけても素っ気ないし…話し方は女だし、お高くとまってるのかと思ってた。」

（話し方に女出てた？気をつけなくちゃ…）

「そんなことないよ！ひっ酷いなあ…」

「ゴメンゴメン！でも今日一日見てて違うつて分かったから。

何だか一生懸命頑張ってるし、素っ気ないのも緊張してたんだろ？」

（ラッキー！なんか誤解してる！本当は男が嫌いなだけですケド。

）

「うつうつ…大物芸能人が目の前に居るかもって思ったからさ。」

「そっか…まあ始まったばかりだけど、お互い頑張ろうな！」

雪が手を差し出してくる。

「うん、頑張ろう！」

私も手を握り返す。

握った雪の手は嫌な感じがしなかった。

雪っていい奴かもしれない…

第八章

レッスンも終り、私は家に帰った。

疲れて家に帰る。当たり前前の事だけど、私にとっては久しぶりの経験。

体は疲れてるのに、気持ちが高ぶって…

お兄ちゃんは私より先に帰って来ていた。

私は今日一日頑張った事を報告して、お兄ちゃんに喜んでほしかった。

私はお兄ちゃんの部屋を訪ねた。

「お兄ちゃん、起きてる？」

私はドアをノックした。

「うん？由子？起きてるよ。入っておいで…。」

お兄ちゃんは仕事道具を広げて床に座り込んでいた。

「由子、今日は一緒に居れなくてゴメンな。」

「ううん、大丈夫だよ！KJの人達とも何とか話せたし。」

「…ちゃんと話せたのか？」

「うん、リーダーのKOUJIさんは何だか可愛い人だし、雪君も何だか友達みたいに話しやすいの！」

私は少し興奮した口調で、今日一日の出来事を話して聞かせた。

お兄ちゃんは黙って私の話を聞いていた。

「そっか…由子、頑張ったな…」

お兄ちゃんは私の頭をポンポンしてくれた。

「うん、おにいちゃんのお陰だね。私…引き籠り卒業出来そうだよ！」

「そっか…良かった。でも由子…頑張るのは良いけど、体調は気を

「使えよ。」

「分かってるよ！大丈夫！」

「ならいいけど……」

「……………」

「お兄ちゃん… 本当にお兄ちゃんのお陰だよ。お兄ちゃんに魔法をかけて貰ったから…」

お兄ちゃんが私を変えてくれたから……」

私はお兄ちゃんに感謝の気持ちでいっぱいだった。

「お兄ちゃんは何時も私を助けてくれる… 本当に感謝してるんだよ。」

「……………」

「由子… そつか、分かった。なら由子……」

「何？」

「お兄ちゃんにお礼は無いのかな？」

「お礼？」

「うん、お礼。」

「えっ私… お兄ちゃん… 何か欲しい物あるの？」

「うん、実は高級な腕時計が欲しくてね……」

「ええ… 今はチョット財布事情が… あっあのね、私頑張ってお給料稼いでくれから、そうしたら……」

私が焦って返事をする、

「あはは…！冗談だよ！お前は本当に可愛いなあ。」

「じっ冗談？もう……」

「お礼はお前の話で良いんだよ。その日の出来事を毎日俺に聞かせて。」

「話し？」

「そう話し。お兄ちゃんにお前が頑張ってる報告をして……」

お兄ちゃんは、お前が生き生きしてる事が嬉しいんだから。」

「そんな事… うん！お安い御用です！」

私とお兄ちゃんは約束をした。

その日の出来事をお兄ちゃんに毎晩報告する事。

もし仕事で時間が合わないなら携帯に電話なりメッセージを残す事。

「私、毎日お兄ちゃんに報告するね!」

私がお兄ちゃんに報告する事でお兄ちゃんが喜んでくれるなら...

私とお兄ちゃんは指切りをした。

「ほら、明日も早いんだろ?もう寝ろ。」

「えー、だって何だか気持ちが高ぶっちゃって...」

「そっか、久しぶりの一人外出だもんな...よし、お兄ちゃんがオマジナイをしてやる!」

「オマジナイ?」

「そう、ココに座って。」

お兄ちゃんは私を自分のベットに座らせる。

「体を楽にして横になってごらん?」

「うん...」

私は言われたとおりに横になる。

「さあ...目を閉じて...俺に全部預けて...」

お兄ちゃんは私の顔を撫でる...私は頷き体の力を解く...

お兄ちゃんの綺麗な指が私の体に触れてきた。

お兄ちゃんは私の頭をポンポン叩いてから、腕、腰、足、肩と、マッサージを施す。

私の疲れた体に染みる...私はつい眠くなって...お兄ちゃんのベットで寝てしまった。

「由子...寝ちゃった?」

「zzzz...うーん、お兄ちゃあーん...」

私の寝息を確認すると、お兄ちゃんは私の頭にそつと唇を押しつける。

「なんか...裏目に出そうだ...折角男しか居ない所に遣ったのに...」
お兄ちゃんは私の頬にキスをする。そして体に布団を掛けて部屋を出て行った。

私はお兄ちゃんが居なくなつた事も気付かないで部屋で朝を迎えた。

私はお兄ちゃんを探して家の中をグルグル歩き回る…

「由子、どうしたの？」

「あっお母さん、お兄ちゃんは？」

「もう、とつくに仕事行つたわよ？」

「えー、先に行つちやつたの？一人で事務所行くの嫌だなあ…」

「子供じゃないんだから！由子も少しお兄ちゃんの負担、減らしてあげないとね！」

お兄ちゃん、今日リビングで寝てたわよ？貴方、お兄ちゃんのベツトで寝ちゃってるから。

お兄ちゃんだって仕事してるんだし、少しお兄ちゃんを卒業しないとね！」

そうなのかな？私、お兄ちゃんに迷惑かけてるのは分かってるつもりだけど…

外から見ても負担掛け過ぎてるのかな？もうお兄ちゃんに心配かけたくないな…

私も怖いだの言っていないで頑張らないと！

「うん、そうだねお母さん…私も頑張らないとね！」

「由子…」

お母さんは私の肩をポンポンしてくれた。

「行つてきます！」

私は身支度を済ませて家を出る。

メイクは私が寝ている間にお兄ちゃんが済ませてくれたし、洋服もお兄ちゃんが用意してしてくれた。

お兄ちゃんの負担にならない様に、自分でメイク覚えなくちゃなあ…初めて一人で電車にも乗れた。

怖くて怖くて仕方なかった…けど、頑張らなくちゃ！

私は恐怖の時間を何とか乗り越え事務所に着いた。

「おはよう由！」

事務所では、先に来ていた雪が出迎えてくれた。

ってか、昨日に増してテンション高いなあ雪って。

「あのさあのさ！聞いた？今日の事！」

「へ？今日って何かあるの？」

「なんか、皆で写真撮りするんだって！メンバー全員参加！」

「そうなんだ……」

「ええーっ、テンション低めだねえ……俺なんて興奮しまくりなのに……！」

「そんなに撮影が楽しみなの？」

「ってか、俺たちの顔が全国に出るんだぜ？」

……そっか！KJの写真って色んな所で見るし、ファンなら絶対チェックするし……

「社長がイメージ作りやすい写真集から始めようって！」

写真集か……いくら私の顔が詐欺的に別人でも写真集は緊張するなあ……アップもあるだろうし……

「由、一緒に頑張ろうな！」

「ああ……うん、頑張ろうな！」

私と雪は拳をぶつけ合う……絵に描いたような男の子の挨拶。なんだか照れ臭いなあ……

私と雪は衣装に着替えて撮影がある部屋に向かう。

部屋では既に撮影の準備が始まっており、お兄ちゃんの姿もあった。

「お兄ちゃん……！」

私はお兄ちゃんに駆け寄った。

「あつ由子……じゃなくて、由！仕事中はお兄ちゃんって呼ぶなって言ってるだろ？」

「えへへ！ごめんね？お兄ちゃん見かけたら嬉しくなっちゃって……」

「えっそっか……次からは気をつけるよ？」

「はい！」

お兄ちゃん、口調は怒ってるくせに、顔はニヤけてるし。

私と雪がお兄ちゃんに少し濃いめのメイクを施される。

ますます別人になったみたいだ。なんか少し色っぽいメイクだなあ…私と雪の支度が終わった頃、いきなり部屋に緊張が走った。KJの三人が現れたからだ。

「おはようございます。」

「お疲れ様です。」

スタッフが次々に挨拶をする。まるで王様みたい。

私と雪も挨拶をしにメンバーの前へ行く。

「おはようございます。」

雪が先に挨拶をした。

「おっおはようございます。」

私も続いて挨拶をして会釈をする。

「お早う！今日は撮影だけど緊張してない？」

KAJIさんが優しく話しかけてくれる。

「はい、少し緊張しています。」

私が正直に答える。

「緊張なんてするのは、気持ちが悪くなる証拠だ…」

KOUJIさんがキツイ言葉を浴びせてくる。

「たっ弛んでなんか…真剣です。」

KOUJIさん…昨日私が笑った事でも根に持ってるのかしら…

「撮影はじめます。」

スタッフの掛け声と共に撮影はスタートした。

「はい、もっと笑ってー！」

カメラマンはメンバー一人一人を写真に収めていく。

私は多少引きつりながらも一人のショットを撮り終える。

顔が幾分か痛い気が…

「では、メンバー全員のショット行きまーす！」

とうとう来たか…五人のショット…

嫌だなあ…密着するかもしれないし…

私は嫌嫌ながらも立ち位置に着く。

私と雪を取り囲むようにして三人が後ろに立つ。背中が熱い…

「皆さん、もう少し動き下さい！」

この状況で何をしろと？

私が固まっていると…

「皆さん、イメージ設定の通り、由と雪を軽く虐めて下さい！」

高田マネージャーの声が響く…

「はい！」

なんだかノリノリなJ E Yさんの声が後ろから響く。

そういえば打ち合わせの時…これからのグループの方向はとか何とか言ってた様な…

ヤバイ、殆ど覚えてない！一体どんなグループイメージなんだっけ…

「雪…雪！」

私は小声で雪に話しかける。

「どうした？」

「あのさ…忘れてないかも一回復習したいんだけど…」

グループ全体のイメージってどんなだっけ？」

「へ？あの初期メンバーのマスコット。お兄さんたちは可愛がる反面虐めちゃうってやつ？」

「へっ虐めちゃう？」

「何だよ、忘れちゃったのか？」

「うん、実はあの時って緊張しすぎてあんまり覚えてないんだ…」

「ふーん、じゃあ一回だけ言うぞ？おれもあまり口に出したくないしな…」

ええ！口に出したくない事をさせられるのでしょうか…

「俺と由はKJのマスコットの存在で、初期メンバーの玩具にされている。」

三人からは友情以上の感情を持たれていそうなスキンシップを受けているものの、

何だか満更でなさそうな感じが女性の萌えの心を捉える。

初期メンバーはお兄ちゃんのポジション、新メンバーは可愛い弟。

何やら怪しげな感じがゾクツときちゃう。」

雪は説明し終わると顔を青ざめながら正面を向いた。

「雪くん、顔色悪いよー！…ちよつとメイク明るめにして？」

「はい。」

お兄ちゃんが雪のメイク直しに入る。

私は今日の撮影が無事に終わるかどうか…不安だった。

第九章

「宜しくお願いしまーす。」

撮影が再開する。

私は緊張つというより恐怖で動けない。

横に居る雪をチラ見する。雪の顔色はお兄ちゃんのお陰で良くなつたものの、表情は硬い。

背中に緊張が走る。

「雪…」

雪の後ろに居るJ E Yさんが雪の肩に手を回す。

雪の肩がピョンと跳ねる。

J E Yさんは雪の耳に口を近づけ囁く…

「雪って何処を感じる？」

フーッとJ E Yさんの息が雪の耳に掛る…雪は顔を真っ赤にしてブンブン頭を振る。

ひいー！雪が襲われる！！

私がJ E Yと雪のやり取りを顔を引き攣らせながら見ていると…

「由…」

私の後ろから声がする。

私の肩に逞しい腕が巻きつく。

「かつK A J Iさん！！」

K A J Iさんの腕が私に絡みつく。

内心は嵐の様だったか、一生懸命作り笑顔で応える。

「由：顔が引き攣ってるよ？」

K A J Iさんは絡んでいた腕の力を緩め、体に触れない様に気を使ってくれる。

K A J Iさん…

しかし優しいK A J Iさんを尻目に後ろからセクシーな声が聞こえ

る。

「K A J I…そんなんじゃないぞ？」

なんて事を！っと思いつながら後ろを振り向いたら… K O U J Iさんの鋭い眼光が私を見ていた。

「こうやるんだ…」

K O U J Iさんは私の肩を掴み私を自分の方へ向かせる。

「由…俺だつて恥ずかしいし、仕事でも男となんてって思うけど、やるしかないんだ。」

でも決して無理しないで…一緒に頑張ろうな。」

K O U J Iさんの甘くてセクシーな声が優しく私に流れてくる。

でも今日は支配される声じゃなくて…守ってくれそうな声。

「K O U J Iさん…」

私は嫌な緊張の中、優しく放たれた言葉に思わず涙が出てきた。

K O U J Iさんは私の量頬に手を添えて、短い髪を耳に掛けてくれた。

「馬鹿だな…こんな事で泣くなんて…」

「す、すいません。」

「うにゃ、馬鹿というか…単純だな。」

「…K O U J Iさん？」

「これからは毎日虐めてやるから…覚悟しておけよ？」

「ひい、マジですか？」

「ああ、大マジだ。」

急に真剣なK O U J Iさんの顔がそこにあった。

私は急に緊張する。

「その表情だ！…」

カメラマンは興奮してシャッターを切る。

「ほう…」

スタッフにどよめきが起こる。

「彼…良いんじゃない？」

「うん、K O U J Iとの絡み…最高だわ…」

私のコロコロ変わる表情：KOUJIの優しい顔や真剣な顔。
何だか良いショットが撮れたみたいだ。

皆が感心する中、一人だけ表情を強張らせる人がいた。

「……由：子。」

お兄ちゃんは震える手で指に挟んでいたメイクブラシを折った。

「はい！いったん休憩に入りまーす。」

私たちはすぐさま離れて休憩に入る。

「それぞれ衣装とメイクを直して一時間後撮影再開します。」

私は衣装を着替る。

何だか全身真っ白な衣装。白いワイシャツに白いズボン。変なの…

私は着替えを済ませ、お兄ちゃんの元へ走る。

「お兄ちゃん！」

お兄ちゃんの顔を見たら気が抜けて…

「由：辛いのか？」

少し考えて答える。

「うん！大丈夫！この位何でもない！」

私は精一杯強がって見せる。

もうお兄ちゃんに心配かける訳にはいかないしね！！

「そうか…ほら！メイク直すぞ？目え閉じる！」

私は言われた通りに目を閉じる。

でも…お兄ちゃん少し変な顔をしてた様な…

私たちが休憩をしている間、スタッフは忙しく動き回る。

何やらセットも変えるようだ。

運ばれてきたセットは、真っ白な布が沢山。

光沢のある布、少し皺のある布…

スタッフは次々に壁にセットしていく。

真っ白い部屋が出来あがる。

次に見た事も無い大きなベット。白い部屋の真ん中に置かれた。

最後に真っ赤なバラの花を散らせて完成したらしい。

「撮影再開しまーす！」

元気なADが号令をかける。

現場に緊張が走る。

「はい、じゃあ皆さんベットの周りに行ってください。」

ADが私たちにベットに行くように促す。

カメラマンが悩んでいる、そして指示を出す。

「うーん、決めた！由さんで行こう！」

「へっ僕？」

「由さんはベットにドカッと座って！」

「はあ…」

私はベットに腰を下ろす。

「あー、そんな端っこじゃなくて…靴脱いで枕に座っちゃって！」

「はあ…」

私は言われたとおりに移動する。

「じゃあ皆さんは由さんを取り囲んで！あっ由さんは足を前に伸ばしてー！」

「はいー！！！」

メンバーが私を取り囲む。私も言われたとおりにする。

「はい、皆さん膝について…あっ雪さんは由さんの足に寝転がって！」

「はい。」

雪が私の足元に寝転がる。

「あーそうじゃなくて！太ももに顔を埋める感じで！」

「いつはっはい…」

雪は嫌そうな顔をして私の太ももに寝転がる。

そんな嫌そうに演^やる？そりゃ雪にとっては同性の太ももだろうけど…

「残りのメンバーは由さんの体に頭預けて！」

皆無言で私の体に頭を乗せる。

「はい、その位置でお願いします。撮影始めます。」

カメラマンがシャッターを切り始める。眩いフラッシュが光る。
「皆さん、表情固いですよー！」

本当に皆の表情は硬かった。

「うーん、聖母マリアに縋る天使って設定なんですけど…皆さん、もつと柔かい表情下さい！」

カメラマンの注文が入る。

「マリアって…」

J E Yさんがため息をつく。

「仕方ない…一頑張りだ…」

K O U J Iさんはそう呟くと私の太ももを擦り始める。

「ひい！」

私は思わず声をあげる。

「由…」

J E Yさんはヤラシイ手つきで私を擦る。

「由くん、ごめんね」

K A J Iさんは優しく足を触る。

「俺も嫌だけど、ちよつとの辛抱だから…」

雪は私の太ももに頬刷りをする。

私の頭の中は真っ白だった。

「表情固いなあ…なんか適当に話して下さい！」

適当って言っただって…私は口が渴いて…声なんか出ないよ。

「由…」

J E Yさんが話しかける。

「はひ。」

私は噛みながら答える。

「ぶっ！！はひだって！！」

J E Yさんは思わず嘔き出す。

私は少しムクれる。

「ごめんごめん！あー由君。君は好きな女性でも居るのかな？」

「いっいいえ…居ないです。」

私は女の子だつてば！

「うーん、恋は人生の必需品じゃないか！勿体ない。」

「はあ…」

「うーん、じゃあ、大切な人は居るだろう？」

大切な人？両親とかお兄ちゃんの事かな？

「はい、居ます。」

「そうか…じゃあ今から俺たちを由君の大切な人達と置き換えてご覧？」

私はお兄ちゃんの顔をチラリと見た。

「！！！！」

お兄ちゃんの顔を見て私はビックリした。今まで見た事も無い顔。悔しいそう、それでいて怒っている様な…人でも殺しそうな表情。私は思わず目視線を戻す。

お兄ちゃん…

「由君、俺たちを大事な人だと思って撫でて…」

J E Yさんがアドバイスをくれる。

「はい、やってみます。」

私は四人を家族に置き替えながら…想像してみる。

何時ものリビング…集まる大好きな家族。

私は家族の真ん中で寛いでいる。

「そう、その表情貰った！」

カメラマンは忙しなくシャッターを押しまくる。

「由さん以外、目を閉じ下さい！！」

メンバーが目を開ける。

私は皆の頬や頭を優しく撫でる。

「はい！！ゾクゾクする画が撮れましたー！今日は終了となります！」

「お疲れ様です！」

スタッフが声を上げる。

すぐさまメンバーは私の体から離れる。

私も少し痺れた足を引きずりながらベットから降りる。

「…あいつの足って…なんかムラムラ来ないか？」

J E YさんがK O U J Iさんに話しかける。

「おい、男の足だぞ？お前らしくないな…」

K O U J Iさんが答える。

「ははっお前だって何か感じる所があったんじゃないの？顔、真っ赤だぞ？」

K O U J Iさんが慌てて両頬を手で隠す。そして、急いでスタジオを出ていく。

「あいつも面白いな！撮影中は平気なのに…終わった途端にこれだ。」

J E Yさんが呟いているとK A J Iさんが合流する。

「でも確かに由君の足って…何っていうか…」

「まあな。少し肉が付き過ぎだ。凄い細身なものにな…」

「まあね。とにかく撮影は終わったし、早く帰ろうよ！」

二人もスタジオを後にする。

撮影は無事？終了した。

全体的には無理やりだった気がするけど…

「雪…」

私は雪の側に駆け寄った。

「おっおっ…由か。」

「お疲れ様！雪！」

「お疲れ…」

心底疲れた表情の雪。

「もう嫌だ…あんなの耐えられない…」

雪はブルブル体を震わせながら言う。

「だって耳に息吹きかけるわ急に背中抓るわで…終いには綺麗な顔であり得ない言葉の数々…」

雪は、今はメイクで分らないけど、顔色が悪そうだ。

「それに…今度は野外撮影だぞ？」

「へっ野外？」

「ああ、まあ写真集だからな。色んな場所で撮るだろ普通。」

「うえっまたこんな事やらされるのかなあ…」

私が弱音を吐くと雪が、

「まあ、男同士気持ち悪いけどな。それが女性に受けるなら仕方ないんじゃないの？」

「うん、仕方…無いよね。」

「ああ、頑張るしかないよ。別に写真集だけが仕事じゃないし。しかし…お前って随分着やせするのな？」

「へっそうかなあ…」

「うん、太ももとか…なんか女みたいにプニプニしてるし…変な気分になっちゃうよなあ…」

「じじじ…冗談だよな？」

「ぶっ冗談に決まってるだろ？」

「何だ、ビックリさせんなよ！気持ち悪う。」

「悪い。まあとにかくお疲れさん！！」

「ああ、お疲れ！！」

私と雪はハイタッチで別れ、雪は控室に戻っていく

「ったく、マジで勃起そうだった…俺…変態なんだろうか…」

雪は独り言を囁きながら控室で苦悩していた。

私も控室に戻ろうとした時、急にお兄ちゃんに腕を掴まれる。

「わっ！あっ…おにいちちゃんかあ。」

私はホッとする。でも…お兄ちゃんは少し怖い顔をしていた。

お兄ちゃんは私の腕をキツく掴み引っ張っていく。

「おっお兄ちゃん？」

私の問いに答えもしないで…お兄ちゃんは私を自分の控室に連れて行った。

第十章

お兄ちゃんは私を控室に連れて行った。

バタンツツと大きな音で扉を閉める。

「おっお兄ちゃん？」

何時もと違う様子のお兄ちゃんに少し体を強張らせる。

「どうしたのお兄ちゃん…」

私は不安な声でお兄ちゃんに話しかけた。

お兄ちゃんは私の腕を強く引つ張り、私を自分の胸へ引きずり込み、そして…

私を強く…思いつきり抱きしめる。

「おっお兄ちゃん？」

私はお兄ちゃんが少し怖かった…

「……大丈夫か？」

「えっ？何？」

「あんな事…知ってたらお前をKJになんかに…」

「だっ大丈夫だよ！！心配しないで。」

「本当か？辛かっただろう？」

お兄ちゃんは私の頬を両手で掴み、目を見つめながら囁く。

それに…不安で仕方ないって顔をしていた。

「ちよつとね…怖かったけど大丈夫！お兄ちゃんも近くに居たし…」

「そうか…でも本当に辛いなら辞めても良いんだぞ？」

「ふふっお兄ちゃん…この前と矛盾してるし！」

私がほほ笑むとお兄ちゃんは急に真剣な顔をした。

「もういいんだ…お前の事は俺が一生守ってやるから…」

一生、お前の側に居てやるから…」

お兄ちゃんはそう言って、私の胸へ顔を埋める。

なんだか大きな赤ちゃんみたいだ。

お兄ちゃんの言葉に今朝のお母さんの言葉が蘇る…

「お兄ちゃん…私は大丈夫だから…もう少し自由になって良いんだよ?」

「由子…」

私はお兄ちゃんの頭をポンポンする。いつもと逆だなあ…

「お兄ちゃん…そんな心配するなら初めから女の格好させてくれたら良かったのに…」

女の子でデビューしてたら男の人の事で悩む執拗なかったのに…」

私は以前から不思議に思っていた事を聞いてみた。

お兄ちゃんは何で私を男のグループに参加させたのだろう…

「それは…その…あれだよ…」

お兄ちゃんは何だか話しくそだった。

「まあ良いけどさ!…あつちよつとトイレに行ってくるね!」

私は諦めて部屋を出る。きっとその内話してくれるだろう。

私が部屋を出ていた時、お兄ちゃんは一人で何か呟いていた…

「くそっ本当に女の格好で自信付けてやればよかった…裏目ばかりだ…くそっ…」

お兄ちゃんは壁を思いつきり殴った…拳が血で滲む…

私はトイレから戻る途中、またあの声を聞いた。

「うつくう…」

もしかして…私は声のする方を見る。

あつちよつぱり。悶絶するKOUJIさんだ。

KOUJIさんは今日も頭を抱え、壁を向いて蹲っている。

あれ?でも今日は赤面していなかったような…もしかして今度こそ具合が悪いんじゃない…

私は少し迷いながらも声をかけた。

「あの…KOUJIさん…」

私は少し離れて声をかけた。

私の声にKOUJIさんはすぐ反応した。

「……なんだ、お前か……」

声の調子からして今度も恥ずかしがってるだけの様だ。

「もしかして……また何かありましたか？」

「はあ？何かって？？お前の所為でJ E Yにからかわれたんだろう？」

KOUJIさんは怒っている様だ……私、何か気に触るような事したっけ……

「あの……私何かしましたか？気付かずにすみません……」

私は頭を下げた。身に覚えはなくとも一応誤っておいた方が無難だろう。

「あつ悪い……別にお前の所為じゃ……」

KOUJIさんは頭をポリポリ掻きながら起ちあがった。

「でも何で……？男だぞ？うーん……」

KOUJIさんは頭を傾げ何だか考え込んでしまった。

「あのー、僕はそろそろ……」

私は部屋を出ようとした時だった。

「待て……」

KOUJIさんの声が聞こえる。

綺麗で支配される声……私は立ち止まる……動けない。

「お前……そんな顔だけど、ちゃんと男だよな？」

KOUJIさんが私の顔をマジマジ覗きこむ……ひい！美男子アップ！私は体が硬直する……

「うーん……胸も無いし……男だ……」

なっ失礼な！これはサラシです！……元々小さいけどさ。

「おっ男です！！」

私はムキになって声を張り上げる。

「うーん……ちよつと失礼。」

はっ？失礼って……あっ……！！

KOUJIさんは私の腕を掴み、一瞬でKOUJIさんの胸の中に

私は収まった。

「！！！！！」

私は思わず硬直する…

「あれれ？なんでだ？訳が解らん…」

ちよっ訳が解んないのは私の方ですけどぉー！

KOUJIさんはすぐ私を離れた。

「すまん…俺は病気らしい…」

「へっびっ病気なんですか？」

「ああ…お前…男だもんなあ…うーん…」

KOUJIさんは再び考え込んでしまった。

私はその隙に部屋を飛び出した。

怖かったなあー、美男子に抱きしめられるなんて…って、あれ？

そういえば…全然怖くなかった様な…

むしろ心地よかった気が…

ううん！そんな筈はない。気のせいだ…

私は考えるのを止め走り出した。

「あれは男だ…あれは男だ…あれは男だ…血迷うな俺…」

KOUJIさんのお経の様な独り言は暫く続く…

「はあはあ…おっお兄ちゃん！！！」

私は息を切らし自分の控室に戻った。

「あれ？」

そこにお兄ちゃんの姿は無かった…

「先に帰ったのかな？」

私はあまり深く考えないで帰宅の準備をする。

私が家に着いてもお兄ちゃんの姿は無かった。

「お母さん、お兄ちゃんは何？」

「えっまだ帰ってきてないわよ？」

まだ帰ってきてないのか…私は夕食を食べお風呂に入り、寝る準備

をする。

時間は深夜を回り午前一時。まだお兄ちゃんは帰ってこなかった。
お兄ちゃん、今日は他に仕事があるとか言ってなかった様な…どう
したんだろう。

私は電話ではなくメールを送る事にした。もし仕事中なら邪魔する
訳にはいかないしね！

（お兄ちゃんへ、今日の報告。

報告と言っても一日一緒だったから知ってるよね。

今日は写真を沢山撮りました！怖かったけど皆の期待に応えられ
るよう…

お兄ちゃんにこれ以上心配かけない様頑張るね！）

お兄ちゃん、メール読んでくれたかな？

私は明日の為に布団に入る。

でも、お兄ちゃんからのメールの返事は無かった。

第十一章

お兄ちゃんは朝になつても家に居なかった。

ケータイにも着信はない…

お兄ちゃん…

私は一人で事務所に向かう。

あんなに怖かった電車も何とか乗れるようになった。

その気になれば私もやるもんだ！

事務所にもお兄ちゃんは居ない…

お兄ちゃん、何処に行つたんだろう。

今日は野外撮影だった。

メンバー全員で車に乗り込み撮影場所へ向かう。

車内では私の隣に雪が座った。

「今日、外で撮影だな！」

「うん…そうだね…」

私はお兄ちゃんが気になつて上の空だった。

「…何時にも増してテンション低いなあー、どうした？」

「いや…別に…あのさ、雪って兄弟居る？」

「え？兄弟？居るよ！二つ下に妹がね。それがどうかしたか？」

「ううん、何でもない。」

「変な奴だな…もしかしてSATOさんと何かあった？」

「えっ別に何も無いけど…どうして？」

「いや、急に兄弟なんて聞いてくるから。」

「……、雪って妹と仲良いの？」

「えっ妹？…最悪。」

「え？」

「あいつは俺の事、バイ菌位にしか思っていないんだよ。会話すら無いし。」

でも俺がKJのメンバーになった途端に態度が急変してさ…

俺の写真撮って売り出すし、メンバーの私物持って来いだのさ…

あいつは悪魔だ…」

「…へえ、パワフルな妹さんだね。」

兄弟ってそんなモンなのかな…私たちが仲良しなのかな…

「雪って妹とメールとかする？」

「メール？ってかアドレスすら知らん…なんで？」

「いや…あのさ、おに…兄貴が昨日家に帰って無くてさ…」

私は雪に相談してみた。

「ふーん、でも良い年の大人の男なんだし、家に居なくても不思議じゃないと思うぜ？」

「ってか、むしろ健康だろ。外で女とでも居たんじゃねーの？」

「うーん、お兄ちゃんに彼女が…」

お兄ちゃん位素敵な人なら居ても不思議じゃないか…

「てか、お前ら兄弟って、本当に仲いいよな。」

「えっそうかな？普通だと思うけど…」

「俺なんて、一日…いや、一週間居なくなったら妹所か親だって心配しないぜ？」

「えっそんなもんなの？」

「普通そうたる…お前だって外泊位するだろ？」

「いや…俺はした事無いんだ…」

「…えっマジで？」

「うん、大マジ。」

「お前…それは不健康だろ。今時女の子でもバンバンやってるのに…」

「…マジっすか…」

「……よし！今日撮影終わったらお泊まり会だ！..」

「へっ？」

「だから、モヤシの由君に風を当ててやる！そんなんじゃ男として欠陥品だ！」

「いや…でも…」

「おっお泊まり会なんてとんでもない！」

「ひっ一晚男と過ごすなんて…死んでしまう。」

「私が答えに困っているのと、後ろから声が聞こえてきた。」

「何だか面白そうな話してるね！」

「あつKAJIさん！聞いてました？コイツの初お泊まり会の話。」

「俺もその話乗った！由君を男にしてやろう！」

「マジっすか？やった！しかし不健全すぎますよコイツ。」

「何？何の話？」

「JEYさんが話に加わる。」

「……ふーん、お泊まり会かあ…面白そうだね。歓迎会もしてないし…乗った。」

「うわー！歓迎会！嬉しいー！」

「隣で雪がはしゃいでいる。」

「おい、KOUJIも勿論参加だぞ？」

「JEYさんが後ろに座っているKOUJIさんに話しかける。」

「……ああ、丁度いい。分かった。」

「何が丁度いいのか分からんが…まあ決定という事で！」

「やったー！由、楽しみだなー！」

「……あっああ……」

「私は反対意見をいう間も貰えずに決定してしまった。」

「仕方ない…ロケ先でお兄ちゃんに相談してみよう。」

「一緒に来てくれるかな？」

「でも、メンバーだけの歓迎会って事で、スタッフ&友達は連れてくるなよ？」

「KAJIさんが余計な事を言う。」

「場所はお前の家なー！」

KAJIさんはKOUIさんを指差しした。

「！なんで俺の家…」

「お前の家が一番広いから。」

JEYさんは迫力のある声で言い放つ。

「じゃあ、仕事終わったら皆でKOUIの家にレッツゴー！」

なんだか異常にノリノリのKAJIさんが叫んでいると、撮影現場に着いた。

「今日の撮影はココで行います！」

スタッフが今日の予定を説明していく。

今日は都内某所にある噴水での撮影だった。

緑に囲まれた公園の中にポツンと噴水がある。

レンガで出来ている噴水はとても可愛い。

「では皆さん、衣装とメイクを終えた方から撮影に入りますので宜しくお願いします。」

私たちは準備をするためにトレーラーへ向かう。

中にはお兄ちゃんが待っていた。

「おっお兄ちゃん！良かった！」

私はお兄ちゃんに駆け寄った。

「由子…ごめんな、昨日は連絡しなくて。」

「ううん、私は大丈夫！お兄ちゃんだって忙しいもんね！」

「ああ…ごめん、早く着替えを済ませてこい。」

「うん、分かった。」

私はお兄ちゃんの顔を見たら安心して、今日の夜の事を相談するのを忘れていた。

私はシンプルなズボンに厚手の真黒なワイシャツという衣装に着替える。

私は噴水に向かう…

既に準備を終えたメンバーが先に撮影を始めていた。

「いいねえ…くうー！」

興奮したカメラマンが狂ったようにシャッターを押しまくる。

噴水には全身ずぶ濡れのKOUJIさんが居た。

頭から滴る雫…透ける衣装…濡れた妖艶な顔。

濡れた髪の間からレンズを睨みつけている…うわぁ…エロい…！

私には刺激が…鼻血が出そう…

続いてJEYさんの番だった。

長めの髪から水が垂れる…色っぽい女性のような感じた。

顎を急に上げ、濡れた髪が後ろに流れる。濡れた喉仏が…セクシー

！！

腰が抜けそうだった。

そしてKAJIさんの番。

上半身裸の衣装に真っ白な布を頭から掛けている。

雫もはじき返しそうな逞しい体…下から見上げる視線は少し怖いけ

ど…カッコいい！！

体を預けたくなる。

雪の番が回ってきた。

雪は頭から水を被るといつか、水と戯れている。

溜っている水を蹴飛ばしたり、いきなり泳いでみたり…可愛い…！

思わず抱きしめたいくなる。

とうとう私の番が回ってきた…

私は恐る恐る噴水に足を入れる…

洋服…透けないかな。

私は取り合えず水を手に当ててみた。冷たい水が袖口に流れてくる…

「あー、由君…取り合えず頭から行って…！」

カメラマンの注文が入る…頭かぁ…

意を決して水に飛び込む。ブクブク…

息が苦しくなって飛び出す…

私は噴水のレンガ部分に腰を下ろした。

「うおう！由君、そのまま寝転がって！！」

カメラマンが指示をだす。

私はカメラの方に体を向け横になる。腕は自分の胸元に置き、乙女ポーズ。

イメージは中性的だったし…こんな感じがしら…

「いいねえー！いいねえー！！」

私の周りをグルグル回るカメラマン…指が腱鞘炎にならないのかしら…

カメラマンの興奮はピークに達したらしく、力尽きた様にその場に座り込んだ…

「はあはあ…皆…サイコーだわ…」

どうやら個別の撮影は終了したらしい…

「ではー、最後にメンバー全員のショット行きまーす！」

スタッフは大きな声で号令をかける。

私たちは濡れた衣装のまま噴水に腰を掛ける。

真ん中にKOUJIさん、その両脇にKAJIさんJEYさん。

KAJIさんの横に雪、JEYさんの横に私。最初は普通にポーズを取っていたけど…

「駄目駄目！！そんなんじゃ女性は逝かせられない！！全然ダメ！！

雪！由！KAJIとJEYにもたれ掛って！！」

うわっ思ってた通り…やっぱり絡むんですか…

私と雪は隣に頭を預ける。

「うーん、もう少し…。雪！KAJIの太ももに頭置いて！！」

「うっ…！はあーい…」

嫌そうに言われたとおりにする。

「うーん、由は…JEYの胸にもたれ掛って！手はJEYの腿！」

JEYは由の肩抱いて！！」

「……はあ。」

私もJEYさんも言われた通りにする。

綺麗な顔の割に胸板が…やっぱり男の人だなあ…

「ふうー！！これよ！これよ！」

すっかり女言葉になったカメラマンが写真を撮りまくる。

私はJ E Yさんの胸の中で早く終わるのをひたすら待つ。

「……由……」

上から声が聞こえる…

「まあ、最近忙しくてな…悪い。」

「はあ、何がですか？」

「お前が気付かなかったなら良いんだけど…勃っちゃった。」

「はあ…何がですか？」

「……お前が馬鹿で良かった。」

「おうっけえいー！！！」

カメラマンはその場に倒れこみ、撮影は終了した。

濡れた服が気持ち悪い！！

私は急いでトレーラーに飛び込んだ。

第十二章

トレーラーに飛び込んだ私は急いで着替えを済ます。
他のメンバーが戻って来ない内に…

コンコン…ドアを叩く音がする…

「由…居るか？」

お兄ちゃんの声だ…

「うん、大丈夫だよ！！お兄ちゃんでしょ？」

「ああ…入るぞ。」

お兄ちゃんが入るなり私の前に来て…

「大丈夫か？」

「うん、昨日よりマシ！」

「そうか…」

お兄ちゃんは何だか泣きそうな顔をしている。

「なら良いんだ…」

お兄ちゃんは私の肩を掴み、椅子に座らせる。
ドライヤーを持つと、私の髪を乾かし始めた。
お兄ちゃんの優しい手が私の髪を梳く。

「由子…昨日はゴメンな…」

「うん、もう良いよ！」

「ちよつと一人で考えたい事があつてな…」

「ふーん、もしかして好きな人の事？」

「えっ…何をしな…」

「あのね、ここに来る途中に話したんだけど、お兄ちゃん位素敵な人なら、

恋人の一人や二人居るんじゃないかって。」

「…誰とそんな話したの？」

「うん？雪だよ？」

「雪…あの同期か…ずいぶん仲が良いんだな…」

「別に…仲良くは無いけど、メンバーの中で一番話しやすいからだ
よ?」

「そうか…話しやすい…か。」

「お兄ちゃん、昨日は彼女と一緒にだったの?隠さなくても良いのに
…」

「……そんな人、居る訳ないだろ?」

「ふうーん、まあ言いたくないなら良いけどさ!その内紹介してよ
!」

「……ああ、紹介したい人が出来たらな…」

お兄ちゃんは髪を乾かし終わるとトレーラーを出て行こうとした。

「お兄ちゃん!」

私は呼び止める。お兄ちゃんに相談したい事があったから。

「うん、何だ?」

「あのね…今日の夜の事なんだけど…」

「夜、どうかしたのか?ああ…今日は絶対帰るからな。心配するな。」

「

「ううん、違うの…今日の夜ね…」

私が話そうとした時、お兄ちゃんに声が掛る。

「SATOさん、SATOさん、お電話です!」

ドアを叩く音、よほど急いでいるのか大きな音だ。

「あー、話は帰ったら聞くから!」

「うん、お仕事頑張つてね!」

「ああ、気をつけて帰れよ?」

「うん、じゃあね。」

私は相談する事も出来なかった。どうしよう…

私は自分の荷物を持ってトレーラーを出ようとした時、他のメンバ
ーが流れ込んできた。

「おお…夜の相談してたら遅くなった!」

雪が興奮した様子で話しかけてくる。

「あのさあ…夜の事なんだけど…」

私は断ろうと話を切り出すと…

「ああ…楽しみにしてるよ？KJプロデューズ歓迎会&由くんの初めての外泊会！」

「いや…だから…」

「早く行きてーなあ。KOUJIさんの家ってスゲー広いんだって！！」

雪は話し終わると濡れた服を一気に脱ぎだした。

みるみる脱いでいく…後はパンツだけ。

見ていられなくてトレーラーを飛び出す。

私たちは事務所のバスに乗って戻った。

事務所に着くと直ぐに解散つという事になった。

「由ー！出発だあー！」

雪は私の腕を掴み、勢いよく駐車場に引っ張っていく。

「ゆっ雪ー！！」

雪の勢いに押されて何も言えなかった。

事務所の地下にある駐車場は私の見た事も無い様な高級車が止まっている。

「俺たちはメンバーの車で送ってもらうんだぜ？KJの助手席…くう。」

感動に浸る雪に、

「あのさ、行き成りだと親も心配するからちょっと電話していいか？」

私は両親がお兄ちゃんが反対してくれるのを祈りつつ電話を掛ける。数回コール音がなった後、お母さんが出た。

「あっお母さん？わ…僕だけど…あのね…」

私が説明しようとしたら…雪が私の携帯を取り上げた。

「もしもし！今晚はー！僕は雪と言います！今晚由くんをお預かりしますのでー！宜しく。」

「えっえっ……」

携帯からお母さんの動揺した声が漏れてくる。

「ちよつと！雪！返して！」

私が携帯を取り返した時…すでに電話は切れていた。

「大丈夫だよー。心配し過ぎだ！」

「うん、でも……」

「男なんて裸一貫あれば良いんだ！だからお前はそんなモヤシみたいな体なんだよ。」

「そんなぁ……」

「もう、携帯は没収だー！！」

また雪に携帯を取られてしまった。

「かつ返してー！！」

私は携帯を取り返そうとしたけど……

雪は携帯を高く掲げ、私には届かなかった。

「今晚、お前が男になったと思ったたら返してやる。」

「……本当？」

「ああ、本当だ。」

「分かった。」

男らしく振舞って携帯を取り返そうー！！

私は腹を決めた。

「さて…お前は誰の車に乗る？」

「えっ一緒じゃないの？」

「よく見ろ！皆スポーツカーだ。二人乗り！」

「へえー、二人しか乗れないんだ……」

「お前って…まあ良いや。俺はK A J Iさんの車に乗せてもらっから。ジャーナーー！！」

「えっ雪？」

ブロロロ…パン！

K A J Iさんは良い音をさせながら車を発進させた。

「お前はK O U J Iに乗せてもらえ。」

「えっ？」

「俺は男は乗せない。」

J E Yさんはそう言い残し、さっさと車を発進させる。

……。

後ろから鋭い視線を感じる。

私は恐る恐る振り返る。

「……早く、乗れ。」

「はぁーい…。」

私はK O U J Iさんの車に乗り込んだ。

真黒なスポーツカー！。デザインもカッコいい。

車内も清潔に保たれていて、乗るのが恐れ多いような。

「汚すなよ？」

「もっ勿論です。おっお願い致します。」

こっ怖ーい！！K O U J Iの自宅が何処にあるか知らないけど、着

くまで怒られてたら…

K O U J Iさんの自宅は、車で20分位の所にあった。

「着いたぞ…。」

私は車から降りる。

……うわぁ…高いマンション…！

一体何階建てなのか、数えるのも面倒なくらいの高層マンション。

その最上階、ペントハウスがK O U J Iさんの家だった。

私はK O U J Iさんの後をトコトコ付いて行った。

エレベータから降りると、広いエントランスが広がっていた。

「うわぁ…広…！」

私は思わず興奮する。

「…そうか？まだ玄関にも入って無い。」

「…そうか？まだ玄関にも入って無い。」

いやいや…エントランスだけで、私の部屋より遥かに広いですけど…

KOUJIさんはカードをドアに差し込む。

ピピッと電子音が鳴り、ドアが開く。

エントランスに部屋の空気が流れてくる…

香水なのか…芳香剤なのか…物凄くいい香りがした。

「入れ……」

「はっはい。」

私はKOUJIさんの部屋へ入った…

第十三章

私は広いリビングに通された。

リビングには大きなソファアが置かれ、大きなテレビが壁に掛けてある。

「うわぁーっ」

私は部屋の中をお上りさんの様に眺める。

必要最低限の電化製品。ゴミ一つない室内。清潔そのものだった。

「そんなに不思議な部屋か？」

KOUJIさんはビールを持って部屋に現われた。

私はビールを受け取ると、大きなソファアに腰掛ける。

「不思議というか…こんな広いリビング…テレビでしか見た事無くて…」

「そうか？普通だと思うが…」

KOUJIさんは自分のビールを開け飲み始めた。

私は借りてきた猫の様に動けなくなった。

沈黙の時間が流れる。

……。

「あつあのおー。」

私は沈黙に耐えられなくて、話を振る。

「何だ？」

「他の皆さんは？」

「ああ…買い出した。」

「買い物ですか…」

「俺の家には客を満足させる程の食料は無い。」

「あつそうですか…」

……。

また沈黙になる。

……。

うーん、気まずい。

私は沈黙に耐えられず何とか話題を探そうと必死で考える。

「あのー、この家って何部屋位あるんですか？」

「4部屋。」

「あつそうですか……」

……… 会話が終わってしまった。

うーん、なんか話題は無いだろうか……。

私は必死に考えていると、急に鼻がムズムズしてくる。

「はっはっ。」

「は？」

「はっはっハックションー！！！」

私は大きくしゃみをしてしまった。

そこら中に鼻水を飛ばす。しまった……。

「おっお前……」

ひい！ K O U J Iさんの鋭い眼光が突き刺さる……

「すみません！すみません！実はさっきから寒くて……」

髪を乾かし着替えもしたが、撮影中ずっと水の中に居たから体が冷

えたらしい。

「そうか……風呂でも入ってこい。」

「ふっふっ風呂ですか？」

「遠慮する事は無い。あいつ等も着き次第風呂入るだろうし……」

「皆さん入るんですか？」

「ああ……大抵な。今日なんて不衛生な水に入っただ。奪い合いになるぞ？」

今なら一人でゆっくり入れる。そのつもりで湯も張ってあるしな。

「

「でも……着替えも無いし……」

「ゲスト様の寝巻が置いてある。」

「はあ……左様で……」

「どうした？入るのか？入らないのか？」

私が答えに迷っている…

「今入らないなら後でイモ洗いだぞ？」

「いつイモは勘弁です！！私は即答する。」

「はっ入らせて頂きます！！失礼します。」

私は逃げる様に風呂場へ向かう。

シンプルなバスタブにシャワー。

設備はシンプルだが、広い浴室だった。

私は洋服を脱いでシャワーを浴び始めた。

体を洗い、バスタブに首まで浸かった。

芯から温まる…気持ちいい…ああ…顔も洗いたい…

私は皆が付く前に出ようと立ち上がった時…事件は起こる。

浴槽から片足を出したと同時に、いきなり浴室の扉が開いた。

「おい、バスタオルが無いだ…へっ？」

「……へっ？」

私もKOUJIIさんも石の様に固まる…。

KOUJIIさんの視線は私の胸元…スッポンポンの胸元。

KOUJIIさんはそのまま視線を私の足元に持っていく…

「なっ無い…」

KOUJIIさんは目を丸くして固まる。

「お前…もしかして…」

私は言葉も出せずに固まる。

その時だった。

玄関が開く音がして数人の足音が聞こえる。

「おい！着いたぞー！！」

「おじゃましまーす。」

メンバーが着いたようだ…。

まっまずい…

KOUJIIさんも慌てた様子で、

「おっおう。」

つと返事をする。

「風呂かぁー？」

J E Yさんの声が聞こえる。足音が近づいてくる。

私とK O U J Iさんは顔を見合わせる。

J E Yさんは脱衣所の前で止まる。ドアノブが降りる…。

私の顔面から血の気が失せる…

J E Yさんが扉を開ける瞬間、K O U J Iさんが浴室に飛び込んできた。

「こつK O U J Iさん??」

「あつ。」

私は焦って体を隠そうとする。でも隠す物が無い…

「なんだぁ、二人して風呂か？」

J E Yさんが脱衣所から話しかけてくる。

「あつあぁ…体が冷えてな…」

K O U J Iさんは声を裏返ししながら答える。

「だよなぁ…水冷たかったもんなぁ…俺も入ろつと!!」

ガサゴソ洋服を脱ぐ音が聞こえた…

「あつ!!」

私は咄嗟に声を出した。

K O U J Iさんが振り返る。

「悪い…ちよつと由の相談に乗ってるんだ…」

「あつ相談?うーんと…そうか、また後にするよ…。」

「悪いな…」

J E Yさんはリビングに戻って行った。

私とK O U J Iさんは大きなため息を吐いた…

良かった…ばれなくて…つて、K O U J Iさんにバレた。

体の隅から隅まで見られた…もうお終いだ…

「お前…女だったんだな…なるほど…俺は正常だったか…」
K O U J Iさんがブツクサ独り言を言っている。

とっ取り合えずこの場から逃げなくては！！

私はKOUJIさんの脇をすり抜け脱衣所に避難しようとした。

「おっおい！！」

KOUJIさんは私の腕を掴む。

「お前：一体どういつもりだ？その体：」

「いえ…これは…あの…」

「答えろ…どういつもりだ…」

KOUJIさんは鋭い目つきで私に詰め寄る…

「すっすみませ！！後で説明するので取り合えず服を…」

私は掴まれている腕を振り払おうとする。

「服って…あう！！すまん。」

KOUJIさんは私がスッポンポンなのを忘れていた様子で慌てて手を離そうとした。

私は脱衣所に向かおうとした時…緊張の為か逆上せたのか、浴室の段差に躓いてしまった…

「あっ！！」

私は転んでしま…っ…てない。体が宙に浮いている。

KOUJIさんが支えてくれていた。

「すっすみませ…」

KOUJIさんが支えてくれたのは…私の小さな胸…

私はKOUJIさんに胸を握られながら固まる…

KOUJIさんも私の胸を握り締めながら固まる…

一体どうなってるんだ？この展開は…

私の意識は一瞬空へ昇って行っただ、直ぐに正気を取り戻した。

私は状況を冷静に確認…したくもない。

まぎれも無くKOUJIさんは私の胸をわし掴みしている。

「はっ離して下さい！！」

私は掴まれた手から逃げようともがく。

でも、KOUJIさんは動こうとしない…

「あのおー…」

私は恐る恐る後ろを振り向く…

KOUJIさんは…気絶でもしているか、正面を向いたまま白白をむいていた…

「こっ KOUJIさん？」

私はもう一度声を掛ける。

「……！」

KOUJIさんの目に黒い光が戻った。

ああ…これで服が着れる。

「降りして下さい。」

私はもう一度 KOUJIさんに話しかける。

KOUJIさんの視線が私を捉える。

「あの、これは…キッチンと説明しますから……」

私が KOUJIさんの腕に手を掛けた瞬間、私は KOUJIさんに正面を向かされる。

クルッと半回転させられ、私は KOUJIさんに抱きしめられている格好になった。

「あっあの……」

私は恥ずかしいというより頭の中が真っ白。

KOUJIさんは何を思ったのか、私に顔を近づける。

「やつ止めてください……。」

私は両手で KOUJIさんの顔を引き離そうとする。

でも、KOUJIさんに両手首を掴まれ、壁に押し付けられる。

私は体を隠す事も、逃げる事も出来ずに…ただ自然に涙が溢れてくる…

「……泣くな……」

KOUJIさんが耳元で囁く…あの甘く切ない声で。

でも私は涙が止まらない…

「…もう、泣くな……」

そう言って KOUJIさんは私の頬を伝っている涙を舐めはじめた…

初めての感覚に私は腰が抜けそうだった…

かつ顔！！舐めた…舐められた！！

私はビクリして涙が止まった…

KOUJIさんは涙を舐め終わると、今度は唇を舐めはじめた…

「こっ KOUJIさ…んっ」

私は口を塞がれ喋る事が出来ない…両腕も動かない…たっ助けて！

お兄ちゃん！！

私は必死にもがいた…逃げようとした。

でもKOUJIさんの力が強すぎて逃げられない…

KOUJIさんは私の口の中に自分の舌を入れてきた…初めての感覚。

な…何これ…私の口の中で動くKOUJIさんの舌…

…頭がボーっとしてくる…気持ちいいかもしれない…

男の人でも唇って柔らかいんだなあ…温かいし…

お腹の下の辺りが疼いてくる…モジモジしてくる…

KOUJIさんは私の口を舐めた後、顔を胸の方へ持っていく…

「ああ…」

思わず声を出してしまう…くすぐりたい。

次の瞬間、KOUJIさんの腕の力が抜けてきた。

こっこれはチャンス！！

私は近くにあったボディーブラシを掴む。

「えい！！！！」

力一杯KOUJIさんの頭めがけ振り降ろす…

パコーン！！！！

良い音が浴室に響く。

KOUJIさんの全身の力が抜け、私の上にもたれ掛る…

「こっ KOUJIさん？」

私はKOUJIさんの顔を覗き込む…

「！！！！！！」

KOUJIさんは、また白目を剥いていた…

「ふんっザマー見ろ!」

私は浴室にKOUJIさんを残し、さっさと服を着る。

第十四章

私はKOUJIIさんを風呂に残し、リビングに戻った。

「あれ？KOUJIIは？」

「あつなんかもう少し入ってから出るって言っていました。」

「あつそう…じゃあ俺も入ってこよう！」

そう言くとJ E Yさんは服を脱ぎ始めた。

あつという間にパンツ一丁になると風呂へすっ飛んで行った…

そういえば、必死で殴っちゃったけど…KOUJIIさん大丈夫だったかな…

浴室からJ E Yさんの声が聞こえてくる。

「おっおい！KOUJII…KOUJII!!」

うーん、力入れすぎたかなあ…でもアレは正当防衛だよね…

暫くすると二人は浴室から戻ってきた…

J E Yさんに肩を貸してもらってはいるものの…KOUJIIさんの足取りは大丈夫そう。

ああ、良かった…って、正体知られてるんだった。

詐欺とかで訴えられたり、賠償金請求されたらどうしよう…

「あれ？KOUJIIどうかしたの？」

何も知らないKAJIIさんが尋ねる。

「いやね、風呂入ったらKOUJIIが服着たまんま倒れてるからさ…」

「えっKOUJII、何があつたの？」

ああ…絶体絶命。

「……わからん……」

KOUJIIさんがボソボソ答える。

「はっ？」

「はっ？」

JEYさんもKAJIさんも返す。

「いや…だから、覚えてない。」

「まじで？」

「ああ、由にタオルを持って行つて…脱衣所の辺りから覚えてない。なんで服着て浴室に居たのかも…おい由…俺は何やってた？」

この人…本当に覚えてないのかしら…

「えっ？俺にタオル持ってきてくれて…一緒に風呂入って…

少し話した後、俺は普通にうちやつたんで後の事は…」

取り合えず白を切ておこう。

「…ふうーん…言われてみればそんな気が…」

……。

爆笑が起こる。

「お前ー、自分の行動位覚えてろよー。」

「KOUJIさんつと面白い人ですねー。」

ああ良かった。無事な上に忘れてくれてるみたいだ。

KOUJIさんは、たちまち顔を真っ赤にして他の部屋へ飛び込んで行った。

これからはKOUJIさんと二人きりになるのは避けなくては…

「KOUJIさん、始めましょうよー！」

入浴を終えた雪が、ドア越しに話しかける。

「……先に始める…」

室内からか細い声が聞こえる。

「はあ…じゃあ先に始めます。」

「ああ…」

雪は諦めてリビングに戻る。

「皆さん！これから由くんの初体験の会を始めまーす…！」

雪が仕切り始めた。

「とりあえず酒でも飲みながらビデオでも見ましょう…！」
それぞれがビールの缶を開けぶつけ合い、一気に流し込む。

さつ酒なんて飲んだ事無い…でも…折角だしチョットだけ…

私は初めてのビールを一口、口に含んだ……まっマズイ！苦い！

「さあて…由…お前って如何にもって感じなんだけど一応聞きます。」

「

「うん、何を？」

まさかお前は女だろ？なんて聞かないよね…

「お前…まさか女…」

うわ、いきなり！まさか皆も気付いてる？

「ううん！！絶対に違う！！違う違う！！違ーう！！」

私は大声を張り上げる。

「はっ？何が？」

雪は不思議そうな顔をする。

「えっだつて女って…」

私も不思議そうな顔をする。

「違うって答えになつて無い。俺は女抱いた事あるのかつて聞こうとしたんだ。」

「へっ抱いた事…って。」

「SEXだよ。セ・ツ・ク・ス！！お前…あるよなあ…。」

SEXってあの…小学校の性教育で習った、あの行為の事ですかあ？

私が必死で頭を回転させている時、雪は…

「あっお前まさか…その年で童貞なんて…まさかなあ…」

男の人って皆そうなのかしら…

「もっ勿論！！当たり前だろ？」

私は虚勢をはる。

「まあ、そりゃそうだ。」

「その顔でチェリーはあり得ないわな？お姉さまたちが黙って無いわな？」

J E Yさんが突っ込んでくる。

「まあ、そりゃーモテモテでしたから！！」

私が自信満々に嘘を吐くと…

「今日はこの後、綺麗なお姉さん達も手配しといたから！」
えっ今何と？

「ラッキーじゃねえ？みんなモデルとかタレントの卵らしいぜ？」
雪が私に耳打ちする。

「何がラッキーなの？」

私は真顔で聞き返すと…

「お前って鈍いなあ。」

雪は呆れ顔で私を見る。

「まあ…後のお楽しみだ！！」

そう言つと雪は酒を飲みほした。

？？綺麗なお姉さんとお酒でも飲むのかしら…ああ、コンパニオンさん？

暫くするとKOUJIさんが部屋から出てきた。今日は早い回復で。

「お前ら…さつき聞こえてきたけど…まさか…」

KOUJIさんはJEYさんを睨む。

「えへへー！！当たり！」

「JEY…勘弁してくれ…」

なんだかKOUJIさんは、うんざりした顔でJEYさんを見る。

「だって今日は由君の初外泊だぜ？お兄さんとしては色々な経験をねー！」

JEYさんはニヤニヤしながら答える。

まあ、コンパニオンさんの経験なんてあまり無いだろうし…

ちよつと楽しみになってきた。

「はあ…部屋は汚さないでくれ…俺の寝室も立ち入り禁止だ…」

KOUJIさんは仕方ないって表情で言う。

「はい！ゲストルームだけね！！」

JEYさんは親指を立てる。

よく解らないけど、KOUJIさんはコンパニオンのお姉さんが嫌いなのだろうか…

「あれ？由…酒進んでる？」

赤い顔をした雪が話しかけてくる。

「えっあのさ…ビールって苦手みたいで…」

私は一口飲んだだけのビールを雪に渡す。

「そっか…じゃあ俺が飲んでやるから、お前はカクテルでも飲むか？」

「うん、そうしてみる。」

折角だし、ちよっとお酒の世界を体験してみようかな？

雪は立ち上がり、カクテルを持って現れる。

「はい！一気に行けよ？」

私はカクテルを受け取り、一口飲んでみる。

ゴクッ…あつ甘ーい！美味しい！

私は丁度喉も乾いていたので一気に飲み干した。

「おお！イケるねえー！」

雪はそう言つと、私の渡したビールを飲みだす。

よく考えると…間接キス！ちよっと恥ずかしいな。

「はい！おかわり！」

K A J Iさんは私に新しいカクテルを手渡す。

「あつすみません。」

さつきとは違うカクテルを受け取り一口飲む。

今度はちよっと苦いけど、フルーツの酸味が効いてる。これも美味しい！

また一気に飲み干した。

「おお…ハイペース！でも綺麗所が来る前に潰れちゃうのは勿体ないからお終いな？」

K A J Iさんは私からグラスを取り上げる。

私は自分の顔が火照っているのをK A J Iさんに教えられた。なんか、体も中に浮いてるみたい。

皆、酒を飲みながら雑談している時、玄関のチャイムが鳴る。

第十五章

「はい!!」

雪はスキップしながら玄関に向かう。

ガチャッと開く音が聞こえると、黄色い声が聞こえてくる。

「失礼しまーす」

「お邪魔しまーす」

中には低い声も…

「…失礼します。」

数人の女性＋二人の男性。

それぞれソファや床に座り、もう一度乾杯をやり直す。

私はカクテルを貰ってご機嫌。

雪は鼻の舌を伸ばし、J E Yさんは既に口説きモード突入。

K O U J Iさんは隅の方で仏頂面で酒を煽る。K A J Iさんは…隣の美少年と何やら話しこんでいる。

K A J Iさんって女性に目もくれない…硬派だなあ…

私が感心して見ていると…

「由…今日のK A J Iさんは男なんだって。」

「へえ…って何が？」

私が聞き返すと、

「あれ？お前聞いてない？K A J Iさんってオールマイティーらしいぜ？」

「……何が？」

「あはっお前って純情なのか馬鹿なのか… K A J Iさんは両方イケるって事。」

「何がイケるの？」

「…お前は天然なんだな。あのな？男も女も抱けるって事。いわゆるバイってやつ。」

うわあ…初めてみた。本物のバイセクシャルの人。

「お前は…誰か気に行った人居たか？」

「へっ？」

「女だよ。女！」

雪はニヤニヤしながら聞く。

「えっ？」

「今日はOKらしいぜ？ゲストルームも4部屋あるらしいし。」

「??あっ今日ってそういう…」

鈍い私でも気付く。

「お前の外泊記念に特別にJ E Yさんが席儲けたんだ。

皆素人だけど、芸能人だし…ほら、あそこの女の子は次の連ドラ
決まってるし、

あそこに居るお姉さんは大御所俳優の隠し子って噂だぜ？」

「へえ…雪って物知りだね。」

私が違う所に感心していると、

「それにお前には関係ないけど、あそこに座ってる男…」

雪が指差した先には、無言で酒を啜る男の人。

「あいつ…見た事無い？」

私は顔をガン見してみた。うーん、覚えが無い。

「わかんない？あいつ…オーディションに来てた奴だぜ？」

「へえー。」

そう言われても…あの時は自分の事で一杯だったから…

「あの後別室に呼ばれて、デビュー決まったらしいぜ？」

「へえー、そうなんだ。」

あまりピンつと来なかったけど、言われてみれば居た様な…

「まあ、かなり良い男だけど、なんかK O U J Iさんとキャラ被る
もんな。」

まあ、たしかにK O U J Iさんとフィンキが似てる様な気も。
目つきが鋭くて、筋の通った鼻、影のある空気…彼も美男子に分類
されるな。

「俺らってラッキーだったな。」

「えっ？」

「今回のオーディションはマスコット系が欲しかったみたいだし、
って、自分で言ってる悲しくなるけど…あいつは綺麗系だもんな。」

「ふうーん…まあ。そういえば…」

私は頷き、貰ったカクテルを空にして、もう一杯注ぎに行こうと立ち上がる。

立ち上がると、足が宙に浮いているような…フワフワしている。

お酒ってこんな感じになるんだなあ。面白い！

私はキッチンに向かい、自分でカクテルを作ろうとした…けど、沢山ビンが並んでいる。

お酒なんて初体験の私に作れる筈は無かった…

私がビンを手に取り悩んでいると、後ろから肩を掴まれる。

「おい、そのビンくれ。」

私は振り返ると、あの美男子が立っていて、私を上から見ていた。
背が高いんだなあ…

「えっこの瓶？」

「ああ…それ使いたい。」

彼はビンを持つと、カチャカチャ何か液体を作り始めた。

「そっそれ何？」

「あつ？見りゃ分かるだろう。」

「俺さ…酒って全然知らないんだよ。」

「ふーん、スレッジ・ハンマー。」

「へえ…これ甘い？」

「いや、あんまり…甘い飲みたいのか？」

「うん、でも作り方解んなくて…」

「ちよっと待ってるよ？」

彼は何かを作り始めた。

「ほら…これ飲んでみる。」

私は一口飲んでみる。……甘くて美味しい！

「うわー、これ美味しい！なんて名前？」

「これか？カシスオレンジ。」

「へえー、有難う！！」

私は受け取ったカクテルを一気に飲み干した。

「お前、いくら甘いからって…そんな飲み方してると潰れるぞ？」

「大丈夫！グルグル回って気持ちいいんだ。」

「それを酔うって言うんだ一般的に。」

「あは！まだまだ！よくテレビだと電信柱に片手ついて…オエエー
つてなってくるんだろ？」

「おやじか…お前名前何て言うんだ？」

彼はかつこ良く酒を飲みながら質問してきた。」

「俺？おれは由子…じゃなくて由だよ。君は？」

「俺はTAKA。本名は鷹。宜しく。」

鷹は右手を差し出してきた。

「うん！宜しくね！」

私は差し出された手をブンブン振りまわした。

鷹はお代りを作ってくれて、

「由はこれをチビチビ飲みなさい！」

つと念を押してきた。

「はぁーい。」

つと私は受け取ってリビングに戻った。

リビングに戻ると人数が減っていた。

つてか1人しか居なかった。

「KOUJIさん？一人ですか？」

「ああ…皆部屋に籠りやがった。」

「あっそうですか！！」

私は自分の顔面が熱くなるのが分かった。

「でも、確か女性の数ってメンバーより多かった気が…帰られたんですか？」

「いや、J E Yが三人連れてった。誰の為に儲けた会だったの…。」
「4人でゲームでもするんですかねえ…広いんだから、リビングでやればいいのに…」

私は四人でボードゲームでもしているんだろうと勝手の解釈をした。

「由って可愛い顔して大胆だなあ…」

「えっ？だって折角だし…皆でやった方が楽しいですよね！！」

「まあ…そういう趣味の人も居るが…」

「ねっ俺が呼んできます！！」

私はイソイソと沢山の声ができる部屋に向かう。

知識の無い酔っぱらいは性質が悪い。

「おっおい！！」

なんか鷹が焦ってるけど、酔っぱらってる私の耳には入らなかった。

一応扉はノックをした。でも、返事を待つでもなく扉を開ける。

ガチャガチャ…鍵掛けてるし。

私はドアを叩きまくった。

「J E Yさん！遊ぶなら皆で遊びまし…むぐっ…」

私は後ろから鷹に羽交い絞めにされ、鷹の大きな手で口を塞がれる。

私はそのままりビングに連れ戻された。

私は何が何だか分からずに鷹に問う。

「鷹、なんかマズかった？」

鷹は真つ青な顔して私の頭にゲンコツをかます。

「馬鹿か！最中に呼び出すなよ…お互いバツ悪いだろうが…」

「あつまあ…集中してる時に水差すのは悪いもんね。」

「当たり前だ。お前だって突っ込んでる時に声掛けられても無理だろう？」

「…何を突っ込むの？ああ！！黒ひげ危機一髪？」

「はあ？お前は…意味分かんねー。俺は真面目に話してるんですけど？」

なんだか鷹が怒り始めた。

「えっ私も至って真面目なつもりなんですが…」

私は怒った男の人が怖くて…少し涙目になってきた。

「お前、何泣いてんの？…えっマジボケ？」

「グスッ…俺、ボケてなんか無いし…真面目に話してるだけだよ。」

鷹は拍子抜けした顔で私を見る。

「…ああ。今、全部理解した。怒ってごめんな？」

「グスッグスッ…」

「ああ…もう分かったから泣くなよ…」

鷹は私の頭を撫でてきた。

私は咄嗟に体をビクッつと強張らせる。

「脅かしちゃったか。でもチョットは世間勉強しような？」

説明すると、J E Yさんは今…最中だ。」

「グスッなっ何の最中なの？」

「だからあ、SEXだよ。皆さんで乱交真っ最中なの。スッポンポン相撲やってるの。」

私は少し考えて…何で気付かなかったのか恥ずかしくなった。

私の顔が見る見る青ざめるのを見て、鷹が大笑いしていた。

第十六章

私と鷹の漫才の様な話を黙って聞いていたKOUJIさんは、突然立ち上がった。

「俺：何だか具合悪くて：先寝るから。適当にお前らも帰るなり泊まるなり好きにしろ。」

つと言い残し、自分の寝室に入って行った。

その後も鷹と雑談していたが、何故かKOUJIさんの事が気になった。

あんだけ頭を強く叩いたし、もしかしたら：

私は鷹との話が途切れた時、KOUJIさんの様子を見に立ちあがった。

「なんだかKOUJIさん具合悪そうだし、ちょっと様子みてくるね。」

「ああ、分かった。」

私はKOUJIさんの寝室へ向かった。

「KOUJIさん？」

私はドアをノックしながらKOUJIさんに声を掛ける。

でも、KOUJIさんからの返答は無かった。

私はドアノブを捻ってみる。ドアはすんなり開いた。

私は声を掛けながら寝室へ入って行った。

「KOUJIさん？具合はどうですか？」

私は盛り上がったベットへ近づいていく。

「……………」

目の前で話しかけているのに、KOUJIさんから返事は無かった。私は最悪の結末が頭を過る。

もしかして、脳内出血でもしちゃったかしら…

もしかして…死んでる？

私の顔色は一気に青ざめる。急いで盛り上がってる布団を揺さぶる。

「KOUJIIさん！KOUJIIさん！」

「うう…由か？」

KOUJIIさんの声が聞こえた。

「KOUJIIさん？大丈夫ですか？」

「……ああ……」

KOUJIIさんは、ゆっくり体を起こす。

私は顔を見て安心した。KOUJIIさんの顔は真っ赤になって…
そう、何時もの恥ずかしがりだった。

「KOUJIIさん…もしかして…」

「…あいつ等が泊まりに来た時は何時もこんな調子だから…
お前も気にせず楽しんで来い。俺の事はほっといてくれ…」

「KOUJIIさん…KOUJIIさんは良いんですか？女の子…」

「俺は参加しない主義だ。好きな女じゃないと勃たないんだ。」

「あっそっそうですか…」

風呂場で勃って襲ってきた人のセリフとは思えない…

「大丈夫そうで安心しました。俺、戻ります。」

「ああ…女はJ E Yが持つてったけど、終わった馬鹿女は戻ってくるかもしれないから、

酒でも飲みながら待ってろ。」

「えっ別に…分かりました。」

私は部屋を後にした。

とにかくKOUJIIさんは無事でよかった。

私はリビングへ戻った。

リビングでは鷹が一人酒を飲んでいた。

「KOUJIIさん、大丈夫だったよ。」

一応鷹にも報告する。

「そうか…分かった。」

鷹は、興味なさそうな返事を返す。

「さて、なんか女性も居なくなっただし、飲みなおそうか！」

「ああ…そうだな。由とじゃ花が無いが…まあ、こんな日も悪くないか。」

私は酒の勢いも借りているのか、男の人と自然に会話をする事ができた。

「鷹も散々だったな…J E Yさんに全部持っただけだ。」

私は鷹をからかう。

「別に…俺はK A J Iさん様に呼ばただけだし。」

私は目を丸くして固まった。

「えっ鷹って…そっち系？」

私はマジマジ聞いた。

「べつ別に！俺は早く売りたいんだ。今日だって本当は来なくなっただけだ。」

でも、事務所に行かないと首位の事言われて…仕方なく。」

「へー、じゃあ鷹はノーマルなんだ。」

「ああ。でも男は全然って訳でもないぜ？何なら為すか？」

丁度女は全員持っただけだしさ！」

鷹は私の頬を軽く撫でた。まるで、私で遊んでいるかの様に。

「ばっ馬鹿！俺はノーマルだ！！」

私は少し怒りながら手を払う。試すなんてトンデモナイ！

「冗談だよ。面白いなお前…」

鷹はクスクス笑う。

それから一時間後、時間は深夜を回り、私の意識も飛びかけていた。目の前はグルグル…幸い吐き気は無いが、どうやらココが限界のようだ。

私は鷹に、

「ごめん鷹、俺…先寝る。」

私はフラフラ立ちあがる。

「そうか…俺も明日バイトあるし、そろそろ寝るか。」

鷹も起ちあがった。

私はフラフラと、空いているゲストルームに向かう。

……でも、何故か鷹は私の後を着いてくる。

「鷹？なにか様？」

私は振り返って顔を見る。

「別に…寝るんだろ？」

鷹は自然に答える。

「えっ鷹は一体何処で寝るの？」

「何処って…ゲストルーム以外何処にあるんだ？」

「でも、ゲストルームって後一部屋しか空いてないよ？」

「…別に…ベツキングサイズだったし、一緒に寝ればいいじゃん。」

「

鷹がトンデモ無い提案をしてきた。

確かに、残っている部屋を私一人で使うのは気が引けるけど…

「いつ一緒に無理だよ！」

私は思いつきり否定した。同じ布団に入るなんてとんでもない。

「別に男同士いいじゃねーか。それに、さっきも説明したけどさ、

俺はホモじゃないぜ？

それに、お前みたいなガキじゃ勃つもんも勃たん。だから大丈夫。

「

それが大丈夫じゃないから私も必死なんですが…

「でつでも俺、すつごく寝姿悪くて…絶対鷹をベツトから落とす自信がある！」

私なりの精一杯の良い訳。

「ああ、大丈夫だろ。ベツトデカイし…早く行こうぜ？」

そう言うなり、鷹は私の腕を掴んで寝室に入って行った。

ゲストルームの中は大きなベツトとテレビが置いてあるだけのシンブルな部屋だ。

私は取り合えず入口付近で立ち竦む。

「お前、何やってんの？寝ないの？」

鷹はイソイソと布団に潜り込む。そして隣に置いている枕をポンポン叩いている。

「あつああ…俺も寝るよ。」

私はベットの端の方に寝転がった。

「おやすみー。」

鷹は一言私に声をかけた後、直ぐに寝息を立てた。

私は何だか拍子抜けした。心配する事も無かった。

私も早く寝てしまおう！朝になれば携帯だつて返してくれるだろうし。

私も寝る努力をした。そして…酔っている私に眠りは意外なほど早く訪れた。

「んんん！。」

時間は三時。まだ真夜中。鷹がモゴモゴ動き出す。

私は微妙なベットの揺れに一瞬意識は戻ったものの、また直ぐ眠りに落ちた。

「しょんべん…もれそう…」

鷹はトイレに行きたいらしく、部屋を出て行った。

暫く経つて、鷹は部屋に戻ってきた。そして再びベットに入る。

大人になると、何故か夜中に目が覚めると、その後は中々寝付けな
いものだ。

もちろん鷹もそんな感じで一向に寝付けなかった。

寝る努力をしても寝付けないので、横に居る由を横目で見ていた。

（ふーん、綺麗な顔してんなあ…本当、女みてえだ。まつ毛も長い
なあ…）

鷹は寝ている私のまつ毛を指で突つつく。

私は目の周りに不快感を覚え手で擦る。

「うつーん…。」

そのままゴロンつと鷹の方に寝がえりを打つ。

（面白いかも…）

鷹は私が寝ているのを良い事に、何やら悪戯小僧的な表情でニヤニヤしている。

意識の無い私は気付くはずもなく、初めての酒は私に深い睡眠をもたらしていた。

第十七章

私は鷹の方を向く状態で寝返りを打っていた。

鷹は一瞬ビクツつとするものの、私の寝息を確認するとニヤリと笑う。

「こいつ…起きねーな。」

鷹は私の顔をツンツン突く。

「はう…。」

私は顔に違和感を感じ顔を擦る。でも気付かない。

「あはっコイツ本当に起きないや…。面白れー。」

一人で笑う鷹。気付かない私。

鷹は私の唇を突く。

「こいつ…プニプニだし。本当に女みてえー。」

私は唇を触る感覚はあるが、夢の中の為、無意識に口に当たる何かを食べようとする。

私は鷹の指をぺロツつと舐める。

「あっはあ…。」

鷹は体をよじる。

鷹は直ぐに指を離し考え込む。

鷹はもう一度私の口に指を当てる。

私は無意識に鷹の指を咥えた。そして口の中で回す。

鷹の体が微かに震える…

私は夢の中で何かを食べていた。…でもこれ…味がしないなあ…マズイ。

私は、鷹の指に思いつきり噛みついた。

「！！！！！」

鷹は全身を仰け反らせ悶えている。

「まじ痛え…うわっ歯形付いたし…」

鷹は薄暗い室内で自分の指を凝視していた。

「こいつ…ぜってー許さん！って、俺が悪いんだけどさ。」

鷹は独り言を言うと、私の隣に座った。

そんな鷹に気付かない私。気持ち良く眠りの中にいる。

鷹は私の寝顔を暫く見ていた。

「しかし、男とは思えない。KJに居る以上男なのは確かなんだが…」

鷹はそう呟くと、私の髪に触れる。

「うわっ髪の毛も細いなあ…」

鷹は次に私の頬に触れた。

「ちよつと痩せ過ぎだ。でも綺麗な肌だ…ム力つく。」

そのまま鷹は私の顎を伝い、鎖骨に指を滑らせる。

「スベスベしやがって…あれ？こいつ…喉仏も無い…まあ声は高いけど…」

痩せてる男でこんな出ない奴って珍しいな。」

鷹はそう言って、私の布団を少しめくる。

私は一瞬ビクツとしたが、また直ぐ眠る。

「…ちよつとだけ…」

鷹は私の胸元のボタンを一つ外す。そして胸を軽く触る。

「あつやつぱり胸は固いや。って俺正気か？」

サラシでガチガチに固めた胸は当然固い。

でも鷹はそれがサラシによる物だとは気付かなかった。

「やべっ男相手に何勃ってんだ？俺ってそっちの趣味あったのか？」

鷹は暗く独り言を呟く。

「あー！もう！俺も寝よう！」

鷹は布団を半分以上もぎ取って布団の中に体をねじ込む。

それから三十分後、私は異常な喉の渴きに目を覚ます。

私はフラフラ布団から出て、リビングに水を飲みに行った。

「確かあ…テーブルにあった様な…あつ水発見！」

私はミネラルウォーターを見つけ、一気に飲み干した。

「ゴクゴクツ。ぷはぁー…生き返った。」

水が喉に染みる。水ってこんなに美味しかったつけ。

私は水を飲み終わると、早く布団に戻りたかった。体が重かったからだ。

フラつく足取りで部屋へ戻る。

私は勢いよくドアを開け、布団の中へ戻る。

隣からは寝息が聞こえる。

「良かったー。まだ寝てる…ふぁぁー。寝よう。」

私の意識は直ぐに無くなった。

暫くしてKOUJIさんが急に目を覚ます。

「っ何だ？地震か？」

急いで体を起こし、辺りを見る。

どうやら地震では無いようだ。

KOUJIさんは再び布団に体を戻そうとした瞬間、右手に温かい物が触れる事に気付く。

恐る恐る隣を確認する。

「…あれ？なんで由が…」

私は知らずに部屋を間違えていた様だった。

すでにスヤスヤ眠る私を見て、KOUJIさんは諦めたように布団に潜った。

「しかし今日は変な日だった。風呂で気絶なんて初めての経験だったし、

記憶障害も初めてだ。しかもトドメに俺の布団に他人が居る。」

KOUJIさんはぶつぶつ独り言を言う。

しばらくしてKOUJIさんも眠りにつき、私は体の窮屈さを感じ寝返りを打った。

しかし思いつきり寝返った為、KOUJIさんの上に乗っかる感じになってしまった。

私は抱き枕感覚でKOUJIさんを抱きしめながら眠った。

KOUJIさんは息苦しい感覚を覚え目を覚ます。

「んっあっ由の野郎…」

KOUJIさんは私の体を突き飛ばし再び眠りの態勢に入る。

しばらくして私はまた寝返りを打った。そしてまたKOUJIさんの上に…

しかも今度は足まで絡ませて…

「おいっ由！重い…」

KOUJIさんは私に話しかける。でも私は眠ったまま。

「っこいつは…戻れ。」

またKOUJIさんは私を突き飛ばそうと肩に手を掛ける。

体半分元に戻った所で私は必死にKOUJIさんにしがみついた。

こんな具合の良い抱き枕…手放してなるものか！

私は力一杯KOUJIさんに抱きつく。

「はぁ…今日は厄日だ…」

KOUJIさんは諦めたように目を閉じる。

私は良い気持ちで眠り続ける。なんて気持ちのいい抱き枕なのかしら…

私は枕に顔を擦りつけ、曲げた右足に力を込める。

「あっ馬鹿野郎！なんて所を…」

私の右膝はKOUJIさんの股間にクリーンヒットしたらしい。

私の右膝はグリグリとKOUJIさんの股間を擦り上げる。

「ああ…ばっ馬鹿由…やめろ…」

KOUJIさんの息遣いが熱くなる。

私は抱き枕に突如発生した突起に膝を掛け、足の固定を図る。

ああ…膝がずり落ちてこない…なんて快適な枕…

私は体が安定した事により一層深く眠りに落ちる。

「まじで…限界だ…」

気の毒なKOUJIさんが懸命に闘っているのに、私は追い打ちを

掛けてしまう。

「ちよつちよつと待ってくれ…」

私はKOUJIさんの首に腕を絡ませ、顔をKOUJIさんの顔面に擦りつける。

はぁー、なにやら良い匂いがする枕だ…

私はグリグリ体を擦りつけた。

「あはあっこつコイツ…本当は起きてるんじゃない…」

KOUJIさんは私の耳元に息を吹きかける…くすぐりたい！

「あ…んっ」

私の甘い声がKOUJIさんの耳をくすぐる…そして…

KOUJIさんの頭の中で何かが外れた。

KOUJIさんは私の唇を自分の口で塞ぎ、舌を中に入れてきた。

私は、甘い何かが口の中で動くので、無意識に自分の舌で追った。ようやく捕まえたソレを、私は離すまいと必死に吸いつく。

KOUJIさんの息は益々荒く、そして熱くなる…。

第十七章（後書き）

書き終わって、何処までエロっちく書こうか悩み中です。
どなたかご意見、ご感想、アドバイス等々頂けたら幸いです。

第十八章（前書き）

R18表現入ってます。苦手な方はご注意ください。

第十八章

koujiさんは口を離す。

私はひな鳥の様に口をパクパクさせるが、直ぐに寝息を立てる。

「お前：絶対起きてるだろ…」

KOUJIさんの問いに息一つ乱さない私。

「何処までやったら起きるんだ？」

KOUJIさんは少し笑い、私に体を向ける。

KOUJIさんは私の服のボタンを一つ一つ外していく。
あつという間に、私の上の寝巻を完全に脱がされた。

「なんでコイツは布なんて巻いてるんだ？」

KOUJIさんは私の胸のサラシに手を掛ける。

少し緩んでいたサラシは、いとも簡単に緩み、そして…

私の小ぶりの胸がKOUJIさんの目に飛び込む。

「あつこいつ…マジかよ…」

KOUJIさんは少し考え、今日の出来事を思い出した。

「そうだ…全部思い出した。」

KOUJIさんは深くため息をつき、私の胸を見つめる。

「…由、続きだ。」

KOUJIさんは私の小さな胸の突起を自分の舌で包む。

「うつんっああ…はあ…」

私は体の芯を走る感覚に身をくねらせた…

私は起きるというよりも、体がフワフワ浮いている感じで意識が戻らない。

KOUJIさんは暫く私の胸で遊んだ後、自分の手のひらを私のズボンの隙間に差し入れる。

KOUJIさんの手は、私の下着に差し掛かり…少し角度を変えて突き進んだ。

KOUJIさんの指先に、ヌルツとした感覚が伝わる。

「あっ」

私は殆ど意識は戻っていたが、何故か体が動かせなかった…
頭はぼんやり…でも体は熱く、疼いていた。

KOUJIさんの指が私のソコを優しく撫でる。

時折音を立てながら動く指の感覚、痛気持ちい感覚に私は酔った。

「お前は俺の物だ。覚悟しておけよ…」

KOUJIさんの甘い声が頭に響く。

私はいつの間にか下の寝巻も脱がされ、裸になっていた。

すこし肌寒い風が私の体を撫でて、流石に私も目が覚める。

「うん…あつあれ？」

私は自分が裸なのに直ぐ気がついた。そしてKOUJIさんの腕の中に居る事も…

「なっなんでKOUJIさんが？」

私は状況が理解できない。

「お前が俺を誘ったんだ。」

「えっだって私はゲストルームで寝てたはずなのに…」

「お前が…ちっ、もういいから…黙ってる。」

私はKOUJIさんに両腕を掴まれ、胸を口に咥えられた。

「あっああ…」

体の芯に響く快感…足をバタつかせて耐える。

「やっ止めてください！人を呼びますよ？」

KOUJIさんは私に言った。

「人を呼びたいなら呼べばいい。俺は手を離さないからな。」

お前の恥ずかしい格好を見てもらえばいい。」

そうだった…私は男だと思わせなくてはいけなかった…

今人を読んだら、お兄ちゃんの顔に泥を…

「くっ。」

私は顔をしかめ、KOUJIさんを睨みつけた。

「理解したか…昼間の続きだ…」

そう言つてKOUJIさんは私の胸から顔を外し、さらに下へと進

んでいった。

「きゃっ…いや…」

KOUJIさんは、私の一番熱くなっている部分を口に含む。

私は唇を噛み締める。

初めて味わう感覚は、私の意識を吹き飛ばしそうだった。

執拗にKOUJIさんはソコを攻めた。私は腰の力が入らない。

音を立てながら指と舌で弄ぶ姿に、私は怖くなって泣きだした。

でも、怖いだけじゃなくて、それが続く事を望んでいる自分にも腹が立った。

「泣くなよ…」

KOUJIさんは私の頭を優しく撫でる。

「だって…私初めてなのに…こんな事って…」

「初めて…分かった。出来るだけ優しくするから…」

そう言ってKOUJIさんは自分のズボンに手を掛け、一気に下まで降ろす。

「……！」

見た事も無い形が目の前に…

ヤバイ！流石にヤバイ！！

私は焦って室内を見渡す。…あつ枕元に逃げられそうなアイテムが！！

KOUJIさんは私の様子に気付かずに、自分を私の入口に押し当てた。

私はそれを取ろうと、力一杯腕を上延ばす。

もっもうちよつと…あと少しで手が届くのに…

その時、鈍い痛みが私の腹部に走る。

「ああ…いったつい！」

私は悲鳴とも思える声を上げる。同時に体が上にずり上がる。

KOUJIさんは自身をグイグイ侵入させる。

体に激痛が走った…なっなにこれ…痛い！！

KOUJIさんは私の中に自分を殆ど入れ終わると、腰をゆっくり

動かし始めた。

ベッドが揺れる…ギシギシ音もする。

私は音がするたび激痛に耐えた。そして、少しずつ体がずり上がっていき、

指先に冷たい物が触れた。私は枕元にあった電気スタンドに手が届いたのだ。

私はスタンドを握ろうと指先で手繰り寄せる。

そして、私はスタンドの柄をしっかりと握り、KOUJIさんの顔を睨みつけた。

私は力一杯スタンドを振り下ろす。床に飛び散るガラス。

でも、KOUJIさんにダメージは無かった。

「同じ手なんて通用しない。お前は俺の物だ。」

「あつああ…。」

KOUJIさんのスピードは益々上がり、私も苦痛以外の何かを下腹部に感じた。

二人の息は熱くなり…私は体の奥深くから湧きあがる快感に、声を抑えるのに必死。

シーツを握り、唇を強く噛みながら…私の口角から血が流れる。

「…馬鹿な奴。」

KOUJIさんは一言呟いて、流れた血液を優しく舐め、自分の舌を侵入させる。

口を開かれた私は、もう声を抑える事なんて出来ない。

そう思った瞬間、自分の中の何かが昇りつめる感覚に襲われた…そして、

KOUJIさんは体を小刻みに震わせながら果てた。

第十九章

気付くと朝になっていた。

隣にKOUJIさんは居ない。

私はゆっくり体を起こす。

「痛っ」

下腹部に痛みが走った…私が処女ではない証拠。

私の目から熱い涙が流れる…私…無理やり…

それに今頃KOUJIさんは皆に正体をばらしてるかもしれない…

お兄ちゃん…ゴメン…

私は暫く鳴き続けたが、このままではしょうがないと思い、部屋を出る覚悟をする。

きつと皆に責められる…怖い…

誤って説明して…とにかく家に帰りたい…

私は涙を拭いて…意を決してドアを開ける。

まぶしい光が目刺さる…朝日が眩しい。

私はソロソロとリビングに向かう。

「おお！」

雪が私に向かって声を掛ける。

ビククツと体を強張らせる。

「どっとうした？怖い夢でも見たか？」

雪は心配そうに私を覗く。

「えっ何って…」

私がオドオドしていると、後ろから声が掛る。

「おい由…朝飯の支度手伝え。」

その声に昨日の恐怖が蘇る。

オドオドしながらキッチンへ向かった。

「あつあの…」

私は震えながらKOUJIさんに話しかける。

「お早う…」

「あつおつお早うございます…あつあの…」

私は涙目でKOUJIさんに話しかける。

「昨日は楽しかったな。」

「はっ？」

「全部覚えてる。何を見たか、何をしたか…何をされたか。」

「あつあの…嘘を付いていたのは誤ります。でもあんな仕打ちって

…」

「あれは俺を殴った罰。お前風呂で俺の事殴ったろ。」

「おっ思い出したんですか…でもあれって正当防衛っていうか…」

「まあ、そうとも言っけどな。」

「もう昨日の様な事は止めてください！バラすなら早くバラして！」

「……お前は皆に知られたいのか？女だって事…」

「そっそんな事…」

「なら黙っててやる。感謝しろ。そのかわり…」

「その代わり？」

「俺の言う事を聞け。」

「えっ？」

「俺が呼んだらすぐ来い。俺が姦りたい時に姦らせろ。」

「ちよっなんですかソレ…」

「言った通りだ。」

「そっそんな…」

「返事は早くな…一週間待ってやる。」

「そっそんな…」

KOUJIさんは話し終わるとリビングに朝食を運び、居なくなつた。

姦らせろって…そんな条件って…でも断れば全部終り。お兄ちゃん

も仕事クビだろうな…

私は食事中も上の空だった。

「お早うございまーす!」

雪は元気に事務所のドアを開ける。

私は雪の影に隠れるように事務所に入る。

「おい!由!」

安心する声が聞こえる…お兄ちゃん…

「由…お前、昨日どうしたんだ…」

お兄ちゃんは私の方を掴みガクガク揺する。

「おっお兄ちゃん…」

私が答えに詰まっていると、雪が話に割り込んできた。

「SATOさん!すいません。電話で話した通り、男だらけのお泊まり会してました!」

「おっ男だらけ?」

「はい!俺が由の携帯奪って無理やり連れて行きました!由を怒らないで下さい。」

「おっお前!!」

お兄ちゃんは雪の胸元を掴んで、壁に押し付ける。

「おっお兄ちゃん!!」

私は二人の間に割り入る。

「SATOさん…無理やりしといて何ですけど…いい年の男が外泊もした事無いなんて…」

ある意味不健康だと思います。」

「ぐっ」

お兄ちゃんは言い返す言葉が無いらしい…言われてみれば確かに不健康だ。

「SATOさん…弟思いなのは立派ですけど、ちょっと行き過ぎだと思っています。」

「……まあ、確かにそうかも知れないな…」

お兄ちゃんは雪から手を離す。

「生意気いつてすみません。」

雪は一言お兄ちゃんに詫びると、自分の控室に入って行った。

「お兄ちゃん…」

私は怒り心頭のお兄ちゃんに近寄る。そつと肩に触れる。

「由子…大丈夫だったか？」

お兄ちゃん心配そうに聞いてくる。

いつそKOUJIIさんとの事を相談しようと思ったが、こんな様子ではKOUJIIさんを殺しかねない。

「だつ大丈夫！ゲストルーム占領して早く寝た！」

私は咄嗟に嘘を言う…お兄ちゃんゴメン。

「そつか…良かった…」

お兄ちゃんは深くため息を付き私の方に頭を乗つけた…

本当は相談したかった。あんな事はもう…嫌だ…

私はお兄ちゃんの頭を強く抱いた。

私はお兄ちゃんと分かれ、控室に入っていく。

入るなり雪が私の目の前で頭を下げた。

「由…ゴメンな？SATOさん、怒って無かった？」

「えっ大丈夫！ありがとね雪…」

「あんなSATOさん初めて見た。本当に心配なんだな…お前の事

…」

「ああ…心配症なんだ。」

「いい兄貴じゃん！あつこれ携帯返すな？」

雪は昨日奪った私の携帯を返してくれた。

「あつ有難う。」

私は雪から携帯を受け取る。

「そういえばお前…せっかくのチャンスだったのにな…残念。」

「へっ何が？」

「何って…女だよおっんな！」

「あつああ…雪は大満足そうじゃん！早くから消えてたし…」

私はニヤニヤ雪の顔を見た…けど、雪は不機嫌そうな顔をしている。

「俺さあ…緊張して酒煽って…」

「うんうん、それで？」

「勃たなかった…」

「…何が？」

「だから！勃起しなかったの！！最悪だ…」

「って事は、出来なかったの？」

私は留めの質問をぶつける。

「くー！由って可愛い顔して酷い事聞くよな…ああ！そうですよ！出来ませんでした！」

雪は頬を膨らまして拗ねてる。可愛い！

「そっか！俺も似たようなもんだ！次に期待だ！」

私は落ち込む雪の背中をポンポン叩いた。

第二十章

その日は一日レッスンだった。

夕方までビッチリ身体を動かし大声を出し…クタクタだ…。

私はフラフラと自宅に帰り、リビングに行く。

「あれ？誰も居ないの？」

静まり返った自宅。誰も居ないみたい。

私はキッチンの冷蔵庫を開け、冷えたミネラルウォーターを一気に飲み干す。

冷蔵庫の扉を閉めると、そこにはメモが貼ってあった。

『お爺ちゃんが入院したそうです。お見舞いに行つて来ます。』

明後日には帰るから、二人で待つていて下さい。』

お爺ちゃん…心配だな。

私はお母さんの携帯に電話を入れる。

「もしもし…うん、そっか…はい。」

お爺ちゃんは大した事ないみたいだけど、暫く泊まってくるって。

お兄ちゃんと二人かあ…まあ、お兄ちゃんが居れば何も怖くはないけど…

私は病状が心配無いと聞き、安心した。

とりあえず汗だくの身体を洗いたくしてお風呂に入る事にした。

浴槽に熱いお湯を張り、首まで一気に浸かる。

「ふあーあ…癒される…」

こうしていると…嫌な事まで忘れそうだ。

でも…昨日は色々あったな…あんな事が無ければ楽しかったのに…楽しかった？

私…楽しんだ？

ちよつと前までは、男の人だけじゃなくて家族以外全員怖かった。

でも…今は普通に話して、一人で電車にも乗れるようになった。

多分、雪が親切にしてくれたお陰、お兄ちゃんが背中を押してくれ

たお陰。

私って、数人の人達の為に、なんて人生を無駄にしてたんだろう。怖がらないで一歩踏み出せば…もっと違った人生が待ってたんだ。有難うお兄ちゃん…雪。

でも、この先どうしたらいいんだろう…

私、KOUJIさんの言うとおり…した方がいいのかな。

お兄ちゃんに相談しようか…

お兄ちゃん、私の事嫌いになるかな。

そうだよ、汚れた妹なんて…痛々しいよね。

私は浴槽の中で考えた。考えて考えて…頭がフラフラする。

頭がボーっとして…やばいつて分かってるけど、身体が…動かなくて…

助けを呼ぼうにも…誰も居ない。どうしよう…

私の意識が…薄れていく。

「よ…こ！由子！大丈夫か！」

お兄ちゃんの声…

私は目を覚ます。

おでこには冷たいタオル。

クーラーの効いたリビングのソファで、全身を冷やしてくれている。

「お兄ちゃん…有難う。」

私は身体を起こす。

「由子…いい年して何やってんだ…心配させやがって。」

「ごめん…お兄ちゃん。ちよつと考え事してて…」

「…仕事、上手くいつてないのか？」

「うっん！皆優しいよ！昨日だって楽しく…楽し…」

私は…言葉に詰まる。

いつそ相談しようか。誰かに話したら楽になりそう。

「…昨日、本当は何かあったな？」

「…KOUJIさんに女だつてバレた。」

「…そうか、それで？KOUJIは何て言つてた？」

「…別に。」

「別につて事無いだろ？黙つてるとかバラすとか。」

「一応黙つててくれるつて。」

「そつか…もし何か言われたり要求されたら俺に相談しろよ？」

俺は仕事首になつたつて構わないんだから。」

「首つて…そんなの駄目だよ！お兄ちゃんが頑張つて手に入れた仕事なのに…」

「やっぱり…お前、何か言われたんだろ？」

お兄ちゃんの誘導作戦に引つ掛かつてしまった。

「べつ別に！！なんで…も…」

思い出すと怖い。昨日の事。でも…言えないよ。

恥ずかしくて情けない。無理やり犯されたなんて…やっぱり言えないよ…

「由子！！お兄ちゃんに隠すな！

お前をKJに入れた時から、ずっと覚悟はしてたんだから！」

「…だつ大丈夫！ただ私の美声を手放したくないんでしょ？もう、心配症なんだから。」

「由子…お前がそう言うならこれ以上聞かない。でも、何かあったら直ぐ相談しろよ？」

「分かつたつて！！有難う。」

お兄ちゃんはそれ以上聞いて来なかった。

「……………もう、大丈夫か？」

体調を気付かつてくれるお兄ちゃん。

頭は少しボーっとしてるけど…身体はひんやり冷えて…むしろ寒い。
「…寒い。」

「…すまん、ちょっと冷やしすぎたかな？」

お兄ちゃんはその言って、私にパジャマを渡してきた。
二重に着ろって事？

私は自分の体を見て…驚愕する。

私…素っ裸じゃない！

まあ…風呂で倒れたんだから最初は裸だろうけど…

「もあー！上に何か掛けてよ！」

私は恥ずかしくて二本の腕で身体を隠した。

「だっだって！早く身体を冷やさないとって…なあ、お前、これ何だ？」

お兄ちゃんは私の胸を指差す。

そこには…赤くアザになった…キスマーク。それが何個も。

「こっこれは…ぶつけたの。」

「…ぶつけた？小さく何度も？」

「そっそう！痛かったなあー。」

…ちよつと無理がある？

お兄ちゃんは、胸を隠している私の両手を握り、上に持ち上げる。

「ちよつ…やあ！！恥ずかしいから！！」

力強く握られた手は、私には解けない。

「昨日…何されたんだ？正直に言え…」

「……何も。」

「嘘はやめろ！！誰に付けられた？こんな…何回も！」

「…言わない。」

「なんで？何で俺以外にこんな事…」

俺以外って…お兄ちゃん、日本語が変ですが？

「言わない言わない言わない…」

呪文のように繰り返す。言えないよ…無理やり奪われたなんて…

「くそっ！！俺のせいだ…俺の…」

お兄ちゃんは…苦痛の表情で泣いた。

「お兄ちゃん…お兄ちゃんの所為じゃないよ？ただ私が不注意だっ

ただけ。」

「誰だ？お前にこんな…殺してやる…名前を言え。」

お兄ちゃんの見た事のない表情…怖い。

「お兄ちゃん…お願い。怖いから…」

「殺してやる…俺がきつちり罰を与えてやるから、名前教える…」

「言わない…絶対に言わない!!」

こんなお兄ちゃんに教えたら…本当に殺しに行きそうで…

「由子、お前は平気なのか？悔しくないのか？」

「…悔しいよ？怖いし痛いし…苦しいよ？」

でも、お兄ちゃんが犯罪者になるのはもつと嫌!!私が我慢すれば…」

「馬鹿か!!また他の奴に姦られるのを黙ってろって言うのか？」

「…でも、お兄ちゃんが居なくなる方が嫌。」

「くっそんな…俺の所為で由子が…俺の由子が…」

「ごめん、それに私は我慢できる。大丈夫。」

「犯されるのを我慢できるのか？それっておかしいだろ？」

「…我慢、できるよ。」

昨日の事…最初は痛かった…でも、痛いだけじゃなかった。

最後は…頭がボーっとして…良かったのも事実で…お兄ちゃんには言えないけど。

「由子…お前。平気なんだな…男に姦られるの…」

「平気な訳…ない。ただチョット…」

お兄ちゃんの顔色が変わる。

「お前、おれがどんな思いで我慢してたか分かるか？」

目の前に素っ裸で倒れてる女目の前にして…それなのに…俺の気持ち解るか？」

…分かるよ。心配してるんでしょ？」

ああそっか…心配してたのに私が名前教えないから起こってるんだ…貞操観念の薄い妹を怒ってるんだ。

「ごめん、心配しなくて大丈夫…悩まないでいいよ？」

お兄ちゃん…私の事でそんなに悩まないで…

私、お兄ちゃんが怒ってる姿なんて見たくないの。

「俺がどんなに我慢してたか…お前に分かるか？なにの…」

「もう我慢しなくていいよ？」

お兄ちゃん…もう自由になつていいよ？

私の為に…馬鹿な妹を心配してる時間を、自分の人生に使って欲しいの。

「……分かった。もう我慢なんてしない。おれは自分のやりたい様に姦る。」

イントネーション間違つてない？

お兄ちゃんは、私の腕を握っている手に更に力を込める。

「おっお兄ちゃん？」

「いいんだろ？我慢しないで。」

「???まあ、そう言ったけど。とつとにかく服着たいから手を離して!」

「…無理。」

「はっ?意味わかな…ふぐっ」

お兄ちゃんは…私の口を塞ぐ。自らの唇で。

第二十一章

お兄ちゃん是我的膝を割って、自分の腰で自由を奪う。

止まらないキス。お兄ちゃんの唇の感覚が私の五感を奪う。

柔らかくて…包みこんでくれる様な優しいキス。でも…

「お兄ちゃん??」

私は口をずらし、お兄ちゃんの間を見る。

兄弟でキスって外国じゃないんだから!!

でも…お兄ちゃんの間を見た事もない表情…何だか、凄く悲しそう。

「お兄ちゃん!手を離し…むぐつ。」

再び覆い被さる唇。

怖い…何時もの優しいお兄ちゃんじゃない。

やつ止めて!!嫌いに…なるかも。

両手に力を込める。でも…ビクともしない。

なんだか…昨日のKOUJIEさんの事がフラッシュバックの様に蘇る。

お兄ちゃんは深く私に侵入した。

口の中を泳ぐ舌。

気持ち悪…くないかも。

でも、兄弟でこんな事…出来る筈が無い!!

お兄ちゃんは私がモゴモゴ文句を言っても、両手の戒めを緩めてくれない。

そればかりか…私を片方の腕で制圧して…片方で私の内腿を触てる。

「お兄ちゃん…嫌！！やめっ…ふうん。」

お兄ちゃんの指が私の蕾を…ピリッつと下腹部に電気が走る。

もう…これはスキンシップの域を超えてる。

これって、恋人がする行為。どこの世界でも兄弟ではしない行為。

「おっお兄ち…グスツやぁ…離して！こわっ…怖いのおーフウツグスツ。」

何だか、怖くて泣けてきた。

こんなの…お兄ちゃんじゃない！！

私を守ってくれた、優しいお兄ちゃんじゃ…

今までの優しさが嘘に思えちゃうから…お兄ちゃんを嫌いになりたくないの。

お願い…苦しめないで…

私が泣きだして、急にお兄ちゃんの理性が戻ってくる。

お兄ちゃんは私の手を離し、私の上からも退いた。

「…俺、どうかしてた。ゴメン。」

私は、何も話さない。というか、何を話していいか分からなかった。

「…顔、洗ってくる。」

お兄ちゃんは部屋を出て行った。

お兄ちゃんの居なくなったりビング。静まりかえってる。

時計の音がカチカチ聞こえて…今までの事が夢だったと錯覚する程静か。

お兄ちゃんは…私が好きなのかな？妹として？それとも女として？もう、どうしたらいいか…

とりあえず…パジャマで武装しよう。

顔を洗いに行くと言ったお兄ちゃんは、お風呂に入っていたみたい。脱衣所の扉が開く音がして…パタパタと歩く音。

お兄ちゃんが出てきた。

私の体は一瞬で緊張する。

もしまた…あんな事されたら？

また泣く？それとも…受け入れる？

嫌われたくないなら、お兄ちゃんの望み通りに…

でも、それをしてら兄弟では居られない！

どうしよう…どうしよう…

お兄ちゃんの足音は、リビングの扉の前で止まる。

私は扉が開くと思い、思わず身構える。

「…由子、ごめんな…」

お兄ちゃんは一言呟いて二階へ上がって行った。

私はホッと胸をなでおろす。

…良かった。

私は、お兄ちゃんの部屋のドアが閉まる音を確認して、自分の部屋に行った。

ベットに飛び込み…深く息を吐いた。

落ち着く…自分の空間。

何だか、KOUJIさんとの事も、お兄ちゃんとの事も…夢だった様に思える。

とにかく寝よう。

寝て忘れてしまおう。今だけは…

でも、お兄ちゃんが隣に居ると思うと寝付けない。

お兄ちゃんの部屋からも、時折物音が聞こえるし…

お兄ちゃん…今何考えてるんだろっ。

お兄ちゃんも苦しんでるよね、きつと。

何時も私を助けてくれたお兄ちゃん…ずっと私の側に居て欲しい。

お兄ちゃんを困らせたくない。

今度、お兄ちゃんが私を求めたら…もしかしたら応じてしまうかも…
さつきは咄嗟の事だったし…少し怖かったけど。

何よりもお兄ちゃんに抱かれる怖さより、嫌われる方が怖い。

それにね、さつき…お兄ちゃんの中に異性を感じてしまった自分も居たの。

もう！考えても分かんない！！とりあえずは現状維持で！！

っと、自分なりの解釈をした瞬間、私の携帯電話が鳴った。

画面には雪の名前が映ってる。急いで電話に出た。

「もしもし？雪？」

「…俺。」

俺？どちら様？雪より声が低い様な…

「お前、もう忘れたのかよ…鷹だよ！」

「…あつそういえば…鷹に似てる。」

「似てる？本人だつちゅーの！！ぎやははー！！」

なにやら電話口は盛り上がっている。

「…何？」

君たちは楽しそうでいいね…っとちよつと妬みを込めて喋る。

「いやあ、雪からお兄さんの事聞いてさ…ちよつと心配で電話した。」

「

鷹…いい奴！！ごめん、あんな口調で喋って。

「だつ大丈夫！大丈夫…だよ…」

なんだか鷹の優しさが染みる。

「…お前も今から来る？」

「へっ何処に？」

「事務所の近くの居酒屋！！雪と二人で飲んでる。昨日の残念会だ。」

「

「…どうしよかな…」

今、ちよつとそんなフィンキじゃ無いし…お兄ちゃんも心配だし…

「お前、本当は兄貴とやり合ったんじゃないのか？声暗いし…」
「やっやっやり合った？まだ姦ってません！！」

「なっ何を急に！そんな訳ないだろ！！」

私は声を大にして否定する。

「そっか！ならいいけど…大丈夫か？」

鷹：優しいなあ…

「うん…だっだいよう…ぶ…グスつぶえええー！！」

下品な鳴き声を挙げた。だって…鷹が優しくて、急に緊張の糸が…

「なあ、お前の家って何処なの？」

「えっ？ x区のx だけど…」

「分かった。ブツブツブツ…」

電話が急に切れる。…嵐の様な電話だ。

あっしまった！！住所教えない方が良かったかな？

だって…家では普通に女の子だし…もしかして…家まで来ちゃった
らどうしよう…

おっお兄ちゃんに聞いて…って、今聞ける状況じゃない！どうしよう。

私は万が一の為に、軽くメイクをしておいた。

メイクしておいて良かった。

案の定、鷹がやってきた。

私の携帯が鳴る、今度は知らない番号。取り合えず電話に出る。

「はい？」

「俺！」

「…もしかして、鷹？」

「おお！今度は一発正解！」

「…何？」

早く帰って！っと言わんばかりの低い声…自分なりにだけど。

でも、鷹は私の口調に気付き、急に真面目に話し出した。

「なあ…ちよつと外出てこいよ。」

「えっ！こんな時間に？」

「こんな時間って…お前、本当に箱入り息子だな。」

まあ、とにかく、客が来てんだ。普通、家に入れるかお前が出てくるか…礼儀じゃね？」

まあ、そう言われてしまうと。でも、この家に入れる訳には…

「分かった。今行くから。」

私は電話を切る。

お兄ちゃんに気付かれない様に階段を下りる。

静かに玄関の扉を開け、外で待っていた鷹に近寄る。

「折角来てくれたのに悪いんだけど、今うちの中人様を招待できる状態じゃなくてさ。」

「ああ、急に来たしな。まあ、とりあえず歩かねえ？」

「…ああ、そうだね。」

私はチラッとお兄ちゃんの部屋を見上げる。寝ているのか真っ暗。ちよつと位なら平気かな？

それに、深夜外を歩くななんて危ないと思ったけど、一見逞しい男が一緒なら大丈夫。

私は鷹の後ろを付いて行つた。

私たちの姿が家の前から完全に消えた時、お兄ちゃんの部屋に電気が付いた。

お兄ちゃんはカーテンを開け、私たちが歩いて行つた方を見つめていた…

第二十一章（後書き）

お兄ちゃん…なんだか可哀そうな感じです。

作者の気持ち次第ではありますが、そのうちきっと…

第二十二章

私と鷹は、近くの公園のベンチに座った。

「なあ…何かあった？」

鷹が優しく聞いてくる。

「んっ？まあ…兄弟喧嘩だよ。どこの家庭でもあるだろう？」

「…昨日の事か？」

「うーん、まあ色々な！でも、もう大丈夫だから。」

「…話したくないなら聞かないけど…遠慮せずに相談しろよ？」

「…ありがとな！」

私と鷹は、くだらない話をし、私の家まで送ってくれた。

「じゃあ、またな！！…今日は有難う。」

「おう、お互いデビュー前で忙しい身だけど…頑張ろうな！！」

「ああ。頑張ろう！」

「これからは、友達兼ライバル！！」

鷹は自分の右手を差し出す。

「うん！友達兼ライバルな！！」

私は、差し出された手を力強く握り返した。

玄関のドアをそつと開け、忍び足で二階に上がる。

自分の部屋に滑り込み、物音を立てない様に布団の中に潜った。
隣の部屋からは…何の音もしない。

お兄ちゃん…寝ちゃったのかな？

私は目を閉じ今日の事を考えて…

お兄ちゃん、なんであんな事したんだろうなあ。

多分、今いくら考えても解らないや。もう、取り合えず寝ます！！

翌朝、目覚ましの音で起きた私は、下のリビングに降りていく。電気も点いてない…お兄ちゃん、まだ寝てるのかな？

私は起こしに行こうと思ったけど…ちょっと勇気が無いや。

朝食を済ませ、厚化粧を施す。

……お兄ちゃん、まだ起きてこない。物音もしない…

私は、恐る恐るお兄ちゃんの部屋のドアをノックする。

「おっお兄ちゃん…起きてる？」

……部屋の返事は無い。

「お兄ちゃん？開けるよ？」

私は部屋のドアを開ける。

そこにはお兄ちゃんの姿は無かった。

キッチンと整ったベット。寝ていた形跡は無かった。

お兄ちゃん…あれから出掛けたのかな？

お兄ちゃんも気まづかったのかな？

私は遅刻しそうだったので、深く考えずに家を出た。

事務所に着くと、雪が出迎えてくれた。

「おはよう！由！」

「ああ！お早う雪。」

朝から元気な雪を見ていると、私の気持ちも元気になるね！

今日は朝からレッスン！

午前中は歌。午後はダンスとハードスケジュール。

でも、お兄ちゃんと顔を合わせる心配が無くて、少し楽…。

雪と一緒に、事務所の車に乗り込み、スタジオに向かった。

午前中は、喉と腹筋を酷使、午後は身体全体を酷使…。
芸能人って…思ったより楽じゃないね。ふう。

今日のスケジュールを終え、私はスタジオの端に座り込み、
身体を雪と雑談していた。

「雪って、妹と仲って良く無いんだけ？」

他の兄妹ってどうなんだろう…。

「妹お？もう最悪だよ…って、俺が一方的に嫌われてるんだけどな。」

「……あつあのさ…スキンシップなんてする？ほっほら、俺の所は
男兄弟だからさ。」

「いや…まず無い。ってか、俺が肩なんて叩こうもんなら…」

「…？もんなら？」

雪は握り拳を私に向けて、真剣な顔で言い放った。

「グーだ。渾身の力でグーパン！！」

「…へっへえー。そっか…。」

なっなんとパワフルな妹さん。

「ってか、兄妹なんて皆そうだろ？まあ、俺ん所は特に妹が恐ろしいから…この前なんて…。」

雪は、妹との壮絶バトルを聞かせてくれた。

普通、兄妹なんてこんな感じなのかな？私たちが特別に仲が良いってこと？

私が手の掛る妹だったから？引き籠りだったから？それとも…
お兄ちゃんが私に対して、兄弟以上の感情を持っているから？

私と雪はスタジオで分かれ、私は電車で帰宅した。

玄関の扉を開けると、家の中は真っ暗だった。

お兄ちゃん、まだ帰って無いのかな？

私は、帰ってくる途中に買った弁当を食べ、お風呂に入った。

風呂から上がってもお兄ちゃんの姿は無く…

私は、お兄ちゃんの帰りを待たないで寝てしまった。

だって…顔合わせても、お互い気まずいだけでしょ？

私は、レッスンの疲れもあり、すぐ寝付いて翌朝まで起きなかった。

その後も、お兄ちゃんと顔を合わせない日は続いた。

どうやらお兄ちゃんは、家に帰って来ている様子が無い…

お兄ちゃんは毎日仕事場には顔を出している様だから、私に逢いたくないんだろうな…。

そんな日が数日続き、両親が自宅に戻ってきた。

そして、両親が帰宅すると同時にお兄ちゃんも家に帰ってくる様になった。

一見は、何事も無く、以前と同じ光景に戻った。

お兄ちゃんも、あえて私を避ける様な態度は見せず、以前と変わらない。

でも、私はあの日以来、お兄ちゃんを少し警戒する様な態度を取ってしまう時があって…

その度、お兄ちゃんは少し悲しげな顔をする。

今日も、何時もの様に事務所に顔を出す。

そして、何時もの様に雪が私の所に駆けてくる。

「おいっ！由！聞いたか？」

「…今事務所に着いたのに、聞いてる訳にでしょうか！」

「あつそつか！…んじゃあ、早くマネージャーに聞いてくれ！…俺、待ってるから！」

雪のハシャギ様、多分相当良い事が有ったんだろうな！…
私は、KJのマネージャーの所に顔を出した。

「お早うございます。」

「おお！由！おはよう！！」

「あの…さっき雪が話を聞いてこいって…何かあったんですか？」

「おっ早速本題だね！…ゴホン！実は…。」
溜めるマネージャ。

「実は？」

「実はね…由と雪のメディアデビューが決まりました！！」

「…メディア…って事は…テレビですか？」

「そう！テレビ出演決まりましたよー！！」

わっ私がテレビに出るの？？

アイドルグループだから当然っちゃあ当然だけど…

「あの…どんな番組ですか？」

「なんか…反応薄いね？まあいいけど？あのね…歌番組ですよ！！」

「うっ歌？」

「そう、歌。まだ新曲の歌い込みはやってないから、既存の歌をメンバー全員で歌うんだ。」

取り合えず顔を知ってもらおうって事でね！！」

「そっそっですか…。おっ俺…上手く歌えるかな…。」

「ちよっと…毎日ボイトレしてるでしょ？」

「まあ…。」

「収録まで一週間しかないけど、頑張ってね！！」

私はマネージャと分かれ、雪の元に戻った。

「雪…話聞いてきたよ。」

「なっビックリだろ？もうデビューだぜ？さすがKJ。」

「まあ…そうだね。…雪は楽しみ？不安は無いの？」

「不安？そりやなあ…当然ある。」

「不安があるのに…雪って凄いいね。俺は…プレッシャーで死にそう
だ。」

私、正直不安で押し潰されそうだった。
収録で失敗したら？歌、間違えたら？

「…由、最初は誰だってプレッシャーが有るのは当たり前。
でも、乗り越えられれば…多分それは自分の自信になる。自分に
返ってくる。」

悩んでないで、一緒に我武者羅に頑張ればいい！！！！」

雪の、目から炎が出そうな気迫に、私の緊張が解けた。

私って、本当に雪に助けられてばかりだね？

もっと…早く雪に逢いたかったな。

私が引き籠りになる前に、そして…アイツじゃなくて、雪を好きに
なりたかった。

雪だったら…女の子の気持ち、大切にしてくれそう。

あれっもしかして私…雪が好き…なのかな？

その日は午前中歌のレッスンに行き、午後はオフだった。

私達は張り切ってレッスンを受け、クタクタでスタジオを出た。
何時もならレッスン後に雪と雑談するんだけど…

今日は用事があるらしく、雪は早々と帰って行った。

私は一人、スタジオから駅に行こうと思いバス停に立っていると、
一台のスポーツカーが停留所に止まった。

窓ガラスが開き、一人の男が声を掛けてきた。

「おい、由。ちょっと付き合え。」

人間の行動まで支配する声… KOUJIさんだった。

私は言われるがままに、車に乗り込んだ。

KOUJIさんは私を連れて自宅に戻った。

リビングの大きなソファに座り、KOUJIさんは私にビールを手渡す。

疲れもあつて、私は貰ったビールを一気に流し込んだ。

「…由、この前の返事、聞かせる。」

「…？この前って…あつ…！！」

わっ忘れてた…今日が返事の期限だった。

「お前、まさか忘れてないよな？」

低く、そして有無を言わせない声。

「わっ忘れてません。でも…まだ結論出てなくて…。」

私の曖昧な返答に、KOUJIさんは少し苛立ったようにフウツツと息を吐いた。

「…今すぐ返事しろ。期限は与えたんだ。」

「…。だって…」

「俺の言う事を受け入れるか、家族を借金塗れにするか…今、決める。」

そんな、今すぐなんて言える訳無い！！

好きでもない男を受け入れるなんて…出来ないよ。

でも、家族に迷惑掛けたくない。どうしよう…。

「…返事が無いって事はNOって事か？」

「……。」

答えられない以上、沈黙するしか無かった。

「解った。じゃあ…BYE。」

KOUJIさんは俺に別れの言葉を告げると、自分の携帯を取り出し、電話を始めた。

『KOUJIです。…ああ、由の事で話があつて、今時間大丈夫ですか？社長。』

こつこの男、社長に告げ口？信じらんない！！

「ちよつちヨツト待つてください！」

私は慌てて携帯を取り上げる。

「…何だ？俺の言いなりになるのか？」

私は、少し考えてから結論を口にした。

「はい、KOUJIさんの言うとおりにします。」

「……懸命だ。」

KOUJIさんは携帯を取り返し、通話を切った。

「由、今日からお前は俺の物だ。ほかの男に触らせるなよ？」

「…な…でわた…し？」

「あつ？何言つてんだか聞こえねえ。」

「何で…私なんですか？KOUJIさんなら、もつと美人の人でも寄ってくるじゃない！」

何で私なの？一晩の過ちなら解るけど…なんで私に執着するの？貴方なら美人の相手、いくらでも居るじゃない！！

「…解んない。お前だけだつたんだ…。」

「何が…ですか。」

「…お前だけ、抱きたい、抱けると思ってたんだ…。」

何か、よく解らない理由。

「私だけ…ですか？」

「お前以外、勃たなかった。前は誰でも良かったのに…今はお前
しか勃たないんだ…。」

それって…イ ポって奴？んっ違うか。

この前、私の事無理やりしたもん…。私にしか…勃たないって
言ってたし。

「考えるな。今言った事は忘れる。それより…早く姦らせろ。」
「はっ？」

何を言われたのか理解しようと考えていると、私の上にKOUJI
さんが覆い被さってきた。

「こっKOUJIさん！！やめて下さい！！」

「ああ？さっき俺の物になったんだろう？」

「でっでも！！心の準備というか…身体の準備というか。」
「んなもん、要らねえだろ。」

KOUJIの舌が、私の口内を犯す。

擦る舌が、なんとも卑猥な音を立てて…

私は、深すぎる口づけに息が出来なくて、顔を横に背けた。

「あっあの…せめてお風呂に入らせて下さい。レッスンしたままで
…。汗臭っんっ！！！！」

私の言葉を遮る様に、また舌が侵入してくる。

口内を凌辱され、私も心外だけど、下腹部が熱くなってきた。

さっきよりも長く舐められ、私は窒息寸前で解放された。

KOUJIさんは、私をお姫様抱っこ状態で、自分の寝室に連れて

行った。

「こっ K O U J I さん！お風呂を…。」

せめて、この汗臭い身体を流したい！！

でも、私が暴れたもんだから…足で K O U J I さんの脇腹を蹴ってしまった。

K O U J I さんが、私の眼を睨んでくる。

「…風呂は駄目だ。」

一言で却下された。

「わっ私も女の子だし…せめて汗の匂いは落としたいんです…。」
最後の抵抗。

「…汗臭いのも、中々良いぞ？」

はい、また一言で却下。

私は K O U J I さんのベッドの上に投げ飛ばされ…朝までずっと抱かれた。

何回も何回も…私が気絶しても、起こされては行為が始まる。

体中が快感に染まり、私は見ず知らずの世界へ引きずり込まれる…。

第二十二章（後書き）

とうとうKOUJIの提案を受け入れてしまいました。
あーあ。

第二十三章

朝までKOUJIさんに抱かれた。

体力は限界…意識も朦朧。

私はシャワーを借り、全身を洗い流す。

正直忘れたかった。KOUJIさんに抱かれていた事。

強めに身体を擦る。皮膚が赤くなる程に…。

気持ち悪かった訳じゃない。むしろ行為の最中…身体は喜んでいても、人間って割りきれないよね…好きでもない男に抱かれるって…。

それに…多分だけど私…雪が気になって仕方ないの。

いつも優しい雪。

たまにキツイ言葉もあるけど、それは私の為の言葉。

いつも雪に救われていた。

助けて貰った故の感情かもしれないけど…今雪の事を考えるとドキドキする。

それって恋って言わないかな？

私の中では、雪が王子様だった。

だからこそ、KOUJIさんに抱かれている事が罪悪感の様に感じてしまうの。

そして、KOUJIさんとの行為で感じてる自分にも嫌悪するの…。

私はシャワーから上がり、リビングに行った。

KOUJIさんはビシッとスーツを着ていて…ちょっとカッコ良かった。

朝日に光る髪が揺れて…絵画の様。

この人に…抱かれてたんだ。

……うつ！無し無し！！嫌々抱かれたんだから！！

KOUJIさんは私に気付くと、一杯のコーヒーを差し出してきた。私はそれを一気に飲み干し（熱かった！）、何も喋らずソファに座った。

「……腹…。減って無いか？」

いきなりの言葉。

「……はっ？…別に。」

貴方とは恋人でも友人でもありませんって感じ。私は人身御供の心境なのに。

「…ならいい。早く支度しろ。」

「はい？何ですか？」

「今日からメンバー全員での歌合せだ。お前待ってたら遅刻しそうだ。」

「はあ…。そうですか。先に行ってて下さって結構です。」

今更優しい気遣いですか？別に待ってなくても結構ですよ。

「…早くしろ。」

まだだ…。

この支配声。面白く無かったり、都合が悪いと何時もこれ。

「はい。直ぐ支度します。」

ご機嫌損ねると後が怖い。

私は急いで支度に取りかかった。

時間にして30分程。私は男子に変身した。

どっから見ても男！最近化粧にもなれたな！！

私は荷物を纏め、玄関で待っていたKOUJIさんの元に小走りで

行った。

「…遅い。」

たった一言でKOUJIさんが苛立つてるのが解る。声が凄く低い。「すみません。これでも早く終わっただんですが…」

「…早く靴を履け。俺まで遅刻する。」

これ以上刺激しない様に素早く靴を履く。

一緒に駐車場まで降り、一緒に車に乗り込んだ。

私は一人でスタジオに行くつと言いつ張ったけど、KOUJIさんが強制的に乗せた。

初日から遅刻したら大変な事になるって脅すから。

一般道をおっ飛ばすKOUJIさんの車。

高速道路じゃないのに物凄いスピード…。死神の足音聞こえますよ…。

出発の後れを取り戻し、集合時間内に到着。

私はヨロヨロした足取りでスタジオに入った。

「お早うございます。」

新人はまず丁寧な挨拶!!基本。

「おはよー!!由!!ドキドキするな!!」

目を輝かせた雪が犬の様に走ってくる。

可愛いくって、凄く元気!こっちまで元気になるね!

「俺さあ、昨日緊張で寝れなかったよ。でもテンションは高いから大丈夫うー!!」

何時もの雪の元気。私の目の前で止まり、手をきつく握ってくれる。キヤーー!

昨晚の事なんて一気に吹っ飛ぶよ!!!ありがとう雪。

私のすぐ後ろから、KOUJIさんが入ってきた。

「…おはよう。」

うわっまだご機嫌斜めですね。以外に頑固だな…。

KOUJIさんは私の顔を見て、チツッと舌打ちしながら歩いてくる。

ワザとらしく私と雪の間を割って入り、繋いだ手を離れさせ、満足そうにスタジオの奥に消えていった。

本当にワザとらしい！最低！

身体は献上したけど、心までは貴方には触れさせません！！

メンバーが全員揃った所で、歌合せに入った。

もともと既存の曲だし、何回も聞いた事のある曲。楽勝！

私はヘッドホンを装着し、目を閉じて自分のパートに専念した。

美しいギターソロからの曲。『秘密』という曲名なの。

ある女性が、ご主人とは別に、心には愛する人が居るって曲。

切ないメロディーだけど、難易度が高い曲。

でも…何回も練習したから大丈夫！

良いプレッシャーは自分に返って来る！

そうだよな？雪。

全員が立ち位置に着き、綺麗なハーモニーがヘッドホンから流れる。

私も音を聞きながら、一生懸命に音程を取る。

うん！良い感じに乗れた！

…でも、隣から変な空気が流れてくる…。

隣を見れば雪が真つ青な顔をしていた。

もしかして雪…緊張してるの？

額は汗だらけ。昨日はあんなに威張って話してたのに…

『雪？大丈夫？』

ヒソヒソ声で話掛けた。

『うん！大丈夫！……じゃないかも。』

珍しく臆病な雪の姿…。

『雪…緊張は自分に返ってくる！！だよ！』

口パク&ガッツポーズで表現。

段々、雪の顔色が良くなってきて…雪の目が元気に輝き始めた！！
…良かった。私にも恩返しが出来たかも？

無事に音合わせが終わった。

「じゃあ、午後は踊りの方を合わせるので、宜しく願いします！」
スタッフが話しかける。

私たちはスタジオ内の食堂で昼食を取る事にした。

関係者や役者しか出入り出来ない、芸能関係者が安心して食事できる場所だった。

私は何を食べようか考えていた。

正直お腹が減り過ぎて！だって…見栄はって朝食食べなかったからさ。

本当に色々なメニューがあって…迷うなあー！！全部美味しそう！

私がメニューを独り占めで考えていると、雪が話しかけてきた。

「由…今日は有難うな…自分で調子の良い事言っというて…カッコ悪かったな俺…。」

伏し目がちに話す雪。

「そんな事無いよ！雪が真剣に音楽に向かい合った結果でしょ？」
何時って雪は真剣にKJの事考えてたし、緊張だって足引っ張らな

い様に考えての事でしょ？

私、いつも近くに居たから知ってるよ？

「…お前、本当に…。」

雪が下を向いたままプルプルしてる…泣かせちゃった？

「良い奴だなああー！！！！」

雪は私に抱きついてきた！！きゃー！！ラッキー！

「ゆっ雪！！」

嬉しくて恥ずかしい！メンバー全員居るのに！

「…早く決める。」

突然不機嫌な声が頭の上から聞こえてくる。

雪の頭を掴んで、私から引き離す大きく細い指…。

もう！！幸せだったのに…。

「あつすみません！」

雪は謝りながらメニューを見始める。

私は横目でKOUJIさんの顔を見ると…うわっ凄く不機嫌！！睨んでるし！！

触らぬ神に祟りなし！！私は知らんぷりでメニューに視線を戻した。

各々注文した料理を食べ終わると、休む暇なく午後の合わせに入った。

私はJ E YさんとK O U J Iさんに挟まれる立ち位置からスタート。振りつけ自体は難しく無い。ただ、立ち位置が途中から変わったりして…

曲を流しながら通し練習を繰り返した。

でもねえ…難しくは無いんだけど…チョット変な振りがあるんだよ

ね。

私と雪が一瞬抱き合い、KOUJIさんとKAJIさんで私たちを引き離すっていう振り。

クールプライメージ的には変じゃないんだけど…

今の私の心境みたい。

私の心には雪が住んでて、KOUJIさんに身体を奪われてる…今の私その物！

なんか…嫌な予感がするなあ…。

その後も2日位全員で通し練習をした。

残りは雪と二人でレッスンに通う日々。

私は雪と幸せな時間を過ごした後、KOUJIさんに抱かれるという日々を過ごし…

一週間の後、収録本番の朝を迎えた。

第二十四章

収録本番の朝、久しぶりに楽な身体を引きずり、ベットから起きる。
「ふぁー！ー！！良く寝たぁー！！」

昨日は珍しくKOUJIさんからの…アレの命令が無かったから。
流石に本番前日はお呼びが掛らなかったの。
昨晩は正直ホツとした。

夜遅くまで抱かれ、真夜中にそつと自宅に帰る生活だったから…
たまにならキツク無いんだけど、連日お呼びが掛ってたから…。

私はメイクの乗りも良く、ご機嫌で事務所に向かった。

「お早う！由！」

今日も元気に駆け寄ってくる雪。毎朝の光景、私の元気の素！！

「お早う雪！今日は頑張ろうね！！」

「ああ！！全国に俺たちの顔が映し出されるんだ！！頑張らないとな！！」

「うんっ！！…で、皆は？」

一旦事務所で集合してからTV局に向かう予定なのに…。

「お前が一番最後！！なんか三人は先乗りしてるらしいよ！！俺はお前待ち！」

へーっそうなんだ…。って、雪の事待たせてたんだね、ごめん。

「待たせてごめんね？」

軽く頭を下げて謝る私。

「いいよ！俺が緊張して、早く来すぎただけの事だから。」

「雪…緊張してるの？」

そんな風に見えないな。

「まあな。流石にテレビは緊張するだろ。…あつ！思い出した！なんかTVの放送に合わせて、

この前の写真集も発売されるらしいぜ？放送の翌日に！！」

「へえー！事務所も策士だね。話題になった所で写真集か…。売れるといいね！」

「ああ…そうだな…。」

「って、由！早く支度しろ！スタジオで衣装合わせとかしないと！あつ…そうか。メイクも念入りにしておかないと…。」

私と雪は、事務所の車で局に入った。

「お早うございます！x2。」

私と雪は、揃って挨拶。

大型の控室にはメンバーが居て、既にメイクやら着替えを始めていた。

「おいっ！由！！。」

私の耳に馴染んだ声…お兄ちゃんの声。

「あつお兄ちゃん…。」

思わず呼んでしまった私に軽くチョップが飛んでくる。

「こらっ！仕事中は？」

あつ仕事中は…SATOさんでした。

「はいっSATOさん。すみません。っで何ですか？」

お兄ちゃんとの掛け合い…久しぶり！

あんな事…があつてから、お互い気まずくて…

家族の前ではお互い普通に過ごしてたけど、前みたいに二人きりになる事は一度も無かった。

ちよつと寂しい感じがしてたんだけど、やっぱりお兄ちゃんと話すと…落ち着く。

「由はこの衣装。雪はこっち。二人とも早く着替えてきて!!」

「はーいx2。」

私と雪は、簡単な仕切りの更衣室に入って行く。

うーん、衣装ついていてもスーツか。

あつても、中性的なイメージなのか、インナーにレースが付いてて…胸が目立たない!

多分、イメージって言うより、お兄ちゃんが選んでくれたのかな? 私は小振りなスーツを着て、更衣室を出た。

「ぶつ。由…レース付いてるぞ!!女みてえー!!」

雪がからかい半分で、私の胸のレースを引っ張った。

「ちよつ雪!!」

私が、『止めて』と言う前に、KOUJIさんは雪の手を捻り上げた。

「こつKOUJIさん?…っ手、痛いですううー!!」

KOUJIさんは力一杯捻ったから、雪は痛そうに助けを求めてた。

「…お前が触るから…つい。」

「…ついつて、別に触る位…。」

雪は離して貰った手首を擦りながら抗議していた。

確かに…男同士なら触る位…不自然ではない様な…もしかして墓穴?

「……いや、レースが取れたら困るから…。」

「…俺、そんな馬鹿力じゃないですよおー!!」

雪は苦笑いしながらメイク台の前に座った。

もうっ!雪になら…触られても良かったのに。貴方より…ね!

「本当、馬鹿KOUJI!久しぶりの歌番組で柄にも無く緊張ですか?」

先に準備を終えたKAJIさんとJEYさんがKOUJIさんのお

馬鹿振りを笑った。

「…………おっ……お前ら……」

全身プルプルさせるKOUJIさん……。なっ何か嫌な予感が……

「まっ待てKOUJI！おっ抑えてくれ！」

慌てるKAJIさん。

「こっKOUJI！すまん！つい面白くて……いつ嫌、何でも無い。」

フォロー出来てないJEYさん。

アレが出ませんように……

メンバーが心の中で願った事……それは、KOUJIさんの極度の恥ずかし屋って事！

一旦籠ったら最後、数時間は止まらない、あの例の奴……！

最近は強引&悪魔のKOUJIさんしか見て無かったから忘れてただけ……

アレ発症したら本番所か、打ち合わせすら出来ないじゃない！

もう、本番前に余計な事しないで二人とも……！

案の定KOUJIさんは控室を飛び出し……10分待ってみたが来なかった。

私たちは、KOUJIさんを手分けして探す事にした。

えっ……KOUJIさんが好きそうな場所……

多分、いや絶対に人間が居ない場所で丸まっているに違い無い……！

私は、空いている控室を次々に確認していった……。

何で私が一番最初に見つけちゃうんでしょ？

私は、一人でブツブツ喋っているKOUJIさんを直ぐに発見した。

「KOUJIさん？本番まで時間無いですよ？」

私は肩に手を置き、帰る様に促す。

「……ほっといてくれ。」

KOUJIさんは動こうとしない。

「もう、子供じゃないんだから…何時もの強引なKOUJIさんは何処行っちゃうんです？」

私の言葉に、ピクツと反応する。効いてる？

そっか、プライド高そうだしなあ…。もうちょい刺激してみるか。

「KOUJIさん？一緒に来ないならスタッフさん、呼んできますよ？」

人に見られるよー！お高いプライド型無しになっちゃうよー！

KOUJIさんは急に立ち上がる。おっ作戦成功ですか？

「……呼びたければ、呼べばいい。」

ひっ開き直り！…もう、何て言い返したら良いか解ないよ。

私が答えに詰まっていると、KOUJIさんが先に口を開いた。

「…ただし、困るのは二人でな。」

んっ？私は困らないけどな…。その直ぐ後、私はKOUJIさんの言葉の意味を理解する。

KOUJIさんは私の腕を掴んで自分に引き寄せる。

私は急に引っ張られて、素直に胸の中に収まってしまった。

「ちよっ！…何するんですか！ここTV局ですよ？」

もうっ！困るってこういう意味？逆に脅されてるし…。

「…鎮めさせる。」

一言呟くと、KOUJIさんの口が私の文句を塞ぎ止めた。

「んんんっ！むぐんっ！…むうー！」

離して！そう叫びたいのに声が出ない。

強い力で、離れる事も出来ない。

「騒ぐな。気付かれるぞ？」

KOUJIさんは耳元で囁く…。

確かに廊下にはスタッフさんとかタレントさんが歩いてる。声を出したら気付かれる！

知られたら…ホモセクシャル扱い？事務所クビ？一家解散？

私は何時もの様に大人しくキスを受け入れる。

私の唾液を全部吸いつくす様な激しいキスが続く。

解放された時には、身体が熱く火照っているのが解る。

「お前は隙が多いんだよ…。」

KOUJIさんは、怒った様な声で言う。今のキスの事？自分からしておいて…。

「なっいきなり何ですか？今のキスは無理やり引つ張られたから…。」

私は少し声を荒げ言い返す。

「…雪になんて胸…触らせやがって…。馬鹿女、淫乱女！！」

……はいっ？雪って…あつ控室の事？

「あつアレは不可抗力で…って、何でKOUJIさんに言われなきゃいけないんですか？」

私たち、恋人でもなんでも無いのに…。

「…お前は俺の物だと言った筈だ。なのに…雪に触らせるなんて…。」

「べつ別に触らせた訳じゃないし、雪は男のつもりで触ったんでしょ？」

怒る方が可笑しいと思いますけど…。」

それに、胸胸言っけど、レースは触られたけど、胸揉まれたとかじや無いし。

何でそこまで言われなきゃ…。もしかして…。

「KOUJIさん、もしかしてヤキモチですか？」

「……はぁー？俺がヤキモチイー？」

あつですよね！貴方様がヤキモチなんて…。

「悪いか？俺がヤキモチ焼いちゃ…。」

意外な一言。

「えっ今…何て？」

思わず聞き返す。

「だから！！ヤキモチ位人間焼くだろ？普通…。」

うわっ！本当にヤキモチ？

私を毎日の様に抱いてる貴方がヤキモチ？

でも、ヤキモチって好きな相手に焼くんだよね…もしかして、私の事？

「あっあの…KOUJIさんって、私の事…んんっ！！ちょっと止めて。」

最後まで言えない内に、KOUJIさんの舌で塞がれてしまった。

頭がボーンと白くなる様な優しいキス…。

何時もの奪うキスじゃ無くて…愛おしそうに抓むキス。

この人、本当に私の事…。

でっでも！私は雪が好きなの！

貴方に心は…。

KOUJIさんは、私の衣装のチャックを降ろしていく…こっこので致すので？

勘弁してえー！ー！！

KOUJIさんは慣れた手つきで私の服を膝下まで下げる。下着も全部。

机に手を付き、丸出しのお尻を突き出す様な格好をさせられる。

…何回もエッチしたけど、こんな丸見えな体勢…恥ずかしすぎる…！

「こつ KOUJIさん！止めて下さい！人が来ますよおお…！」

逃げたい…！でも、男の人の力に敵う筈が無い。

私は抑えられたまま愛撫され、受け入れる準備をされてしまった…。

「くう！んああー！」

深く挿入され、思わず声が出てしまう。

「…おい、声出すと人入ってくるぞ？」

「そっそんな事言われても…んっんんー！はあ、くう。」

声出さないなんて…無理…！

何回も KOUJIさんを受け入れた私の身体は…快楽に正直になっ
てしまった。

頭では解ってる。でも、身体が反応してしまう。

KOUJIさんは私の腰を持ち、強く私を揺さぶった…。

机はガタガタと音を出し、臀部からは卑猥な音が聞こえる…。

「由…逝く、逝くぞ…。」

中に注がれる熱い液体…。

私は衣装が汚れるのを気にしながら座り込んだ。

「ほら、立て。」

へたり込んでいる私の二の腕を掴んで、KOUJIさんは私を立たせる。

「ほら、足開け。拭いてやる。」

見れば、手にはウェットティッシュを持っているKOUJIさん！
「いいえ、自分で出来ますから…。」

子供じゃないのに、人に下を拭いて貰うなんて！！あり得ない！

「早くしろ。衣装が汚れる。」

…衣装、汚したら大変だ！でも…拭いて貰うのは恥ずかしい…。
「じつ自分で出来ますよ…。」

「早くしろ！股から俺のが垂れてきてるぞ！！」
えっ？垂れ…うわっ！！本当だ！

私は図らずも、衣装に垂れるのが怖くて、大足を開いてしまった。
「やれば出来るじゃん。少し…動くなよ？」

何と言う痴態。醜態。もう…気絶したいよ！！

「あつあの…すみません。でも、垂れたの拭いて下されば、後は自分で…。」

私の言葉に、KOUJIさんは顔を見て話しかけて来た。

「…別に、何時もやられてる事だろ？今更恥ずかしがるなよ…。」
…えっ？今、何と仰った？何時もやってる事？

じゃあ、行為した後、私が気絶してる時は、KOUJIさんが拭いてたんですか？嫌あー！！

そんな馬鹿な行為をしていると、突然部屋のドアをノックする音が聞こえた。

『ドンドンッ！！』

その音に、二人ともビクッってなる。誰？

「あの、誰か居るんですか？……鍵……は掛って無いな。」
この声は……うそ……！中に入ってきて来ないで……！！

「入りますよ……！失礼します。」

段々と室内に廊下の光の筋が出来る。

私は、ビククリして動く事も出来ない。それはKOUJIさんも同じようだ。

「……由……。お前、何やってるんだ？」

見られた……見られてしまった……。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……。

「KOUJIさん、これは一体どういふ事です……か？」
怒りに満ちた声が私たちを襲う……。

第二十四章（後書き）

何だかシユケベな話に…。

あの声の持ち主は…誰でしょう！

やっぱり解っちゃいますよね？すみません。

第二十五章

声の主はお兄ちゃんだった。

お兄ちゃんの目線の先には、剥き出しの私の尻。

そして…太股に垂れた自分の物を拭いているKOUJIさん。
解るよね…私たちが今まで何してたか。

「…別に、愛し合ってる者同士の自然の行為ですけど？」

KOUJIさんは平然と答える。

お兄ちゃんの顔色が変わっていく。

真っ赤な顔に、険しい目付き…こんなお兄ちゃんの顔、見た事無い。

「あつあの…お兄ちゃん…。」

何て言って良いか解んない。

どんな良い訳並べても、私たちがSEXしていたのは明らか。

この前とは状況が違う。だって目の前に私を犯した男が居るんだもん。

お兄ちゃん、今日は怒るだけじゃ済まないかも…。もしかしたら…

KOUJIさんの事、殺しちゃったらどうしよう。

良い訳しなきゃ…お兄ちゃんが納得する様な、お兄ちゃんがKOUJIさんに手を出さない様な…。

「KOUJIさん、愛し合ってるってどういう事ですか？この前由子に酷い事をしたのも貴方なんですか？」

「…この前？何時の事だか？ほぼ毎日してるから解んないですね。」

「…！きつ貴様…。」

火に油を注ぐようなKOUJIさんの言葉。信じらんない！！

どうしよう…このままだと本当に飛びかかりそうな勢いだよお兄ち

やん…。

「由、お前だって自分から進んで俺に抱かれてるんだろ？」

KOUJIさんが私に向かって言う。

「由…どうなんだ。」

お兄ちゃんも私の言葉を待ってる。

「…うん。私が望んで抱かれてるの…。」

嘘でも…こう言うしかないでしょ？お兄ちゃんの為に…。

「本当か？本当はお前、嫌なんだろ？取引で抱かれてるんだろ？

それに悔しいって、怖いって言ってたじゃないか！！そうなんだろ？」

お兄ちゃんの縋る様な目…ごめんねお兄ちゃん。

「最初は嫌だった。悔しかったし苦しかった。でも…

今はKOUJIさんの事が好きで…私からお願ひしてるのよ。」

お兄ちゃんの顔を見て話せない。

お兄ちゃんの顔を見たら…泣いてしまいそうだった。

「解ってもらえましたか？俺たち、愛し合ってるんです。」

KOUJIさんは冷たくお兄ちゃんに言う。

「…由子、本当か？本当なのか？」

信じたくない、お兄ちゃんの心の声が聞こえそうだった。

「…うん、本当に本当なの。心配しないで…。」

私の言葉を聞いて…お兄ちゃんはボーっとした表情で部屋を出て行った。

お兄ちゃんの事、傷つけた？どうしよう…。

その後、私は無言で後始末を済ませ部屋を出ようとした。

「おい、待てよ。」

KOUJIさんが私を呼びとめる。

「…なんですか？」

「…心、此処に在らずか？そんなにショックか？」

「…別に。」

冷たく答えた。

だって、ショック所じゃ無い。もう…どうしたらいいか解らない。
やっとお兄ちゃんが家に帰って来て…お兄ちゃんと元に戻るかも
って思ってたのに。

こんなの見られて、元に戻る訳無い！！

悔しい…悲しい…寂しい…

「…そうか。済まなかった。」

いきなりの謝罪。

「えっ？」

初めての謝罪に、思わず振り返る。だって…謝るなんてビックリし
ちゃって。

「KOUJIさんでも悪いって思う事、あるんですね。」

絶対許さない。

「…あんまりだな。俺だって局でやっちゃった事については悪かっ
たと思ってる。」

「その事だけ…ですか？」

「ああ。当然だ。他に悪い事したか？」

お兄ちゃんへの言葉…悪いと思ってるんだ。

「お兄ちゃんにあんな言い方…他に言い方は無かったんですか？」

「あれは…ああ言うしか無かった。だってお前…兄貴と何か無かあ
るんだろ？」

「なっ何かで何ですか？」

「例えば、兄貴に愛してると言われたとか…もしくは兄貴に抱かれ
てるとか…。」

「なっ何ですかそれ！有るわけ無いじゃないですか！」

それに近い事はあったけど…愛してるなんて、私たち兄弟なのに…

「ふーん、感が外れたか？…いや、俺が手を出したのが早かっただけか？」

「なっなんの事ですか？」

「多分、SATOさんはお前の事、本気で愛してるぞ。気付かなかったのか？」

あんな熱い目で俺とお前睨んで…あれは嫉妬の籠った目付きだったのに…。」

「まっまさか！私たち、兄弟なんですよ？」

確かにスキンシップの激しい兄弟だとは思ってたけど、まさか…ね？

「普通、あそこまで嫉妬剥き出しされて気付かない奴居ないだろ？」

俺がSATOさんにあんな言い方したのだって、それが原因なのに…。」

「そうなんですか？」

「俺だってお前手放す訳にはいかないし…受けて立つだろ、男として…。」

「なっなんですかそれ…。」

そんな事言われても…

「それってお前…。なあ、お前は俺の事、どう思ってた？」

「なっいきなり何ですか？」

どう思ってるって…決まってるじゃない！

「私をダッチワイフか何かと思ってる男の人だと思ってますけど？」

ふん！嫌み位言いたくなる。

「ダッ？っってお前、酷いな。そんな風にしか思われて無かったんだな。」

「だって、脅迫してるじゃないですか！」

「まあな。でもそうでもしなきゃ…手に入らないと思ったんだ。」

まあ、最初は本当に出来心だった。でも今は…お前と一緒に居たくて…

お前の事だけ抱きたいんだ。……愛してるんだ。」

「きつ急にそんな事言われても…。」

だって、脅迫して女抱く男なんでしょ？

「信じられないか？」

「あつ当たり前じゃないですか！私にした事棚に上げて…そんな事言わないで！」

もう、何なのよ！！

「そうか…当然だよな。俺が悪い。でも…本当にお前の事を手放したく無いんだ。」

ずっと…傍に居て欲しいと思ってる。なあ…駄目か？俺じゃ駄目か？」

今まで見た事無い様なKOUJIさんの顔。

縋る様な眼…この人、本気なんだ…。

「…無理です。だって…そんな事急に言われたって…。」

信じらんないし、考えらんない！だって、脅迫して私を犯してたんだよ？解ってる？

「だよな。当然だ。……俺はもうお前の事、無理に抱かない。呼び出しもしない。」

俺の…俺が信じられる時が来たら…返事をくれないか？それまで俺は…待つから。」

「…わかりました。それでいいなら。」

「ああ、それで良い。ありがとう。」

KOUJIさんが可愛く笑う。へえ…こんな顔もするんだ。

私とKOUJIさんは部屋を出た。

楽屋に戻ると…メンバーが血相変えて駆け寄ってきた。

「おいっ！馬鹿KOUJI！いい加減にしろ！！」

JEYさんが怒りだす。

「お前が変な事言うから…。」

KOUJIさんは膨れ顔で答える。

「とにかく！後は二人がメイク終えるだけだから、早く済ませて！

！」

KAJIさんが急かす。

私とKOUJIさんは鏡の前に座る。

そして…後ろにお兄ちゃんが立つ。

お兄ちゃんは何も喋らないで、黙々と作業をこなす。

私も声を掛けられない…なんて話したらいいか解らない。

KOUJIさんのメイクの時も同様。いや、それ以上に不気味な空気が漂ってる。

不機嫌なKOUJIさんに、怒りの籠った目で見るお兄ちゃん。

それは当然、メンバーから見ても異様な光景で…

先にメイクの済んだ私は、メンバーの質問攻めにあった。

「なあ…お前ら、何かあった？」

雪が心配して聞いてくる。

「うつん…別に、無いよ？」

嘘…ごめんね雪。

正直に言える訳無い。言ったら…軽蔑するでしょ？

「何時も爽やかなSATOさんが…珍しいな？」

不信がるKAJIさんにJEYさん。

「まあ…珍しいといえばそうですね。家ではたまにあるんですけど…。」

嘘です！こんな顔のお兄ちゃんは初めてです。

作業を終えた二人は、直ぐに席を離れる。

お兄ちゃんはコスメ類を片付け、KOUJIさんは隅のソファード力つと腰を落とす。

きつ気まずい…。

「KJの皆さん！そろそろ移動お願いしまーす！」

天の助けか、スタッフの声が響く。

皆ぞろぞろと部屋から出て行き、最後に私が部屋を出ようとした時、お兄ちゃんは私の腕を掴んで、部屋に引き戻した。

「…なあ由？大丈夫か？」

いつものお兄ちゃんの優しい顔。

「なっ何が？」

解ってるけど…自分の口から言えない。

「お前、さっきはKOUJIが居たから本当の事言えなかったんだろ？」

今なら二人きりだ。正直に答える。

「だったから…さっき言っただでしょ？」

やっぱり…そう来たか。

「嘘をつくな！お前がそんな女じゃないのは、俺が一番知ってる。」

真剣なお兄ちゃん。

お兄ちゃんには…隠せないのかな？

でも、隠さなきゃいけない。お兄ちゃんの為に…

「全部本当だよ？私…KOUJIさんが好きなの。」

お兄ちゃんの目を見て、きっぱり否定した。

お兄ちゃんは私の言葉を聞いて…真っ青な顔をした。

「よっ由子…。俺は…！お前が…」

お兄ちゃんが何か言いかけた時、雪の声が私を呼ぶ。

「おい！由ー！早く来いよ　！！」

「っ。由…早く行け。」

お兄ちゃんは横を向く。

「うっうん。行ってきます。」

私は少し不安を覚えながら、雪たちに合流した。

第二十六章

メンバーと共に立ち位置に着く。

「3…2…1…」

スタッフのカウントダウン。緊張が高まる。

イントロが流れ出し、私たちは緩やかに動き始める。

曲も半分過ぎ、いよいよ変な振り付けの節に差し掛かった。

私は打ち合わせ通り、雪の元に歩み寄る。

雪も私の傍に来て…抱き合った。

きゅーん！！雪ー！！

私は一瞬、スタジオの中に居る事を忘れる。

そして…KOUJIさんが私の腕を掴む。

私は打ち合わせ通り、KOUJIさんの方へ連れて行かれる。

もうちょっと…雪と抱きあっていたかった…なんてね！

局はそのまま進み終盤に差し掛かる。

少し…息が苦しくなってきた。練習の時は平気だったのに…

やっぱり緊張していると負担がかかるのかな？

私の顔が微妙に引き攣る。

KOUJIさんが私の方に一瞬視線を送ってきた。

すると…KOUJIさんは私を抱きしめる様に歌い始めた。

なっ何するの！！っと一瞬思ったけど…私の事、助けてくれたのかな？

引き攣った私の顔を隠してくれたんだよね…。

それに気付いたKAJIさんも、雪を隠す様に歌い始める。

J E Yさんは中立をとる様な立ち位置に着き…曲は終わった。

「すみませんでした!!」

収録を終えた私は、開口一番で謝った。

「もう、ビックリしちゃったよ。打ち合わせと違うんだもん。」

「雪、ごめんね?それに… K O U J Iさん、有難うございました。」

K O U J Iさんは照れた様に下を向く。

「大丈夫!初めてのTVだし!最初は皆緊張するんだよ?それに、雪だってギリギリだったよな!」

K A J Iさんは明るく笑い飛ばしてくれた。

「そうそう俺も… って!マジっすか?」

雪も笑いながら突っ込む。それを笑って見ているJ E Yさん。

ありがとう皆…。

私たちは楽屋に戻り、衣装を着替える。

…あれっ?お兄ちゃんが居ない。先に帰ったのかな?

私は帰宅の準備を終えると、さっさと帰ろうとした。

「おい!何処行くんだよ!!」

雪が私の手を掴んで引きとめる。ちょっと嬉しい。

「えっ?何処って…自宅?」

「なっ聞いてない?これから打ち上げだけだ…。」

「うっ打ち上げ?」

「ああ。普通はライブ後なんかにするんだろうけど…初めてのTVお疲れって事で急きょ決まった!」

なあ…由も行くだろ?」

ウルンツと可愛い目で訴える。そんな顔されたら…行くわよ!!」

「ああ…行くよ。」

「良かったあ!じゃあ急いで着替え済ませるから!!」

雪は嬉しそうに着替えに向かった。

私たちはマイクロバスに乗り込み、近くのパールに向かった。

貸し切りになつて、中には知ってる顔が待つてた。

「おう！お疲れ様ー！！」

「あつ鷹！！どうしたの？」

それに…この間のお泊まり会のメンバーとか事務所の人達が待つてた。

「初TV！おめでとうー！緊張した？」

鷹が私の肩に腕を絡ませながら聞いてくる。

「まあな。チョットだけな？」

「へえ…何気に大物？」

鷹が感心してくれると…雪はあつさりネタばらし。

「嘘！由…顔引き攣つてたじゃん！！」

「あつ速攻バラした！」

三人でお笑い。いいなあ…こんなフィンキも！

「じゃあ、また後で来るから！！」

鷹は知り合いを見つけた様で、何処かに行つてしまった。

皆グラスを持ち…乾杯の掛け声と同時に、一気に酒を流し込む。

「ぶはあー！最高！！」

雪は美味しそうな顔で飲み干した。

「あつお代り貰つてくるけど、何か持つてくる？」

雪に声を掛ける。

「おつ！気が効くね！じゃあ、ビール！！」

「うん。了解。」

私はカウンターにお代りを貰いに行った。

「すみません。ビール二つ下さい。」

「はい。かしこまりました。」

バーテンさんはオシャレなグラスに入つたビールを手渡す。それを受け取ると、ウキウキと雪の元に戻つた。

「はいっお待たせ！」

「あつサンキュー！」

雪はビールを受け取って、半分位まで一気に飲む。

「ぷはあ…。ああ美味い！しかし…緊張したな！」

「えっ？雪も緊張したの？」

「そりゃあ。俺的にもあのアドリブは助かった。」

「ふーん。なんだ、謝って損した。」

「なっ何？俺は顔に出さなかったぞ？このおー！！！」

私に腕を回し、私の頬を優しく抓る。

こそばゆい痛みが嬉しい。

「おいっあまり浮かれるなよ？」

私たちを引き離す様にKOUJIさんとJEYさんが現れた…。ワザと？

「べっ別に浮かれてなんか…。」

「そ、そうっす！ただ嬉しくて…。」

雪も慌てて良い訳をした。

「…ぶっ冗談だよ！今日くらい浮かれちゃえ！！！」

すでに酔っぱらっているJEYさんが、私たちに抱きついてきた。

「うわっ！！！」

「ぎゃっ！！！」

いきなり抱きつかれ、二人して声を出す。

「おいっ酔っぱらい。」

KOUJIさんがJEYさんを引き剥す。たっ助かった…。

「何だよあ。少し位良いじゃん！何かこの二人、異常に可愛いしさ！！！」

なっ何を言い出すんだ？この人は…。

「まあ…確かに可愛い顔してるが…。」

KOUJIさんは私の顔を見て言う。ちよっバレちゃうでしょ？

「珍しい！KOUJIがこの手の冗談に乗るなんてなあ。」

「J E Yさんが突っ込む。」

「べつ別に。正直に言っただけだ……。」

顔を真っ赤にして、プイツと何処かに行ってしまった。

「まあ始まった。本日二回目……！」

もう。ワザとだなJ E Yさん。

「おっ俺、探してきましようか？」

雪が名乗り出る。

「ああ、いいよ！そのうち出てくるからさ……さあて、俺は回ってくるな！」

J E Yさんは他の人の所に行ってしまった。

「なっ何だったんだ今の……。」

「さあ。」

雪と顔を見合って笑う。

でも何か……超幸せ……！！

「でも……確かに可愛いよな。」

「へっ何が？」

「いや……お前だよ。俺は男顔だけど……お前って本当に女みたいな顔してるよな。」

お前が女だったら……超好みなのにな、残念。」

「……もっもう！何言ってるんだよ……！」

「いや、冗談だよ！お前は男だしな。ただ……女だったら惚れちゃうかもって話……！」

「なっ何馬鹿な事言ってるんだよ……！」

自分でも顔が赤くなるのが解って……横を向いた。

「じっ冗談だよ！そんなありえない話だし、本気で取るなよ……！」
雪まで真っ赤な顔になって……。

「……なあ雪、もし……もしも俺が女だったら？本気で惚れる？」
もし私が正体を明かしたら……もし女だって名乗り出たら？

雪は私を受け止めてくれる？

「…由、…ゴメン。冗談が過ぎたな。」

真面目な顔で…謝った。なんかシヨックだよ…。

「…いや。…さあて！飲もうぜ！！」

空気変えたくて明るく切りだす。

「あつああ…飲もう！飲もう飲もう！！」

二人でグラスを合わせ、残りを一気に流し込んだ。

私は何度もお代りを繰り返した。

だって…正体を明かす前に振られた心境で。

告白すら出来なくて玉碎みたいな？

正直シヨックで…。早く家に帰りたい…。

「おい…大丈夫か？」

いつの間にか横に居た鷹が、心配そうに声を掛ける。

「んああ…だつ大丈夫…夫かな？」

「おいおい。駄目じゃん。…そろそろ終いだけど、帰れるか？」

「うーん…大丈夫…かも？」

「意味が解らん…おいつお…い…。」

鷹の声が、遠くなっていく。

……………。

ゆらゆら気持ちいい…温かくて…心地いい…。

私は、頬を伝う冷たい空気に起こされる。

「あつれ？ここ何処？」

見える景色は、明らかに何処かのマンションのホール。

「おっ起きたか？」

「たつ鷹？わつ私…。」

私、鷹にオンブされてる！！

「あーあ…まだ酔ってるな？私って…お力マか？」

やばい！咄嗟に出ちゃった！

「あつ鷹…あのさ、ここ何処？」

「ここ？俺のマンション。」

「たつ鷹の？」

「ああ。本当は家まで送ろうと思ったんだけど…お前の兄貴、五月蠅そうだし。」

「そっそつか…ありがとう。」

「まあ…少し酔い冷ましたら帰れば良いんじゃない？」

そう言つて、鷹は玄関の鍵を開ける。

私は鷹の言葉に素直に甘えた。

鷹は私をソファ―に寝かせ、水を持ってきてくれた。

「あつありがとう…。」

「いえいえ…どういたしまして。」

鷹はニッコリ笑つて…その場で着替えを始めた。

ジャケットを乱暴に脱ぎ捨て、ベルトを力チャ力チャ鳴らす。

前を緩め…ワイシャツも一気に脱ぎ棄てる。

逞しい…若く美しい男の身体が目の前に現れる。

「きゃっ…！」

思わず声を出す。

「きゃつて…変な奴。」

だつて…！鷹は男同士つて思うだろうけど…。

けっ血压あがりそう…それに…鼻血出そうよ…。

とっとなつ取り合えず…一旦落ち着こう。

「おつおい…！大丈夫か？顔色悪いぞ？」

「だつ大丈夫…あのさ…トイレ貸して…。」

「はっ吐くのか？そっそこの扉だ…！」

部屋に吐くな…！…と言わんばかりに焦る鷹。

私はヨロヨロ立ち上がり…トイレに向かう。

ドアを開けると、当然だけど目の前には便器。

人間って…深酒してから便器見ると…吐きたくなるんだね。初めて知った。

「うええーーーー！」

ダイナミックにまき散らしてしまった。

「うわーーーーー！マジかよ…。」

私は全身嘔吐物塗れ…臭い…。

鷹はため息をつきながら、私を風呂に放り込んだ…。

第二十七章

全身嘔吐物まみれの私：鷹に風呂場に放り込まれてしまった。

「マッジ：洒落にならんだろうよコレ：取り合えず全身洗え。」

鷹はそう言つて、風呂のドアを閉める。

鷹が起こるのも無理ないよね：自宅のトイレが物凄い事になったんだから。

私は心の中で詫びながら、シャワーを捻った。

頭から湯を掛け、身体に付着した異臭を洗い流す。

うーん、折角だからシャンプーも借りてしまおうか。

……うん、サッパリした。っとなると、服も全部脱ぎたい。

……よし！脱いじゃえ！

私は勢いよく素っ裸になり、身体を綺麗に洗った。

「おい、着替え置いておくな。」

突然、ドアの外から鷹の声が聞こえる。

「ひゃい！あつ有難う。」

声を裏返しながら礼を言う。

だって：KOUJIさんとの事が頭の中に蘇って来て……。

どっとうか中に入つて来ません様に！！

鷹は、タオルと着替えを置き、脱衣所を出て行った：良かった。

私は、鷹が脱衣所から出て行ったのを確認して、風呂から出た。

身体を拭き、鷹が用意してくれた着替えを確認する。

袋に入つたままの新しい下着に、Ｔシャツ＆Ｇパン。

私は、鷹に感謝しながら着替えを済ませた。

「たっ鷹：有難う。」

鷹はソファでTVを見ている途中だった。

「おう。今度からは気を付けて飲めよ？」

「うん、そうするよ。…あのさ、悪いんだけど、雑巾とか貸してくれないか？」

「はっ？何で？」

「だって俺…鷹のトイレ汚しちゃって…ごめんな？直ぐに掃除するから…。」

早く綺麗にしてくちや！鷹に申し訳ない…。

「ああ、もう俺がやっておいたから大丈夫だよ。」

嘘！鷹に掃除させちゃったの？うわぁ…最悪。

「マジで？本当ゴメン！！俺…なんて謝っていいのか…。」

鷹は私の顔を見て立ちあがる。

「本当、あり得ない奴だよな！！由以上に面白い奴見た事無いや…ぶっ。」

噴き出し鷹…そんなに私って変？

「うう…今日は返す言葉が有りません…。」

「ぶっ！本当に変な奴。まあ、少しその布団にでも寝てろ。んで落ち着いてから帰ればいいから。」

あっ！もうゲロは勘弁してな！

「もう大丈夫だよお。じゃあお言葉に甘えて…。」

これ以上の醜態を晒す前に、気分を落ちつけよう。

私は鷹に言われた通り、ベットを拝借した。

ベットには氷枕が置いてあった。なんて気が効くのかしら！

私は気分良く氷枕に頭を埋める。

気持ちいい…頭の中がスッキリしてくる…。

そして私は…知らない間に眠ってしまった…。

突然、頭に軽い痛みが走って目が覚めた。

「痛っ…あれ？私…寝ちゃったんだ。」

取り合えず、さっきまで鷹が居たソファーを見る。

でも、鷹はソファーに居ない。何処に行っただろう。

私は部屋中をキョロキョロ見回した。…ん？隣に気配が…

うわぁ！隣で鷹、寝てる！きゃぁー！！

私が慌ててベットから降りた所為で、鷹も目を覚ました。

「うつん…あれ？俺まで寝ちゃったか…。どうだ？少しは気分良くなっただか？」

「あつうん。もう大丈夫！」

鷹が気を使ってくれたお陰で、気持ち悪いのは収まっていた。

「由…面倒だから泊まってくか？」

眠そうに目を擦りながら鷹が提案する。…でも、

「うつん、大丈夫。ありがとうな？お陰様で復活したし…今日は帰るよ。」

いくら話しやすい鷹でも、一晚同じ部屋で過ごす訳には…

「まあ、兄貴も五月蠅そうだしな！！」

「まあね。散らかしちゃってゴメンな？借りた服は今度返すから…」

「

私は荷物を持ち、玄関に向かった。

靴を履き、玄関を開ける。

「じゃあ、お邪魔しましたって…何で鷹まで靴？」

鷹は、私の後を追う様に靴を履き始めていた。

「いや…お前みたいな女顔、どこぞの変態さんにでも襲われたら…

俺が兄貴に殺されそうだ。」

「送って…くれるの？」

鷹、優しいんだな。

「おつお前…そんな女みたいな言葉使い辞めろ！なんか…変な気分になる。」

鷹が嫌そうな顔で私に言った。

「うつそうか？気付かなかった。ごめん。」

「もう、早く行こうぜ？」

「ああ……」

二人して私の家に向かった。

鷹の家から私の家までは車で20分位の距離にあった。

鷹は車を持っていない為、私をバイクの後ろに乗せて送ってくれた。初めて乗るバイクの後ろ……緊張しちゃうな！

それに……何処を掴んでいいのか解らない！

こういう時って……鷹にしがみついた方がいいの？それともバイク？私は取り合えず、鷹の服の裾を手でキツク握った。

「おいっ！ちゃんと掴まってる！振り落とすぞ？」

鷹は信号待ちで停車した瞬間そう言っ、私の両手を掴み、自分のウエストに導く。

これって……抱きつけて事？きつ緊張しちゃう。

信号が青に変わり、鷹が走りだす。

全身にGが掛り、落されまいと力を込める私は、必然的に鷹にしがみ付いていた。

鷹は、大きな川の上に掛る橋の上を走らせる。

深夜という事もあり、結構なスピードで走った。風が気持ち良い！私は鷹にしがみつきながらも、流れる景色と夜風を楽しんでいた。

そんな私の目に、見慣れた人影が映る……

「たっ鷹！ちよつと停まって！」

私は鷹の服をグイグイ引っ張って合図を送る。

鷹はそれに気付き、バイクを停車させた。

「どうした？あつちヨイ飛ばし過ぎた？」

鷹はヘルメットを外し、私の方を向く。

「うつん、違うんだ……。あそこに……」

私は人影の方を指差す。

そこには…全身汗だくのお兄ちゃんの姿。

走りながら辺りをキョロキョロ…止まっては振り返り、また走り出す。

多分…私を探してるんだよね…。

正直、怒られるのが怖くて停まりたく無かった。

でも、必死の形相で私を探すお兄ちゃん…放っておけないよ。

「鷹…ちよつと待ってて？」

私は鷹に借りていたヘルメットを手渡し、反対車線のお兄ちゃんの元へ走って行った。

「お兄ちゃん！」

私は声を出しながらお兄ちゃんの傍に行く。

お兄ちゃんもそれに気付き、私の方を見る。

「由子！…！」

お兄ちゃんは私の傍に走って来て…私をきつく抱きしめた。
まるで…親が子供を抱きしめる様に。

「お兄ちゃん…もしかして私の事…探してたの？」

「ああ…昼間の事もあるし…お前が帰って来ない気がして…怖かったんだ。」

お兄ちゃんは、私を抱く力を緩めない。それどころか…ますます腕に力を込める。

「お兄ちゃん…心配掛けてごめんね？でも、KOUJIさんとは…別れたから。」

お兄ちゃんにはKOUJIさんの事を好きだって嘘ついてるし…
本当は全部話して、KOUJIさんは何もしないって言った話を話したいけど。

でも…結果は同じだから…お兄ちゃんの為の嘘なら許されるよね？

「ほっ本当か？本当に別れたんだな？」

お兄ちゃんは力を解き、私の腕を掴んで顔を覗いてくる。

「うん、本当だよ？心配掛けてごめんね？」

精一杯の笑顔をお兄ちゃんに送る。

「そうか…良かった。」

はあっつと深く息を吐き、頭だけ私の胸に崩れ落ちた。

そんな私たち二人のやりとりを不思議そうに見ていたのは鷹だった。ポカーンと口を開けてる。…やばい！帰っていいよって言えば良かった！！

「たつ鷹！待たせてゴメンな？」

私はお兄ちゃんから離れ、鷹の方に駆け寄ろうとする。

お兄ちゃんに説明しなくちゃ！遅く帰ってきた理由。

鷹と一緒に話してもらおう！！

でも…鷹は何か手を振り…叫んでる？聞こえないよ…。

「えー？何ー？聞こえないよー！」

もつと近くまで行かなくちゃ！

私は鷹の傍に駆け寄ろうとした…その時だった。

「ドンツ！！！！キイイイ…。」

突然、私の身体が前に飛ぶ。痛ああ！膝がヒリヒリ、手のひらも痛い。

いま…誰かに背中を…押された？

私は振り返る。

そして…目の前で、恐ろしく…一生忘れられない光景が始まっていた。

一台のトラック…お兄ちゃんの必死の顔…

お兄ちゃんに突っ込むトラック…宙を舞うお兄ちゃんの身体…

「お兄ちゃああーん!!!」

私は恐怖で動けない…動く暇も無い。
それは一瞬の出来事…

お兄ちゃんは轢かれそうな私を突き飛ばし、自らが代わりとなって
トラックに当たった…

お兄ちゃんは、私の代わりに宙を舞い…橋の手すりを越えて行った。

ドボーン!!

水に落ちる音が聞こえる…。

私は直ぐにでも確認したかった。でも…足が動かない。
怪我では無くて、恐怖で動けない…。

「この馬鹿野郎!!!」

鷹が直ぐに来てくれて…橋の手すりから下を覗きこむ。

「……見えない。」

一言呟くと、携帯を取り出し、電話をかけ始めた。

鷹は救急要請をし終えると、私の傍に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「おっおっお兄…ちゃん…お兄ちゃん…は？何処？」

「…川に…落ちた。」

「たっ鷹…お願い…助けて…お兄ちゃん、助けて…。」
震える声で何とか喋る。

誰か…誰か…誰か…助けて…

お兄ちゃんを助けて!!!!

第二十八章

鷹が呼んでくれた救急車やレスキュー隊は直ぐに来た。皆、必死に川に落ちたお兄ちゃんを探してくれた。

私は救急車の中で手当てをして貰いながら、お兄ちゃんが見つかったという連絡を待っていた。

でも…いくら待っても、吉報は届かない。

私を乗せた救急車の隊員は、私に病院へ行くように促した。

でも、お兄ちゃんが見つかったという知らせが無い今、私はここから動きたく無かった。

「由…心配なのは解るけど…」

一緒に乗っていた鷹が私を宥める。

自分では気丈にしていたつもりだったけど…

鷹から見れば酷く取り乱している様に見えるんだろう。

「そんなんじゃ兄貴に怒られるぞ！お前の為に身体張ったんだろう！

心配なのは解るけど、お前が元氣にならないと…」

「でも！私の…私の所為で…」

頭を激しく振った。私が悪いの…私が…！！

「由…！！」

鷹が声を荒げて止めようとする。でも…

「由…由子…！！」

鷹が突然私の名前を呼ぶ。そして…痛いくらいに抱きしめた。

「落ち着くんだ由子…落ち着け…」

鷹の胸に抱かれながら、少しずつ落ち着きを取り戻した。

「はあはあ…どうしよう鷹…私の所為でお兄ちゃんが…」

鷹はさらに強く私を抱きしめ、優しい声で話し始めた。

「由子…お前が此処で取り乱した所で、お兄さんの発見が早くなる訳じゃない。」

それよりも、お前はちゃんと治療を受けて、いざお兄さんが見つかった時…

一刻も早く駆け付けれる事が出来るようにした方が…お兄さんだつて喜ぶに決まってる。」

鷹は私に言い聞かせる様に話す。

「…うん、そうだよ…ね。鷹の言うとおりにする…。鷹、一緒に居てくれる?」

一人だと…また発狂してまいそうで怖い。

「ああ…ちゃんと傍に、お前の傍に居るから…。」

鷹はそう言つて、私の頭を撫でてくれた…。

私は鷹と一緒に病院に向かった。

私はお兄ちゃんのお陰で、膝と手のひらの擦り傷だけで済んだ。消毒してガーゼをあててもらい、帰宅出来る事になった。

待合室で会計を待っている時、病院に両親が飛び込んできた。

「由子!」

お母さんが私の元に走つて来て、私を強く抱きしめた。

お父さんは涙目で私の手を取り、手の甲を擦った。

「ねえ…お兄ちゃんは?」

一番気になっている事を聞いた。

すると両親は…首を横に振った。

「まだ…見つからないの。深夜で視界も悪いらしくて…。」

警察の人からは…覚悟してくれって……うう…。」

口に手を当てて…無き崩れるお母さん。

嘘…嘘だよ…

お兄ちゃん…死なないよね?

鷹は私と両親が再会したのを確認すると、声も掛けずに病院から居なくなっていた。

きつと…家に帰ったのだろう。

鷹に感謝し、私は両親と自宅に戻った。

それから一週間が過ぎた。

搜索範囲も、川の流れ等も考慮した上で、かなり広範囲で行われた。でも…私たちに吉報が届く事は無かった。

警察の人からは、トラックに撥ねられた上に川に落ちた以上、もう諦めてくださいと言われた。

そして…死亡届を出す様に言われた。

遺体だつて見つかつて無いのに？

お兄ちゃんが死んだつて思わなくちゃいけないの？

ヤダ！！絶対に嫌！！！！

両親は言われた通り死亡届を出し、私は受け入れられないまま、休んでいたKJの仕事に戻る事になった。

お兄ちゃんの事は、すでに社長からメンバーへ伝えてあったらしく、私が事務所に顔を出すと、皆私に同情の言葉を掛けてきた。

どうして皆、お兄ちゃんが死んだつて受け入れてるの？

まだ遺体だつて見つかつて無いのに。

皆酷い！！！！

その日は病み上がりという事もあって、レッスンをしないで帰った。

家に帰っても、考えるのはお兄ちゃんの事ばかり。

私の所為でお兄ちゃんはあるな目に。

お兄ちゃんは私の身代わりに…。

後悔ばかりが頭をよぎる。

もし…お兄ちゃんの事受け入れてたら…お兄ちゃんは轢かれる事も無かった。

お兄ちゃんと喧嘩なんかしなければ…お兄ちゃんは私を探し歩く事もしなかった。

悪いのは私…全部私。

考えるだけで…涙が止まらない。

そんな時、ドアを叩く音がした。

「由…。お友達がいらしてるけど…お通しする?」

お母さんの声…なんで私を由って呼ぶの?

「…友達って、誰?」

私は部屋の中から聞く。

「えつと…お名前は?」

お母さんは誰かに話しかけている様だ…て事は、既に隣に居るって事?

「由…俺だよ。鷹。」

鷹?どうしたんだろう。

私は鷹にちゃんとお礼を言っただけだった事を思い出し、部屋の扉を開けた。

「鷹…どうしたの?…あつ取り合えず中入って?」

私は鷹を自分の部屋に招き入れた。

鷹は部屋に入るなり、キョロキョロと部屋中を見物している。

「あつあの…何?」

変な態度をする鷹に問いかけた。

「ん?いや…本当だったなと思って。」

何の事だろう。

「本当って…何が？」

「由…子ちゃん？」

鷹は、私の目をしっかりと見つめて話しかけてくる。

「なっ何言ってるんだよ！子ちゃんって…俺はおカマじゃ無い！」

「…この前、皆お前の事由子って呼んでただろ？この前から疑問に思ってたんだ。」

なんだ…本名までバレてるのね？

「…騙してごめんな？」

「いや、大丈夫。でも何でオーディションなんか…」

鷹は何故KJのオーディションに私が参加したのか不思議に思っている様子。

今更隠す事も無い。

私は鷹に全部話した。

「…そつか…。お兄さんのお陰なんだな…」

「うん、お兄ちゃんは私の恩人。この部屋から出してくれた恩、友達を作ってくれた恩、命を救ってくれた恩…」

「すげーお兄さんなんだな…」

鷹は私の頭を軽く叩く…。お兄ちゃんみたいだな。

「鷹、色々有難うね？助かった…」

「はっ？何が？」

「あの時、鷹が居てくれたから取り乱さなくて済んだ。病院まで付き添ってくれて…」

今日だってお見舞いに来てくれたし…。本当に有難うね？」

「いや…勝手にしてる事だから…」

それはそうと…お前はそのままKJでやって行くつもりなのか？」

「えっ？何で？」

「いや…今お前がKJに居るのは兄貴の為だろ？でも…」

鷹は最後の一言を飲み込んだ。

「…正直解らないの。メンバーに性別の事黙っているのも正直辛いし。」

鷹：鷹ならどうする？」

鷹に助けを求める。鷹ならどうする？もし鷹が私の立場なら？

「それは…お前が決める。俺が決める事じゃ無い。

ただ…相談とか話とか、色々聞くからさ！別に今すぐ答えを出す問題でも無いと思うし。」

そうだよ…鷹に変な事聞いちゃったな…。

「ねえ…もう一つ聞いてもいい？」

「へっ？何？」

「あのさ…鷹は私が女だって気づいて…どう思った？」

「なっ何を急に…」

「もし…私がメンバーに正直に話したら？」

メンバーは私を拒絶する？それとも受け入れてくれる？

鷹：鷹はどう思った？気持ち悪いとか思った？」

もし私がカミングアウトするなら…一番怖いこと聞いてみた。

「うーん…俺的には平気だけど…その証拠に今此处に要るしな！！

メンバーは…どうだろうな？拒絶する奴も居ると思うぜ？多分雪辺りがな。

裏切られた…そう思うかも。雪は単純だからな。」

「やっぱり…そうだよ。」

「もしかしたら、それをネタに言い寄ってくる奴も居るかもな！！」
それは…居ました。

「とにかく…カミングアウトにしたって、話す時期があると思うぜ？」

「だよ…ありがとう鷹…。」

鷹って話しやすいな！

第二十九章

次の日、思い足取りで事務所に向かった。
また変に励まされたら…嫌だな。

「由ー！ー！おはよう！」

雪は何時もと変わらず、子犬の様に走って私を出迎えてくれた。

「おはよう！今日も元気だね！」

以前と同じ態度の雪に安心感を覚える。

「由、マネージャーから聞いたけど、今日からレッスン復帰するの
か？」

「うん。何時までも休んで居られないよ！また今日から頑張るから
！」

精一杯の笑顔で返す。

「そっか！じゃあ、一緒に頑張ろうな！」

雪と私は肩を組みながらレッスンに向かった。

しばらく休んでいたレッスン…思ってた以上に身体が付いていけな
かった。

「つつ疲れた…。」

汗だくで床に座り込む私。ひい…しんどい。

「由、大丈夫か？あんまり無理するなよ？」

雪は冷たく冷えたドリンクを私に差し出し、横にドカっ！と座っ
た。

「あっありがとう！！」

私は受け取って、一気に喉に流し込んだ。

「あのさ…昨日はごめんな？」

雪がいきなり謝ってきた。なんの事だろう。

「えっ？いきなり何？どうしたの？」

「いや…昨日さ、皆に気を使われて…嫌だったんだろ？」

「…私、顔に出てた？」

「うわっ顔に出てない自信あったのに。」

「いや、顔色と言うか…纏ってる空気というか…。」

「雪自身確証がある訳じゃ無かったみたい。自爆した！！」

「うっん。気にしないで？やっぱりまだ落ち込んで…。」

「だよな、身内にあんな事があつたら…普通に居られる訳無いよな…なあ、由…。」

「雪が私の顔を覗きこむ様に話しかけてきた。うわ！雪のアップ！！」

「お前…辞めたりしないよ…な？」

「雪の表情が心配で溢れてる。」

「えっ？何で急に…辞める予定は無いけど？」

「本当に？」

「うっうん、まあ。でも何で？」

「別に身内が死んだからって…仕事辞める人居ないでしょ…。」

「いや…職場同じだったし、二人って…何て言うか…異常に仲が良かったって言うか…。」

「…大丈夫。辞めたりしないよ？」

「本当だな？」

「うっ本当だつてば！！！」

「もう、本当に辞めないってば！！今…はね。」

「そっかぁー！良かった！！！」

「雪は大きく息を吐く。」

「せっかく仲良くなってさあ…辞めたら寂しいじゃん？本当に良かったよ。」

「雪は満面の笑みで私に笑いかける。」

「雪…ありがとう。」

「いや、お礼言うのはこっちだし！」

雪は笑いながら私の肩を叩く。

なんか…親友って感じ？

まあ…いっか！普通の同僚より親友の方が嬉しいや！！

どうせ正体を明かせないなら…親友以上のポジションを望んじゃ駄目だよな？

女の私は受け入れてくれそうに無い。でも親友としてなら…ずっと一緒に居れるもんね。

私と雪は一緒に建物の外に出た。

二人して駅に向かっていている途中、私達目がけ、クラクションが鳴り響いた。

ビツクリして振り返ると、そこにはバイクに跨った鷹が居た。

「おい！迎えに来たぞ！！」

鷹が私に向かってヘルメットを投げる。

「えっ？」

何？約束したっけ？

「おいっ！飲みに行く約束だろ？」

鷹はウインクしながら答える。

「えっ？あれ？」

身に覚えが無いです。

「由ー、ずるい。二人で飲みに行くのかよ…。」

可愛く雪が不貞腐れる。

「おう！昨日約束してな？なあ由？」

またウインクする鷹。話を合わせろって事？

「うっうん…。そうなんだ！！」

雪に向かって嘘をつく。

「ふうーん…ずるーい！！」

雪は拗ねてしまった…その拗ねた顔も可愛いけどね！！

「じゃあ…また明日ね？」

これ以上居たらボロが出そう…。

私はヘルメットを被り、鷹の後ろに跨った。

鷹の背中にしがみ付く。

痛い位の風が私の身体を包んだ。

そして鷹は、飲みに行くでもなく私を家まで送ってくれた。

「鷹…もしかして私を送りに？」

私はヘルメットを鷹に差し出し尋ねる。

「ああ…まあな！一応女の子だし？知ってるの俺だけだろ？

まあ、SATOさんの代わりとまでは行かないけどな！！

後、そのメットはお前専用だから返さなくていい。」

鷹は恥ずかしそうに私に言った。

鷹…鷹はもしかして、お兄ちゃんに悪いって思ってるのかな？

鷹、私を心配してくれてるんだ…。

「あっありがとう…。」

「まあ、俺のユニットって今はまだ暇だし…忙しくなったら迎えに行くの無理かもしれないけど…

それまでは俺、お前の事送ってやるから…な？」

鷹は照れ笑いしながらバイクに跨った。

「お前、明日もレッスンだろ？」

「うん。」

「じゃあ、また明日も待つてるから…じゃあな！！」

「あっありがとう！」

お礼を言った私の頭をポンポンっと叩いて、家に帰って行った。

私は鷹から貰ったヘルメットを机に飾った。

ヘルメット…私のだつてさ！！

なんか、恥ずかしい！！

あんなカッコイイ男の子から、女の子の扱いを受けてしまった…。
女の子扱いなんて何年ぶりだろう。

鷹って…本当に優しいんだな。

あんなに見た目は怖そうなのに、見た目じゃないんだな！

雪もそうだけど、私って恵まれてるんだろうね。

顔の良い人達に囲まれて、その人達から大事にされて（一人例外も居るけど…。）。

男の人って、怖いだけじゃなかった。

優しい人だって沢山居た。

やっと解った。

でも、それを気付かせてくれたのって、お兄ちゃんのお陰だよね。
お兄ちゃん…お兄ちゃん…早く帰って来て…
生きてるなら…お願いだから。

翌朝、私は鷹から貰ったヘルメットを片手に家を出た。
メットを持ったままレスンに向かい、終わったたら外で鷹を待った。
鷹はちゃんと来てくれて、私を家まで送ってくれた。

「じゃあ、また明日な？」

鷹は私を家の前で降ろし、自分はまたバイクに跨った。

「あつうん…。」

私はお礼を言うけど…ちょっと心配事があって空返事をしてしまった。

「ん？どうかしたか？」

鷹は私の様子に勘づき、心配そうに声を掛けてくれた。

「…あのね、雪が…。」

私は鷹に正直に告白した。

実は…雪が拗ねちゃって困ってるの。

昨日だけならまだしも、今日も二人で飲みに行くって言うっちゃった

から。

だって、送ってもらうなんて正直に言ったら、男としては可笑しいでしょ？

男なのに鷹に送ってもらうなんて…

明日も雪の前で鷹と飲みに行くって言ったら…雪が可哀そう。どういい訳しようか、帰ってくる間、ずっと考えてた。

鷹は、私話を聞いて…少し考えた。
でも、直ぐに答えをくれた。

「別に大丈夫じゃね？俺が家に連れて帰った所為で事故にあったとかさ。」

俺が勝手に責任感じて、無理やり送られてるとか言えば…ね？」
鷹はどうだ！っと言わんばかりの表情。

「まあ…いずれにせよ少し考えなくちゃね！宿題！！」

私は鷹の答えをスル する様に返す。

だって…鷹の考えたいいい訳、鷹が悪者になっちゃうじゃない。

親切な鷹を悪者にするなんて…絶対嫌！！

「そっ？いい案だと思ったのに…。じゃあ、思いつき次第メール入れるわ！」

期限は明日の帰宅時間までな？」

「うん、宿題ね？」

「懐かしい…いや、恐ろしい響きだな。まあ…考えるか！じゃあ、また明日な？」

「うん、また明日ね！！」

私は手を振って鷹を見送った。

部屋で一人で言い訳を考える。

なんて言ったら雪の機嫌が直る？

何て言ったら鷹が悪者にならない？

……私、なんだか浮気の良い訳をしてるみたい。

秘密がバレない為の良い訳だけど……男と会う自然な理由を探してる
って事でしょ？

何か……変なの！！

私は眩しい光で目を覚ました。

時計を見れば……おわ！遅刻する！！

急いでシャワーを浴び、身支度を整える。
早くなったな……男の準備するの。

……んっ？何か忘れてる様な……。

うーん、思い出せない。

って、こんな考え事してる時間無い！！早く行かなくちゃ！
私は朝食も食べずに家を飛び出した。

第三十章

私は急いで事務所に向かった。
何時もの様に雪が出迎えてくれた。

「おはよう。」

雪が膨れ面で迎える。

あつ……忘れてた事、思い出した。

「おっお早う。」

気まぐずく挨拶を返す。

「来週…写真集の発売日だな。」

プクツと膨れた頬で喋る。

「あつそうだね。楽しみ！」

そういえば、来週は以前撮った写真集が発売されるんだった。
私の顔…全国にお披露目なのね。緊張だな。

私と雪が廊下で喋っていると、マネージャーがやってきた。

「由君、雪君、ミーティングするから集まってくれろ？」

なんのミーティング？

私たちは解らないままマネージャーの後を着いて行った。

部屋には他のメンバーも集まっていた。

「あはようございます。」

私と雪は元気よく挨拶をした。

「今日は新曲の打ち合わせをします。」

マネージャーが司会進行。

「しっ新曲ですか？」

私と雪はビックリ！もう新曲？

「はい。本当は早くから準備は出来ていたんですが…

由君の事情や人員の手配で延期されてまして…。」

そっか…私たちの事で延期になって…

「本当は先週から歌やら踊りやら合わせて行きたかったんですが、時間が有りません。」

これ以上は延期出来ないの、二人とも今日中に歌だけは覚えて下さい。」

今日中！！覚えられるかしら、不安。

「解りましたか？」

マネージャーが顔を覗きこんでくる。

むっ無理なんて言えるフィンキじゃ無いでしょ！！

「はっはい…。」

口籠る私と雪。

「では今日は解散します。明日は歌合せを行いますので宜しく願います。」

私と雪は部屋に残り、メンバーとマネージャーが出て行くのを見送った。

「ふうー。」

部屋に二人で残り、ため息をつく。

「おい…由。自信あるか？」

雪が不安そうな声で話しかけてきた。

「やっやるしかないよね…。」

自分に言い聞かせる様に答えた。

楽屋に戻り、私と雪はマネージャーから渡された歌詞を穴が空くほど見つめた。

一緒に渡されたCDを聞きながら、必死にメロディーと歌詞を覚える。

2時間ほど二人で暗記した後、成果を確かめる様に、お互い歌を披露した。

「じゃあ、最初は俺が歌うから。少しでも変な所があったら遠慮なく言ってくれな？」

雪は喋り終わると、深く深呼吸をした。息を吐き終わると、雪の目付きが一気に変わった。

雪の口から綺麗なメロディーが流れる。

綺麗な発音、優しい声…。

私は思わず聞き惚れてしまった。

「よ…し？由…！」

雪の声で現実に戻された。

「あっあれ？」

私はビククリして激しく瞬きをする。

「おーい！！由さん？聞いてました？」

雪が私の目の前で手をヒラヒラさせる。

「きつ聞いてたよ！あっあの…雪の声が綺麗だったから…聞き惚れちゃった。」

正直に白状。

「あっそっそう？嬉しい事言ってくれるね？」

雪は照れた様に頭を掻いた。

「で、肝心の歌の出来栄は？俺、何か間違えてた？」

「きつ聞き惚れて…覚えてない…ごめん！もう一回歌って？」

手のひらを合わせ、雪に謝る。

「まっマジ？おいおい…。解ったよ。嬉しかったからもう一回歌う。でも、次はちゃんと評価してくれよ？」

雪は苦笑いしながら深呼吸をする。

雪の歌は完璧だった。

完璧に歌詞も覚え、メロディーも自分のパートを完璧に歌いこなし

ていた。

「はあはあ…今度はどうだった？」

雪は完全燃焼でもしたかの様に疲れていた。

「うん！完璧！雪って凄い！！」

私は雪に拍手を送る。

「じゃあ、次は由だな？ほら、聞いててやるから歌え！」

雪は椅子に腰を降ろし、足を組む。

「うつうん。お願いします。」

雪：監督みたいだな。

私は呼吸を整えて…口を開く。

覚えたてのメロディー、歌にくいな。

でも、なんとか間違えずに最後まで歌いきった。

「どつどつかな？」

歌い終え、雪に感想を聞く。

「うーん…とりあえず合格。」

雪は渋い表情だ。なんか悪かったのかな？

「あの…とりあえず？どこか悪かった？」

「うーん、なんか…聴きづらい。声が固いのかな？」

雪は首を傾げる。

「声が…固い？」

意味が解らず雪に聞く。

「うん。多分緊張の所為だろうな。リラックスしてもう一回歌ってみな？」

雪はホラホラと手で合図を送ってきた。

「うつうん。……ふう。」

深く深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。

大丈夫。さっき間違えなかったし。今度も大丈夫。

……。

「どつどつ?」

歌い終え、私は雪に声を掛ける。

「…さつきよりは良い。でも…まだ固いかも。」

雪は腕まで組んで考え込んだ。

「まだ固い? 緊張してるのかな…。」

私も考え込む。

「そうだ。今度は二人で歌ってみようか?」

雪は立ち上がり、私の傍に立つ。

「一緒に?」

私は雪の方を向き、聞く。

「うん、二人で歌えば感じ解るかも! それに…緊張しないだろ?」

雪は笑いながら私の肩を抱く。

雪の温かさが全身に広がると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。

私は雪のリードに合わせ、声を乗せていった。

最初は上手く噛みあわない声も、最後には綺麗なハーモニーになった。

さらに、もう一回最初から歌い直すと…私と雪の声は綺麗に混じり合っていた。

「ほら。綺麗に歌えたら?」

雪は笑いながら私の顔を覗きこむ。

「うん! 有難う! 自信付いたよ!」

嬉しくて、ちゃんと顔を見てお礼が言いたくて、顔を雪の方へ向ける。

「うわぁ! ! ! ! !」

雪の顔が…どアップで視界に飛び込んでくる。

そうだった！！肩：抱かれてたんだっけ？

「おっお前：失礼な声出すね。一応芸能人の顔に向かって…。」
だって！好きな人のアップなんて！！

「ごっごめん！！」

雪の顔を見て謝罪の言葉を言う。

…雪の顔、こんな近くで見れるなんて…。

綺麗な眼…長い睫毛…艶々な唇…

思わず見惚れちゃう！

「あ…あの、由さん？あんまりジロジロ見ると…キスしちゃうよ？」

雪が笑いながら冗談を言う。

「雪がしたいなら…いいよ？」

雪に見惚れていた私は…つい本音を口に出す。

「…うつつわ！ごめん！冗談だよ！！」

自分の吐いた言葉の意味を思い出し、赤面しながら雪に謝った。

「俺…そっちの趣味は…無いんだけどね？」

「へっ？」

「なんか…へんな感じ。これで目覚めたら、責任取れよ？」

雪が意味不明な言葉を吐く。

すると、雪は私の肩に回した腕に力を込め、私を自分の胸に引きずり込む。

ビックリして慌てる私…。

「ゆっ雪？冗談だっ…うつむぐっ！」

焦って雪に伝える。

でも…ちよつと遅かった。

雪は…私を引き寄せ、自分の口を押し付けた。
口から伝わる雪の温もり。

温かい…胸の奥がキューンと熱くなる。

雪は私の項に手を添え、頭を逃がさない様に固定している…。逃げないのに。

雪はまるでアイスでも食べるかの様に、自分の唇で私を唇を味わう。どうしたらいいか…硬直したままの私。

雪は、自分の舌先を私の口内に差し入れた。

雪の温かく、湿った舌が私の口内を動き回る。

雪の舌…夢みたい。

愛情を込める様に、雪の舌を出迎えた。

優しく吸い上げたり、先っぽでコチヨコチヨ撥った。

次第に…雪の動きも激しさを増し、熱い吐息が私の頬に掛る。

私も…なんだか下腹部が熱くなってきた。

雪は突然口を離した。

「ゆっ雪？」

私は息を荒げたまま、雪に声を掛ける。

「ごっゴメン…ここまでするなんて…」

雪は私の肩に両手を置き、頭を下げる。

「うっうん…謝るな…よ。」

なんか…謝られたら惨めじゃん。

「冗談のつもりだったのに…途中から本気になっちゃってな…」

雪は苦笑い。

「おっ俺だって…冗談だから！忘れよう…な？」

私は笑って雪に笑顔を返す。

本当は、冗談と言われショックだった。

でも、雪は私を男だと思っている以上、冗談で済まさないと…。

「そっだよな？お互い歌が成功して、興奮してたし！冗談だ！冗談。」

「そつそつだよ！アドレナリン効果！」
でも…素敵な思いになっちゃった！！

気が付けば、空はうつすら暗くなってきた。

「そろそろ帰ろうぜ？鷹だつて迎えに来る時間だろ？」

雪は荷物を纏めながら話しかけてきた。

「うつうん。そうだね？」

しまった…。雪にいい訳考えてなかった。

もし、行き先とか聞かれたらどうしよう。

いい訳を必死に考えていたら、雪は帰り支度を済ませ、私の前に立った。

「じゃあ、今日はお疲れさん！歌は家でも練習しろよ？また明日テストだからな？」

雪は何も聞かずに帰ろうとしている。

「あっありがとう。雪…歌教えてくれて…。」
後ろを向いた雪に感謝を伝えた。

私の声に雪は一瞬立ち止まり、私の方へ帰ってきた。

雪は私の耳元に口を寄せて…エロチックな声で喋った。

「由…お前の所為で俺…痛い位勃っちゃった。」

雪は意地悪な顔をして、さつさと部屋を出て行った。

耳に残った雪の熱…それだけで下半身が熱くなる。

私は荷物を纏め、外でまっている鷹の元に走った。

「ごつごめん！お待たせ！」

小走りで近寄る。

「おう！お疲れさん！！」

私は家から持ってきたヘルメットを被り、後ろに跨った。

鷹は何時もの様に私の家の前まで送ってくれた。

後ろから降り、私は鷹に礼を言う。

「ありがとう！」

いつもああ…って、直ぐに鷹から返事が返ってくる。でも、鷹は何か考えてる様だった。

「由、今日何かあったか？」

「えっ？何で？」

「いや…お前待ってる時、先に雪が出てきたろ？その時、雪の様子が変だったから…。」

「へっ変？」

「なんか…真っ赤な顔して、頭抱えてた。思い当たる事…ある？」

思い当たる事は…あります。

でも、私の前では動揺してる様に見えなかったけど…。

「あの…雪と、チュウしちゃった。」

「はあ？？チュウって？」

「だから…冗談で…しちゃったの。でも、私には動揺してる風に見えなかったよ？」

雪だって、男としたと思ってるだろうし…。」

言って悲しくなるけどね。

「そっか…だからあんなに…。」

鷹は一人で納得してる。

「えっ？何が？私にも教えて…！」

鷹は…不敵な笑いで返してきた。

「それは…教えて欲しい？」

「んもう！焦らさないでよ…！」

「じゃあ…俺が間違っただけか確かめさせてくれたら良いよ？」

「確かめる？…うん、別にいいけど…。」

「じゃあ、失礼して…。」

チュツ。

「たっ鷹あー！」

「あははっ！雪ばかりズルイ！俺も仲間に入れてくれ！！」

雪とは違う鷹とのキス。短くて…唇が一瞬触れただけ。

「もう…で、何が解ったのか教えてよ！」

「ああ。あのな…多分だぞ？」

「うん。」

「雪は…お前を男だと思ってキスした。でも、女相手するみたいに興奮しちゃって…」

戸惑ったんだと思うぜ？」

「戸惑った？」

「ああ。多分今頃は、あつちの趣味があつたと思って苦悩してる筈だぜ？」

「そっそっか…。」

確か…勃ったって言うてたし…。

「あーあ、可哀そうな雪ちゃん。本当は女相手なのにね。」

鷹が悪そうな笑顔でニヤニヤ。

もう、鷹面白がってる場合じゃないのに！！

第三十一章（前書き）

投稿遅くなってすみません（――）

第三十一章

私は自宅に戻っても猛特訓。

雪が教えてくれた感じを思いだしながら。

……うん、多分大丈夫かな？すっかり覚えました！

明日、雪にもう一度聞いて貰おう。

気が付けば既に真夜中。

私は練習を切り上げ、疲れた身体を洗い、寝る準備を済ませ布団に入る。

今日の素敵な思い出を思い出しながら…

翌日、私は事務所に着くなり雪を捕まえ歌を聞いて貰った。

歌い終わると雪は満足そうに笑い、頭をグシャリと撫でてくれた。

その後、メンバー全員で歌を合わせ調整などを済ませた。

…そして踊り。

今回は難しい立ち位置も無く、手の振りだけだった。

思いのほか簡単に事は進み…数日後。

今日はいよいよ新曲の収録。

私は初めてのCD収録で緊張がMAX状態だった。

何時もの様に雪に緊張を解して貰おうと、スタジオの端に居る雪の傍に近づいた。

「…雪？いよいよ収録だね…。おっ俺…すげー緊張なんだけど……雪？」

雪の顔を覗きこめば…雪は真っ青な顔をしていた。

「ゆっ雪？大丈夫？顔色が悪いけど？」

心配になり、雪の手を握ると…冷たい。

極度の緊張の所為で、雪の手は氷の様に冷たかった。

「雪！大丈夫？」

思わず声が大きくなる。

「んっどうかしたか？」

私の声を聞いたのか、華麗な足音が近づいてくる。KOUJIIさんの足音。

「あっあの…雪が…」

振りかえり、KOUJIIさんに助けを求める。

「ああ？雪がどうかし……。あっ…。」

KOUJIIさんは一瞬で雪の体調を察した様子。

「…雪。おい…雪…！」

KOUJIIさんは少し声を荒げ、雪の肩を掴み揺った。

「…んああ！…あっあれ？KOUJIIさん…あっ！でっ出番ですか？」

緊張しすぎて状況が解って無いみたい。

「おい。しっかりしろ。お前はもうKJのメンバーなんだぞ！」

「はっはい…そっそうですよ…ね？おっ俺も…メンバー…」

呂律すら回らない雪。

「ふう。しょうがないな…まあ初めての収録だしな。

とりあえず一回、深呼吸でもして落ち付け。」

珍しく？KOUJIIさんが頬笑みながら、雪に優しく話しかける。

「はっはい…すー、はあー……。はあ。」

雪の顔色に少し赤みが戻ってくる。

「雪、誰だって緊張するんだ。落ち付け…それに失敗しても大丈夫

だ。俺達メンバーが居る。

お前は何も心配するな…ただ何時もの様に歌えばいいだけだ。」

KOUJIIさんは真つすぐに雪の目を見つめ、穏やかに話しかけた。雪は小さく頷き、KOUJIIさんの話を聞いていた。

「落ち着いたか？」

「はい。もう大丈夫です。迷惑かけてすみませんでした。」

喋り終わる頃には、いつもの元気な雪に戻っていた。

「まあ、最初は誰だつて緊張する。そのうち鼻糞穿りながら歌える。心配するな。」

「はう鼻糞？ですか…ぷつ。くつくくつ…」

思わず噴き出す雪。よかった…もう大丈夫だね？

「そつそんなに面白かった…か？」

噴き出す雪を見て…今度はKOUJIIさんの顔色が悪くなってきた。

「あつ………いついえ…」

KOUJIIさんの顔色を見て何かを察する雪。

やつやばい！今度はKOUJIIさん！！

案の定、KOUJIIさんは真つ赤な顔でスタジオを出て行ってしまった…面倒くさああ！

収録時間も迫っていて…KOUJIIさんの何時もの逃亡癖にメンバー全員の顔色が変わる。

いつ急いでKOUJIIさん探さなくちゃ！！

そして…やっぱり私が一番最初にKOUJIIさんを発見。

誰も居ないスタジオの片隅に蹲るKOUJIIさんを見つけた。

何で私が最初なんだろ…何時も同じような場所に隠れるのにな…

私はメンバーに見つかった連絡を入れると、KOUJIIさんの傍に近寄った。

「KOUJIさん？またですか？」

蹲ってるKOUJIさんに声を掛ける。

「…五月蠅い。沢山の人間の前で笑われたんだ…。」

つと、返事が返ってきた。

「あつそうですか。残念。」

「…何がだ。」

「折角見直せそうだったのにな…今日のKOUJIさん。

雪を励ましてたKOUJIさん、カッコ良かったのになあ！。」

KOUJIさんを奮い立たせるのにはプライドを擲るか、自信を取り戻させるのが一番だ。

「…本当…か？」

ほら、反応があつた。

「はい、本当です。でも…すぐ逃亡する癖は…ちょっとねえ？」

KOUJIさんは絶対に怒ってくる筈！

でも…答えは意外だった。

「ホントだな？本当にカッコ良かったんだな？」

あ…れえ？怒ると思つたのに。

「えっ？ええ。後輩を優しく励ます人って素敵だと思いますけど？」

「…そっそうか…お前がそう思ってくれるなら…」

そう言つと、KOUJIさんは急に立ち上がり、私の方に振り返つた。

「解つた。お前の言葉、嬉しかったから頑張る。」

そこには何時ものツンツンしたKOUJIさんの姿は無く…ちょっとドキドキした。

表情は何時もの物だけ…纏ってる空気が柔かった。

KOUJIさんはそのまま部屋を出て行き、私も後を追う様に付いて行つた。

KOUJIさんは真つすぐスタジオに戻り、何事も無かったかの如くメンバーに合流した。

「おっおい、今日は早いな？しかしお前…凄いな。あんな我儘猛獣…。」

つと、尊敬の眼差しで私を見つめるJEYさん。

「いえ、なんかコツを掴んだというか…鍵を見つけたというか…」

「ふーん、まあ何でもいいけどさ！これからはKOUJI担当、お前な！」

「ええ…マジですか…」

「おいしい、そんな嫌そうな顔するなよ…頼む！」

「はあ…解りました。」

「良かった…これで収録とか止まる事無くなるわ…助かった。」

心底嬉しそうなJEYさん。
そんなに困ってたのかな？

KOUJIさんも無事？に合流した所で、いよいよ新曲の収録が始まった。

全員マイクの前に立ち、ヘッドホンから流れるメロディーに声を載せて行く。

何回か撮り直しをした程度で、無事に収録は終了した。

「いやあ、今日は由のお手柄だったな…！」

嬉しそうに頷き合うJEYさんとKAJIさん。

「そっそんな…俺は何もしてません。」

「そんな事無いよなあ！俺、KOUJIが居なくなつた瞬間、今日中の収録は諦めてたんだ！」

「そうそう！また二日掛るのかって覚悟してたし…！」

そっそんなに苦労してたんですか…

新曲の収録が終わった事もあり、私達は打ち上げ…というか、スタッフ達と飲みに行く事になった。

場所は居酒屋。

でも、一応芸能人という事もあり、貸し切りで行われた。

私はすかさず雪の隣を確保して参加。

雪との楽しいお喋りを楽しんでいた。

「今日はカツコ悪い所見られたな…それに引き換え、お前…よく緊張しなかったな！」

雪は私を褒めてくれた。

でも…実は貴方とKOUJIさんがパニックに陥っていたお陰で私は他の事を考えなくて良かったの！

…なんて本当の事は言えないけどね。

「そっそう？俺も一応成長したのかな？」

「おっ！言うねえー！」

私は、雪との楽しい時間を過ごした。

この前、歌を二人で練習した時の事…

あの後、雪が離れて行くんじゃないか不安だったけど、今日の様子からして大丈夫そう！

良かったあ！

雪に嫌われたら…JKでなんてやっていけない！

雪は、私が芸能人である為に必要不可欠！

雪が居なきや…芸能人なんて出来ない！男装なんて意味が無い！

それから約二時間が過ぎた。

適当に切り上げるスタッフさんや、既に潰れている人も居る中、会はお開きになった。

私は家に帰ろうと荷物を持ち、店から出ようとした時、急に入口が開いた。

そしてそこには…見慣れた顔が居た。

「あっあれ？鷹？どうしたの？」

鷹は鼻の先を真つ赤にして店に入ってきた。

「どうしたのって…雪に電話したら皆で飲んでるっていうから。」

「ああ、そうだね。鷹にも声掛けねば…」

「そうだよー！冷たいな由は…」

少し口を膨らませ、鷹が膨れていた。

「ごっごめん。」

「はあ、しかも既にお開きムードだし…。」

鷹は帰り支度を始めたスタッフ達に視線を向ける。

「ごっごめんってば！…そっそうだ！二次会！二次会に行こう！」

「二次会？俺と二人で？」

「えっ？もしかして…俺とじゃ嫌だった？」

「やっぱり…女とじゃツマラナイよね…。」

「いやー！二人で飲み！いいじゃん！行こう！」

鷹は嬉しそうに笑い、私の腕を掴んで店から出て行った。

今日は遅くなる予定だったからヘルメットを持ってきていなかった。だから鷹と二人で近くの別の居酒屋に入って行った。

そこは少し暗いフィンキで、居酒屋だけど、プライベートが確保されてるような…

秘密の隠れ場所って感じだった。

席は完全に個別で、周りは高い壁で仕切られている。

なんとなく大人な感じで…居心地もいいな。

「さて！飲みますか！」

鷹は楽しそうにメニューを見ていた。

「のっ飲むのはいいけど…俺、さっきまでの酒が残ってて…」
既にちよつと酔っぱらってます私。

「えー！つままないじゃん一人で飲んでてもお。」

「うっ…じゃあ、少しだけ…弱めの酒って何？」

「弱め？…じゃあ、コレなんてどう？」

「これ弱いのか？んじゃあコレ頼むね。」

「了解！じゃあ俺は…決まり！すみません！」

鷹は店員を呼び、注文を済ませる。

飲み物が届くまでの間、鷹と何気ない会話をしていた。

そして…鷹が頼んだ飲み物が届くと、二人で乾杯をし、一気に喉に流し込んだ。

そして直ぐにお代りを注文。

鷹が頼んでくれた酒は、甘く飲みやすかった。

ジュースの様な味で、私は凄く気に入った。

鷹って何でも知ってるんだな…ちよつと尊敬。

「なあ、由。実は今日な…お前に話があったんだ。」

「へっ？話？」

「あんな…実は…」

鷹は溜めながら、勿体つけて話す。

「じっ実は？」

なっ何が飛び出すんだ？

「実は…俺のデビューが決まりました！！」

でっデビュー？鷹がデビューするの？

「デビューって、鷹のユニットのデビューが決まったの？」

「いや…最初はグループでの筈だったんだけどな。なんと！俺ピンでのデビューだ！」

「うわ！本当？凄いじゃん！！」

「へえー！鷹がピンでデビューかあ！凄いなあ！」

「最初は俺も驚いたけど、これってチャンスじゃん？俺って運が強くね？」

「うん！でも…なんで急に一人でって事に？」

「それが不思議なんだけどなあ…マネージャーが言うには…」

「うん、マネージャーが？」

「なんか…大物芸能人がたまたま事務所に来た時に俺を見かけたらしくて…」

「誰だかは教えて貰えなかったけどな。なんかソイツの後押しがあったらしいんだ。」

「大物って…誰なんだろう。俺…ちゃんと面向かって礼が言いたいよ…」

「ふーん、大物芸能人かあ…そんな事もあるんだね！ラッキーじゃん！鷹！」

「まあな！とりあえずこのチャンスを物にするぜ！」

鷹は意気込み、新しく届いたばかりの酒を一気に飲み干した。また鷹はお代りを注文し、来た途端にまた一気に飲み干した。

鷹は酒を急に飲んだ所為か、顔を真っ赤にしながら熱く語り、二時間ほど経った時には…

テーブルに顔を載せ、グーグーと寝てしまった。

鷹：余程嬉しかったんだな。

私も嬉しいよ！鷹がデビュー出来る事。

本当に良かったね！おめでとう！

私はタクシーを呼び、店員の助けを借り車に放り込み、鷹の自宅へ向かった。

でも、家の前に着いても、鷹は起きる気配が無かった。

「おーい！鷹あー！家着いたぞ！起きろ！」

思いつき鷹の身体を揺さぶる。

「うーん、もうちよつと…」

寝ぼけてるし…こりやだめだ。

私はタクシー運転手の手を借り、鷹を玄関前に座らせた。

ポケットを漁り、鍵を探す。

見つけた鍵で玄関を開け、鷹を引きずり中に入った。

久しぶりの鷹の家…何時も鷹が付けてる香水の香りがする。

私は重い鷹を何とかベツトまで運び、一息つく。

軽く首元だけシャツをあけ、身体を楽にしてあげる。

さて、私も帰ろうか…と思った時、鷹が苦しそうに呻き始めた。

「うーっ 苦しいい… みつ水う…」

「えっ？鷹、どつか苦しいの？水飲みたいの？」

「よつ由…みつ水…水くれ…」

「わっわかった！水だね？ちよつと待つてて！」

多分飲み過ぎで気持ち悪いんだな…

早く水飲ませてあげよう。

私は冷蔵庫に入っていたミネラルウォーターを勝手に拝借し、鷹に手渡す。

鷹は真つ青な顔で受け取ると、急いでガブガブ飲みだした。

一気に全部飲み干すと、今度は急に口を手で押さえ出した。

「えっ！まさか…鷹？気持ち悪いの？」

私の問いに、鷹は頭を上下に振り答えた。

「ちよつちよつと待つて！急いでトイレに…」

鷹の腕を掴み立たせた瞬間……

「ぎゃあーーーー!!」

私は鷹の嘔吐物を頭からかぶってしまった……最悪。

「ぐっごっごめ……うええええ……」

終わらない鷹の……。

仕方なく、私は風呂場に鷹を連れて行き、シャワーの栓を捻った……。

第三十一章（後書き）

更新が遅くなってしまいました。

ちよつと忙しくて……って、いい訳ですけど。

でも、見捨てずに読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。
す。

これからも私の秘密の話をしよう、読んで下さい。――

第三十二章

「ほら！しっかりして鷹！！」

私は鷹の頭から温めのお湯を掛ける。

ついでに私も服を着たまま頭から湯をかける。

「うー…ごめん。俺…女の子になんて事…」

少し正気に戻った鷹は反省しているみたい。

「もういいから…ほら鷹、腕上げて？」

私は嘔吐物塗れの鷹を脱がそうと、衣服に手を掛ける。

「うーん…俺…臭い…」

鷹は自分の匂いを嗅いで嫌そうな顔をし、素直に腕を上げた。

私は一気に鷹の上半身を裸にし、石鹸を使いながら綺麗にしてあげた。

「…はい、もう大丈夫。後は自分でやってね！」

流石に下半身は…脱がせられない。

後は自分で処理する様に促した。

「あう…ありがとう…ごめんな…」

「いいから。私も洗いたいから早くしてね？」

「ああ…そっか。お前もゲロ塗れ…」

鷹は私の姿を見て…一瞬固まる。

ん？私…何か変かな？

「なっ…なによ！そんな見て…何か変？」

「いついや…ちよつと刺激が…」

へっ？刺激……

「あわあ！ごつごめー！！」

慌てて胸を隠す。

だって、濡れてスケスケに！！

私は急いで浴室から飛び出し、取り合えず鷹が出てくるのを待った。鷹は自分の身体を洗い、少しでも風呂の扉を開け、手を差し出した。「なっ何よ…」

ヒラヒラと何かを催促する鷹の手のひら…あっバスタオル！私は側にあつたタオルを扉の隙間から鷹に手渡した。

鷹はざつと身体を拭き、目の前に現れた。

臭い私とは対照的に、鷹は既に良い匂いがする。

「大丈夫？気分は？」

心配して鷹に尋ねる。

「ああ…大分スッキリした。ありがとう。ほら次…どうぞ？」

鷹は壁際に寄り、私に道を譲る。

「うん、お借りします。あっそうだ。何か着る物貸して？」

ベチヨベチヨに汚れた服じゃ帰れない！

何か服を貸して貰いたい。

「あっああ。用意しておく。」

鷹は何故か天井を見たまま答えた…そっか、私…スケスケだった。…気を使ってくれたんだね？

それにしても…上半身裸で腰にタオルを巻いただけの鷹って、少しドキドキする。

だって、男の人の裸なんて、お兄ちゃんかお父さんしか…

あっ後、KOUJIさんも…

何か、男の人でも裸って皆違っんだな…

お父さんやお兄ちゃんは温かい感じ。

KOUJIさんは…スケベな感じ。

鷹は…包まれる感じがする。

広い胸板、綺麗な筋肉。私を全てから守ってくれる感じがする。何か…鷹に抱きしめて貰いたい感じ。ぎゅって…包んで欲しい。

…いかにいかに。私が好きなのは雪でしょ？これは鷹ですよ？
何か…男の人が女性の裸にムラムラする気持ち、分かります。

コレって…鷹に欲情してるって事でしょ？

「……あの、由さん？何してるの？」

鷹の声が頭の上から聞こえてくる。

「…へっ？何って、お風呂入ろうと…何で？」

「何でって…お前こそ何で俺の事…そんなガン見なの？」

ガン見って、私そんなに鷹の事…見てた？

「えっ、そんな見ちゃってた？ごめん…。」

「いや、別にいいけど。」

少し照れた様な鷹の態度。

なーんか…少し気まずいフインキが流れる。

はっ早く風呂に入っちゃえ！！

私はその場の空気に耐えられなくて、急いで鷹の横を通り過ぎた。

扉をしつかり締めて、全身裸になる。

鷹のシャンプーを借りて洗髪。

……鷹の匂い。

石鹸を泡立て、身体に塗る。泡泡！

シャワーで綺麗に流せば、気分もサッパリした。

私は風呂の扉を少しだけ開け、鷹が近くに居ないのを確認してタオルを探す。

扉の近くに、鷹が用意してくれたタオルと着替えを見つけると、それに腕を通した。

少し大きめの鷹のＴシャツにダボダボのスウェット。

服から香る鷹の香り…鷹に抱かれてるみたい。

なっなんかエッチ！！

私は着替えを済ませ、ソファーに寝転がる鷹の傍に近寄った。
たっ鷹は…軽くシャツを掛けて、ズボンしか履いて無いし！エロい…

「あっありがとう。スッキリした。」

私は鷹に礼を言う。

「いや、俺こそごめんな…お前の事、汚しちゃって…」

「いいよ！この前は私が鷹に迷惑掛けたんだし。今日はお返しだよ！」

「そういえば…そんな事もあったな。」

「うん。だから気にしないで？」

「ああ。ありがとう。」

鷹は笑ってくれた。

そういえば部屋が綺麗に掃除されてる。自分で後始末したんだ。
それに、部屋中に良い香りもする。さっきの嫌な匂いが嘘みたい…
これって…いつも鷹が着けてる香水の香り？

「鷹、良い匂いがする。」

「ああ、さっきのままじゃ…また吐きそうだったしな。」

「あは！確かに。でも…今は凄く良い香りがする。」

「ふーん、お前この匂い好きなの？」

「うん、何か…鷹に包まれてるみたい…」

やばっ！思わず本音が！

「つつつつつ…お前、冗談キツイな…」

冗談キツイって…そんなに嫌なのかな。正直ショックだな。

「あっ…あはは！冗談だよー！そんな怒らないですよー！！」

そうだよな、私みたいなブス、メイクしないと外にも出れない様な不細工女…

鷹は優しく接してくれるけど本音は…

私みたいな元引き籠り女…勘弁だよね？

「えっ？そうじゃなくて、何か…勘違いしてない？お前。」
「かつ勘違い…そこまで言わなくても良く無い？

「なっ何が！！だからさっきのは面白いかなって！！本気に取らないでよ。」

折角気を許せる友達が出来たと思ってたのにな…ショック。

私…冗談も言わせてもらえない程嫌われてる？

今までの鷹の態度は全部…お兄ちゃんへの罪滅ぼしなんだね。

「だから、やっぱり何か勘違いしてるな由…俺は…」

鷹が喋ってる。俺はの続き…

俺はお前なんかにかかれても迷惑だっって言いたいんでしょ？

もう、最後のフレーズまで聞いたら立ち直れない。

私は鷹が喋り終わる前に席を立った。

「わっ分かったから！もう止めて！！…着替えは洗って返すから。」

私は汚れた服を風呂場に取りに行き、帰ろうと鞆を持った。

「なっ何やってんだよ！いきなり怒りだして…俺の話、最後まで聞けよ！！」

鷹が怒ってる…ちょっと怖い。

早く帰りたい！早く部屋に籠りたい！

早く人目が無い場所に行きたい！！

久々の感情。

忘れてた感情。

引き籠っていた、あの時の感情。

誰の視界にも入りたくない。

自分の顔を見られたくない。

怖い…人が怖い。

私は逃げるように玄関に向かった。

「おっおい！由！ちよつと待てよ！！」

慌てて鷹が私を追いかけてくる。

私は逃げたくて急いで靴を履く。

玄関のノブに指先が触れた瞬間：私の手を鷹の手が包んだ。

「やつ！！離して！！」

ガチャガチャとノブを回す私。

「おい、落ちつけよ！」

鷹の言葉が耳に入らない。それほど焦っていた私。

「嫌、帰りたい！！」

「何で！！」

「だって、私不細工だもん！鷹の目に触れたくない！鷹の視界に入りたくない！」

「何で…そうなるんだ？」

「だって！！鷹は私に欲情されたら気持ち悪いんでしょ？だから帰る！！」

焦ってさつき考えていた気持ちを正直にぶちまける。

「よっ欲情？お前…欲情してくれたのか？俺に…」

「やっやばい。はつきり聞かれた。もう…お終いだ。」

「そっそっよ！鷹の香り嗅いで、鷹に抱かれてるみたいだった！

鷹の裸見て、胸の中に入りたいてって思った！鷹に抱かれたいって思った！！

「……気持ち悪い事言って…ごめん。いつ今帰るから…」
話していて涙が溢れる。

鷹は私の言葉を聞いて茫然としてる。

「やっぱり…気持ち悪かったんだね。」

「じゃっじゃあ…優しくしてくれてありがとう。もう目の前に現れ

ないから…」

最後の言葉を振り絞る。

そして、頭の上から声が聞こえた。

「ほら、やっぱり何か勘違いしてたじゃん。」

「…ごめん、帰るから…」

「俺、気持ち悪いなんて一言も言って無いのに。」

「…へっ？」

「俺、お前の事…可愛いって思うよ？」

「もう、優しくしてくれなくてもいいよ？自分が不細工なのは自分が一番知ってるから。」

「何そうなるんだよ！俺は不細工だなんて思って無いし！むしろ、可愛いと思ってる！！」

「嘘言わないで…私、この顔が原因で酷い人生だったし…今回だつて。」

「だから！俺は！」

「だって！冗談キツイって…言っただじゃない！！」

「…だから、本当にきつかったよ。あんなエッチな言葉。」

「…ごめん。」

「そんな事言われたら、流石の俺も勃つ。」

「…はっ？」

「だから！冗談でも俺的には下半身に來たというか…」

「かつ下半身？」

「ほれっ。」

鷹はそう言つて、私を後ろから抱きしめてきた。

「なっなに？」

「だから…ほれっ。」

背中に触れる鷹の熱く固くなった物。

やつやだ！鷹：勃ってる。

「お前に触れるだけで…こうなんだぜ？気持ち悪い訳ないじゃん。」
「なっ何で…」

「何でって…なあ、お前…俺の事好きなの？」

「すっ好きって…」

「だって、俺に抱かれないんだろ？」

「まっまあ。」

「なら好きって事じゃないの？」

「……解んない。」

「はっはあ？」

「だって！鷹は優しい友達で…私、好きな人居るし。」

「好きな人…居るのか？」

「…うん。」

「それでも俺に欲情しちゃったの？」

「…すみません。」

「なっなんだあ？意味わかんねえ。」

「わっ私だって解んないよ！今日初めて男の人に欲情しちゃったんだもん。」

「…ふーん、初めてねえ。」

「だから、私も鷹が好きで欲情したのか、ただ身体目当てなのか…解んないんだもん！」

「…へえ。でも俺に抱かれないんだ。」

「もう、勘弁してよ。」

鷹との意味不明な会話が続く。

「まあ、いいけどさ！俺は嬉しかったし。」

「うっ嬉しかったの？」

「そりゃ…お前の事は気に入ってるし。そんな女からあんなフレイズ飛びだしたらなあ。」

「気に入って…。あつ有難う。」

「嬉しい？」

「そりやまあ、嬉しい…です。」

「そっか！じゃあ誤解は解けたな？」

「はっはい。私の勘違いでした。」

「はい。じゃあこれでお終いな？」

「うん、ごめんね？」

「じゃあ、お互いスッキリした所で…してみる？」

んっ？今…してみるって言った？

「なっ何を？」

「何って…コレだけど？」

そう言つて、鷹はまた下半身を押し付けてきた。

「なっ何で？」

「何でって、お前は俺に抱かれない。俺もお前を抱きたい。」

「だっ抱きたいの？」

「うん。駄目？」

「駄目って…」

「俺、彼女居ないし、お前だつて今は彼氏居ないだろ？」

「何で居ないって解るの？」

「そりや、好きな人がいるって事は付き合つまで発展して無いって事だろ？」

「まっまあ…」

「なら問題ないじゃん！お前が嫌なら止めるけど…」

鷹は私の首筋に熱い息を掛ける。

あつ頭がクラクラするうー！

「どうする？してみる？もしかしたら俺の事…好きになるかもよ？」

「そっそんな簡単に…」

「簡単じゃない。俺だつて精一杯。お前に嫌われないかドキドキし

てる。」

「たっ鷹の事、嫌いになんかなる訳ないじゃん。」

「…本当？」

「うん。」

「良かった…じゃあ、好きになったら教えて？」

「好きにつて…むぐっ！」

急に鷹に口を塞がれる。

鷹の柔かい唇が私の言葉を奪う。

温かい…そして気持ち良い。

鷹は私を抱き上げ、自分のベットに連れて行った。

私も対抗せずに…むしろ自分からキスを求めた。

鷹にしがみ付き、鷹の熱を感じる。

鷹は私を優しく脱がしてくれて…自分も裸になった。

目の前に現れる鷹の逞しい身体…すごくカッコいい。

思わず指で鷹の胸をなぞる。

鷹は一瞬身体を跳ねさせた。

私は鷹の裸に目を奪われ…心臓の鼓動を速くした。

鷹は私の身体を優しく愛撫してくれた。

触れる指が優しさを醸し出す。

私…この人に抱かれるんだ…幸せだ。

鷹は私を快楽の世界に連れて行った。

もう何度も意識が飛んで…全身に心地よい疲れが訪れる。

一回終わっても、また鷹を求めてしまう。

鷹も私の気持ちが高ぶるのが解って…自信もまた首を擡げる。

私は知ってる限りの知識で鷹に尽し、鷹も全身で私を愛してくれた。

朝まで抱きあい、二人で何回も到達した。

エッチって…こんなに気持ち良いんだ。

KOUJIさんとは無理やり感があったから、肉体的快樂はあっても心が満たされなかった。

でも、鷹は違った。

鷹との行為は気持ちが入ってた。

正直、鷹の事が好きか…まだ解んない。

でも、鷹と離れたくなかった。

鷹と肌が触れていないと凄く寂しかった。

…身体から始まる恋って、あるのかな？

第三十二章（後書き）

今：冬ですよ？

由子ちゃんは今春まつ盛りのご様子です。

そのうち三十三章の番外編を書きたいと思います。

もし18歳以上の方が居て、ちょっと大人小説に興味がある方が居ましたら、ムーンライトの方も覗いて見て下さい！>（――）<

第三十三章

あの日から…鷹に抱かれたあの日から半年が経った。
鷹とは友人以上恋人未満…いわゆるエッチ友達状態。
でも、なぜか二人とも恋人は作らず…そんな感じ。
はつきりと告白もされず、でも他の異性とは関係を持たない…暗黙の了解だった。

そんな宙ぶらりんな関係も半年が過ぎれば…当たり前になっていた。

「鷹！連ドラ主演オメデト　！！」
あちこちでグラスが鳴る音が聞こえる。

今日は鷹の主演決定飲み会（まあ、何時もの飲み会ですケド…）

デビューして半年の鷹は、驚異の出世街道を突っ走り…
今やゴールデンタイムドラマを主演を射止めるまでになった。
それは…すべて、この女性のお陰だった。

鷹の隣を陣取り、鷹の腕に纏わりつきながら酒を飲む女…

そう、鷹のデビューに絡んできた大物芸能人…佐藤佳苗さとうかなえだった。

年は35歳。タレント業だけでなく、ドラマ、CDなど…

子役デビュー系だけど、親が芸能界のドンと呼ばれるほどの人物。

親の七光りが半端じゃ無い女だ。

彼女に気に入られたタレントは仕事が舞い込み、

彼女に嫌われれば…芸能界では生きていけない。

まあ…佳苗が大物というより、佳苗の親が大物で、佳苗の頼みは何でも聞く親ばかなのだ。

つんで佳苗が事務所に来た際、鷹は佳苗のお眼鏡にとまり…今や鷹はトップスターになった。

鷹を支えた女だとも思っているんだろう。

佳苗は、さも当然の様に鷹に纏わりついている。

なーんかムカつくけど…佳苗には誰も逆らえない。

逆らったら…明日から仕事が無くなるから。

早苗は鷹に足を絡め…必死にアピール。

そういえば鷹がこの前言ってた…佳苗がしつこく誘ってくるって。

うーん、私は彼女じゃないけど…ちょっと複雑な感じ。

目の前で鷹にイチヤイチヤされるのは…何とも腹が経つ。

あつ、鷹の事だけじゃなくて、私の半年間も説明しなくちゃ！

私達KJの出した新曲は大ヒット！

写真集の売れ行きも良く、今だにトップ芸能人の地位に…お陰さまで。

それに、最近は私と雪にも熱狂的なファンが付き始めて！

なかなかの芸能人ライフを送っております。

最近はKOUJIさんの猛アタックも影をひそめ…毎日過ごしやすい！

優しい雪の事は…いまだに忘れられないけど…正直今は鷹の方が気になる感じです。

最近、私たちのマネージャーが変わり、新しく加藤徹さんかとうとおるという男性になった。

加藤さんは中々のイケメンで、私なんかより芸能人に相応しいと思う程、色香のある人。

テキパキとスケジュールを組み、本当に有能な人。

前マネージャーには悪いけど…徹さんがマネージャーで嬉しい。

「由さん、明日は10時から撮影なんで…えっとー、8時には迎えに行きますんで!」

徹さんは手帳を見ながらメンバーに明日の確認。

「はい、解りました。明日は徹さんが迎えに来てくれるの?」

「ええ、由が一番の遅刻魔! 私が迎えに行きます。」

そう、私はKJで一番の遅刻魔! 一か月前に一人暮らしを始めてから余計に…。

「うう…すみません。8時に出れる用意します…」

「ええ、本当、宜しく願いますよ?」

有能なマネージャー、顔もカッコいい、仕事も出来る。

でも…今までの人生の中で、怒られたら怖いランキング一位! 本当に怖い!

私は毎日、マネージャーに怒られない様に過ごす様にしてる。

「そろそろ帰らないと…また明日遅刻しますよ?」

マネージャーが時計を指差しながら帰る様に私を促す。

「はい、じゃあ皆に挨拶してきますね?」

私はメンバーをはじめ、その場に居る人達に挨拶に回った。

「J E Yさん、K A J Iさん、お疲れ様です。お先に失礼します。」

二人で固まって飲んでる二人。

「ああ、じゃあ明日な?」

「おお、気を付けてな?」

ヒラヒラと手でサヨナラの挨拶をくれる。

今日は気になる相手は居なかったようで、つまらなそうに二人で話をしていた。

「はい、失礼します。」

私は軽く会釈してその場を去る。

「KOUJIさん、御先に失礼します。」

少し離れた場所で女性に囲まれ酒を飲むKOUJIさん。

「ああ、帰るのか…送って行くぞ？」

今にも立ち上がりそうなKOUJIさん。

「いえ、大丈夫です。楽しんで下さいね？」

私は気を利かせたつもりだったけど…KOUJIさんはあからさまに不機嫌な顔をした。

「いいよ、送って行く。」

その場を立つKOUJIさん。

「いえ、私が送って行きますので。私もこれで失礼します。」

直ぐにマネージャーが割って入る。

「……そう。」

KOUJIさんは物凄く不機嫌な顔で再び席に着いた…。

あまりにKOUJIさんが不機嫌なもので、周りに居た女性の困惑が気の毒だった。

次に雪。

雪はスタッフさん達とギャーギャー楽しんでいた。

「雪？マネージャー命令で帰ります。」

本当は雪と喋っていたけれど…

雪は私と男としか思ってた無いか…少し切ないんだよね。

でも、鷹のお陰だろうけど、雪とは良い友達付き合いが出来てる。

キスしちゃってお互い意識した時期もあったけど、今はもう昔の出来事の様。

鷹に感謝。

「おお！また明日な？」

「うん、じゃあ明日な!」
こんな感じ。

最後に鷹に話しかける。

でも…鷹一人占めの佳苗の目線は少し怖い物があつた。
でも、挨拶位はしても可笑しくないだろう。

「鷹、俺…先帰るな?今日は本当におめでとうな?」

勿論、男口調で鷹に話しかけた。

「ああ、今日は来てくれてありがとうな?」

「うん、じゃあ…またな?」

「ああ…いや、ちよつと待って?」

鷹は纏わり付いている早苗を優しく退け、立ち上がった。

「あん!鷹ってば…」

気持ち悪いほどの言葉使いの早苗。

「すみません、ちよつとコイツ外まで送ってくるんで…」

鷹は早苗に説明する。

「ええー!男の子送って行くより早苗と居てよー!」

なつ何言つてんだ?この女…

「すぐ戻りますから。こいつ…俺の親友なんで!」

「ふうーん…早く戻って来てよ?」

「はい。ちよつとすみません。」

鷹は困惑する私の腕を掴み、店の外に出て行つた。

「マネージャーさんは車回してきて下さい。こいつ身体冷えてるみたいなんで。」

「えっ?そうですか?駐車場まで近いんですけど。」

「でも、タレントに風邪ひかせるの…まずくないっすか?」

「はあ…では少し待って下さいね?」

鷹は適当な良い訳でマネージャーを追っ払った。

「鷹？私寒くないよ？」

「いいの！こうでも言わないとお前と二人つきりになれないだろ？」
たっ鷹…。嬉しすぎます。

「そっそうだけど…。」

ばれたとき怖いんですけど…。

「お前は、俺と二人になりたくなかったの？」

「うっ、あの…。まあ、そうですね。」

「なら良いじゃん！」

鷹は周りに人が居ない事を確認すると…私を急に抱きしめた。

「たっ鷹？」

「だって…早苗さんがしつこくて…今日お前と喋れなかった。」

「そりやそうだけど。」

「由子切れです。只今充電中。」

そう言うて鷹は外なのにもかかわらず、激しく私の唇を吸い始めた。

「んっ たっ鷹あ…。んん！」

とろけそうな鷹の濃厚キッス！腰砕け…。

「ぷはあー！充電終了！ごちそうさまでした！」

ペロツと舌で口を舐める鷹。なんてエロい！

「もう！誰かに見られたらどうするの？」

「大丈夫！周り確認したもん！」

怒るにも怒れない。

だって…私も鷹にチュウして欲しかったんだもん。

その時、車のライトが近づいてきた。

「由さん、お待たせしました。」

マネージャーの車…間一髪！

「ほら、危ないじゃん！」

私は鷹の肩を軽く叩く。

「あっあれ？まあギリギリセーフっていう事で！」

マネージャーに聞こえない位のヒソヒソ話。

「由さん？行きますよ？」

マネージャーが急かす。

「あっはい、今行きます。じゃあ鷹、またね？」

「ああ、気を付けてな？」

私は鷹に手を振り、車に乗り込んだ。

「由さん、自宅が良いですね？」

「はい、お願いします。」

私は助手席に座り、大人しく自宅に向かう。

「マネージャーは戻るんですか？飲み会。」

流石に自分のタレント残して帰らないよね？

「いいえ？戻りませんか？」

「えっ？いいんですか？」

「はい、遅刻が心配なのは由さんだけなんで。」
ズバツと辛口。

「はあ、ご迷惑掛けます。」

「いいえ、もう慣れました。」

「ぐっすみません。」

マネージャーとの何気ない会話。

怒ると最強に怖い徹マネージャー！。

でも、マネージャーと話してると落ち着く。

なんでだろう…。ただ話すだけで気持ちにゆとりが出来る。

私にとってマネージャー以上の存在。

別に恋しいとか付き合いたいかじゃ無い。

ただ…この人とずっと話していたい。

鷹が愛をくれる存在だとすれば、マネージャーは安らぎをくれる存在。

不思議な感情を寄せる相手なのは確かだった。

だから今日もマネージャーの命令に素直に従って帰ったの。

「じゃあ、明日お迎えに来ますんで。起きられますか？」

自宅前に私を降ろし、マネージャーが話しかけてきた。

「はい、大丈夫です！おやすみなさい。」

「はい、お疲れさまでした。」

私は挨拶を済ませ、オートロックの自宅に入って行く。

そして、マネージャーは私が家に入るのを確認してから車を発進させる。

本当に心配症な人だな。

第三十四章

マナージャーと別れ、私は自宅に戻った。

疲れた身体をソファーに投げ出し、今日の出来事を振り返る。

鷹：大丈夫だったかな？佳苗の誘い…断れたかな？

でも鷹だって男。佳苗だって親の七光りはあっても芸能人、美人だし…

ひよっとしたら今頃…嫌だな。

私と鷹は正式に付き合っただけではなかった。ただ身体の関係。

お互いに好き同士ではあるのだから告白はしてない。

もし鷹が早苗を受け入れても、私は文句が言えない。

じゃあ告白して鷹を自分の物だけにする？今更？

身体の関係が半年続くと…今更告白なんて出来ない。

だって…お互いその気なら、もうとっくに告白してるだろうし。

それが無いって事は…鷹は身体だけの関係を望んでる？

どうしよう…このままだと鷹は…

私は頭を振り、必死にその先を考えない様にする。

恋人でも無い私に鷹を縛る事は出来ない。

…私、かなり鷹の事好きになつてたんだな。

鷹の言った通りになっちゃった。

「どうする？してみる？もしかしたら俺の事…好きになるかもよ？」

その通りだよ鷹。

私は鷹の事…好きになったよ。

鷹の事、独占したい。

鷹の身体：誰にも触らせたくない。

もう、雪を思う気持ち以上に鷹の事…大好き。

優しい鷹、傍にいてくれた鷹。

私の秘密を知っても見放さないで受け入れてくれた鷹…こんな人、他に居る？

KOUJIさんは秘密を知って身体を要求してきた。

雪は…バラす間もなく否定した。

鷹は無償で助けてくれた…。

もう！一人で悩んでも仕方ない！

私はふっ切る様に服を脱ぎ散らかし、バタバタ足音を立て風呂に入った。

熱めのシャワーを浴び、何時もより多めにシャンプーを取り、頭に塗る。

思いつきり泡立てれば、泡はボトボト足元に落ちる。

もう顔面泡だらけで、息も苦しい。

でも…なんだか悩みが落ちて行くようでスッキリする。

その泡を一気に流し、リンス、ボディークリーム…身体を綺麗にする。身体を擦りながら考える。

「最近…筋肉増えたな…男の子みたい。」

連日の歌の収録。最近はハードな動きが多い。

毎日男として振る舞い、男の動きをする。そりゃ筋肉だって増えるよね。

鷹：こんな男みたいな身体抱いて、満足なのかな？

急に不安が蘇って来ちゃった…泣けてくるよ。

私は浴室を出て乱暴にバスタオルで身体を拭く。下着を付け、シャツを一枚だけ着る。

冷蔵庫に入っているビールを取り出し、一気に流し込む。
もう早く寝てしまえ!!!

ビールを三本程飲んで、ほろ酔いになった頃、玄関のチャイムが鳴った。

時間は深夜二時。誰?こんな時間に…

インターホンに映った顔を確認する。

そこには…愛おしい鷹の顔。

「たっ鷹?どうしたの?」

「いや…お前に会いたくて来た。」

「あ…そう。待って今開けるから…」

私はロックを解除し、鷹を家に招き入れる。

「おう!もしかして寝てた?」

「ううん?まだ寝てない。」

「もしかして、まだ飲んでる?」

「何か…色々考えちゃって。そういえば、鷹は急にどうしたの?」

「どうしたのって…逢いたいから来ただけ。それにしあって…酷くない?」

「えっ?何が」

「お前…俺が逢いたかったって言ったのに、あっそうって…冷たいなあ由ちゃん。」

「だっだっ!」

「あーあ、ちよっぴりショックですねー。」

そんな事言われたって…今さっきまで鷹の事で悩んでいたのに。急に逢いたかったって言われて戸惑っちゃったんだもん。

「そっそんな困った顔するな!冗談だつてば!」

鷹は私の濡れた頭をかき回し、笑った。

「冗談って!もう真剣に悩んじゃったよ。」

「ごめんって！」

「で、急にどうしたの？佳苗さんはいいの？」

「佳苗さん…ねえ。正直困ってるよ。」

「えっ？何で」

鷹の事、こんなに有名にしてくれた女性だよ？

「あの人…マジしつこいんだよ。今さっきも自分の家に行こうって…マジ勘弁。」

「えっ？断って大丈夫なの？」

早苗の事適当にあしらうと…後が怖い。

「だって、そりゃ佳苗さん綺麗だし、魅力のある人だけど…」

「そうだよ、綺麗だし…何でも思いのままだし…」

「まあな。でも好きでも無い女…抱けねえーだろ。」

「えっ？」

「えっってお前なあ…俺だって流石に何でも抱けないんですけど…」

「そっそうなの？」

「そうなのって…これはショックですねえ。」

「だったって！鷹…私の事は…抱くじゃん。」

「私の事って…なあ、お前さあ俺との事、何とも思ってた無いの？」

「何とも…そりゃ…」

鷹は体勢を少し正し、私の目を真つすぐに見て質問してきた。

「なあ、お前って俺の事どう思ってるの？」

「どっとうって…。たっ鷹こそどう思ってるの？」

「俺？俺は…お前の事大事に思ってる。誰にも渡したくない。」

「…嘘…みたい。」

「由の事、大事に思ってるよ。だから他の女の誘い、全部断ってるし。」

「ふっふーん…。」

「ふーんって。お前は？俺の事どう考えてんだよ。」

「どうって…鷹の事…私だっけ…凄く大切に思ってる。」

「大切なだけ？俺の事、一人占めにしたくないの？」

「したい…したいけど！そんな事無理でしょ。」

「何が無理？」

「だって、鷹の周りには綺麗な人ばかりだし、私…男装してるし男っばいし…」

「お前…十分女だよ？」

「ほっ本当？」

「ああ。俺と一緒にの時のお前…すげー女感じるよ？だから俺も勃っちゃうんでしょうが。」

「うう…。」

「お前、自分の魅力知らないだけだろ。俺的にはかなり色っぽい女ですけど？」

「ほっ本当？」

「しつこい！なあ…お前の事、俺だけの女にしたい。まだ駄目？」

「まっまだ？何が？」

「だってお前…初めてアレした時、好きな奴居るって言ってただろ？」

「あっ…そういえば…」

「そういえば…もしかして忘れてた？」

「えっと…あの…その…はい。」

「お前なあー！俺…ずっと我慢してたんですけど？自分の物にするの。」

「がっ我慢？」

「そうだよ。エッチした後だってさあ、お前の事ずっと抱きしめてたかったのに我慢したり、

極力避妊だっけしてたじゃん！まあ、最初はしなかったけど…」

「あっそういえば…」

「なあ、まだ好きなの？雪の事。」

えっ？私：雪が好きな事、鷹に言っただけ？

私が少し困惑していると、鷹は正直に話してくれた。なんで雪の事分かったかって。

「前、雪とチュウしたって言ってた時、お前すげー嬉しそうだったし…」

口では悩んでる風だったけど嬉しいって…それしかないだろ？俺…なに気にシヨックだった。」

「鷹：シヨックだったの？」

「そりゃ。だからムカついて…俺もチュウしちゃったじゃん。」

「あれって…そういう意味だったの？」

「ああ。それに…雪の態度だって満更でもなかったじゃん？」

「えっ？そう？分かんないよ。」

「そうだよ。傍から見てりゃ分かる。結構俺、焦ってたんだけど。」

「何で？」

「だってお前…両想いになられたら勝てないだろ俺…。」

「勝つつて…もしかして鷹、私の事…」

「好きだよ。」

「…ほっ、本当に？」

「あのさ…俺の態度で分からなかった？」

「だって！まさか私の事なんて…思わないよ。鷹位かっこいい人が私なんて…」

「俺は毎回伝えてるつもりだった。お前が欲しいって。伝わらなかった？」

「うっ…だってまさか…」

「なあ、まだ雪が好き？諦められない？」

「雪は…好きだけど…でも…」

「でも？」

「でも…今は鷹の事ばかり考えてる。さっき雪も満更って聞かされても鷹の事考えて…」

自分でも意外な程だった。
あんなに大好きな雪。心の支えだった雪。
もしかしたら両想いだったかもって考えても…今は鷹の事が方が気になる。

「俺の事、考えてるの？」

「うん。」

「俺の事…好き？」

「……うん。好き。」

「雪…よりも？」

「…好き。鷹の方が大好き。」

「…やった…」

「へっ？」

鷹は一言呟いた後、私を急に抱きしめた。

「やっと手に入れた。お前の事…」

「鷹…。」

「欲しかった。俺だけの物にしたかった。」

「鷹。」

「俺…お前抱いてても、ずっと雪と二人で抱いてる感覚だった。」

二人しか居ないのに、いつも雪の存在を感じてた。」

「……。」

「いつかは俺の物になるかもって思ってたても自信無かったし…」

それに雪の事、すげー好きみたいだったしな？いつ逢えなくなる

かって…不安だった。」

「ばっ馬鹿だね。そんな訳ないのに…」

「俺。今すげー幸せだ。」

「鷹…私だって。」

「傍に居てくれ…ずっと。」

「…うん、居る。傍に居る。」

鷹は私を優しく脱がし、体中にキスを落す。

私は鷹の全身を撫で、愛す。

優しく触れ合い、お互いを確かめる。

温かく…包まれる愛情。

初めて抱き合った気分だった。

心が通じるって…幸せなんだな…。

第三十四章（後書き）

鷹とラブラブ突入？このまま終われば幸せなんでしょうけどね？
作者は弄ぶのが好きですので…ゴメンね由子ちゃん。

余談ですが、第三十三章番外編、ムーンライトの方に乘せてみました。

番外編は二人の初めての夜…詳しく続き書いたらどうなのよ的な感じで書いた作品です。

お時間に余裕がある時、しょうが無い、読んでやるよという親切な方で18歳以上の方…読んで頂けたら幸いです。

第三十五章

鷹と気持ちを確認し合って…毎日幸せな日が続く筈だった。

『TO由 今日時間ある？鷹』

鷹からのメール。気付けばメールが届いたのは数時間前。

『ごめん、今メール見れた。今まで収録でした。今からでも平気？由』

返信遅くなっちゃったけど…平気かな？

すると、鷹からの着信が入った。

「もしもし！鷹？」

「おう。俺ー！あのさ…ごめん、今スタジオ向かってるんだ。」

「仕事？」

「うん、あんなメール送つといてごめんな？」

「ううん？仕事は仕方ないよ！じゃあまた今度ね？」

「ああ…最近逢えないな。寂しくない？」

「…寂しい。でもしょうが無いよね？お互い仕事順調だし…。」

「そうだよな。仕事有るのは幸せに思わないと…。」

「そうだ！鷹は次のオフ何時？」

「オフ？えつと…ねえ、次何時休み？」

鷹はマネージャーに確認しているみたい。

「もしもし？次のオフって…来月だって。12日。」

「そっか…じゃあ私もマネージャーに言ってみる！」

「言ってみるって…そんなのイケんの？」

「うん、頑張る！でも…時間空いたら直ぐ電話してね？」

「ああ。お前もしろよ？電話。」

「うん勿論！鷹に逢いたいし。」

「俺も。あつ…そろそろ局着くから。」

「分かった。じゃあ頑張つてね？」

「お前もちゃんと休めよ？」

「うん。じゃあね？」

「うん。またな…」

後ろ髪を引かれる心地で電話を切る。

逢えないならせめて…声だけでも聞いていたい。でも隠さないと私たちの関係。

知られたら全て終わる。

鷹と気持ちを確認しあつてから、私たちは全然会えなかった。お互い仕事が順調すぎて。

鷹はアルバムを出し、連ドラと映画も抱えてる。

私もドラマが決まったり、新曲の打ち合わせしたり…忙しい。

何か…付き合い出してからの方が逢えないな…。

鷹との電話を切り、私はマネージャーの車に乗り込んだ。

「由さん、大丈夫ですか？」

「えっ？」

「いや…寂しそうな顔してたから。」

「…分かった？実は…彼…彼女と全然会えなくて。」

「彼女…居たんですか？」

「えっ？そりゃ…」

「…ファンにバレ無い様にして下さいね？一気に人気下がります。」

「もっ勿論！」

傍から見れば男同士の恋愛。バレる訳には！

「…どんな人なんですか？お相手の方は…。」

「何で？」

「マネージャーとしては把握しておかないと…。」

「ふーん、恥ずかしいな…。えっと…優しい人。」

「優しい？」

「うん、それに凄く…綺麗なの。」

「綺麗？」

「筋肉の付き方とか…あと香り！」

「香り？」

「うん、何時も付けてる香水と混じった自信の香りが大好きなの。」

「…何か、男の人みたいですね、筋肉と香りって…。」

「えっ？」

「すみません。由さんのお相手に向かって…。」

「いいよ…。」

一瞬ビツクリした。

それ以上マネージャーは恋人について聞いてこなかった。

ただ…強制で別れさせはしないけど、もし万が一…何か起こった時は分からないって。

絶対隠さないと…鷹を失いたくない。

その後、自宅に着くまでの間は、ずっと他愛も無い話をしてた。

私…本当にマネージャーと喋る時間が好きなの！

話していて…落ち着くの。

纏ってる空気。落ち着いた話し方。

でも、一番落ち着いてしまう理由は…声質だった。

少し低くて…でも透明感がある。

この人の声って…凄くセクシー。

顔も良い。声も良い。

マネージャーの彼女は幸せだろうな。

ってか、マネージャーって彼女居るのかな？

結婚は…していない様子。

「ねえ、マネージャーは彼女居るの？」

「はっ？彼女…ですか？」

「うん。俺は教えたし…次はマネージャーの番。」

「私は…今は居ません。」

「またまたあー！そのルックスで？」

「嬉しいですね？私の見た目…好きですか？」

「そりゃ！男から見てもカッコいいのに…世の女性が放って置かないでしょ？」

「そんな。芸能人の由さんに言われるなんて…光栄です。」

「あはっ！っで、本当は居るんでしょ？」

マネージャは…少し悲しそうな顔をした。

「正確には…好きな人は居ます。でも、俺とその人は結ばれちゃ駄目なんです。」

「何で？」

「…神の罰が下るから…」

「…はっ？」

「…いえ、何でもありません。もうすぐで着きますよ?」
はぐらかされた。

でも、口調からして…辛い恋愛でもしてるのかな？

車は自宅の前に着く。

「お疲れ様です。ゆつくり休んで下さい。」

「ありがとっ！じゃあ、御休みなさい。」

「……待つて。」

「なっ何？忘れ物？」

「早く！……頭を下げて隠れて。」

「なっ何が起こったの？」

私は意味が解らずダツシユボードの陰に身を隠した。

「……今日は私の家に泊まって下さい。」

「なっ何で？」

もしかしたら……鷹が訪ねてくるかもしれないのに。家に帰りたい！

「ファンが数人居ます。」

「ファン？」

「はい。マンションの入り口をキョロキョロ監視してます。」

「俺がここに住んでるって……ばれちゃった。」

「その様ですね。これでは防犯上危険です。とりあえず数日は俺の……家にも避難して下さい。」

「そんな迷惑な掛ける事……俺は親友の所にも……。」

「親友とは誰です？」

「えっ？同じ事務所の鷹の所に。」

「鷹……駄目です。」

「なっ何で？」

マネージャーの家だと化粧も落せないし……何より一緒に住む理由が出来たと思ったのに……

「タレントの所は駄目です。万が一家に押し入られたら……。」

「でも、男二人ですよ？」

「凶器を持って居たら？」

「それだったらマネージャーだって……。」

「私は多少傷の残る身体になっても平気ですが……タレントは駄目でしょう？」

「あつ……。」

「身体の傷なら脱がなければいいんでしょうけど……顔に傷でも出来

たら…お終いです。」

顔に傷…メイクで隠せない程後が残ったら…仕事は来なくなるかも。

「…そう…ですよね？」

「俺の家が嫌でしたらホテルでも…」

「そんな事は…じゃあお願いします。」

「…車出します。」

マネージャーは車を発進させた。

マネージャーがここまで警戒するのには訳がある。

それはストーカーの存在だった。

芸能人なら仕方ない事かも知れないけど…最近は常軌を逸してきたから。

最初は後ろから尾けられるだけだった。

でも最近は…脅迫地味たファンレターや不気味な差し入れ。

終いには私の物を返せとか…意味すら分からない。

そんな事が続いて…私達は必要以上に敏感になってた。

本当はホテルに泊まりたかったけど、一人になるのは怖いかも。

私はマネージャーの家に数日厄介になる事にした。

必要な着替え類は時間を置いてからマネージャーに付き添われ取りに戻れたけど…

不便だな、秘密を知らない人と暮らすのは。

メイクだつて落せない。

入浴だつて気を使う。

でも仕方ないよね…。

マネージャーの家は広い2LDK。余つてた一部屋を借りる事になった。

リビングで部屋が仕切られてるし…プライベートは確保できそうな造り。

そして…必要な物以外は置かれて無い家。凄くシンプルだった。私は部屋に荷物を運び、リビングでマネージャーと話を始めた。

「…厄介ですね、ストーカー。」

「うん、でも何だろうね？返せて…」

「何でしょうね。心当たりは？」

「あつ有るわけないよ！」

「そうですか…大方彼女が由さんに夢中で…なんて感じでしょうかね？」

「勘弁してほしい…」

「早く自宅に戻る様に手配しますから。」

「お願いします。」

マネージャーには悪いけど、私は早く家に戻りたかった。だって…ますます鷹に会える時間が減っちゃうもん。

二人で雑談していると…鷹からの電話が鳴った。

「はい。」

「由！もう少しで収録終わりそうだけど…家居る？」

「あの…実は…」

私は鷹に事情を説明する。

「なっ！イケメンマネージャーと二人？マジで？」

「うん、怖いし…」

「分かった。つで住所は？」

「えっ？何で？」

「何でって…友達としてなら訪ねても変じゃないだろ？」

「まあ、確かに。」

「早く！」

「分かった。東京都の…」

私はマンシヨンの場所を鷹に伝えた。

電話を切ってマネージャーとの話に戻る。

「お友達ですか？」

「そっそう！あの…友達が来たいって言うんだけど…いい？」

「教えてしまったんでしょ？」

「聞く前に…すみません。」

「…仕方ないでしょう。」

「やった！……すみません。」

これで鷹に会える！良かった…

第三十六章

「お友達…来るんでしょう？」

「はい、すみません勝手に…」

「いえ、私は自分の部屋で仕事をしていますので、何かあったら呼んで下さい。」

「あっはい。有難うございます。」

マネージャーはガサガサと持ち帰った書類を持って自分の部屋に行った。

鷹…あとの位で来るのかな？

時間にして一時間ほどで鷹は来てくれた。

私はマネージャーに宛がわれた自分の部屋に鷹を招き入れる。

「…大丈夫？困った事ない？」

「うん、今のところ…」

「なあ、此処じゃなくちゃ駄目なの？」

「えっ？」

「俺の家は？」

「…本当はそうしたい。けど…もし鷹に危害が及んだら…それこそ顔に傷でも…」

「俺は！……俺は大丈夫だよ。今からでも来…」

「駄目だよ。私だつて鷹と一緒にの方が嬉しい。けど鷹、やっと仕事増えたのに…失うよ？」

「それでも！仕事もそうだけど、由の事だつてやっと手に入れたのに。」

「私なら大丈夫。あのマネージャーって如何にも固物って感じだし、自分の部屋もあるし…」

鷹は少し考えて答えを出した。

「分かった。由がそこまで言うなら。それに…俺は仕事頑張って、早く由との結婚資金貯めなくちゃな!!」

「けっ結婚？」

「はっ？俺とじゃ嫌？」

「まっまさか！ただ…ビックリしただけ。」

「嬉しく…ないの？」

「もっ勿論嬉しいに決まってるよ！」

「良かった…今すぐって訳じゃないけど、二人の将来の事…真剣に考えてるから。」

「わっ分かった。」

鷹は嬉しそうに私を抱きしめる。

鷹…真剣に考えてくれてるんだな…嬉しい。

マネージャーも一緒の家に居る以上、今日はキスまでしか出来なかった。

鷹は次の仕事に行かなくちゃいけないくて…二時間ほどで帰って行った。

好きな人が帰って行く瞬間って、凄く寂しい。

私は鷹を見送った後、マネージャーの部屋のドアを叩いた。

「マネージャー？起きてます？」

「…はい。なんですか？」

「あの…今日は有難うございました。今、友達帰りました。」

「そうですか。ではお風呂にでも入って身体を休めて下さい。」

「あっすみません。頂きます。」

私はドア越しに礼を言い、部屋に戻る。

着替えを持ち風呂に向かう。

やっやだな…入って来ないよね…

何故か風呂に乱入される事が多かった私は警戒してたけど…心配無

用だった。

脱衣所の中に入ってドアを閉めようとした時…ノブに鍵が付いているのに気が付いた。

自宅なのに鍵？ちょっと不思議に思ったけど私にはラッキー！安心して裸になり、熱い湯が張ってあった浴槽に身を沈める…

サッパリした所で風呂を上がり、ばっちり男装を施す。

この調子ならバレずにマネージャーとの生活も出来そうだ！

私は汚れた服を持って脱衣所を出る。

するとマネージャーは私が出てくるのをリビングで待っていてくれた。

「由さん、湯加減どうでしたか？」

「あっお陰さまで！気持ち良かったです。」

「それは良かった。では風呂上がりに一杯どうです？」

「あっ！頂きます。じゃあ荷物置いてきますね！」

私は汚れ物を部屋に置きに行った。

「はい。これどうぞ？」

「あっ頂きます。」

マネージャーは私に缶のカクテルを手渡した。

「あれ？カクテル…」

「ビールの方が良かったですか？」

「いいえ…個人的にはこっちの方が…でも普通一杯って言ったらビールだと思ってたので…」

「まあ普通はそうですね。でも、由さんはこっちの方が好きかと思ひまして…」

「うわ！流石敏腕マネージャー！」

「恐れ入ります。では乾杯。」

「乾杯ー！」

風呂上がりの乾いた喉に甘いカクテルが染みってくる。

「ぷはあー！美味しい！」

「美味しそうに…飲むんですね。」

「えっ？何か？」

「いえ。何でもありません。」

何か可笑しかったかな…

私たちは楽しく話しながら、お互い2、3本飲んでいた。

私も少し酔いが回って来て…お喋りも楽しかったけど横になりたくなってきた。

「ふあー！」

欠伸まで出ちゃう。

「お疲れのようですね。今日はお開きにしましょうか。」

「はい…じゃあ…寝ます。おやすみなさい。」

「はい、では明日は10時からスタジオで収録になりますので…」

「うつ分かってますよ。もう…寝る直前まで…」

「ふふっ仕事ですので。おやすみなさい由…さん。」

「はーい。おやすみなさいマネージャー…うわっ…！」

歩き出した私は、机の角に足をぶつけ転びそうになる。

「由ー！」

倒れこむ瞬間、身体が宙に浮いた。

「あっあれ？マネージャー？」

「もう、すっかりして下さい…大丈夫ですか？」

「はっはい、すいません。」

気付けば私は…マネージャーに抱きしめられてた…逞しい男性の胸に。

「うわあ！！私！！！」

焦ってマネージャーから離れようと胸を押す。

「あぶない！！！」

勢い余って後ろに倒れそうな私を庇い…私はまたマネージャーの胸

に抱えられてしまった。

「ほら…気をつけなさい…由…さん？」

「はい…重ねがさね申し訳ない。」

「歩けますか？」

「はい…大丈夫です。失礼します。」

ゆっくり…転ばない様に部屋に戻る。

私は顔から火が出る心地で…用意してくれた布団に倒れ込んだ。

ジタバタ暴れ…己のドジを反省する。でも…思い出しちゃう。

「マネージャーの胸…広くて遅い…」

着痩せするタイプなのか…以外にもマネージャーの胸は遅かった。それに…何だか懐かしい様な香りもした。

包まれる様な…守ってくれる様な…

思い出すとドキドキする。

…うわ！私…なんて事考えてるの！アンタ…鷹っていう彼氏が居るじゃない！

自己嫌悪だよ、本当最悪だ私。

大好きな彼氏が居るのに…マネージャーにドキドキしてどうするの！

その頃マネージャーは…部屋に戻っている様だ。ドアが締まる音がしたから。

「…ったく、あのドジは…俺じゃなかったら…」

一人ブツクサ喋るマネージャー。

「何時かバレるぞ？気を付けろよ…由子。」

徹が何か独り言を喋っている時、ほろ酔いの私は…既に夢の中に居た。

第三十六章（後書き）

久々に連続投稿しました！はっ早く続きが書きたい…
しかし、あのマネージャーは何者なのでしょう…正体を知ってる
様ですが。

第三十七章

私は酒に酔って、爆睡していた。それこそ誰かに触られても気付かない程。

「…由さん？起きてます？」

声を掛けられても気付く訳ない。

「まったく…本当によく寝る子だな由子は。」

温かい手が触れる。でも…眠りが深く気付かない。

「ずっと…触れたかった、お前に。」

頬に触れる温かな手、そして唇に当たる湿った感触。

「おに…ちゃ…ん…」

「…由子、夢見てる？」

私の頬に流れた涙を誰かが拭う…誰？

私は夢を見ていた。

そう、お兄ちゃんの夢。

大きい背中、守ってくれる長い腕。

逢いたい…逢いたいよお兄ちゃん…

何で…何で死んじゃったの？一人にしないで…お兄ちゃん。

「お兄ちゃんーん！！」

ガバツと布団から飛び起きる。

辺りを見渡して…ここがマネージャーの家なのを思い出す。

そうか…昨日避難してきたんだっけ。

突然死んじやったお兄ちゃんの夢、久しぶりに見たなあ。

何だか心が温かい。そして…思い出して、また涙が出てくる。

「お兄ちゃん…居ないんだよ…ね。」

そつだ、現実は今う…お兄ちゃんは今居ない。

私は涙を拭いて、布団から出た。

時間を見れば、すでに起きなくちゃいけない時間。

私は寝巻を脱ぎ、着替える。

そして…ドアをノックする音が聞こえた。

「由さん？どうかしましたか？」

「あつマネージャー…おはようございます。」

「大丈夫ですか？さっき叫び声が…」

「すつすいません、久しぶりに死んだ兄の夢を見て…」

「そうですか。あの、朝食の準備は出来てますので用意出来たら来て下さい。」

「はい。有難うございます。」

急いで着替えを済ませ、メイクを直す。

ドアを開ければ…部屋に広がる食事の香り。

「うわっ凄い。」

「お早うございます。良く眠れましたか？」

「あつはい。お陰さまで…んで、この食事は？マネージャーが？」

「はい。お口に合えば良いんですが…」

「そんな！凄く美味しそう…しかも、わた…俺の好物ばかりです！」

「良かった。では召し上がって下さい。」

「あつはい。頂きます。」

私は食卓に着く。

目の前に並ぶ好物達。どれも美味しそう。

凄いなあ、本当に敏腕マネージャーだなこの人。

白いご飯にお味噌汁。甘い卵焼きにウインナーに漬物。実家の定番メニューだ。

実家にでも電話して聞いたのかな？

私は卵焼きに箸を伸ばす。

……うわ、本当に我が家の味。嘘みたい。

「…実家に電話でもしたんですか？」

「えっ？何故です？」

「いや、あまりにも私の好みの味付けだったの…」

「そうですか！気に入ってもらえて嬉しいです。じゃあ全部食べて下さいね？」

「えっ？あっはい…」

何か、はぐらかされた様な気もするけど…まっいいか！

私はお腹一杯になるまで食事を楽しんだ。

「うわぁ…食べ過ぎました。」

「はい。良く召し上がっていらつしやいましたね。」

「ご飯が美味しすぎるんです。俺の所為じゃ…」

「良かった。でも由さんは痩せてるから…沢山食べないとね。」

「はい、じゃあ言葉に甘えて…夕飯も楽しみにしてます！」

「ははっ！調子いいですね！了解です。」

「やった！楽しみ！」

「ええ、楽しみにしてして下さい。あっそろそろ出発しないと…」

「はい、荷物持ってきますね？」

「はい、私も準備してきます。」

お互いに部屋に戻り、準備をする。

私は荷物を持ち部屋を出る。

既に準備万端のマネージャーの後を付いていき、車に乗り込む。

今日はドラマの撮影。

学園物で私の役はちよつと訳ありの男子高校生。

役名は叶^{かなう}。男なのを偽って全寮制の女子高に入学する物語。

叶はある目的があつて入学するんだけど、同室の女の子に恋をするというストーリー！。

女子学生に変装する役という事で、中性的な私がぴったりと白羽の矢が立ったのだ。

今日で撮影は三回目。今までNGばかり。

早くドラマの緊張感に馴れなくちゃね！

「…ねえ、今日の授業、面倒だよね…」

「うん、サボっちゃう？どっか行こうよ！」

二人で学校を抜け出すシーン。

相手の女の子は叶の事女だと思ってるので、結構スキンシップが多い役所。

雪に話したら羨ましがられたし。

でも…私にとつたら地獄だよ。女同士で会話してるみたいで。

私、プライベートで同性の友達居ないし…やりにくい。

それに…相手役の女の子、役以上にスキンシップが激しくて困る。

今日も腕を組んで学校を抜け出すシーンなんだけど、そんなに胸を押し付けられても！

ほら、貴方のマネージャーさん…かなり慌ててるよ？

今日の撮影は無事に終わり、私は監督さんやら共演者さんに挨拶をし楽屋に戻った。

スタジオから楽屋までの道には、幾つもの楽屋が並んでいて。

その中に、胸躍る名前を私は見つけた。

「鷹」

今日、同じ局で撮影してたんあ！偶然！

私は当然の様にドアをノックする事も無く扉を開けた。

「鷹？今日同じ局だったんだ…ね…鷹、何してるの？」

楽屋…覗かなきゃ良かった。

鷹の楽屋には、鷹の他に人が居た。

「あら？幾ら友達でもノック位したら？由君。」

勘に触る声の主、佳苗だった。

鷹も私の声に気付いた様で：目が合う。

物凄い焦ってる鷹の顔：何でそんな顔するの？

「すつすみません：でも、一体何してるんですか？」

「何って：野暮な事聞くのね貴方。」

勝ち誇った様な佳苗の顔。何も言わないで目を丸くしてる鷹：

私は、自分が男装していてKJのメンバーだという事も忘れ、その場で涙を流した。

「うつつそ…」

私は鷹の楽屋を飛び出した。

「よつ由さん？どうしたんです？」

私が自分の楽屋で放心していると、マネージャーが慌てて声を掛けてきた。

「：何でもありません。少し：疲れて：うつつ…」

声を出すと涙が止まらない。

「：何があつたか聞きません。ただ今は：泣きなさい。」

そう言つて、マネージャーは私を自分の胸の中に招き入れた。

精神的に相当きつかった私は、素直に好意に甘え：泣きはらした。

私だつて同じ部屋に居た位じゃ泣かない。

でも：さっき見た光景は我慢出来なかったの。

鷹：何であんな事？

鷹は楽屋で佳苗と抱き合っていた。

鷹はソファで目をつぶり、佳苗を受け入れていた。

別に裸だった訳じゃない。でも彼女以外の女を自分の上に乗せる？それに佳苗のあの言葉：野暮って何？

胸の奥が抉られる様だった。それに鷹だつて！
何でも言ってくれなかったの？私は鷹の何？

冷静に考えれば、その場で口論しなくて良かったと思う。
そんな事したら…私たちの芸能生活は一瞬で終わる。
でも…今すぐにも鷹の楽屋に殴り込みに行きたかった。
今ここに、マネージャーが居てくれて良かった。

私はマネージャーに支えられながら車に乗り込み、家に帰った。
私は直ぐに部屋に閉じこもり、頭から布団を被る。

泣き続け…いつの間にか眠りに就く。

時間にして3時間ほど経った時、携帯の着信音で私は目を覚ました。
ディスプレイに映る名前は鷹だった。

今頃良い訳？なんで直ぐに電話すらして来ないの？

出ようか…いつそ無視しようか。

暫く携帯を眺めて考えていると…ふっと音が鳴り止んだ。

私は、また掛つてくると思い電話を持ったまま着信を待った。

でも、その後電話は掛つて来なかった。

私…振られたの？

何にも悪い事してないのに…振られたの？

いつ意味が解んないよ…鷹。

頭の中が真っ白になって、何も考えられない。

考えられないから涙も出ない。

そんな時、ドアをノックする音が聞こえる。

「由さん？起きてます？」

「あっはい…起きてます。」

「夕食、一緒にどうですか？」

「夕食ですか、ちよつと食欲が…」

「そうですか…朝食の時、楽しみにしてるって言うてくれたから、丹精込めて作っただんですが…」

「…すみません、今行きます。」

そっぴいえば私、楽しみって言った気がする。

折角私の為に作ってくれた食事、断ったら失礼だよな？

あんまり食べられないかもしれないけど…せめて一口でも。

私は軽くメイクを直し、部屋を出た。

第三十七章（後書き）

鷹は本当に浮気をしているのでしょうか。
それにマネージャーの正体は？
次回分かる予定です。

第三十八章（前書き）

更新がかなり遅くなりました＞（
――）＜

第三十八章

部屋を出ると、夕食の香りが立ち込めている。

「うわぁ、いい香り！」

心に染みる香り…不思議。

「さぁ、召し上がって下さい。」

マネージャーが私の目の前に、湯気の立つ味噌汁を差し出す。

「頂きます。」

私は、アツアツの味噌汁を少し口の中に流し込む。

「……。美味しい。」

懐かしの味だった。

ネギと油揚げのシンプルな味噌汁。

でも…朝も感じたけど、これってやっぱり…

「あの、今朝も聞いた事なんですけど…実家に電話でもしました？」

「…いえ？何故です？」

少し言葉に詰まりながら答えるマネージャー。

「味…。実家と同じなんです。」

「味…ですか？」

「はい。この味噌汁の味、実家と同じです。それに朝の卵焼きの味も…。」

「……。」

「マネージャー？別に私、怒ってないですし。電話したんですか？それとも母と逢いました？」

「……いいえ、違います。」

認めないの？ただ実家に連絡を取ったか聞いているだけなのに。

「じゃぁ、何で実家の味がわかるんですか？」

「……聞いたんです。お兄さんに…」

「おっお兄ちゃんに？」

マネージャーって、お兄ちゃんと面識あったの？

マネージャーは、食事が終わった後に、お兄ちゃんとの話をしてくれた。

マネージャーとお兄ちゃんが知り合ったのは、お兄ちゃんがアメリカに修行に行った時。

ルームメイトとして出会った二人は直ぐに仲良しになって…色々話をしたんだって。

我が家の味を知ったのは、二人で一緒に食事の用意なんかもしたらだって。

帰国しても二人の仲は相変わらず。よく連絡も取り合ってた…

暫く連絡が途絶えたお兄ちゃんを心配して帰国したらお兄ちゃんは亡くなってた。

お兄ちゃんは生前、マネージャーに私の話をしていたんだって。

引き籠りだった事。男装して芸能界に入った事まで。

お兄ちゃんは凄く私の事を心配してたらしくて…

お兄ちゃんの代わりじゃないけど、代わりに私の傍に居てあげたかったって…

マネージャーは正直に話してくれた。

話を聞いている内に分かった事。

お兄ちゃんは、マネージャーを心から信頼していたという事。

だって、私の男装とか芸能界の事…信用していなきゃ話さないだろうし。

それに…話を聞いていた以上、私が本当は女だって事…知っていたという事実。

マネージャーはそんな態度、一度も見せなかったなあ…。

「あの…由さん？怒りました？」

「へっ？何で？」

「いや、私はお兄さんとの関係を黙っていましたし…」

「まあ、もつと早く打ち明けて欲しかったのは確かですけどね。」

「すみません。言いそびれてしまつて…それに、私が気に掛けなくても…」

「…気に掛けなくても？」

「…由さんには彼氏の鷹君が傍に居ましたしね。無粋でしたね。」

「かつ彼氏つて。バレてました？恥ずかしいー！もあー！」

でも…私は嬉しいです。マネージャーが見守っていてくれた事。

何か…お兄ちゃんが傍に居るみたいで。」

「里君に…ですか？私…似てますかね？」

「いえ、全然！！マネージャーと似ても似つかない感じ！！」

「では？」

「フインキというか…空気というか…」

「空気？」

「はい。兄の纏っていた空気です。マネージャーの傍に居ると、安心します。」

まるで…本当にお兄ちゃんが帰ってきたみたいです。」

「そうですか。それは光栄です。」

思わず口から出た言葉だった。

お兄ちゃんが帰ってきたみたい…本心だった。

料理の味付けだけじゃない。マネージャーといると本当に心が落ち着いたから。

本当に不思議な人…

私は食事の後片付けを手伝い、自室に戻る。

お兄ちゃんとマネージャーとのアメリカの生活を想像し、一人で笑っていた。

不思議…鷹との事、あんなにショックだったのに…

大丈夫という訳じゃないけど、少しだけ気が晴れたのは確かだな。

…よかった、一人じゃなくて。

「由さん？お風呂どうぞ…」

ドア越しにマネージャーの声が聞こえてきた。

「はっはい。頂きます。」

私は着替えると、簡単なメイク道具を持ち部屋を出ようとした。

「…あつ、これは要らないんだ…。」

手に持っていたメイク道具。もう必要無いのか。

だって…マネージャーは私が女だって知ってるしね。

でも、いきなり素ツピンで風呂から出てきたら驚くかな？

だって…素ツピンの私は不細工だしね。

うん、今日…だけじゃなくて、暫くは軽くメイクをして風呂から出よう。

私は脱衣所で裸になり、熱い湯に身体を浸ける。

「…ふぁー、気持ちいい…」

冷えた身体に染みる温かさ…ほっとするな。

何か…今日は色々あったな。

鷹の浮気にマネージャーの正体。

疲れたなあ…

身体を洗い、再び湯に浸かっていた時だった。

ドンドンドン…！！

急に激しく玄関のドアを叩く音が聞こえてきた。

「誰？」

結構な勢いでドアを叩く音。

何か…急に不安になって来て、私は急いで風呂から上がった。身体を乱暴に拭き、急いで持っていた寝巻に着替える。

「……！！……！！」
ハッキリは聞こえない。でも……聞き覚えのある声同士が何か言い争っている様だった。

「……由……どこ……あい……！！」
この声……鷹？

私は恐る恐る脱衣所の扉を開ける。

少しだけ戸を開け、玄関の方へ視線を向ける。

「……鷹。」

汗だくで、必死にマネージャーに迫る鷹の姿が目に入る。

「……っ！由……！！」

鷹は、ドアの隙間から覗く私に気づき、大声で私の名前を呼んだ。

「……由さん、御客様ですが……追いついてしまいませんか？」

「……いえ、大丈夫です。」

「本当ですか？」

「はい。……鷹、私の部屋で話そう？」

「由……そうだな、とにかく中に入れてくれ……」

鷹を自室に招き入れる。

「……由子、ごめんな……」

「……ごめんって、何が？」

「何って……楽屋での事。」

「楽屋……ああ、佳苗さんとイチヤイチヤしてた事？」

「……俺はイチヤイチヤなんかしてない！あれはお前の誤解だ……！！」

「誤解？何が誤解なの？鷹の上に乗ってたんだよ！あれがイチヤイチヤじゃ無いなら一体何なの！」

「俺は……寝てただけだ。」

「はあ？何その良い訳！」

「良い訳じゃ無い！本当の事だ……！！」

「私は見たのよ？それに佳苗さんだって言ってた！私が野暮だつて！！どういう意味よ！」

「そんなの俺にも意味わかんねーよ！俺は本当に寝てただけだ！目が覚めたら佳苗さんが俺の上に乗ってるし、ドアにはお前が立ってるし！」

俺も状況把握するまで意味解んなかったんだ！！」

「…だから電話もしてくれなかったの？」

「…ごめん、佳苗さんから話聞くのに手間取って…」

でも、俺と彼女は本当に何でも無いんだ！信じてくれ！」

「…信じたい。信じたいけど！！私はあんな現場目撃しちゃって…」
「信じて…くれないのか？」

「…少し、時間が欲しい。私もいきなりだったし…頭を整理したい。」

「…どの位…時間欲しいんだ？」

「分かんない…自分でも。」

「…分かった。俺は何時までも待つてるから。俺、お前なら信じてくれるって思ってる。」

鷹は重い足取りで帰っていった…

「マネージャー、済みませんでした。」

「もう、大丈夫なんですか？」

「大丈夫…なのかな？私にもわかりません。」

「…お互いが大事に思ってたれば、きっと解決する。心配するな。」

マネージャーは私の頭をポンポンと叩いてくれた…まるで本物のお兄ちゃんのように。

マネージャーは私に甘いカクテルを手渡し、ソレを受け取る。

口に流せば、甘く爽やかな酸味が口に広がる。

「…美味しい。ありがとう…」

「一杯飲んで寝てしまうのが一番！さあ、全部飲み干して？」

「はい、頂きます。」

一気に流し込むと、胃がカツと熱くなるのが解る。
結構アルコール強いのかな？

私は空いたグラスをマネージャーに手渡し、礼を言う。

「有難うございます。なんか…眠れそうです。」

「それは良かった。さあ、ゆっくり休んで下さい。」

「はい、御休みなさい…」

部屋に戻り、布団に飛び込む。

…疲れた。今日は本当に疲れた…

私は寝酒のお陰か、直ぐに深い眠りに就いた。

……………カチャ、キー。

部屋のドアが空く音がする。

私…鍵掛け忘れちゃった？

起きなくちゃ…でも、面倒くさい…目も開けたくない…
いいや…寝てよう…

「由…さん？」

あれ？マネージャーの声がする。

何か用事？

でも…眠い。目…開けたくないな…

私は頭では起きなくてはと思っていたけど、眠気に勝てなかった。
「…寝てるんだね…」

はい、寝てます。起きるの面倒です。話は明日起きてから…

「…今日は大変だったね…由子。」

…由子？今、私の事由子って呼んだ？

「由子…負けるなよ…俺が…傍に居るから。」

やっぱり、私の事由子って呼んでる。お兄ちゃんから名前聞いてたのかな？

「由子…俺が守ってやるから。今なら…今なら守ってやれる。」

…今なら？どういう意味？

「俺が…お兄ちゃんが守ってやる。お前を苦しめる全ての物から…今は守ってやれるから。」

…どういう意味なんだろう…

考えてる内に、私の意識は鮮明に戻っていた。

でも、今更起きるなんて…気まずいよ。

仕方ない、ここはタヌキ寝入り！

「…ごめんな由子、お前…死んだと思ってるんだよな…」

死んだと…思ってる？

「ごめんなあ…ああするしか無かったんだ。あの時は…お前との関係…壊れかけてたし…」

関係…私、前から知ってたっけ？

「今なら他人の男としてお前の傍に居れる。他人として守ってやれる。」

他人…他人として？

「他人の…一人の男としてお前の傍に居れる。」

由子…安心しろよ？お兄ちゃんが傍に居るからな…お前の傍に…
…もしかして、本当にお兄ちゃん？私の血の繋がったお兄ちゃん？

マネージャーは私が本当に寝ていると思い、色々喋っていた。

私も適当に寝返りしたり、深い呼吸をしたり…必死に演技していた。

「…由子、幸せにしてやるから。」
マネージャーは最後にそう呟き、喋らなくなった。
沈黙が流れ…私は耐えきれず起き上がろうかと悩んでいた時だった。
ふつと風が頬を撫で、マネージャーが動くのが解った。
あつ部屋から出て行ってくれるんだ…助かった！
もう限界だった。それに…ゆっくり考えたい。今までの言葉の意味を。

服が擦れる音が聞こえ、動く気配もする。
でも…ドアに向かう気配じゃ無い。それどころか近づいてくる！！
バレてた？

マネージャーは私の顔を覗きこんでいるみたいだった。
息遣いが近くに聞こえ…狸がバレないかドキドキしてた。
マネージャーは…私に顔を近づけ……

私にキスをした。

第三十八章（後書き）

かなり遅くなった更新ですが、呼んでくれて感謝です。
忘れないでいてくれて有難うございます。

第三十九章（前書き）

お久しぶりです。あきちゃんです。
久しぶりの投稿なのに……とうとう書いてしまいました。

15歳未満の方は、この三十九章をすっ飛ばして下さい。

第三十九章

マナージャーは私にキスをしてきた。

優しく…触れるだけのキス。

前は兄弟ならキス位する物だと思ってた。

でも、今の私には違うんだって分かる。

本当は、直ぐにでも跳ねのけようと思ってた。

だって、否定してもマナージャーの正体はお兄ちゃん。

お兄ちゃんの事は本当に大好き。

でも…異性として愛してはいけない相手。

はっ早く逃げなくちゃ！

でも…出来なかった。

私の頬に、温かい雫が落ちてきたから。

泣いて…るの？

お兄ちゃん…辛かったのかな？

今ここで、私起きていたのをバラして跳ねのけたら…またお兄ち

ゃんは辛くなる？

でっ出来ない…

離れない唇…

落ちてくる涙…

そりゃ私だって男性経験を積んで多少免疫も出来たけど…

こんなキスされたら、ドキドキしちゃうんですけど…！

「うっ」

思わず声が出ちゃう。

「！」

ビククリして離れるマネージャー。
私も焦って、寝返りの振りをする。
一瞬緊張が部屋の中を走り…また静寂に戻った。
おっお願い…早く出て行って！
そう思ってたのに…

マネージャーは、私の顔の横に自分の頭を置き、何するでもなくただ見つめていた。
さっさつきよりシンドイ状況だ。
なっ何で顔見てるの？
もっもっこの緊張に耐えるの限界！
私は意を決して目を開けてみる事にした。

「ふっ…」
軽く息を吐きながら、ゆっくりと瞼を開けた。
ぼやけた視線の先に、マネージャーの顔が映る。
うつすらお兄ちゃんの面影があるけど…本当に別人の顔してる。
本当に…お兄ちゃんだよな？

マネージャーは目をつぶっていて、私が顔を見ている事に気が付いてない。
私もそれを良い事に、ジックリとマネージャーの顔を見ていた。

「……。」
マネージャーの落ち着いた息遣い…もしかして寝ちゃってる？
うそ、信じられない。

「……うつん…」
寝言の様な吐息が漏れる。
ぷっ。なんか面白い。

あの几帳面そうな顔のマナージャーが、私の隣でクークー言ってるなんて。

変なの…何か嬉しいや。

「むう…にや…むにゅ…」

口をモゴモゴさせてるし…なんか凄く可愛い。

私も寝ちゃえばよかったのに…うっかり寝顔を見つめてしまっていた。

本当に不思議だなあ。

目の前に居る人はお兄ちゃんかもしれないけど…でも本人曰く他人で…

もう、私に位本当の事言ってくれてもいいのに！

もう…何かちよつと腹立ってきた。

そうだ、何か悪戯してやろうか？

うーん、どうしてくれよう。

そうだ、私も…

チュ。

お返しに頬にチュってしてやった。

何か悪戯になつて無い様な気もするけど…

実はさっきのキスの名残がまだあつて…

身体の奥が熱くなつてたの。

かといって今鷹を呼ぶのはあり得ないし…

まあ、気が紛れるかと思つてしてみたんだけど…

逆にもつと熱くなつてきた。

下半身はドキドキ脈打つて…どうしよう。

私は目の前に居る男性に欲情してしまった。

あつ頭ではお兄ちゃんかもつて分かつてても…顔は赤の他人しか…かなりカッコいい人。

どうしよう…

焦って目を閉じてても、顔に寝息が掛ってるし。
やっやだ！襲いかかったやいそう…

この人は、どういう風に女性を抱くんだろう。
もしかして…鷹より上手だったりして。

それに…この人に抱かれたら、どんな感じがするんだろう。
…うっうわ！私、どうしよう…

もう頭がボーっとして自分じゃないみたい。

頭の中まで熱くなってきた…涙が出そう。

ちよっちよっとなれる位なら起きないよね？

ちよっただけ、だから。

指先でチヨンと唇に触れてみた。

男の人なのに柔かい感触だ。

プニプニしてる…可愛い。

ここに唇を重ねたら…きつと気持ちいい。

ちよっただけ…大丈夫だね？

だって私には勝手にしてきたんだし…私だって少し位。

恐る恐る触れた。

プニユっとした温かい唇。

あっ気持ち…いいかも。

頭の中が白くなる。

気持ち良い。

……。

「チュ！」

あっ！思わず吸っちゃった！音まで出ちゃった！

うわあやばい！起きちゃう！！

案の定薄ら目を開けたマネージャー。

そして…ばっちり私と目が合う。

焦ってる私は、何も言葉が出ない。

マネージャーは…何も言わないで、私の顔をじっと見つめてる。

焦るでもなく…ただジツと見つめてる。

私も、お返しだよーとか冗談口調で喋ればよかったのに、

じっと見つめるマネージャーの視線に吸いこまれて…動けなかった。

この人はお兄ちゃんなのに…顔は他人だから。

いつ良い訳なのは分かってる。

でも、頭だけじゃ制御できなかった。

マネージャーの腕が動き、私の首筋に伸びてくる。

「あつ…んん…。」

ゾクッとして声が出ちゃう。

マネージャーはそのまま手のひらで私の頭を包み、自分に引き寄せ
る。

吸い込まれるように合さる唇。

柔かい感触は、私の意識を完全に真っ白にしていく。

そのうちに深く差し込まれるマネージャーの舌先。

私の口内を動きまわり、私はそれに応える様に追いかけて…絡ませる。

どれだけ合さっていたのか、お互い息が上がっていて…全身が心臓
の様にドキドキしてた。

もう止められないかもしれない。

「由子、俺の事…受け入れて欲しい。」

突然耳に声が掛る。

やっやだ…何て答えればいいの？

正直私も身体の芯が熱くてどうにもならない。

いっそ無理やり犯してくれた方がいい。

だって…それならマネージャーの所為に出来るから。
でも…きつとマネージャーは無理に抱いたりしないだろう。
分かってる。絶対にしない。
なら…どうしたらいいの。
今の状況で跳ねのけられる？
お互い意識があって…分かってる上であんな熱いキスして。
それって同意の上って事でしょ？
鷹という彼氏がいるのに…

鷹、そうだ鷹だって…

佳苗と浮気してたんだ。なら私だって…

そうだよ、私だって浮気したっていいよね。

そう思った瞬間に、何か私の中の引つかかっていた物が外れた。

私は小さく頷き、自分からキスを求めた。

マネージャーの頭を引き寄せ、吸いついた。

マネージャーは一瞬動きが止まっていたけど、直ぐに戻り…乱暴に私の上に乗った。

キスをしながら互いの服を脱がせて、裸になる。

マネージャーのキスが私の体中に落ちてくる。

「ああ…んん…あつああ…!!」

敏感な場所を愛されて、体中から何かが昇ってくる。

「だつため…やつ、そんなに…やあ!」

駄目だ…もう我慢出来ない!

「ああ!ああ…」

思い切りマネージャーの頭を掴み、下腹部に押し付けた。
全身に走る刺激が感覚で、かるく痙攣してる。

「いつあ…ああ…あ…」

「由子…逝っちゃった？」

「うつうん…やだ…」

「嫌じゃないよ…もっと、もっと感じて欲しい、俺の事だけ…」

マネージャーは私の間に腰を割り入れ…自分を宛がってきた…来る。

割り入ってくる感覚がしたと思うと、ズンツツと一気に奥まで感覚が突き抜ける。

「ああああ！」

かなりの質量で、ちょっと苦しい。

でもマネージャーはもっと辛そうな顔してて…それが一層私の欲情を掻き立てる。

無我夢中で抱きつき、快感を貪る。

動く背中にしがみ付き、無くなりそうな意識を一生懸命に探していた。

音が卑猥に響き、部屋中に木霊する。

翌日、私はマネージャーの腕の中で目覚めた。

キッチンと服が着せてあって…身体も綺麗になってる。

ん？昨日…あれ？

そっか…夢だ！

何だあ、良かった。

この状況だって、きつと訳があって腕枕を…

とにかく起きなくちゃ！

そっと腰をあげる。

「あつ…うう…」

気だるさの残っている腰に軽く痛みが走る。
こっこれは…確実に何かがあつた証拠だな。
やつやばい。浮気しちやつた…

ってか、浮気所じゃない！

この人は…多分お兄ちゃんなのに！

第三十九章（後書き）

申し訳ありません>（――）<

書いちゃいました…あれを！

何か…四各関係に発展しそうですwww

第四十章

「やっぱり…しちゃったよね。」

この下半身の気だるさは、間違いなく何かしちゃった証拠だ。今さらだけど、もしかして大変な事しちゃったんじゃない？

この横に寝ている人は、お兄ちゃんかも知れないのに…てか、お兄ちゃんだと思う。

なら私…実のお兄ちゃんとエッチ関係に？うわぁー！

「…そんなに後悔してる？」

横から声が聞こえてくる。

「まっマネージャー…おはようございます。」

「おはよう。眠れた？」

「あつはい…お陰さまで。」

「ふふつ。よかった。じゃあ私も起きようかな？今日はドラマの収録もあるしね。」

「はっはい。すぐに支度します。」

「ああ、私も支度しなくちゃね。」

マネージャーは私の頭を軽く叩いて部屋を出て行った。

一人になった部屋で考える。

勢いで浮気しちゃった事、しかもマネージャーと。

これって…最悪にマズイ事だよね？

どっとうしたらいいの！

でも、さっきのマネージャーの態度…何か普通じゃなかった？
まるで何事も無かった様に…。

私は支度を済ませ、リビングに行こうとドアノブに手を掛ける。
でも、何か気まずくてドアを開く事が出来ない。

どんな顔して話せばいいか解んないよ。

私がドアノブを握ったまま問答していると、外から声が掛った。

「由さん？準備できましたか？」

「あっはい。直ぐに行きます。」

私は意を決してノブを捻った。

朝食の匂いがする朝のリビング。

マネージャーはテーブルに座りコーヒーを飲んでいた。

「由さん？時間も無いんで早く食事を済ませて下さいね。」

ニコやかに笑い私に朝食を勧めてくれる。

「あっひゃい…はい。頂きます。」

動揺のあまり噛み噛みな私は、真っ赤な顔でテーブルに着いた。
とにかく食事を済ませようと必死にご飯を口に運ぶ。

シーンとした空気が流れて、ちよつと気まずい。

「…由さん。昨日の事何ですけど…」

話を切り出したのはマネージャーだった。

「ひゃ！ひゃい！！」

「…ぷつ。」

「ひゃい？」

「ぷぷぷつ。」

「あっあの…」

「ごめん、余りに面白い顔してたから。」

「はあ…」

「あのね、昨日の事は忘れてくれていいんだよ？って、男のセリフ
じゃないけど…」

「…はあ？」

「いや、由さんが余りにも気まずそうにしてたし…それに彼氏と喧
嘩した後の事だったし…」

もしかして間が射しただけなのかなって。」

気まずそうに言った？

そりゃ誰だってそうでしょ！彼氏居るし貴方は兄弟かもしれない訳だし。

動揺しない人なんか居ないと思いますけど？

…もしかしてパニックなのは私だけ？マネージャーは平気なの？朝の態度といい、今だって気にしないでって、間が射したって…マネージャーにとっては忘れてもいい程の出来ごとだったって事？なんか…凄いシヨック。

「…気まぐれ…ですか？」

「えっ？」

「昨日の事は貴方にとって、忘れても良い程度の事なんですね。」

「そっそれは違っ！」

「でも！さっきだって態度は何時も通りだし、忘れてって言うし…。」

「それは由子が嫌がってると思って！」

「嫌がってたなら…嫌がってたなら大人しく抱かれたりなんかしない。」

「…由子。」

「私は…！私にはただ鷹が居るのに他の人と…しちゃって、自分から望んでしちゃって…」

最初は鷹への仕返しの気持ちもあっただけ…途中から本当に気持ちが入っちゃって…。」

自分でも何言ってるか解んない。

ただ昨日の気持ちを知って欲しかった。

最初は仕返しの気持ちが強かった。

でも途中からは、自分でも止められないほどマネージャーを欲した。仕返しなんてどうでも良くなって、ただ私がマネージャーに抱か

れたかった。

好きかは分からない。でもあの時は少なくとも…気持ちが入ってた。

言ってて涙がこぼれてくる。

悔しいのか悲しいのか分からない。ただ胸の奥が熱い。

「…由子、ごめんな…ありがとう。」

マネージャーは呟いて、席を立ち私を抱きしめた。

温かく…包み込んでくれる優しい胸だった。

ピンポン！ピンポン！

玄関のチャイムが鳴る。誰か来た？

私は一瞬で我に返り、マネージャーの胸の中から出る。

「誰だ？こんな朝早く…うわぁ！！」

インターホンを覗きこんだマネージャーがビクリしてる。一体誰？

「たっ鷹だ。」

マネージャーは私の方を見て怖い顔で誰が来たか教えてくれた。

「鷹が…来たの？」

「ああ。どうする？」

「えっどうする…て？」

「居留守使う？それとも…殴ってくる？」

「なっ殴る？」

「どうする？由さんの言うとおりにするけど…」

由子から由さんに戻っちゃった…って、そんな事考えてる場合じゃない！

どうしよう！たっ鷹が来た！！

「とっ取り合えず部屋で話をします。入れて下さい。」

「…では何かあったら直ぐに呼んで？」

「はい。」

マナージャーは鷹を家の中に招き入れ、自分は自室に入る。
私は自分の部屋に鷹を招き、ドアを閉めた。

「…どうしたの？こんな朝早く…」

「ごめん、どうしても会いたくて…」

「時間欲しいって言ったじゃない。」

「ああ、分かっている。でも…今離れたら二度とお前に触れられない
様な気がして…」

「…鷹。」

「なあ、本当に佳苗さんとは何も無いんだよ！信じてくれないか」

「いつでも！私見ちゃったし…」

「見たって何を見ただよ！俺が佳苗を抱きしめてたか？キスでも
してたか？」

「そっそれは…、でも！佳苗さん上に乗ってたし変な事言ってたし
！」

「それは佳苗さんが言ってた事だろ？俺じゃない。佳苗さんの嘘だ。」

「なっ何で嘘なんて言うの？男だと思ってる私に鷹との事嘘言わな
くたって。」

「それは…俺がお前の話しばっかりしたり、お前との約束ばかり優
先するからだって言ってた。」

「…は？」

「佳苗さんから聞いた。自分が誘っても乗って来ないのにお前とは
頻繁に会ってるし…」

男だと分かっても嫉妬したって。

俺が寝てる時に悪戯しようとしたらお前と鉢合わせして…つい嘘
ついたって。」

「…本当？本当に佳苗さんの嘘なの？」

「信じて…くれ。頼むから…」

鷹のこんな真剣な顔、今まで見た事無い。

鷹の言ってる事は本当なんだろう。

鷹：浮気してた訳じゃないさそう。良かった！私は裏切られた訳じゃない！

「分かった、信じる。信じる事にする。」

「本当か？」

「うん。本当。」

「…よつよかったあ。」

へたへたと床に座り込む鷹。

「たつ鷹？大丈夫？」

私が手を差し出すと鷹は私の手を握り自分の方へ引っ張った。

「きやあ！」

ビックリして思わず声が出ちゃった。

「良かった…本当に良かった。」

鷹は私の胸に顔を埋め、抱きしめて震えてる。

「鷹：大丈夫？」

「んっ、もう大丈夫。」

鷹は顔を上げ私の顔を見る。

「由子：俺はお前の事だけ愛してるから。」

愛してる…初めて言われた。ドキッとする。

鷹は私に顔を近づけて…キスをしてきた。

その時だった。

「由さん！大丈夫ですか！！」

バンツ！と大きな音を立てて、マネージャーが部屋に飛び込んできた。

私は慌てて鷹から離れる。

驚き過ぎて声も出ない。鷹もビックリして固まってる。

「…すみません。悲鳴が聞こえた気がしたので…」

一瞬凄惨な形相をしていたマネージャー、今は悲しそうな顔をしてる。

「あっそれは俺がコイツの事脅かしちゃったダケで！いつ今のキスも冗談なんで！」

鷹は慌てて良い訳をする。

「そっか、鷹は知らないんだよね…マネージャーは私の正体を知ってるって。」

「そうですか、では仲直り出来たんですね…。由さんそろそろスタジオに行かないと…」

「あっ、はい。直ぐに支度します。」

「では私は車で待っているの、家の戸締りをお願いします。」

「はっはい。分かりました。」

マネージャーは今にも泣きそうな顔で部屋を出て行った。

胸の奥がチクンと痛む。

「…ぷはー！あぶねー！…男同士って誤解されたかな？」

「だっ大丈夫だと思うよ？ほっほら私急がないといけないから…今日、は、ね？」

「あっああ、分かった。じゃあまたな？」

鷹はニコニコしながら私を抱きしめ家を出て行った。

一人になった部屋、マネージャーの香りがする部屋。

さっきのマネージャーの表情が頭から離れない。

マネージャー、凄く悲しそうな顔してた。

私：昨日の今日でマネージャーに酷い仕打ちしちゃったんじゃない…

さっきまで気持ちの入った行為だったって言うたのに、鷹とキスしてる所見られるなんて…

痛い…胸の奥が物凄く痛い。

この痛みは何？私を優しく抱きしめてくれたあの人に対する罪悪感？

それとも…

番外編く兄として男としてく（前書き）

お兄ちゃんのお持ちち…番外編です。

お兄ちゃんのお持ちちは一体どうなんだろ。

番外編　兄として男として

由子：俺の妹。俺の思い人：

俺は由子の為に自らを殺し、そしてまたお前の前に現れた。
そう、お前を兄でなく男として守れる様に…

由子：お前は気付いてたよな、俺の気持ちに。

何時だったか：俺はお前に妹以上の愛情を持ってしまったんだ。
いけないと知りながら、お前は俺の全てになってしまったんだ…。

前にお前を困らせてしまった時、そう：俺が無理やりお前を押さえつけたあの日：

お前：泣いちゃったよな？怖かったろ？

でもな？俺：あの時は本当にお前を抱きたかったんだ。

抱いて：俺以外の男の事なんて忘れさせてやりたかった。

：由子、お前を殺して俺も死のうとさえ思ったんだ。

馬鹿な事考えたよな？ごめん。

でも：お前が好きでも無い男に抱かれるのは我慢出来なかった。

あの後、お前が出かけた後な：俺はアイツを殺しに行こうかと思っ
てたんだ本当に。

でも：俺が犯罪者になったらお前、悲しむよな？
だから我慢出来た。俺を動かすのは全てお前次第なんだよ。

俺：思いついたんだ。

俺の特技を生かして、別人としてお前と生きていけないかって
でも、化粧じゃお前は誤魔化せないだろ？

そんな時にあの事故。正直チャンスだと喜んだよ。

俺ね…嘔吐いたんだお前に。

俺の事兄貴じゃないかって聞いただろ？

それね…半分本当なんだ。

留学時代に知り合った友人。

家族もなく友人もない徹。俺ね…ソイツの身元保証人みたいな物だったんだよ。

そして徹が死んだと連絡が来た時、とっさに入れ替わる事を思いついたんだ。

チャンスだった。

俺は死んだ振りをして、別人に生まれ変わった。

事故で傷ついた顔は整形し別人に…あとは化粧で誤魔化した。

徹の遺体と共に受け取った身分証明書…これを自分の物にしたんだ。

今度こそ…今度こそお前を陰から見守る筈だったのにな。

俺…お前とあんな関係になっちまった…

俺、自分が抑えられなかった。

目の前で弱ってるお前を慰めてやりたかった。

そしたらお前は俺を求めてくれた…

俺…お前と関係した事、後悔なんてしない。

たとえお前に嫌われても、俺はあの日を後悔しない。

だから…落ち込まないで？

俺…何もなかった様に接するから。

悲しまないで？

俺一人が罪を背負えばいいんだから…

お前は好きな風に生きて行けばいい。

俺が必要なら俺は何だってしてやる。

俺が要らなくなったら、俺はお前の前から消えてあげる。

だから…もう少しだけ傍に居させて？

お前が俺を必要としなくなるその日まで。

俺はいつでもお前の為だけに生きてあげる。

お前は俺の全てなんだから…

番外編く兄として男としてく（後書き）

やっぱりマネージャーはお兄ちゃんでしたね！
由子の為に自分の殺すお兄ちゃんの愛。
その愛は由子の心に届くのでしょうか…

第四十一章（前書き）

お待たせしてしまい、申し訳ありません。

第四十一章

あの気持ちは何だったのだろう。

鷹とのキスをマネージャーに見られて…心が痛んだ。

私は一体どうしちゃったんだろう。

マネージャが待つ地下駐車場に向かう。

何か顔合わせ辛いなあ…。

「お待たせしました。」

ドアを開け、車に乗り込む。

「いいえ、あの…仲直りできたんですか？」

「えっ？あの…はい。」

顔が見れない。今朝まで貴方の腕に抱かれていたのに…。

自分から望んで貴方と寝ましたなんて言った後、鷹との事を見られるなんて。

正直どういう顔をしていいのか分からない。

「由さん、気にしないで下さいね？そんな顔…しないで下さい。」

「えっ？私…変な顔してましたか？」

やだ！気付かれない様にしてたつもりなのに…。

「泣きそうな顔…してますよ？…ふっ、だから気にしないで下さい。

もう昨日の事は、お互い忘れましょう。」

「マネージャー、ごめんなさい。私…」

言葉が出ない。私自信が自分の事分らないのに…整理付いてないのに。

「ほら、そんな顔しないで？貴方はKJなんですよ？

女の子皆が憧れるアイドルKJのメンバーなんですから。」

「…はい。自覚が足りなくてすいません。」

そうだ、私は芸能人になったんだ。

こんな凹んだ顔をしてちゃ駄目だ。

これは、お兄ちゃんが私に用意してくれた仕事なんだから…

程なくして車は仕事場に着く。

マネージャーと一緒に局に入って、控室で準備をする。

今日はドラマ撮影の続き、男として主演しているドラマ。

もうかなり撮影は進んでいて、今日はクライマックスシーンの撮影。

相手役の女優とのキスシーンがある。

念入りに歯磨きをして撮影に臨んだ。

「今日は宜しくお願いしまーす！」

相手役の女の子、狩野 かりの 沙希 さき が現場に入る。

「お願いします。」

私も沙希に挨拶をする。

「由さん、今日はキスシーンですね！リードして下さい。」

キャピツとした態度。超ぶりっこだ。

「えっ？ああ…こちらこそお願いします。」

人前でキスするなんて、まあ相手は女の子だからマシかもしれないけど。

「やだあ！男の人がリードして下さいよ！私からなんて…恥ずかしい。」

「そっそうだね。あの俺：頑張るから。」

「ふふっ。今からでも予行練習：します？」

沙希は口を尖らせて私に迫ってくる。

「いつ今はちよっと…。」

動揺しますよ。いくら同性とはいえ可愛い顔で迫られたら…

「あはっ！冗談ですってば！由さんのエッチ。」

沙希は笑いながらセツトに入って行く。

本当、勘弁してよね。

「では、本番いきまーす。5、4、3…。」

カウントが始まり本番。

「叶…もう別れるしかないの？貴方は…いいの？」

沙希のセリフ。

「別れたくなんかない！お前とずっと…」

私のセリフ。

「なら！何で？…。もういい…私は彼と一緒に行くわ…。」

沙希は後ろを向いて歩きだす。

「待てよ！…くっ、おい！！」

私は止まらない沙希の手を掴み引き寄せ…ここだあ！

ブチュ　　！！！！

沙希の口にキスをする。

…えっと、ここは大胆に思いをぶつける感じでって言われたっけな？
なら…こうかしら。

沙希の口をそつと舌先で開き、自分の舌を突っ込んだ。

沙希の身体はビククツと跳ねあがったが、沙希も女優。そのまま気丈に演技を続ける。

…これで正解？でもOKが出ない…。

もっもつと官能的にした方がいいのかしら…こっこれでどうだ！！！！

差し入れた下を、沙希に絡ませる。
もう画面からでもディープなの分かるだろうなあ…。ちょっと嫌だなあ。

でも私は女優！…じゃなくて俳優なのよ！ちゃんと監督の期待に応えなくちゃ！！

「…カーーーーーー！ト！！」

監督の声がして、沙希から離れる。

「…沙希さん、ありがと…あれ、沙希さん？大丈夫？」

沙希が地面に座り込み、顔を真っ赤にしている。

そうだよ、いくら女優とはいえ人前で男とキスなんて…

私からすれば同性だから、まだ多少気が楽だけど…

「ちよつと！由さん！」

監督から声が掛る。

「あつ、はい！…沙希さん監督が呼んでるから行くね？」

私は座り込んで居る沙希の傍を離れ、監督に向かって走って行く。

「…あの監督、どうでしたか？」

「あのさ、大胆には言ったけど…あれは大胆過ぎるよ…。」

「えっ？大胆過ぎ？」

「あのさ、激しく舌を突っ込めって事じゃない。抱きしめたり苦悶の表情だったり…」

あれじゃ放送できないよ…。これは学園ドラマ！深夜じゃないんだから。」

「…うわ！すみません！勘違いしちゃって！」

はっ恥ずかしい！激しくキスしろって意味じゃなかったのね！

…沙希さん、ごめん！

「まあ、綺麗な女優さんとキスして興奮するのは仕方ないけど、そ

れはプライベートでね！」

「うう、すみません。もう一回やらせて下さい。」

私はさっきの立位置に戻る。

「沙希さん…、俺勘違いしちゃって…。ごめんね？」

沙希に謝る。だからもう一回チャンス下さい！

「…私は別に。結構感じちゃったし！あんな情熱的なのは今度二人でね！」

流石女優さんだ。共演者に気まで使って…

「じゃあ、もう一回いきまーす。5、4、3…。」

再び気合いを入れる。

「叶…もう別れるしかないの？貴方は…いいの？」

沙希のセリフ。

「別れたくなんかない！お前とずっと…。」

私のセリフ。

「なら！何で？…。もういい…私は彼と一緒に行くわ…。」

沙希はさっきと同じ様に、後ろを向いて歩きだす。

よし！今度こそ！

「待てよ！…くっ、おい！！」

私は止まらない沙希の手を掴み…今度は軽くキス…そして抱きしめて…苦悶の表情！

「…んー！OKOKOK！ばっちりOKえ！」

監督のOKが出る。

そして撮影は着々と進み…いよいよ最後のシーン。
実は叶は病気で、死んでしまうと言っただ。

暫くして会場につくと、中は既に盛り上がった。
音楽が鳴り、大声で笑う声が聞こえる。

うーん、楽しそう！早く混ざりたい！！

私はドリンクを受け取り、監督の所に挨拶に行く。

「あの監督、お疲れ様でした！」

「おお！由君！君も良く頑張ったね！最初はどうかと思ったんだが…

しかし、今日の君のキスは凄かったねえ！！」

ガハガハと笑う監督。もう…言わないで下さい。

「もう、監督つてば酔いすぎ！」

隣で監督に媚を売っているのは沙希。次のドラマも使って欲しいのだろう。

「いやいや！スマン！君も由くんのキスに腰砕けになってたんなあ！

なあ、やっぱり凄かったかい？あのキスは。感じちゃったかい？ガハガハ！！！」

セクハラ大爆発の監督。すでにかんりの酒を飲んでいるのか顔が真っ赤だ。

「やだあ！そんな私の口から言えないですよ！気持ち良かったなんて…あら、言っちゃった。」

「ガハガハ！沙希君もやるなあ！ほら、もっと飲みなさい！飲みなさい！」

監督は沙希のグラスに酒を注ぎ、そして今度は私のグラスにも…

「ほら、今日の主役が飲まないなんて駄目だろう！ほら！早く飲んで！」

「はっはい！頂きます。」

注がれたウイスキーを一気に流し込む。

…きつキツイ！気持ち悪いよー！。

「おお！良い飲みっぷりじゃないか！ほら！もっと飲んでくれよ！ガハガハ！」

さらにウイスキーをグラスに注いでくる。

…もう飲みたくないよ。でも飲むのも仕事！頑張ろう！

「…つぶはああ！ご馳走様です！」

嫌々ながらも、取り合えず胃に流し込む。

…うええ、酔っぱらいそう。

「本当に若いだけあって凄いなあ！ほら、遠慮せずにもっと飲みなさい！」

さらにグラスに注がれる。もう…限界ですよ。

でも、これだけ。これ飲んだら逃げよう！

「じゃあこれだけ頂きます。明日も仕事があるので…。」

グラスに口を付けて…グイッ！

うえええ、本当に不味い！でも…あと少し…

「ふーっ、ふーっ…行きまーす！」

大げさなアクションで流し込む。僕は飲んでますよーってアピールする為に。

…でも、すでに2杯のウイスキーは意外にも私の神経を緩くしちゃったみたいで…

「あつ！…うわあ、冷たい…。」

口から零れた酒が胸元を大胆に濡らす。…お酒臭ーい！

「おお、やったなあ！勿体ない！」

監督は私の失敗を見てガハガハ笑っている。アンタねえ…

「すみません。着替えてきます。」

私はチャンスとばかりに席から離れる。

もう監督の傍に近寄るのは辞めた方が良さそうだ。

「…由さん、こちらです。」

傍で見ていたマネージャーが私の手を引き裏に連れて行く。

「由さん、もう監督には近づかない方がいいですよ？」

あんな飲み方したら急性アルコール中毒で死んじゃいます。」

マネージャーの言葉が私の耳から入り…抜けて行く。

もう酔っちゃったもーん！

「…由さん、視点が定まってるませんよ？とにかく着替えましょう。」

マネージャーは辺りをキョロキョロして確認。

人氣が無いのを確認すると、私の服を脱がしてくれた。

うふっ、昔みたいだね？お兄ちゃん…。

「ねえ、マネージャー？何で本当の事言ってくれないの？」

酔っぱらって…つい本音が出てしまう。

「由さん？いきなり何を言うんです？」

「…お兄ちゃん、忘れちゃった？昔…着替えさせてくれたよね？」

「…私はお兄さんじゃ…。」

何でそんなに否定するの？何で自分は兄だと言ってくれないの？

私は分かった上で抱かれたのに…何でそうだと言ってくれないの？

「お兄ちゃん…私の事嫌いな？何で言ってくれないの？」

自然と涙が出てきて…マネージャーを見つめる。

「…由さん、もう止めましょう。貴方は酔って…。」

「何で！何で言ってくれないの！私はお兄ちゃんだと分かった上で昨日…」

お兄ちゃんだから抱かれたのに！何で？」

口にして初めて分かった。自分の気持ちが…

私はお兄ちゃんだから抱かれたんだ。

鷹に傷つけられたからじゃない！お兄ちゃんが…何時も守ってくれたお兄ちゃんだから…

マネージャーの胸に抱きつく。

お兄ちゃん…正直に言って？認めて？

そうすれば私は…どんな辛い事でも受け入れる。
貴方が私を受け入れてくれれば…私は…

「由子…お前…何時から？」

「お兄ちゃん…。」

「何時から気付いてた？俺の事…。」

「認めた？今…認めたよね？」

「…ご飯。あれはうちの味だった。それに…お兄ちゃんのキス。同じだった。」

「…はあ、俺は何の為に死んだ振りまで…。」

「お兄ちゃん…、もう離れないでね？」

「…お前、それがどういう意味だか解って言ってるのか？俺たち…」

「兄弟でもいい。大事なものは気持ちでしょ？」

「…鷹は？仲直りしたんだろう？」

「…した。でも鷹にキスされてお兄ちゃんに見られて…恥ずかしさより辛さの方が勝ってて…」

その時気付いた。自分の気持ち…。」

そう、あの痛みは罪悪感だった。

鷹にじゃなくて、お兄ちゃんに…

それが解れば、自分の気持ちも分かってくる。何で罪悪感を感じたか…

自分に嘘を付いているから…罪悪感なんか感じたんだ。

「由子、辛いぞ?」

「大丈夫、お兄ちゃん…傍に居てくれるでしょ?」

「当たり前だ。俺はお前の物だから…。」

お兄ちゃんからのキス。

これから待ち受けるであろう困難を、二人で分かち合う為に…
二人で立ち向かっていく為に…

きつく抱き合い、お互いを励まし合う。

大丈夫…傍に居るから…

私達は気付かなかった。

まさかこれを人に聞かれているなんて…

床に紙が落ちる。

電話番号が書かれた小さなメモが。

「…信じられない。」

小さく呟く女…沙希。

沙希は私に電話番号を教えようと私の後をつけていた。
そこで目撃した二人の抱擁。

沙希のプライドは傷つき、嫉妬の心が燃え上がる。

「…でも、使えそうね…由…くん。」

沙希は不敵に笑い、私達の前に姿を現した…

第四十一章（後書き）

お兄ちゃんだと白状しましたね！これで二人は順調に…とはいかない様ですね。

沙希が二人の前に姿を現して…どうなるんでしょう。

第四十二章

「でも、使えそうね…由くん。」

沙希が不気味な笑いを浮かべながら私達の前に歩いてくる。

私達は歩いてくる沙希に気付いて、すぐ離れたけど…遅かった。

「由さん、今日はお疲れ様でしたあ！」

「さっ沙希さん、お疲れ様です。」

ふふつと笑う沙希。何を考えてるのか分からない。

「あのね、折り入って相談があるんだけど…由君ちよつといい？」

「相談ですか？あの…俺でいいんですか？」

「ええ！貴方じゃなきゃ駄目なの…。」

「なら…いいですよ？」

沙希が私の腕に纏わりついてくる。

「では私はフロアでお待ちしてます。」

マナー…、お兄ちゃん表に出て行ってしまった。

「あの、俺に相談って？」

沙希と二人での会話。こんな所写真にでも撮られたら！

早く皆の所に戻らないと…

「あのね…私、貴方に折り入ってお願いがあつて来たの。」

「お願い…ですか？」

「うん、あのね…私、KJの大ファンなのよね！」

「有難うございます！貴方みたいな綺麗な人にファンだなんて言っ

て貰って…。」

ファンが増えるのは嬉しい事。私だってKJの事大切に思ってるし…

沙希は急に真顔になり…恐ろしい事を口走り始めた。

「あのね、貴方をお願いと言うのは…私をKJのメンバーに紹介して貰いたって事なの。」

「…紹介ですか？あの…。」

紹介って、貴方の事はメンバー全員知ってると思いますけど…

「そう、紹介よ。」

沙希は笑う。笑顔の裏にどんな考えがあるのか分かり辛い。

「あの、紹介って普通に沙希さんの事を共演者って紹介すればいいの？

なら今度歌番組の撮影があるからスタジオ来る？」

別にメンバーに紹介する位なら…サインとかあげれば満足でしょ？

「…普通に紹介されても嬉しくないんだけど？私ね…KOUJIEの大ファンなの。」

KOUJIEと付き合いきたいの。」

「つつ付き合いたいんですか？それは…。」

紹介する位なら出来るけど…私が付き合ってあげてと言ってもKOUJIEさんが納得するか…

私に好意を持ってくれてる様だったし…ちょい無理だよね。

「あの、沙希さんを紹介するのは簡単ですけど、男女の事は二人の事だし…。」

私はやんわり断る。だって私には無理だから…。

「…そう、でもね…貴方に断る権利は無いと思うのだけど…。」

私ね今…聞いちゃったのよ？貴方とマネージャーの関係。」

ニヤリと笑う沙希。…まさか全部？

「あの…、俺とマネージャーの関係って…何か変ですか？」

どこまで知ってるの？

私は沙希から聞きだそうとする。

「ふつ、何かですって？それを私に言わせたいの？由…子ちゃん。」
私の名前…沙希は全て知って…

「あの、私とマネージャーは怪しい関係じゃないです。それに名前も。」

顔が女つぱいから皆に子を付けられて…冗談なんですよ？」

我ながら苦しい良い訳。でも…お兄ちゃんとの関係は絶対知られたくない。

「あのさ、全部知ってるって言うてんでしょ！さっき聞いてたの貴方達の会話！」

…女なの隠してただけじゃなくて、まさか兄弟で…汚いわね。」

「汚い…そこまで言う？私とお兄ちゃんは…！！」

「あら、目の前で認めたのね！本当にヤラシイ人ね。」

汚い…私達の事汚いって。

確かに許されるとは思って無いけど…でも汚いなんて言わなくたって！

何なの…この女は。

「…話しは分かってくれた？私はK O U J I だけじゃなくてK J のメンバー全員と寝たいのよ！」

貴方はそれを手助けして頂戴。」

「手助け？手助けって…。」

「だから！貴方は私とメンバーが二人きりになれる状況を作ってくれればいい。」

まあ、私と二人きりになった男で落ちなかった男は居ないから…。

「
自信タップリの沙希。」

「私にメンバーを売って言うの？そんなの酷い！」

「酷いのは貴方じゃない！私にあんなキスして…しかも男だなんて

…。」

「沙希さん？それって…。」

「とにかく！メンバーとの事お願いね？私に逆らったら…全部マスコミに流すから。」

「…沙希さん。」

沙希は本気だ。目が真剣だから…

私はメンバーを売らなくちゃけないの？

J E YさんやK A J Iさんはともかく、K O U J Iさんが簡単に落ちるとは思えない。

それに雪…、やっぱり雪には汚れて欲しく無い。

雪は私を励ましてくれて支えてくれた大切な人。

その人を沙希みたいな女に汚されたくない！

でも協力しないと沙希はマスコミに…それは絶対に嫌！

折角K Jとして売れ始めて、それにお兄ちゃんとの事も…

今まで頑張つて来た事を全部白紙に戻すなんて無理！

… K O U J Iさんとのアレが終つて、でもまた脅される日が続くの？
なんで？何で私ばかり…

メンバーを売るか自分を売るか…簡単には決められない。

ならあの二人を沙希に紹介して…妥協して貰うしかない。

私は沙希と強制的に連絡先を交換させられ、フロアーに戻って行った。

… お兄ちゃんに相談する？いや… もうお兄ちゃんを失うのは嫌。

K O U J Iさんとの時は、私が対象だったからバレてしまった。
でも今回はメンバーの事。私さえ黙っていれば…

K A J IさんJ E Yさん御免なさい。生贄になって下さい！

打ち上げ会場に戻った私は、酷い表情をしていたらしい。

お兄ちゃんは私の傍にすぐさま来て、もう帰ろうと言ってくれた。何があったのか聞かれると思ったけど、お兄ちゃんは何も言わなかった。

家に帰っても気分が晴れる事は無かった。

お兄ちゃんが好物を作ってくれても、食事が喉を通らない程。私の所為でメンバーに迷惑掛けちゃうんだろうし…辛いよ。

そして何事も無く数日が過ぎて…今日は歌番組の収録だった。普段は個別に忙しいメンバー、今日は久々の全員集合だった。

「お久しぶりです！」

後ろめたい気持ちを隠して、皆に挨拶をする。

「おお！由いー！久しぶりいー！」

相変わらず元気一杯の雪。

「うん！久しぶり！雪のドラマ見たよ！良い演技だったね！」

雪も私と同じように最近はドラマ撮影で忙しそうだったの。

雪も学園物で、元気一杯のスポーツ少年の役。雪にピッタリのイメージだね！

「由のドラマも見たよ！由すげーじゃん！超純情少年！いいなああの役。」

「そお？でも死んじゃう役だし…。」

「まじ？叶って死んじゃうのぉ？ショックー！」

あら、まだ最終回放送されてないんだった。ネタばれ？

「ごめん！言っちゃった…。」

「むーっ。別にいいけどさあ…んで、沙希ちゃんとはどうなるの？」

「さっ沙希？」

「うん、何か役のイメージ弱くて役名出てこないんだけど、あの沙

希ちゃんって超俺の好みだし！

ねえ俺に紹介してよ！」

「…紹介して欲しいの？」

「えっ？まじ紹介してくれんの？そりゃ今一押しだし男なら皆あの手は好きでしょ！」

「そうなの？あんな女…雪もタイプなんだ…。」

シヨックなんですけど。雪の口から沙希の名前は聞きたく無かった。まあ見た目は本当に可愛いと思うけど…人の弱みを握って脅すような女なのよ！

雪…騙されないで。

雪に言いたい！でも言えないよね…

雪…お願い、間違えないで！

たとえ世界中の男が沙希と寝ても、貴方は汚れないでいて。私に言えた義理じゃないのは分かる。でも貴方には綺麗なままできて欲しいの。

雪、お願いだから失望させないでね。

収録準備は進み、リハーサルに入る。

メンバー全員で舞台に立ち、そして皆で歌う。

うん、やっぱり気持ち良かもしれない、皆の前で歌うのは。

お兄ちゃんから紹介され、嫌々始めた仕事だった。

でもメンバー達と一緒に過ごして、タレント兼アイドルになって…

人前で歌う事、人前で演じる事の楽しさを知ってしまった。

今の私にとって芸能人で居る事はとても大事な事になっている。

やっぱり辞めたくない。KJのメンバーとして皆と一緒に歌っていたい。

それを邪魔してくる沙希…私は貴方が憎いよ。
どうか放っておいて。

でも、私の願いは届かない。

「おいっ！由見てみるよ！あそこおー！」

リハーサルを終えた私達は、スタジオの隅で休んでいたんだけど、
何故か雪が興奮し初めて…スタジオの入口を指差して居る。

「なに？大物でも来たの？」

あまりにも雪が興奮するから…大物芸能人が来たのかと思った。
でも、違った。

「由い、何言ってるんだよ！ほらあそこ！沙希だよ！さ・き！」

沙希…もしかして本当に来たの？

いくら私が収録に遊びに来いと言ったからって、それは挑発を受ける前の話。

今更スタジオに来るなんて…一体何がしたいの？

「ああ！由くん！遊びに来ちゃった！」

思い切り笑顔の沙希が私の傍に駆け足で来る。

「…沙希さん、本当に来たんですね。」

「やだあ！由くんから言っただんじやない！遊びに来いって！」

「…それは…」

私と沙希の不穏な空気に、和ませようと口を挟んできたのは雪。

「おいっ！由！俺たちにも紹介してくれよ！」

ちよっ！余計な事言わないでよ！

私は貴方達を守りたいのに…

「沙希でーす！貴方は雪君でしょ？超カッコイイ！！！」

「まじでえ！俺超嬉しい！改めまして雪です！宜しくね！！」

雪はデレツとした顔で沙希に手を差し出す。

そして沙希は、私の方をチラッと見てから雪の手を握り返す。

やめて！そう叫びたかった。

別に私は雪の彼女でも無いから、そんな事この場で言えやしない。
だから、私は下唇を思い切り噛んでその場を耐えた。

…やだ、もう離さないよ！！

そして沙希は次々にメンバーに挨拶していく。自ら握手を求めて…

「沙希でーす！宜しく願います！」

「TVより可愛いじゃん！俺はK A J I。宜しくね！」

「沙希です！これから宜しく！」

「…J E Yです。」

…J E Yさんの好みは沙希では無かった様で…握手も嫌々していた様だ。

沙希ざまあ！！

そして沙希はK O U J Iさんの前に立つ。

「沙希でーす！K O U J Iさんの大ファンなんです！」

「…そう。」

沙希は今までより気合いの入った笑顔でK O U J Iさんに話しかける。

でも…K O U J Iさんの表情は明らかに不機嫌だ。

差し出された手を握り返す事も無く、ただ短い一言しか会話しない。

正直…胸がスツとした。

沙希の方もそれを感じた様で…ニコリと笑ってスタジオから出て行

ってしまった。

「…KOUJI、お前もうちよつと愛想よく出来ないの？一応同じ業界人だしさあ。」

KAJIさんが注意する。

「そうだ、俺なんて握手まで…。」

JEYさんも茶々を入れる。

「…あんな女と挨拶を交わすなんて、あり得ない。」

KOUJIさんは、キツパリと言い切る。

どうやら沙希の事を入ったのは、雪とKAJIさんのみ。

JEYさんとKOUJIさんは眼中に無い様だ。

沙希…この二人落せるモンなら落してみなさいよ!!!

第四十二章（後書き）

もう少し鷹は蚊帳の外になりそうです。
でも忘れた訳じゃないので我慢してね鷹。

第四十三章

KOUJIさんとJEYさんの態度に、私は胸がスカツとした。
沙希…そんなに自信があるならこの二人…落してみなさいよ！

私は本番まで楽屋に戻る事にした。

そして皆で雑談が始まったんだけど…話題は当然沙希の事。
雪が先頭を切って話し始める。

「なあー！沙希ちゃんってTVで見るより超かわいいな！」

雪が私に話しかけてくる。

「えっ？んまあ…顔はね。」

「何何？ヤキモチ？俺に沙希ちゃん取られると思ってるの？」

「なっ！そんなんじゃ！ただ…俺は…」

ヤキモチなのかな？勿論雪を取られる事に対してだけど。

でも…なんか違う気がする。

雪を取られたくないのは本当だけど…私は雪を愛してまではいない。
まっ前は…本当に好きだったよ？でも…今の私にはお兄ちゃんが
居る。

でも沙希には取られたくない。

これって…私の独占欲なのかな？私の我儘？

正直、雪だけじゃなくてKAJIさんもJEYさんもKOUJIさ
んも…

皆沙希と寝て欲しくない。

沙希を抱く事によって、大切なメンバーが汚れる気がして…

大切なメンバーを騙して居るみたいで…

私の秘密が沙希にバレた所為で、メンバー全員を人身御供にして
しまった。

私の秘密の所為で…

「どうした？顔色が悪いが…。」

KOUJIさんが私を気遣ってくれる。

KOUJIさん…ごめんなさい。

最初是最悪な関係だったKOUJIさん。

私を無理やり抱いて、秘密を盾に私を脅して…

何度身体を奪われたか分からない。

でも、繰り返す内にKOUJIさんに対する感情は少し変わって行った気がする。

憎しみだけの関係、でも最後までそうだった？

うつん、違うと思う。

憎しみが消えた訳じゃない。でも…ほんの少し愛情が沸いて居たと思う。

だから逃げないで抱かれていたのかも知れない。

「KOUJIさん…ごめんなさい。」

償いの言葉が勝手に口から飛び出す。

「…はあ？」

意味…分からないよね？

うん、それでいいの。

意味は私だけが解ってればいい。

そう…私だけが。

暫くしてADさんが楽屋にやってくる。

「KJさん、そろそろスタンバイの方を宜しく願います。」

「へーい。じゃあ…久々に暴れますか！」

珍しくクールなJ E Yさんが皆に声を掛ける。

私はゴクンツと唾を飲み、立ち上がる。

一生懸命に歌おう。

そう…後悔しない様に…

私は決めていた。

メンバーを差し出す位なら…自分で身を引こうと。

最初は女好きのメンバーに犠牲になって貰う予定だった。

でも…それは違うと思う。

一度でもあんな女抱いてしまったら…きっと一生付きまとわれる。

そして暴露本とか出版されちゃうかもしれない。

そんなの…絶対に許さない！

沙希に頼んでみよう…私は引退するからと。

そう、引退すれば…沙希も私にKJを紹介しろなんて無理には言えないだろう。

だって、脅すネタが無くなるもん。

…そうよ、私が引退すれば、沙希からメンバーを守れるかもしれない。

嫌だ…引退なんて。

でも、元々こうなったのは私の所為だし。けじめ…つけなくちゃね。

歌番組は順調に収録が進んでいく。

そして司会者に紹介され、メンバーは舞台の上でスタンバイをする。

…これが最後の仕事になるかもしれない。

そう思うと足が震えてくる。

ガタガタと…止まらない。

「由…。」

隣から雪の音がする。

「落ちつけ。大丈夫だから。」

「…うつうん。」

「…ぷつ。ほら、緊張しないの！失敗しても…俺たちが助けてやるから。」

「雪…。」

雪の言葉に気持ち落ち着く。

「…由。」

反対からKOUJIさんの声がする。

「…心配するな。俺たちが居るだろ。」

低いけど綺麗な声で私に話しかけてくる。

「…はい。」

「OK！いくぞ！」

KOUJIさんの声は私の気持ちを奮い立たせてくれる。

そしてKAJIさんにJEYさんも。

言葉は交わさなくとも、目が合えば大丈夫だと頷いてくれる。

…こんな、こんなに温かいメンバーを私は…

本番はスタートを切る。

力一杯声を出し、遅れない様に踊りを合わせる。

息が苦しくても…身体が重くても…私は必死にメンバーに着いていた。

「ではまた来週！」

司会のタレントが番組を閉める。

私達は手を振りながらフェードアウト。

…終わった。

私達は楽屋に戻り、帰宅する準備をする。

お兄ちゃんと家に帰ろうとした時…私の前に沙希が現れた。

「由君！今日もカッコ良かった！」

「…有難うございます。」

「ねえ…、これから二人で出掛けない？」

「あの…それは…」

何？今日誰か一人差し出せと言うの？

決心はしたけど…こんなに早く？

お兄ちゃんは私の顔を見て、助け舟出そうか？と目で言ってくれる。
でも…私は首を少しだけ横に振った。

…大丈夫。

このままメンバーを沙希に差し出す訳にはいかない。
遅れば遅れるだけ…沙希の行為に拍車を掛ける筈。

「…では、行きましようか沙希さん。」

「よかったあ！じゃあ…私の車で出かけようよ！」

「…はい。」

私は沙希の車でスタジオから出る。

沙希の車…と言っても沙希は免許が無い為、沙希のマネージャーも
同伴。

KJの為には、まずマネージャーの口を封じなくちゃ！

いくら私は引退するから！と言っても、マネージャーに聞かれては
元も子もない。

「…沙希さん、散歩でもしませんか？」

私は沙希に合図を送る。

マネージャーの方に一瞬目線を送り、沙希に知らせる。

沙希も一瞬マネージャーに目線を送り…ニヤッと笑う。

「いいわね！でも、公園だと人目に付くし…私の部屋はどう？」

「沙希さんの家…ですか？」

私は沙希の提案に、頭を上下に軽く振り答える。

「ちよつ！沙希ちゃん？」

慌てたのは沙希のマネージャー。

「大丈夫だって！由君は男の子が好きなのよ？」
なっ何言ってんだこの女。

確かに男のお兄ちゃんが好きだけど…でもそんな事言ったら…バレちゃう！

「…そうなの？なら…見られない様に入るによ？」

…マネージャーが天然系で良かった。

ホモセクシャルにされちゃったけど、バレるよりマシだ。

車は沙希のマンションに着く。

マネージャーは私達を降ろして帰宅。

私は沙希の後に付いてマンションの中に入って行った。でも…

……私達は気付かなかった。

一瞬だけ光ったフラッシュに…

第四十三章（後書き）

いよいよ直接対決か？

引退を決めた由子ちゃんのは気持ちは沙希に届くのでしょうか…

第四十四章

沙希のマンションに入って行く。写真を撮られている事も気付かずに…

「ここが私の部屋。さあどうぞ。」

沙希はドアを開け私を中に誘導する。

「…失礼します。」

私は靴を揃えて部屋の中に入って行つた。

沙希の部屋、玄関からして少女趣味。

全体がピンクに統一されている。

でも、嫌みの無い感じがするのは沙希のセンスかもしれない。
いいなあ…、これぞ女の子の部屋って感じ。

「由ちゃ…、由君はここに座って？」

沙希はソファ―を指差す。そして私は沙希の言つとおり素直に腰を降ろす。

沙希は台所に立ち、何やら飲み物を作っている様だ。

…別に飲み物なんか要らないから、早く話を詰めようよ！
…と思っていたけど、沙希の感情を刺激しない様にしなとね。

「お待たせ！これ…取り寄せた紅茶なの！飲んでみて…！」

沙希は私の前にティーカップを差し出す。

ほのかに湯気の立つカップからは、凄く良い香りがしてくる。

「頂きます。」

一言礼を言ってから口に運んだ。

…うわぁ！これ美味しいわ！スツキリしてるのに濃厚で。

えつと！…気を許しちゃ駄目よ！これは私を油断させる作戦に違いない！

気を許させてメンバーを紹介させようとしても無駄よ！

そつよ…、お茶なんて飲んでる場合じゃあい！

私は…沙希に断りに来てるんだから！

沙希は自分の分の紅茶をテーブルに置いて、ソファーに腰掛けた。

「…沙希さん。」

「なあに？」

沙希は紅茶を啜りながら余裕の表情。

「お話があります。」

「…何かしら。」

「メンバーの事…なんですけど。」

私は思い切って切り出した。

沙希も話を聞いてくれる様で持っていたカップをテーブルに置く。

「…メンバーの事？なあに？今日にでも一人紹介してくれるの？」

「…その事でお話があります。」

「…紹介してくれるまで付き纏うわよ。」

沙希に先手を打たれる。

「…沙希さん、お願いがあるんです。あの…この話は無しにしても
らえませんか？」

沙希の目を見て…私なりに真剣に語りかけた。

「…嫌。」

沙希は考える事もせずに拒否の言葉を口にする。

「…では、私が引退するとしたらどうですか？」

「…貴方が引退？…それだけ？」

「それだけって、他に私に出来る事ないですし…それにいくら貴方

が美人だとしても、

脅されてメンバーを紹介するのって…なんか騙してるみたいで。」

沙希は少し考えて言葉を選ぶように喋った。

「貴方が引退すれば済む問題ですか？」

「…えっ？」

「引退しても…貴方がKJのメンバーで居た事には変わりないですよ？」

ましてドラマや写真集、歌のCDまで作って…今更世間が許すとも思う？」

ファンはお金を出して貴方達5人を応援してた。その人達が真実を知ったら…ねえ？」

沙希は一度でもメディアにメンバーとして出てしまった以上、

今更引退した所で何も変わらないと言いたいのだろう。

女だったと世間に公表されてしまえば…KJにとってはマイナスでしか無い。

「…では、私はどうすればいいんですか？何をしたら…貴方の気が済みますか？」

もう沙希自信に決めて貰うしか道はない。

「だから！メンバーを紹介…。」

あくまでも紹介してくれと言わん沙希に、私は言葉を遮る様に話した。

「ですから、私は絶対にメンバーを売ったりしません！絶対に！！」

少し声を荒げる。だって…私の気持ちが絶対だという事を沙希に知って欲しかったから。

私は不純な動機でメンバーを売ったりはしない！沙希に分かって欲

しかった。

沙希は何を考えているのか、答える事も無く黙ったまま下を向いている。

「沙希さん、私が気に食わないなら私の事だけにして下さい。

もし貴方がKJのファンで居てくれるなら…公表だけは止めて貰えませんか？

貴方が公表すれば…KJはお終いです。寝る価値もない集団になつてしまいますよ？」

何も言わない沙希に、私が追加で語りかける。

寝てみたいとまで思っている人、嫌いでは無いでしょう？
それに…貴方が公表すればメンバー全員が迷惑するのよ？
ファンで居るなら…メンバーが困る様な事はしないで。

「…私と脅してるの？」

やっと沙希が口を開く。

「別に…、本当の事を言ってるだけです。」

「…まあ、確かにそうね。じゃあ公表だけは止めてあげる。だから紹介は絶対にしてよ。」

メンバーだけは諦めないという沙希。
もう、どうしたらいいか分からないよ。

「何でそんなにKJに拘るの？芸能人と寝たいなら他にも沢山いるじゃない！」

なにも人を脅してまで寝なくても、貴方が誘えばいくらでも居る筈よ！」

流石の私も大声で怒鳴る。だって…幾らなんでもあり得ないでしょう。」「

「…何で拘るかって？それは…貴方、分からないの？」

「分からないから聞いてるんです！」

「…私、顔に出やすいタイプだと思ってただけどなあ。」

沙希は急に笑ってテーブルの上のカップに手を伸ばす。

「由君。貴方…本当に私が意地悪している理由わからないの？」

「…分かりませんよ。」

騙してまで男と寝たい貴方の気持ちなんて分かる筈無いでしょう！

「私…別にKJのファンでも無いし、寝れば良いとも思って無いわよ。」

「…えっ？違うの？」

私ってば沙希の事誤解して…、いや？これは作戦かもしれないな。

油断しちゃう駄目だよ。

「じゃあ、理由…聞かせて下さい。」

沙希…行ってみなさいよ！私が納得できる良い訳を！！

「…私、貴方の事…本気で好きだったのよ？知ってた？」

「…えっと…はい？」

あまりに突然で、私は言葉が上手く出てこない。

「嫌だ。本当に気付いてなかったの？私なりにアピールしてた積りなのに。」

沙希は私の表情を見てクスクスと笑っている。

こっこれは陽動作戦？

「私…貴方と一緒に収録日には必ずスキップしに行ったり、何気に好き好きオーラ出したり…ねえ、本当に気付いてなかったの？」

「…まあ、今思えばそういう事も…。」

沙希の言葉に記憶が蘇ってくる。

今思えば確かに必要以上のスキンシップを受けていた気がする。
でも…流石に好きと思われてるなんて思わないよ！

「…嫌だ。本当に気付いてなかったのね。」

沙希が呆れたように溜息をつく。

「あの…、本当に私を？」

「…貴方じゃない。KJの由君が好きだったの。女じゃなくて男の由…！！

由君と一緒に共演して…あんな激しいキスを人前でされて…。」

「すみません。私…。」

「別に謝らないでも良いわよ。私が勝手に思いを寄せていただけ。
でもね…シヨックだったの。」

「シヨック？」

「当たり前じゃ無い！あんなキスされたんだもん。貴方も私に気が
あると思っても不思議じゃないわ！

そして告白しようと打ち上げの時…。なのに貴方は女で、しかも
お兄さんと…。」

「…沙希さん。」

沙希の表情が一気に変わり、今にも泣きそうだ。

これは…本当に悲しんでるの？それとも女優さんだし演技？

私には見わけが付かないよ。

「…沙希さん、騙して居て済みませんでした。」

「別に謝らないでもいいわよ。ただ…自分の事が恥ずかしくて悔し
くて…。」

だから貴方に意地悪しちゃったの。」

「沙希さん。」

沙希は残っている紅茶を一気に飲み干し、そっとソーサーの上に置
いた。

「…メンバー紹介しろというのは撤回するし、貴方の事も一切口外しないわ。」

落ち着いた口調で私に語りかける。

「あの…本当に？」

いきなりの展開に、信じられない私は沙希に伺いを立てた。

「本当。それに最初から紹介してもらおうと思って無かったし。ただ…」

「…ただ？」

「…ただ、あのまま失恋するのが悔しかったのよ！だって…初恋よ？初恋。」

「…初恋ですか？貴方みたいに可愛らしい人が？」

「…どうも。嫌味にしか聞こえないけどね。」

「そんな！本心です。」

沙希さん、今時幼稚園の子供だって好きな人は居ますよ？
なにの…初恋だなんて。そりゃショックだよな。

第四十五章

沙希の話は本当なのだろうか。
初恋って…マジですか？

「あの…、本当に無かった事にしてくれるんですか？」

「…ええ。何回も言わせないで。」

「…ごめんなさい。」

「あのさ、謝らないでくれない？別に貴方が悪い訳じゃないし。」
「えっと、はい。すみません。」

沙希は、思わず謝る私の顔を見て噴き出す。

「…ぷつ。あははは！！…何で私、女の子の事好きになっちゃったのかな。」

「沙希さん。」

「あのね、私…デビュー当時に嫌な思いばかりしてきて、ちょっと男性不審でさあ。」

「そんな時に女の子みたい…って、本当に女だったんだけど貴方と会って…。」

胸押し付けても抱きついてても反応しない貴方に興味持って…。」

沙希は自分の思いを語り始めた。

沙希はデビュー当時、事務所から過剰な接待やらを要求されて、新人の彼女は従ってたんだって。

男たちの沙希への欲望やら人間の汚い部分とか沢山見てきた沙希は、心が壊れ掛ってたらしい。

そんな時私と会って…。最初は悪戯半分で私に近づいてきたらしいんだけど、

色気にも押しにも反応しない私に、心底安心感を覚えたらしくて…。

私は女なんだから当然なんだけど、彼女にしてみれば新鮮な風に見えたんだって。

この人なら自分を大切にしてくれるかもしれない…そんな希望を持った時、私の正体を知って…

可愛さ余って憎さ100倍ってな風に、私に嫌がらせをしちゃったんだって。

沙希は…真剣な目で私に謝ってくれた。

私は、彼女の気持ちを信じる事にしようと思う。

「由…ちゃん。これからも仲良くしてくれない？」

「…えっ？私で…いいんですか？」

「むしろ貴方がいいの。何か…汚れて無いって言うか…綺麗って言うか…。」

「ええ！！沙希さんにそんな事言われると…逆に凹みますよ。」

「あはははっ！まあとにかく、仲良くしてよ！それに…貴方の為にも私にみたいな女…

一人位は居た方がいいと思うよ？これからも芸能界で生きて行きたいなら…。」

沙希のいう事は最もだった。

いくらお兄ちゃんがマネージャで協力してくれるとは言え、男である以上限界があると思う。

そんな時同性の協力者がいてくれたら…それは前から思ってた事だった。

沙希の申し出は正直助かる。

「…あの、私からもお願いできますか？」

「…勿論！お詫びじゃないけど私に出来る事あったら何でも言うてよ！…！」

私は沙希のマンションに泊まり、一晚中話しこんだ。
久しぶりの女同士としての会話は、本当に楽しくて…。

女性で私の秘密を知ってくれている人が居るのは本当に良い事なのかもしれないね。

そして次の朝、私は沙希の作った朝食をご馳走になりマンションを後にした。

こんな晴れやかな気持ちの朝は久しぶりかもしれない。

朝の少し冷たい空気も、肺に吸い込むと気持ちが良い…そうだ深呼吸なんてしちゃったりして！

私は被っていた変装用帽子を脱ぎ、両手を広げて深く呼吸をする。
少し身体が冷える感じは、凄く気持ちが良い。

私は、今までの疲れが取れた様な心地で、スキップしながら自宅に帰って行った。

「只今！」

私は自宅（お兄ちゃんのマンション）の扉を元氣よく開ける。

「…由子、お前…大丈夫か？」

「うん！大丈夫！！！」

心配そうなお兄ちゃんの顔、アレ…一応電話では説明した筈なのにな？

私はもう一度、お兄ちゃんに今までの事を洗いざらい説明し始めた。

「良かったな由子。でも、ちゃんと相談しろよ？」

ニコニコ笑いながらお兄ちゃんは頭を撫でてくれる。そう…昔の様に。

一度お互いの気持ちを確認し合った私達は、もうすっかり打ち解けていた。

まだ問題は沢山あるけど…二人で居れば乗り越えられると思うし、そうしていくつもり。

鷹との事、両親の事…結婚は出来なくはないけど…肉体的に妊娠も望めないだろう。

これから乗り越えて行かなくてはならない問題…本当に沢山あって大変。

私は着替えを済ませ、お兄ちゃんと一緒に事務所に向った。

今日は新曲の打ち合わせで、メンバーも全員集合。

玄関でお兄ちゃんとは別れ、私はメンバーの待つ部屋のドアを開ける。

「お早うございます！」

気分のいい私は、大声で皆に挨拶をする。

「おお！！超元気じゃん！」

雪は私の元に走って来てくれる。相変わらず朝から元気！！

他のメンバは…私の方を見て手を上げてくれたり振ってくれたり…。

まだメンバーと一緒に仕事が出来ると…本当に良かった。

暫くして、KOUJIさんがデモを流し始める。

まだピアノの音とKOUJIさんの歌声しか入ってない曲だけど…

凄く素敵なのメロディー。

バラードなのかな？優しい曲で、KOUJIさんの切ない声が凄く

綺麗。

「…素敵。」

思わず声に出して感想を言ってしまう。

「…お前、気持ち悪いよ。」

顔を真っ赤にしているKOUJIさん。どうやら褒められた事が恥ずかしいらしい。

…あれ？何やら俯いて震えてる。
やばい！久々に出ちやっつかも！！

KOUJIさんは黙ったまま部屋を出て行き、残された皆は溜息を吐く。

「…由さん？やってくれたね？」

「ええ！！ただ褒めただけなのに！」

「もう、何回遭遇すればポイント分かるんだよ！お前責任もって探して来い！！」

「ひっ！わっ分かりました！！」

追い出される様にKOUJIさん搜索で出かける私。

…発見するのは楽勝なんだけど、連れ戻すのは一苦労なんだよね。
って考えてる傍からKOUJIさん発見！！

誰も居ない部屋の隅っこ。

体育座りで蹲るKOUJIさんの姿。

久しぶりに見たけど…ちょっと可愛いかもしれない！！

「…KOUJIさん？時間掛りそうですか？」

「…ああ。」

馴れた様に会話をする。

「あの、なるべく早く戻って下さいね？私が皆に怒られちゃう。」

「…ああ。」

私はKOUJIさんが復活するまで、反対の隅に寄り掛かり時間を潰す。

「…由、ちょっと話…しないか？」

突然KOUJIさんが私の方に歩いてくる。

「…はい？」

「あの…俺、お前に聞きたい事があるんだ。」

まだ真っ赤な顔のKOUJIさんは、真剣な顔で私に話しかけてきた。

思えば久々に向き合ったKOUJIさん。

色々な事があって…それに私の初体験の相手で…。

嫌な思い出が沢山あるけど、最後は私を解放してくれて見守ってくれてる人。

「…由、お前…今誰か居るのか？相手…。」

「あつ相手ですか？」

「…そうだよ。相手…男だよ。」

「あの…、彼氏が居るか聞いてるんですか？」

「そだよ。…居るのか？」

これ…正直に答えた方が良いんだろうか？

私の事まだ好きで居てくれるとすれば…ここは正直に言った方が
良い気がする。

「…はい。います。」

誰とは言えないけど…私には愛する人が居ます。目を見てハッキリ
答えた。

「…そか。」

下を向いたままのKOUJIさん。表情が解らない。

「あの…、KOUJIさん？」

「…あああ！！くそおお！！」

なっ何ですかいきなり！

「…ちよつKOUJIさん？」

「…しょうがねーか。あんな始まりだったしな？」

KOUJIさんは私の肩を抱き、そつと額にキスをしてきた。

「ひゃああ！なっ何するんですか！！」

「…もう何もしないから。最後…な？」

私に笑いかけ、まるでお別れの様にきつく抱きしめてきた。
抵抗しようとも思っただけ…何故か動く事が出来なかった。

「…はい。これからよろしくな？」

いきなり私を離し、握手を求めるKOUJIさん。これ…どういう意味なんだろう。

「はあ？…まあ宜しくです。」

差し出された手を握りかえず私。

KOUJIさんは私の手をブンブン上下に振り、そっと手放した。

「あの…KOUJIさん？」

何が何だか分からないんですけど？

「…ほら、皆待つてんだろ？早くこい。」

先に部屋から出て行くKOUJIさん。ちよっ！貴方の所為で此処に居るんですけど…！

KOUJIさんの後を追う様にメンバーの元に戻った。

第四十六章

「おお！今日は早かったなあ！」

私達の事を出迎えるメンバー。

皆馴れた様子ですね。

KOUJIIさんは何事も無かった様に椅子に座り、足を組む。

それも何時もの様子。そして…

「…始めるぞ。」

自分の所為で遅れている事など感じさせない…というか気にも留めない様に、

KOUJIIさんは打ち合わせを開始してしまう。

でもね、それも何時もの事で、私達は大人しくKOUJIIさんのペースに巻き込まれるんです。

部屋全体に音楽が掛り、KOUJIIさんの手懸けた新曲が皆の耳の入って行く。

「素敵な…。ぐう。」

新曲は、何度聞いても素敵な曲で…また禁断フレーズを口走りそうに。

すかさず皆で私の口を塞いで…ご迷惑かけます。

「KOUJIIさん、タイトル何て言っんですか？」

この曲に合うタイトル…きつと素敵な筈。

「My secret story」

KOUJIIさんのニュアンスは凄く綺麗だ。

でも、どういう意味なんだろう。英語2だった私には難しい。

KOUJIさんから渡された歌詞。

そこには一人の男の…切ない思いが書かれていた。

My secret story

僕は知っていたよ 君が素晴らしい女性である事を
世界中が知らなくても 僕だけは君の事を信じてる
だけど君は誤解している 僕の本当の気持ち
僕は君さえ居てくれれば何も要らないのに

My secret story

これは誰も知らない秘密

My secret story

君と僕だけの秘密だよ

いつも陰から君を見てる だから僕を嫌わないで

君の事を何時も応援してる 支えて行きたい
出来れば僕も入れて欲しい 君の世界の中に
叶わないならせめて 見守る事を許して
僕は君さえ居てくれれば何も望まないから

My secret story

せめて君との思い出は

My secret story

僕の誇りと信じたいんだ
いつも陰から見守ってるよ だから僕を許して欲しい
もう二度と君を傷つけないと誓うから…

これ…私に対しての手紙？

この歌詞から感じるのは…私に対するKOUJIさんの謝罪。
私、KOUJIさんの事誤解してたのかな？
歌詞から感じる温かい愛情…思うだけで涙が流れる。

「…KOUJI、これ…お前何かあったのか？」

KAJIさんが突っ込む。

「嫌？俺じゃ無い。最近知り合った男の事を…代弁しただけだ。」

KOUJIさんは、顔色一つ変えずに言い切った。

「だよなあ！こんな一途な男…お前の筈ないよな！！」

KAJIさん初め、メンバー全員がそう思った。

この曲の本当の意味を知っているのは…この場では私とKOUJI
さんだけ。

そう…二人の秘密の話。

でも、私には一つの不安要素。

それは…私とKOUJIさんの関係を知ってる唯一人の存在。

そう…お兄ちゃんだ。

この曲を聞いてお兄ちゃんがどう思うか…それだけが心配だった。

でもこの曲、本当に素敵で…優しくて切なくて。

これを聞いた人は、絶対に好きになってくれる。

今までと違うKJ、きっと皆が喜んでくれる。

この曲なら…

誤解させない様にお兄ちゃんに伝えよう。

KOUJIさんの事は過去の事で、今は貴方だけが好きだと。

そしてKOUJIさんの事はもう恨んでは居ないと。

この曲を愛してくれとは言わないけど、せめて認めて欲しいと…

私はお兄ちゃんと車で自宅に戻ろうとした。

お兄ちゃんは車を取ってくると駐車場に向い、私はロビーで待機していた。

すると…後ろから私を呼ぶ声がしてきた。

「…由君！！」

この声は…沙希？

後ろを振りむけば、チョココンと私の方を見つめる沙希の姿。

「…うわぁ！！さっ沙希さん？」

「えへっ、ビックリした？」

「そりゃビックリしますよ！どっとうしたんですか？」

「ええ？友達に会いに來ただけ！…何よ、嬉しく無いの？」

沙希は久々のオフで、近くにシヨッピングに來ていたらしい。

事務所の前を通り掛った時、たまたま私の姿を発見したみたいで。

ランチでも一緒に誘ってくれたんだ！！

そりゃ沙希と居れば女の自分に戻れるから嬉しいけど…ここは事務所だし。

それに、沙希と待ち合わせしてるなんて写真にでも撮られたら！！

「うっ嬉しいけど、ここ事務所だし、場所は考えないとね？」

「…ああ、そっか。いくら友達でも今は、由…君だもんね。」

「そう、由君なの。ごめんね？」

「分かった！じゃあ…此処出たら電話して！」

「うん、分かった。」

沙希はそのまま事務所の出口に向かい、私は沙希に向かい中から手を振っていた。

その時、信じられない事が起きてしまう…

私と沙希を、無数のフラッシュが襲う。

「沙希さん！KJの由とどういうご関係ですか？」

「沙希さん！お泊まりデートは昨日が初めてですか！！」

「由さんとはドラマ共演がキツカケですか！！」

「由さん！沙希さんとは何時からの付き合いですか？」

あれ…これって、スクープされちゃってるのかな？

とにかく…眩しいですってば！！

沙希は下を向いて、必死に顔を隠して居る。

私は…とにかく沙希の頭から自分の来ていたジャケットを被せ、事務所の中に引きずり込んだ。

身動き出来ない状態の沙希を、あのまま放置するのは可哀そうだったから。

「…沙希さん、これ…。」

「うん、ヤラレタね。」

私と沙希は、口数少なく茫然としてしまう。

暫くすると警備員数人が飛んできて、記者達を目の届かない所まで追い出してくれた。

「…由さん、一体どうしたんです？」

マネージャーモードのお兄ちゃんが飛んできた。

「おっ…マネージャー、スクープされちゃった。」

「…はあ？なっ何で…、あっ！まさか昨日の…。」

「うん、そうみたいです。」

私達は裏口から逃げるように事務所を後にした。

第四十七章

その日は家から一步も出る事が出来なかった。

窓から覗けば、外には無数の記者達が私が出てくるのを待っている。そんな中に飛び込む勇氣は無い。

沙希…沙希の方は？

私は携帯を取り出し、沙希に掛けてみた。

「…あつ！もしもし沙希ちゃん？そっちはどう？」

「由ちゃん？…うーん、こっちは凄い記者の数だよ。由ちゃんの方は？」

「うん、こっちも物凄い数。これじゃプライベート所じゃ無いね。」

「そうだねえ。残念だけど二人で合うのは無理かもね。」

折角同性の友達が出来たのに…。

学生時代、引き込もってから初めての同性の友達。

私の秘密を知っても友達になってくれた人だったのに！

何で私は友達と上手く行かないんだろう。

それから私達は、何処に行くにも記者達に後を追われる様になった。番組の収録、新曲の打ち合わせ…何処にでも記者は現れる。

家の中だけは盗撮されない様にカーテンをしっかり締めただけ…

締め切った部屋の中はジメジメしていて気分が悪い。最悪な環境だな。

…芸能人ってこんな感じなの？これが芸能人なの？

…鬱になりそうだよ。

実は最近、私には記者以外に不安があった。

それは、鷹の存在。

こんなに私の事が報道されて、あの日以来連絡すら無いって…可笑しくない？

正直お兄ちゃんとの事話さなくちゃいけないからドキドキはあったけど…

仮にも付き合ってる相手に電話一本寄こさないって…あり得ないでしょ！

…まあ、私からも電話してない以上、人の事言えないけど。TVでは良く見かけるから生きては居るんだろうけどさあ。

こういう場合、どうしたらいいの？

こっちから電話した方がいいのかな？

でもあんなに優しくしてくれた鷹に…言うのは辛いな。でも、二股掛けるよりはいいよね？

それに、相手がお兄ちゃんだとは言つつもりは無い。

うん、私の自己満足なダケなのは分かってるけど。

どちらにせよこっちから電話するのが筋だね。

沙希の事説明するのも、別れたいと言うのも。

私は意を決して携帯に手を掛けた。

…プルルル、プルルル、プルルル…

あれ？出ないのかな？もしかして仕事中だったりして。

「…はい。」

ああ！！出た！出ちゃった！！どうしよう！何て切りだす？

「あつあの！由だけど…」

「…由？…ああ！KJの由君？」

この声…鷹じゃ無い？鷹にしては高いというか…これって女の声だよね。

「あの…、鷹出して貰えませんか？」

震える声で電話に出た女に話しかけた。

「鷹？ああ今は…お風呂入ってるけど」

「ふっ風呂？何で！！！」

「なっ何でって…、汗かいたから？」

「何で？！何で汗かいてんの？」

「…ちよつと、いくら鷹の友達でもさ…聞かれたくない事ってあると思うよ？」

私は…その後何も言わずに電話を切った。

電話を切っても私の身体は動かない。

浮気…してるって事だよね鷹。

この前はあんなに私の前で必死に説明して…あの鷹は何だったの？私…鷹の何だったんだろう。

頭に血が上ってくる…自分の事を棚に上げて。

脳みそが沸騰しそう！…ってか沸騰した！！

ム力つくう！！！！

佳苗との時はまだSEXって意識薄かったからここまで沸騰しなかったけど…

今回は汗…汗ってさあ！！した後って事じゃない？

でもさ…浮気されるってこういう気持ちなんだよね。

これ、私も鷹に同じ事をしようとした。人の事言えない…。

鷹の事…怒る資格ないよね当然。

そう考えると、私の心は急に軽くなった。
喧嘩両成敗じゃないけど、浮気両成敗。

…ズルイ考えだな。

でも…ずるくても、少しホツとしたのは事実。最悪な女…私って。

電話に出れないならメール…。

『電話したら女性が出たよ。汗かく様な事してたんだね。』

鷹…二度目は無いよ。二度と逢う事は無いから。由より』

これなら女に見られても大丈夫だよな。

暫くしても鷹から返信は無かった。

っという事は、お別れ成立？

人と人の別れって…こんなに呆気ないの？

私、鷹からの連絡受けられるように携帯持って待ってたのに。
別れのメール位返信くれても良くない？

呆気無さ過ぎ。

ここまでシンプル過ぎちゃうと、喜んでいいのかすら分からなくなる。

私と鷹の交際って一体何だったんだろう。

まるで…二人の間には、何も無かったみたいだね。

私…鷹への気持ち、申し訳ない部分まで消えちゃったよ。

自分を責める事すら馬鹿らしい。

鷹からの連絡が無いまま数日が過ぎた。

相変わらず私と沙希は記者に追いかけられる毎日。

私達がいくら否定しても、記者達達の追及は止まらなかった。
マスコミ各社にFAXでコメントも発表したけど…結果は変わらず。
余りの過熱に、お互いの事務所からは記者会見をした方が良いので
は？

という話まで飛び出してきた。

…別に誰と付き合っても良いじゃない！誰かを愛する事はいけない
事なの？

人を愛する事は罪になるの？もう放っておいてよ！

私は正直、鬱状態にまで追い詰められていた。

今日はスタジオで歌番組の収録があった。

無事終り、メンバーと一緒にテレビ局を出ようとした時…ある事件
が起こった。

それは…私の一生を左右する、重大な事件だった。

「由さん、車に乗って下さい。」

お兄…マネージャーは局の入口まで車を回してくれる。

それは私が記者に追いかけられる様になってから毎回の事。

マネージャーの手によって開かれた車のドアに、私は乗り込もうと
する。

そして車に足を突っ込んだ時、いきなり腕を誰かに掴まれた。

「由さん！沙希さんとの交際は本当なんでしょう？」

私の腕を離すまいと力を込めて握る記者。

この記者…毎日私を付け回してる。

「ちよっ！止めて下さい！」

「由さん！いい加減認めて下さいよ！貴方も疲れるでしょう？」

「止めて下さい！コメントはFAXで出しました！それが本当の事なんです！」

「嘘言わないで下さいよ！私はこの目でお泊まりを確認してるんですから！」

…この記者が、全ての原因の写真を撮ったのは！

アンタの所為で、私達はどれだけ困ってると思ってるの？

怒りが込み上げて…私は記者を睨みつけた。

「おお！その表情良いですね！ゾクゾクしますよ！」

「いい加減にして下さいよ！アンタの所為で！！」

私は力任せに腕を振り払った。

余りに勢いよく振り払ったから、記者はよろめいてしまう。

「…ああ！今僕に暴力をふるいましたね？これは明日の朝刊に載せさせて頂きますよ！」

ニヤリと笑いながら私の写真を撮る記者。

ム力つく…掴まれた手を振り払っただけじゃない！これが暴力だというの？

私は更に怒りが増して…記者の顔を激しく睨みつけた。

「由さん！早く車に乗って！」

私と記者の様子に気付いたマネージャーが、二人の間に割り込んでくる。

私はマネージャーの背中に守られる様に車に乗り込んだ。

扉は閉められ…マネージャーと記者は少し離れた所で良い争いを始める。

どうにかして私に近寄りたい記者に、それを阻止したいマネージャー！。

最初は言葉同士、それが次第に身体がぶつかる様になって…

記者の強引なタックルは、マネージャーの身体を弾き飛ばしてしま

った。

決して力で負ける筈は無い。暴力と書かれるのを防いだ結果だろう。

運命の時は来る。

弾き飛ばされたお兄ちゃんの直ぐ目の前に…

第四十八章

パパパ ! ! ! !

激しいクラクションが鳴り響く。

そして…宙を舞い、地面に叩きつけられるお兄ちゃんの身体。

「…嘘…何？何が…。」

分らない、私の目の前で何が起こってるの？

お兄ちゃんの身体が宙に舞って…飛ばされて…血まみれで地面に横たわって居る。

私はよろめく足でお兄ちゃんの傍に寄った。

「ねえ…何してんの？早く起きてよ…。」

ピクリとも動かないお兄ちゃんの身体。

私はどうにかしてお兄ちゃんを起こそうと、必死に身体を揺すった。

「起きてよお兄ちゃん…ねえ早く家に帰ろうよ…ねえ…。」

「駄目だ！動かしちゃいけない！」

急に頭の上で声がして…私は腕を掴まれる。

「でも…起きないの…お兄ちゃん…寝ちゃってるの…。」

「…今、救急車呼んだから！動かさないで！」

「お兄ちゃん…お兄ちゃん！！！」

私は動かないお兄ちゃんに縋るように救急車を待った。

暫くして救急車は到着して、お兄ちゃんは中に乗せられる。

「誰か状況分かる人居ますか？」

白い服を着た隊員に声を掛けられる。

「あの…俺…見てました。」

「では一緒に来て下さい。」

私は頷き乗り込んだ。

サイレンを鳴らしながら走る救急車の中。

私は処置をされるお兄ちゃんから目が離せなかった。

…お兄ちゃん、また車に…

また私の所為でお兄ちゃんは傷ついて…今度は血まみれで動かない…
どうして？どうしてお兄ちゃんだけこんな目に？

私が…私の秘密が招いた結果。

病院に到着して、私はお兄ちゃんと一緒に処置室に向かった。

「付き添いの方は外でお待ち下さい！」

中まで入ろうとした私は、看護師に止められ待合室の椅子に座らされる。

…どうしよう…お兄ちゃん死んじゃう…！

誰か助けて…お兄ちゃんを助けて…

私が椅子で震えていると、バタバタと数人が走ってくる音が聞こえてくる。

「おい！由！マネージャーの具合は？」

「しっかりしろ！俺たちにも状況説明しろ！」

顔を上げて確認すると…そこに居たのはKJのメンバーだった。

「雪…KOUJIさん…KAJIさん…JEYさん…。それに…鷹？」

そう、居たのはKJのメンバー以外に鷹も。

何で鷹が此処に？

「鷹…何で…。」

私は震える口で鷹に話しかけた。

「嫌…お前に会いに事務所行ったら丁度病院行くメンバーに会って
事情聞いた。」

俺が来るのはどうかと思ったけど、昨日の誤解を解きたくて……」
「……今それどころじゃ無いの。出なおして。」

「嫌だ！今話し聞いて貰えないと俺……一生後悔する！なあ、聞いてくれよ。」

「……止めてよ！本当に今は！」

周りにメンバーが居る事も忘れ、鷹に怒鳴りつける。

私は今、愛する人が生きるか死ぬかって状況なのよ？

アンタの良い訳聞いてる場合じゃ無いのよ！

お兄ちゃんの手で動揺している私は鷹にイラつきをぶつけてしま
う。

「由……落ち着けて。」

雪が私の肩を抱いて落ち着かせようとする。

「っ……！由から離れる！」

それを見た鷹が、私と雪を引き離す様に身体を入れてくる。

「はあ？何だよお前……少しは場所を弁えろよ。由はお前の物じゃ無い
だろう？」

「……俺のだよ。コイツは……。」

「はあ？何言っちゃってんのお前。」

雪と鷹が睨みあう様に顔を近づけている。

もう嫌だ。

何でこんな状況になってるの？

私はお兄ちゃんの手配だけしていたいの！もう放っておいてよ……！

突然処置室の扉が開き、看護師が慌てた様子で飛び出してきた。

「あの、患者さんのご家族と連絡が取れる方居ますか？」

「あの……何が……。」

「……それはお話できませんが、急を用するので急いでお願いします。」

連絡先を……」

「何？何が起こってるんですか？教えて下さい！」

「それはお教えできません！患者さんの事は言えない決まりです！」

「……お願いです……教えて下さい……今、危ない状況なんですか？」

「……正直難しいです。ですから早くご家族の連絡先を……！」

危ない？お兄ちゃん……本当に死んじやったり……嫌……嫌だあ！

「私！私が家族です！妹です！だから教えええ……！」

メンバーの事も忘れ、パニックになった私は看護師に縋りついた。

「いつ妹……さん？貴方……男の人ですよ……ね？」

「これは変装です！ですから兄の事を……兄の事を教えて下さい！」

泣いて……思い切り泣いて縋った。

「でも……。貴方KJの……」

信じてくれない看護師に、私は彼女の手を引っ張って自分の胸に押し付けた。

「……っ嘘……！！……では、急いでこちらに来て下さい。」

看護師に連れられ奥に入って行く私。

そして待合室に残されたメンバー+鷹。

「……なあ、妹って言ってたよな……。」

「ああ……しかも兄だってさ。」

メンバーは今日の前で起こった事について話しあっていた。

「……由は女だ。」

口を開いたのはKOUJIだった。

「……はあ？マジかよ……俺……気付かなかった。」

ビククリするKAJIとJEY、それに雪。

「本当ですか？……ってかKOUJIさんは知ってたんですか？」

雪はKOUJIに詰め寄る。

「…ああ、俺は知っていた。それに…ソイツも知ってた様だな。」
KOUJIは顎先をクイツと鷹に向ける。

鷹に視線が集まり…鷹は今までの事を説明し出した。

「…はい、皆さんに黙っていてすみませんでした。アイツ…由は女で俺の彼女です。」

あつ！でも皆さんを騙していたというか…そういうんじゃないかと無くてアイツはふざけた気持ちでメンバーで居た訳じゃないんです。それだけは信じてやって下さい。」

鷹が頭を下げ謝罪する。

「…おい、さっき誤解を解くとか何とか言ってたけど…何かあったのか？」

KOUJIが鷹にキツイ視線を向ける。

「…昨日、俺の電話に妹が勝手に出ちゃって…それで由子が誤解して…」

「…何で今なんだ？誤解が生じたなら昨日の内に謝るのが筋だろうが！」

珍しく声を荒げて怒鳴るKOUJI。

待合室でそんな事が繰り広げられてるとは夢にも思わない私は、皆の元に一時戻った。

「…由！大丈夫か？」

私の元に走ってくる雪。

「…うん、私…俺は大丈夫だよ。でもマネージャーが…」

「マネージャー…悪いの？」

「うん…今から手術。」

「そっか…」

雪は私の頭を撫でてくれる。でも…何時もより優しいのは気の所為かな？

「…で、家族が呼ばれるのは同意書か？」

K O U J Iさんに声を掛けられ、私は視線を上げる。

「…はい。後…肝臓と腎臓も移植した方が…生体肝移植？だから家族が…。」

「そうか。…で、お前のを移植するのか？」

「…へ？何で…。」

さつきはパニックだったから意識して無かったけど…もしかして私何か言っちゃった？

「…マネージャーの妹…なんだろう？」

K A J Iさんが私に話しかけてくる。

「あつあの…その…。」

「ぷつ。今更良い訳しても無駄！全部聞いちゃんたから！」

K A J Iさんの横から顔をのぞかせ、ニヤニヤと話すのはJ E Yさん。

…あれ、もしかして私…全部喋っちゃってた？

「…由子…！！」

またパニックに陥っている私を落ち着かせようと、雪が肩を掴んで話しかけてくる。

「後で良い訳はゆつくり聞くから！とりあえず手術…頑張れ！」

何時もの雪の笑顔…。

メンバーの顔を順に見つめる。

皆…怒っている様子は無い。

有難う…皆さん。

勇気貰いました。

私は仕事を暫く休む事を告げ、お兄ちゃんの元に戻った。

第四十八章（後書き）

私の秘密の話をしよう：次回で最終章になります。
宜しければ最後までお付き合い下さい。――（――）――＜

最終章（前書き）

私の秘密の話をしようの最終章になります。
長い間お付き合い頂き感謝致します あきちゃん

最終章

お腹が千切れそう…痛い…

激痛で目が覚める。

そうだ…私…手術したんだ。

私の所為で事故に会ったお兄ちゃんの為に、私は自分の肝臓と腎臓を差し出した。

そして…手術は無事に成功し、お兄ちゃんは一命を取り留めた。

今日は手術して二日目の朝、私はベットの上で身動き出来ないで居た。

実家には知らせてない。…お兄ちゃん生きてましたなんて言えないもん。

本当は知らせた方がいいのは分かってる。でも…お兄ちゃんの行為を無駄にしたくなかったから。

ごめんね…お父さんお母さん。

それから一週間後、私は漸くお兄ちゃんと面会が許される。

ドキドキした…手術が成功したのは知ってるけど、まだ顔見て無かったから。

…生きてるよね？ちゃんと元に戻ってるよね？

お兄ちゃんは集中治療室に居た。

身体から色々なチューブが出てて…見えていて痛々しい。

でも、ちゃんと息してる。私に気付いて微かに手も動かしてる…。

私はその手を握る様に、お兄ちゃんの指にそつと触れた。

「お兄ちゃん…良かった…お兄ちゃん…。」

心配させまいと泣かない様に決めたのに…勝手に涙が出てきちゃう。

「由子…ごめんな…俺…お前の肌に傷を…」

「いいの！お兄ちゃん是我的為に事故に…」

「…ぶつ。それが俺が決めた…道だつての。」

満足に動かす事も出来ない身体で、私の頭を撫でてくれる。

「早く…家に帰ろうね。」

「ああ…二人の家に帰ろう。」

私は自分が退院するまでの毎日、お兄ちゃんの病室に入り浸った。看護師に怒られるまで、お兄ちゃんの傍から離れなかった。そして私は先に退院の日を迎える。

「おーす由子！元気かあ？」

花束持参の雪が迎えに来てくれた。

「あつ雪！ありがとう！」

花束を受け取り、雪に礼を言う。

雪は私の荷物を持ってくれて、運んでくれる。

「…そうだ、マネージャーにも一言挨拶してくかなあ！」

「うん！きつと喜ぶよ！でも…あの事はまだ秘密にしてね？」

「分かってるって！心配すんなよ！」

一般病棟に移った（個室）お兄ちゃんに、退院の挨拶に行く。

「…失礼します。…おお！マネージャー元気そうですね！」

何時も明るい雪は、そのままのテンションで病室に入って行く。

「…あのね雪さん。元気なら入院して無いですよ。」

顔で笑いながら口では嫌味を言うお兄ちゃん。

「あははっ！そんだけ言えれば退院も近いですね！」

「まあ、早く退院しないと心配ですからね…雪さんが。」

「あーっ！ひでえ！」

病室に笑い声が響く。

でも私は心の底から笑えなかった。だって…冷や冷やしてたんだもん。

雪：暴走してばらさないでよって…監視してた。

何でかって言うと…実はお兄ちゃんには嘘を付いて居たの。

だって、メンバーに正体を知られた事…言えなかったんだもん。

だからお兄ちゃんに仕事を休んだ良い訳を聞かれた時、咄嗟に嘘言っちゃったのよね。

『お兄ちゃんと一緒に事故に巻き込まれて、二人して救急車で運ばれた。』

メンバーが駆け付けた時には、移植も終わって入院した後だった。

□

こう説明したのよってお兄ちゃんには言っていた。

予め雪には口止めしておいたんだ。でも…ちよつと今不安です。

でもね、そのうち本当の事を言うつもり。でも今はその時じゃ無い。

私が本当の…秘密を打ち明ける時は、私が由子に戻る時。

そう…KJを引退する時って決めたから。

私ね、入院してる間…考えたんだ。

どうしたらお兄ちゃんを守る事が出来るのかって。

どうしたらお兄ちゃんを心配させずに済むかって。

答えは一つしか無かった。

そう、私がKJを引退してお兄ちゃんと二人で生きて行く事だけだつて。

引退すれば追いかける事も無い。

秘密がバレてメンバーに迷惑を掛ける事も無い。

折角受け入れて貰えそうだったけど…これ以上迷惑はかけられない。

KOUJIさんの新曲…My secret storyの制作が終ったら私は…

引退するって決めたの。

私は数日家で休養した後、スタジオに顔を出す。

メンバーに挨拶と休んでいた謝罪をして、収録に挑む。

「…おい、ちゃんと出来てるんだろうな。」

KOUJIさんの厳しい視線。

「はい。入院中もずっと聞いてました。イメージも膨らませました。」

「

…そうか。」

KOUJIさんは私の頭を撫でてくれる。

3
…2
…1
…

カウントの後流れる綺麗なメロデー。

私達は各自マイクに向かって歌い出す。

私の歌を…皆で歌う。

無事収録も終え、スタジオは歓声に包まれる。

皆で手を叩きあい、褒め合う。

これが最後…KJとして居る最後の…瞬間。

私は忘れる事が無い様に、持参したカメラで写真を撮った。

KJとして輝いて居られた私の場所を…

私は先にスタジオを出て、そのまま事務所に向かった。

社長に事情を説明し、深く頭を下げ辞表を出した。

社長は止めるなど言ってくれたけど…只管謝る事で理解してくれた。

私はKJの控室に、一通の手紙を残して事務所を後にした。

『皆さんに挨拶すらできなかったけど…許して下さい。』

皆さんにご迷惑を掛けて…心配ばかり掛けてすみませんでした。

私はKJのメンバーで居られた事を誇りに思っています。

償いの出来ない私を許して下さい。』

暫くしてお兄ちゃんは無事に退院し、家に帰って来た。

普通の恋人とまではいかないけど、それなりに幸せに過ごして居た。お兄ちゃんは以前のメイクの仕事に戻り、生活も安定してきた。

たまにKJのメンバーと顔を合わせる機会があったみたいだね。

お兄ちゃんを見かける度に私の様子を聞いてくるメンバーに、

お兄ちゃんは元気で居ると言っているみたい。

KJは以前よりグンと売れ、もう私には直接見る事も叶わない…雲の上の存在になっている。

鷹とはあれつきり連絡もないまま…自然消滅を迎えてしまった。

鷹もTVで見ない日は無い。私の彼氏だったなんて嘘みたい。

…ちよっ！私っては何考えてんのよ！もう…専業主婦ってこれだからね。

…専業主婦。

えへっ！良い響きでしょ？

実は…先日お兄ちゃんと入籍したんだあ！

世間的には他人だし、戸籍も違う。だから入籍出来たって訳。

入籍なんて意味無いし、他人の戸籍を奪ってるんだからお兄ちゃんと結婚したという実感は無い。

でも、これから二人で生きて行くにはこの方が都合いいからって二人で話した結果です。

私…実のお兄ちゃんと夫婦になっちゃったよ！！

今日はKJの新曲、My secret storyの発売日。

私が急に引退しちゃった所為で発売日が伸びてたのよね。

それでようやく今日発表されるんだけど…

何かね、家に封筒が届いたの。

開けると中には…チケット？しかも日付は今日じゃない！！

…KJのライブコンサート…私が行っても良いのかな？

…あれ？中に一通の手紙が入ってる。

く由子ちゃんへく

久しぶりー！元気だった？

ライブのチケット贈ったんだけど見てくれたかな？

俺達は由子ちゃんが来るの待ってるからね！！

それで、悪いんだけど裏口から入ってもらえると助かります。

由子ちゃんの顔、ファンに知られちゃってるからね！

絶対、絶ーーーー対に見に来てよね！

それが、僕達に対する償いだと思ってね！！

雪より

雪…ありがとう。

皆、忘れないで居てくれて有難うございます。

私…行ってもいいの？私なんか皆の生歌を聞いても良いの？

客席から見ている位なら、皆に逢う事は無いけど…

一緒に感動を味わう事…して良いのかな？

うん、折角手紙くれたんだもん！見に行ってみようかな！

…それんしても雪、私さあ…誰にも気付かれないと思うよ？

お兄ちゃん仕込みの化粧してれば別だけどさ。

ナチュラルメイクで私の事分かるのって…お兄ちゃん位だもん。

まあ、裏から入れて言うならそうするけど。

私はドキドキしながらコンサートホールに向かう。

途中、KJの団扇やらタオルを持った女の子たちに沢山逢ったけど…

誰も私がKJの由だという事は気付いてない。

…雪、私正面から入っても大丈夫だと思っただけど？

…コンサートが行われるホールは、沢山の人数が収容できると有名な場所。

こんな大きな会場を満員に出来るKJは本当に凄い。

私も…メンバーとして居た時期があっただよね。ちょっと鼻高い！
誰にも言えない秘密なんだけど。

私は指示された通りに裏口に向かった。

「ここだよね…。」

荷物が搬入される場所。沢山のスタッフが出入りしている。

…私、止められないよね？だって…ネームプレートも腕章もしてない。

…不審者扱いされないよね？

足を進める。一歩…二歩…

「…お客様、ここはスタッフオンリーなので。」

進む私の前に、遮る様に伸びる腕。

スタツフTシャツを着て、ネームプレートを付けている女性。

見た事の無い顔…アルバイトの女性？

「あの…私…。」

「あのね、KJのファンで居てくれるのは有り難いけど、迷惑だから止めてねこういうの。」

「私は別に迷惑なんて…。」

「あのね、ちゃんとルール守らないと駄目でしょ？」

「だから私は！ちゃんと…。」

「しつこいファンは嫌われるよ？」

しつこいファン…今の私はそう見えるんだ。

その時、私の耳に聞きなれた声が響いてくる。

「あれ？もしかして…あぁー！やっぱり由子ちゃん！」

犬の様に可愛らしい笑顔で走ってくる雪。

…久しぶりの雪、走ってくる光景はまるで昔に戻ったみたい。

「雪！きやあー！」

私は嬉しくなつて雪に向かって走り出した。

「ちよつ！いい加減にしないと通報するよ！！」

女性が私を羽交い絞めにする。

「きやあ！ちよつと止めて！！」

「貴方ねえ！今警察に突き出してやる！！」

私の腕を強く引っ張り、何処かに連れて行くこうとする。

「痛っ！止めて下さい！！」

「ほら！こっちに来なさいよ！！」

「うわあ、ちよつと何処行くの由子ちゃん。」

近くまで来た雪が、面白そうに見ている。

「ちよつ！雪つてば！見てないで助けてよ！」

「…えっ？お知り合いですか？」

私が雪に怒鳴るのを見て慌てる女性。

「…君さあ、ちゃんと確認した方がいいよ？この女性はKJにとって一番大切な女性。」

それに…由子つて人が来たら楽屋に案内する様にスタッフ全員に伝えてあつたよね？」

「…この人が…すすみませんでした！！」

慌てて私の腕を離し、顔を真っ赤にして走り去る女性。

「ごめんね由子ちゃん、俺…ちゃんと伝えたツモリだったんだけど。」

「…あのさ、どういう風に伝えたの？」

「え？うーんと…KJの由の妹で、超美人の女の子だよって。」

ニコニコしながら答える雪。

…それじゃあの方が間違えるのも納得だよ。

「まあ、とにかく今日は来てくれて有難う！始まる前に皆に挨拶してつてね！」

「…私は…皆の前に顔出す資格なんて…」

「そんな事ないよ！それに…挨拶も無しに居なくなつて…皆寂しかったんだよ？」

「雪…でも…」

「もういいから！ねっ！早くこつち！！」

私の腕を掴んで、無理やり楽屋に連れて行かれる。

「皆ー！由子ちゃん連れてきたよ！！」

勢いよくドアを開け、心の準備も出来ない間に中に通される私。

「あつあの…お久しぶりです。」

とつとにかく挨拶！

「ああー！由子ちゃんだあ！元気だった？」

ニコニコ話しかけてくれるのはK A J Iさん。

「…お前…ちゃんと肌の手入れしてるのか？荒れてるぞ。」

ちよつと辛口なJ E Yさん。

そして…

「…来たか。」

短い言葉のK O U J Iさん。

そして、K O U J Iさんは私の傍まで歩いて来て…一枚のCDをくれた。

「家に帰ってから聞け。」

これ、カバーは無いけど多分…あの曲だよな。

「有難う…御座います。」

前と変わる事の無かったメンバーの態度、私は胸の底が熱くなってきた。

まだライブも始まって無いのに…涙が止まらない。

「皆さん、そろそろ会場の方に…。」

スタッフがメンバーを呼びに来る。

「あっ！もう時間？由子ちゃんともっと話したかったのに！！」

「…来るのが遅いんだよ。」

雪とKOUJIさんの会話。

…私が悪いんですか？

KAJIさん、JEYさん、雪そして…KOUJIさんと握手をして送り出す。

「ちゃんと見てろよ。俺達の姿を。」

KOUJIさんが私に話しかけてくる。とびきりの笑顔で。

「…はい。見ています。必ず…。」

私の頭を撫でて会場に向かっていく。

私も会場に向かおうと楽屋を出た時…聞きなれた声で私の名前が呼ばれる。

「由子。」

これは…お兄ちゃん？

振りかえると、胸にネームプレートを着けたお兄ちゃんの姿が。

「なっ何でお兄ちゃんか？」

「…いや、今日は俺がメイク担当だもん。」

「…そうなの？知らなかった…。」

「そりゃ言って無かったからな。でも…俺は由子が来るの知ってたよ。」

「…嘘！本当に？」

「ああ。メンバーから相談されてたし…お前を誘って良かった。」

「…なんだあ。知らなかったのは私だけかあ。」

「怒るなよ？…まあ…ほら始まるから一緒に行こう。」

「うん…。お兄ちゃん…有難う。」

お兄ちゃんに手を引かれ、私は客席に向かう。

雪が用意してくれた席は…ちょうど真ん中の特等席だった。

暫くすると辺りが暗くなり…音楽が流れ始める。

曲は進み、私の思い入れのあるイントロが流れる。

M y s e c r e t s t o r y …

心に染みる…

マトモに聞いて居られない。

涙で視界はぼやけ、ステージ上のメンバーが霞んでしまう。

生涯忘れない様に…この目に焼き付けておきたいのに。

曲は終わってしまう。

プログラムからして最後の曲だったのに…。

場内割れんばかりの歓声と拍手に包まれる中、KOUJIさんがマイクを握る。

「…今日は、来てくれてありがとう。

予定には無かったんですが…今日、この会場に俺たちにとって大切な人が来ています。

その人の為に…俺達はこの曲を捧げます。聞いて下さい…。Our secret stories。」

Our secret stories

僕達は君の事を知っているよ 本当の君の事を
君が何処で何をしようとも 僕達は君の傍に
離れていても一緒にいるよ 気持ちは同じ場所
心配しなくて良いよ 僕らは君を受け入れる

Our secret stories

これは僕達だけの秘密にしよう

Our secret stories

誰にも言わないと君に誓うよ

秘密が僕らを結び付ける だから僕達は誰にも話さない

僕達だけが知っている 君の秘密の話を

僕達だけが感じてる 君の秘密の姿を

隠さないで 隠れないで

僕達と一緒にいようよ 僕らは君を受け入れる

たとえ一緒に居る事が 君にとって難しいとしても
秘密が僕らを結んでくれるよ だから胸の深い所に

君はただ信じて居れば良い　それだけで僕は輝けるんだ
君の瞳に映る様に　だから僕は頑張れるんだ

これは僕らの秘密の話　誰にも言わない秘密の話
秘密が僕らを結び付ける　だから僕達を愛してくれ

I am watching you
Therefore you also are looking
at us
We are proud of you

これもバラード、そして綺麗なメロディー。
そして歌詞に載せる私への温かい感情：

私：KJになって良かった。

私：皆と一緒にに入れて良かった

お兄ちゃんに勧められて入った芸能界：

KJのメンバーになった事は間違いじゃなかった。

私は：KJで居て良かった

KJのメンバーで居れた事を誇りに思うよ：

KOUJIさんから渡されたCD：

その中にはこの曲が入っていた：

これで：私の秘密の話はお終いです。
聞いてくれて有難う。　KJ　由

最終章（後書き）

皆さんに支えられ、何とか最終章まで来る事ができました。

本当はもっと後日談的な事が書きたかったんですが…この辺りで止めておきます。

長々…いえ、ダラダラと長い作品になりましたが、最後までお付き合ひ頂き…

本当に感謝しています。

皆さん、有難うございました。

あきちゃん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9633m/>

私の秘密の話しをしよう

2011年2月7日11時13分発行